

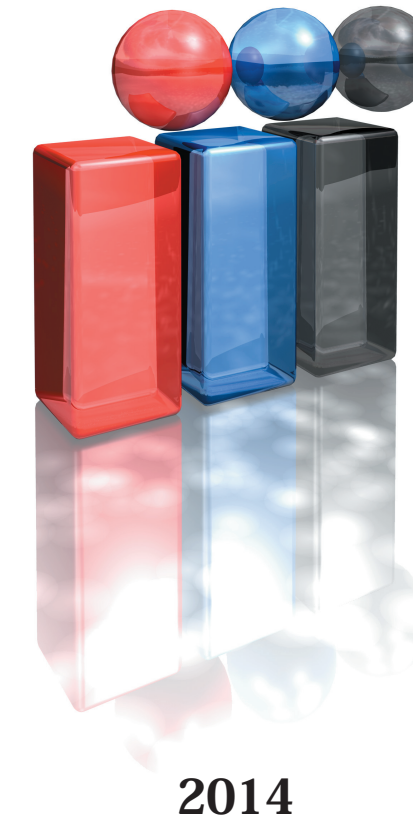
# 東京大学大学院情報学環・学際情報学府年報

## Annual Report

第10号

(通巻42号)

Interfaculty Initiative in Information Studies  
Graduate School of Interdisciplinary Information Studies  
The University of Tokyo



東京大学大学院情報学環・学際情報学府年報

二〇一四年度 第十号(通巻四十二号)

東京大学大学院情報学環・学際情報学府



東京大学大学院情報学環・学際情報学府

東京大学大学院情報学環・学際情報学府年報

Annual Report

Interfaculty Initiative in Information Studies

Graduate School of Interdisciplinary Information Studies

The University of Tokyo

第 10 号 (通卷 42 号)

2014 年度

東京大学大学院情報学環・学際情報学府

I. 現状と課題	1
1 組織説明	1
1.1 概要	1
1.2 理念と沿革	3
1.3 行動シナリオ	6
1.4 教職員組織	7
1.4.1 教職員数	7
1.4.2 昇任・採用（教授昇任人事）	9
1.5 財務	10
1.6 運営	13
1.6.1 情報学環教授会	13
1.6.2 学府委員会	14
1.6.2.1 社会情報学コース	14
1.6.2.2 文化・人間情報学コース	14
1.6.2.3 先端表現情報学コース	15
1.6.2.4 総合分析情報学コース	15
1.6.2.5 アジア情報社会コース	16
1.6.3 教務委員会	17
1.6.4 予算委員会	17
1.6.5 将来計画委員会	18
1.6.6 入試・カリキュラム制度検討委員会	18
1.6.7 施設整備委員会	18
1.6.8 福武ホール管理運営委員会	19
1.6.9 コンプライアンス委員会	20
1.6.10 情報セキュリティ委員会	20
1.6.11 情報ネットワーク委員会	20
1.6.12 情報倫理審査会	21
1.6.13 業績評価委員会	21
1.6.14 ヒトを対象とした実験研究および調査研究に関する倫理審査委員会	21
1.6.15 企画広報委員会	21
1.6.16 図書・出版委員会	22
1.6.17 国際活動委員会	23
1.6.18 産学連携委員会	23
1.6.19 知的財産室	23
1.6.20 利益相反アドバイザー	24
1.6.21 ハラスメント予防担当者	24

1.6.22	社会情報研究資料センター	24
1.6.22.1	情報学環メディア・コンテンツ研究機構	25
1.6.23	総合防災情報研究センター運営委員会	25
1.6.24	ユビキタス情報社会基盤研究センター	26
1.6.25	現代韓国研究センター	26
1.6.26	駒場カリキュラム連携運営委員会	27
1.6.27	学生・留学生委員会	27
1.6.28	教育部委員会	28
1.7	事務組織	29
2	教育活動	30
2.1	概況	30
2.2	教育カリキュラム	30
2.3	カリキュラム支援体制	31
2.3.1	主指導教員・副指導教員の配置	31
2.3.2	修士・博士 研究計画書の作成	31
2.3.3	修士課程研究構想発表会	32
2.3.4	修士論文中間発表会	32
2.3.5	博士課程コロキウム	32
2.3.6	E-learning 授業 (iii online)	32
2.3.6.1	iii online の目標	32
2.3.6.2	iii online の概要	33
2.4	学際情報学府への進学	35
2.5	修士論文及び博士論文の執筆	36
2.6	学際情報学府からの就職・進学動向	41
2.7	学際情報学府以外の教育活動	41
2.7.1	教育部	42
2.7.2	学部横断型教育プログラム「メディアコンテンツ」	43
2.7.3	大学院横断型教育プログラム「デジタル・ヒューマニティーズ」	44
2.7.4	角川文化振興財団メディア・コンテンツ研究寄付講座	44
2.7.5	「情報技術によるインフラ高度化」社会連携講座	45
2.7.6	反転学習社会連携講座	45
3	研究活動	47
3.1	概況	47
3.1.1	文理の相互作用と連携	47
3.1.2	流動教員制度	47
3.2	大型研究プロジェクト（1,000万円以上規模）	48
3.3	附属センターの役割	50

3.3.1	社会情報研究資料センター	50
3.3.1.1	情報学環メディア・コンテンツ研究機構	51
3.3.2	総合防災情報研究センター	52
3.3.2.1	災害情報の生産—伝達—受容過程の解明	52
3.3.2.2	首都直下地震災害の全体像の把握	52
3.3.2.3	大学 SCM モデルの開発	53
3.3.2.4	災害情報教育の実施とプログラム開発	53
3.3.2.5	その他	53
3.3.3	ユビキタス情報社会基盤研究センター	53
3.3.4	現代韓国研究センター	54
4	社会との交流	54
4.1	国際的委員会	54
4.2	政府・自治体委員会	56
4.3	学協会活動	59
4.3	他組織役職	61
4.5	セミナー・研究会・公開講座	62
4.6	出版活動	66
4.6.1	『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』	67
4.6.2	『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究・調査研究編』	67
4.6.3	『英文紀要』	68
4.7	定期刊行物・ホームページ	68
4.7.1	定期刊行物	68
4.7.2	ホームページ	68
4.8	国際交流	69
II.	資料	71
1	沿革	71
2	学環の教員（定員）	72
3	学府の学生数	73
4	教育部	75
5	予算	76
6	土地・建物面積	77
7	入試定数と受入数	77
8	年度別入試データ詳細	77
9	修了者数の推移	84
10	学生支援機構（旧育英会）奨学生数	85
11	日本学術振興会特別研究員数	85
12	リサーチアシスタント数	85
13	就職状況	86

14	研究員（客員）等	91
15	学会賞など受賞者リスト	91
16	論文数	92
17	特許出願・公開数	92
18	国際団体役員・委員数	93
19	政府関係委員会委員数	93
20	地方公共団体関係委員会委員数	93
21	ジャーナル編集・会議運営	94
22	定期刊行物一覧	94
23	留学生数の推移	95
24	留学生国籍別一覧	96
Ⅲ. 個人業績編		98
Ⅳ. 外部資金獲得状況		210

# I. 現状と課題

---

## 1 組織説明

### 1.1 概要

東京大学大学院情報学環・学際情報学府は、従来の研究科とは異なる形態の大学院組織として、2000年4月に設置された。この大学院組織は、研究組織（教員が所属）である情報学環と教育組織（学生が所属）である学際情報学府という2つの対をなす機構によって構成されている。大学院の組織モデルとして、研究科が研究と教育の統合モデルであるのに対して、学環・学府は分離モデルだといえる。従来の研究科が専門深化と恒常性を基本的な特質とするのに対して、この大学院組織は、全学にわたる情報関連の諸領域をネットワーク的に連携させる横型の組織として設置され、情報学分野の総合的な教育研究を先端的かつダイナミックに推進するのに適した形態として考え出された。

その基本的特徴は、組織構成員の流動性と全学的連携、及び研究組織である情報学環と教育組織である学際情報学府の両立という点にある。すなわち、研究組織である「情報学環」は、固有の基幹教員と、学内既存の研究科・研究所等から3年ないし7年の期間をもって情報学環に教員枠及び身分を異動する多数の流動教員によって構成されている。ここでは、多数の分野横断的なプロジェクト研究を柱に据え、文系理系の区別を越えた情報分野の学融合に基づいた研究を推進している。教育組織である「学際情報学府」における大学院学生に対する研究指導は、情報学環の基幹教員と流動教員が行うが、授業科目の担当は、これらの教員以外に他研究科・研究所等に所属する教員にも委嘱する。また、副指導教員制や副専攻制度の積極的な運用を図ることによって、情報関連の広範な学問分野を覆う幅広い学際的教育を目指している。

研究組織である大学院情報学環は、学際情報学圏と社会情報学圏という2つの学圏から構成されている。それぞれの学圏は、次のようにいずれも5つの学域からなっている。

#### 大学院 情報学環

##### ■学際情報学圏

情報生命・思想学域

情報システム・言語学域

情報表現・造形学域

情報環境・認知学域

情報社会・制度学域

##### ■社会情報学圏

ジャーナリズム・メディア学域

情報行動・機能学域

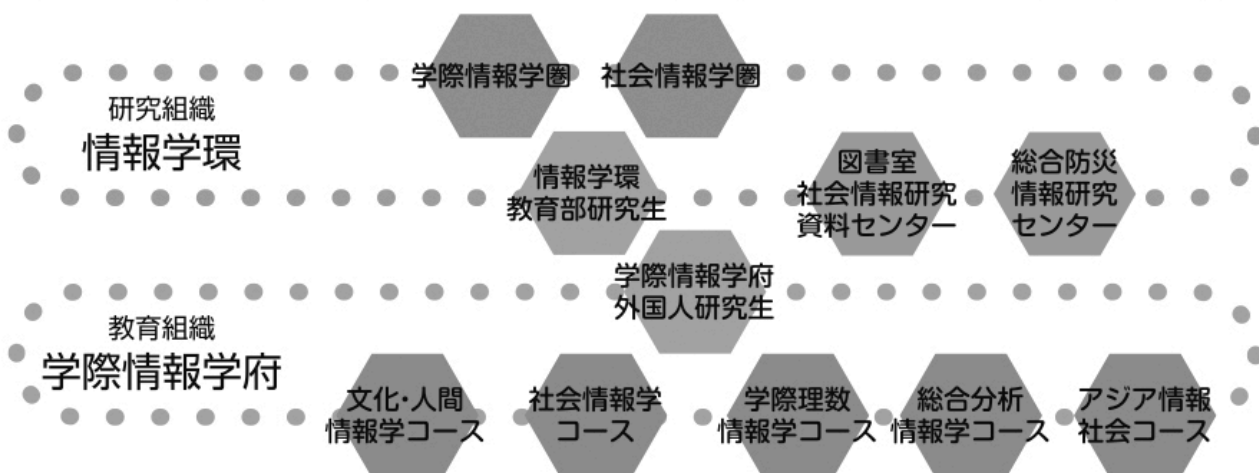
情報法・政策学域

情報経済・産業学域

情報文化・歴史学域

# 東京大学大学院 情報学環・学際情報学府

Interfaculty Initiative in Information Studies & Graduate School of Interdisciplinary Information Studies



教育組織である大学院学際情報学府では、一方では情報現象についての文理を越境する幅広い視野を、他方では社会情報学からコンピュータ科学までの高度な専門的能力を、同時に身につけた人材を持続的に社会に提供していくために、それぞれの自律性と相互の連携をあわせもったカリキュラムを編成し、それを運営する以下のような5つのコースを設置している。このコース制は、教育効果を上げるために学生をコースに振り分けるものであって、教員がコースに所属するものではない。教員は学環に所属している。

また、学際情報学府は学際情報学の1専攻という形式をとってはいるが、この「専攻」は従来の研究科における専攻とは異なるものであり、そこに教員が所属しているわけではない。

## 社会情報学コース

このコースでは、メディア、コミュニケーション、社会情報に関わる社会現象・文化現象を分析するための学識を養い、専攻分野における研究および応用の能力を培うことを目的とし、社会情報学の発展に貢献できる研究者を養成するとともに、社会人を受け入れて研究手法を身につけさせ、知識の高度化をはかる教育を行っている。

## 文化・人間情報学コース

このコースでは、情報学の視座から文化・人間科学の諸領域を体系的に再編し、生命現象や進化、身体知覚から現代文化、メディア、映像、テキスト、アーカイブ、リテラシー、学習環境までの21世紀的な諸課題に理論的かつ実践的に取り組んでいくことのできる深い学識と精緻な方法的能力をそなえた研究者や実践者を養成する教育を行っている。



## 先端表現情報学コース

このコースでは、21 世紀の社会・産業・個人の情報環境の基盤となる専門的な理数情報学の知を深めるとともに、あわせて他分野と協調して学際的に情報学のフロンティアを切り拓いていくための幅広い学識を身につけた研究者及び表現者を養成している。

## 総合分析情報学コース

このコースでは、センサーから大量のデジタル情報を取得し、それを必要な場所や機器へ通信し、保存・解析したうえで、有効に活用する分析情報学の学際的な専門教育を実施している

## アジア情報社会コース

このコースでは、情報通信技術の影響をますます受けつつある現代アジアの諸社会や国際関係に対する分析力や洞察力を養成する為の大学院教育を行っている。講義や指導はすべて英語で行われ、学年は 10 月から始まる。

これらの 5 つのコースそれぞれで、一般の入試と並び、実践的な経験や目的を重視し、社会人を主要な対象とした特別選抜を実施している。

## 情報学環教育部

また、学部生を対象とした教育カリキュラムとして、情報学環教育部がある。教育部では、大学 2 年次以上の在学者及び大学卒業業者の中から、将来、新聞、放送、出版などジャーナリズムの諸分野で活動することを志す者、あるいはマス・メディア、コミュニケーション及び社会情報現象、さらには学際的な情報学の学問的研究に関心を持っている者を毎年 50 名程度研究生として受け入れ、一定のカリキュラムのもとに、修業年限 2 年で基礎的な専門教育を実施し、修了に必要な単位を修得した者には修了証書を授与している。

## 1.2 理念と沿革

### \* 情報学環・学際情報学府設立の経緯

情報学環・学際情報学府設立の背景には、次のような認識があった。近年にみられる情報技術の急速な発展と利用の拡大によって、「情報」が現代社会において果たす意味は、決定的に重要なものとなってきた。技術的体系だけでなく、人間の行動や意識、社会のさまざまなシステム、文化や芸術、産業や政治・国際関係など、人間社会のあらゆる側面が、「情報」の様式変化のインパクトによって、根本的な変革を促されつつある。21 世紀には、この情報様式のあり方が、地球上の生命や人間、社会の動向を大きく規定する基盤となることは確実だ。こうした状況を背景に、「情報」に関する、より総合的でより高度な教育研究の社会的意義が高まり、それに応えうるような教育研究体制の整備が、喫緊に求められていた。

情報にかかわる教育研究は、今日、きわめて多様な学問領域で行われており、しかも、各個別領

域に固有な対象や方法とも深く結びつきながら発展してきている。こうした実態を有効に生かしながら、相互間の有機的連携を促し、学際的な教育研究をすすめることが、情報学の総合的な発展のためには不可欠だと考えられた。また、情報学は、急速に発展し、変容しつつある学問分野であることから、一方では研究面で、先端的な学融合に就中に取り組みうる緊密な共同体制を設ける必要があると同時に、他方では教育面で、カリキュラム編成や研究指導體制の幅広さと研究内容の進展や時代の要請の変化に即応できる組織的柔軟性を確保する必要があった。こうした特性をもっている情報学の教育研究上の目的を効率的かつ実効的に達成するために、平成12年4月から、学校教育法第66条に定める「研究科以外の教育研究上の基本となる組織」として、東京大学大学院に、「情報学環」及び「学際情報学府」が設置されたのである。

「情報学環」と「学際情報学府」が両者一体となって構成されるこの大学院組織は、専門深化と恒常性を基本的な特質とする従来の研究科とは違って、全学にわたる情報関連の諸領域をネットワーク的に連携させる横型の組織として設置され、情報学分野の総合的な教育研究を先端的かつダイナミックに推進するにふさわしい形態をとった。

前述の通り、その基本的特徴は、組織構成員の流動性と全学的連携、及び研究組織である情報学環と教育組織である学際情報学府の両立という点にあり、その組織構造は次のように作られた。研究組織である「情報学環」は、基幹教員と流動教員によって構成された。基幹教員とは情報学環が固有のもつ教育枠で採用される教員であり、流動教員とは既存の研究科・研究所等から3年ないし7年の期間をもって情報学環に定員及び人が移され、それによって情報学環教員となる教員のことである。そこでは、多数の分野横断的なプロジェクト研究を柱に据え、文系理系の区別を越えた情報分野の学融合が目指された。

教育組織である「学際情報学府」における大学院学生に対する研究指導は、情報学環の基幹教員及び教育にも従事する流動教員が行なう。学際情報学府における授業科目の担当は、これらの教員が行うほか、他研究科・研究所等に所属する教員にも兼担当教員として委嘱する。

## \* 社会情報研究所の合流、新組織設立に至る経緯

このようにして設立された情報学環・学際情報学府は、2004年4月1日、東京大学社会情報研究所と組織統合し、新たな一歩を踏み出した。社会情報研究所は国立大学附置研究所であり、その歴史をたどれば約75年間にわたる伝統をもつ研究機関であった。

1929年10月1日、東京帝国大学文学部に新聞に関する学術研究施設として新聞研究室が設置された。新聞研究室は、帝国大学の法学部、文学部、経済学部からそれぞれ1名の指導教授が横断的に参加し、1名の指導補助、および3名の研究員が置かれるという、規模は小さいが、今日の情報学環のさきがけをなすような仕方で東京帝国大学を横断的につなぐ学際的な研究組織であった。またその運営は、渋沢栄一や阪谷芳郎、本山彦一、徳富蘇峰、杉村廣太郎といった、当時の財界、新聞界の名士たちが協力して募られた寄附金によってまかなわれ、今日の産学連携のさきがけをなす形態をとっていた。設立時の新聞研究室の指導教授としては、法学部から南原繁教授が、文学部から戸田貞三教授が、経済学部から河合栄治郎教授がというように、戦前期日本の法学、社会学、

経済学をまさしく代表する教授 3 名が参画し、指導補助として実質的な研究組織の中核を担った小野秀雄（初代新聞研究所長）を支えていた。

このような前史を経て、戦後の 1949 年に新聞研究所が正式に東京大学附置研究所として発足した。その根拠をなす国立学校設置法（49 年 5 月 31 日公布）には、「新聞及び時事についての出版、放送又は映画に関する研究、並びにこれらの事業に従事し、又は従事しようとする者の指導及び養成」と規定されていた。すなわち、新聞研究所は設立の当初から、狭義の新聞に限らず、雑誌、放送、映画などを含むマス・メディア全般を研究対象とする学際的な研究組織として出発していたわけである。また、「新聞」という言葉そのものも、今日のように狭義の新聞紙だけを指していたわけではなく、ニュースや報道媒体全般をも含みこんだ概念であるという理解がその当時にはあった。

やがて、新聞研究所は 20 世紀後半の放送をはじめとするマス・コミュニケーションの発展を受けて組織の拡充と研究部門の再編を重ねていった。1957 年度からは、基礎部門：マス・コミュニケーション理論、歴史部門：マス・コミュニケーション史、特殊部門 1：コミュニケーション過程、特殊部門 2：マス・コミュニケーション・メディア、特殊部門 3：世論及び宣伝という 5 研究部門の構成となり、63 年度からはこれに放送部門が、さらに 74 年度からは情報社会部門が、80 年度からは社会情報システム部門が加わった。このような部門構成から明らかなように、東京大学新聞研究所は、マス・コミュニケーション研究を基本に据えながら、トータルな社会的コミュニケーション研究をも視野に収めつつ、日本の国立大学では唯一の現代社会の最も中核的な研究課題たる情報の社会的側面に関する学際的、総合的な研究として発展し、高い評価を得た。

そして、このような実績を基盤にして、1992 年 4 月 1 日、「社会情報の総合的研究」を目指して新聞研究所から社会情報研究所への改組が行われた。改組後の社会情報研究所は、情報メディア、情報行動、情報・社会という 3 大部門を置き、旧新聞資料センターを改称した情報メディア研究資料センターを附置するという体制をとって、1992 年から 95 年まで続いた文部省科学研究費重点領域研究「情報化社会と人間」をはじめ、情報化社会に対する学際的な取り組みを本格的かつ先端的に進めた。1996 年には外部評価を実施し、高い評価を得た。そのときの産業界パネルの委員は小池唯夫（毎日新聞社長）、川口幹夫（NHK 会長）、関本忠夫（日本電気会長）、大塚信一（岩波書店社長）、福川伸次（電通総研所長）の方々であった。

高度情報社会の深まりのなかで、東京大学における情報をめぐる教育研究体制の再編が議論になるたびに社会情報研究所は、文系の研究所として、その流れに身を置いてきた。そして、情報学環・学際情報学府の設立構想の際には積極的に関わり、人的リソースの提供において文系部局としては最大の貢献を果たした。社会情報研究所は情報学環・学際情報学府の設立後も密接な関係をもち、学環・学府を支援してきた。そして、国立大学法人化を前にした、国立大学附置研究所の見直し方針のなかで、社会情報研究所は情報学環・学際情報学府との合併を選択し、大学附置研究所から大学院組織へと全面的に移行したのである。それは、文系のなかでの学際的研究から、文理相互浸透のなかでの学際的教育研究へのシフトであり、情報現象を研究対象として組織としてはある意味で必然的な流れであり、新たなスプリングボードであったといえよう。

## 1.3 行動シナリオ

部局別行動シナリオ「情報学環・学際情報学府」

濱田純一総長のもとで策定された「行動シナリオ FOREST 2015」の部局別行動シナリオ(改訂版)において、情報学環・学際情報学府は各年度に見直しを行い、2013 年度は次のような行動シナリオを掲げている。

\*\*\*

設立 14 年目を迎えた大学院情報学環・学際情報学府は、これまでの蓄積を基本的には継承しつつ、次のような課題に積極的に取り組みます。

### 1 学術研究の深化と卓越性の追求

文理を越えた学際情報学研究の大学院として、世界最先端の総合的な情報学研究を推進し、世界の先端的研究機関と国際的な連携体制を構築する（「ユビキタス情報社会基盤研究拠点」、「メディア・コンテンツ国際研究拠点」、「アジア情報社会国際研究拠点」の推進）。

### 2 教育の新たな取り組み

1) プログラムⅠ 情報学を基礎にして、情報理工学系研究科をはじめ他研究科と協力し、複雑化する現代社会の様々な課題に取り組む次世代型の国際的リーダーを育成する 5 年一貫制博士プログラムを実施する。国際的にトップレベルの人材を集められるよう、カリキュラム、教育組織の見直しを行う。同時に産学官連携の強化に取り組み、博士号取得者の活躍の場を拓げるべく努力する。

2) プログラムⅡ 学際情報学を担うとともに、社会でリーダーとして活躍する人材を育成するために、学部前期から博士後期まで学際情報学授業科目群を展開する（「教養学部後期課程学際科学科」への参画、「メディア・コンテンツ」「デジタル・ヒューマニティーズ」「科学技術イノベーション政策の科学」など学部・大学院横断プログラムの充実）。

3) 国際化の推進 海外派遣プログラム・国際インターンシップを推進する。国際連携校との間に授業交換・単位互換および博士共同指導制度を検討する。英語での授業を充実させ外国人教員を積極的に登用する（「国際教育研究拠点ネットワーク」、「メディア・コンテンツ国際研究拠点」の設置、「現代韓国研究センター」の展開）。

4) 院生・ポスドク支援 RA・TA 制度を含め、院生・ポスドク支援のための「博士学位取得研究支援プログラム」といった支援枠組みの充実をはかる。

### 3 社会との連携

1) 組織：大学の社会連携コミュニケーションのための実践的研究機関を設立し「知の共創」イニシアティブを推進する。情報社会基盤の研究開発の産官学の連携と学内ベンチャーの育成のための教育研究プログラムを推進する（「知の共創センター」の設立、「情報社会基盤教育研究・国際戦略プログラム」の設置）。

2) 人：社会連携・産学連携のために外部人材を登用する「学環フェロー」、「学環フォーラム」の制度を発足させる。日常的な交流の場として、学術カフェ「U-Talk」等の社会活動を拡充する。

3) 社会貢献：震災からの復興・再生など、社会の重要課題の解決に学際情報学の立場から積極的に貢献する（「総合防災情報研究センター(CIDIR)」等の社会貢献活動の強化）

#### 4 ガバナンス・コンプライアンスの向上

情報学環の「流動システム」をさらに発展させて組織の流動性を確保し人材の絶えざる活性化を実現する。情報倫理・研究倫理教育の継続的实施により、その定着・浸透をはかる。教員の自己統治能力の向上、透明性とコンプライアンス推進、若手教員の教育能力改善のための「賢いFDプログラム」を導入する。

#### 5 研究基盤・教育施設の整備

新たな教育研究棟の建設、研究・教育施設の整備に全力をあげる。情報学環の先進的な情報基盤技術のノウハウを活かして、21世紀の持続可能社会のモデルとなる「スマート・キャンパス」の実証実験を実現する（「ダイワ・ユビキタス学術研究館」の建設・整備）。社会情報資料研究センターにおけるメディア教育研究資料の保存と利活用推進のために「国際メディア・アーカイブ教育研究コア構想」の実現へ取り組む。

## 1.4 教職員組織

### 1.4.1 教職員数

給与の財源が運営費交付金となっている教職員（常勤教職員）の採用枠は75人となっている。内訳は図1-4-1-1のとおり、教授等の常勤教員62人、常勤職員13人となっている。このほか、大学院情報学環は、外部資金に基づく特任教員や研究補助等の非常勤職員から構成される。

また、大学院情報学環の組織の一つとなっている基幹教員と流動教員の内訳について見ると、図1-4-1-2のとおりとなっている。基幹教員の定員数は36名、流動教員の定員数は25名とおおむね同数であり、両方の教員で情報学環の研究教育組織が等しく支えられていることがわかる。

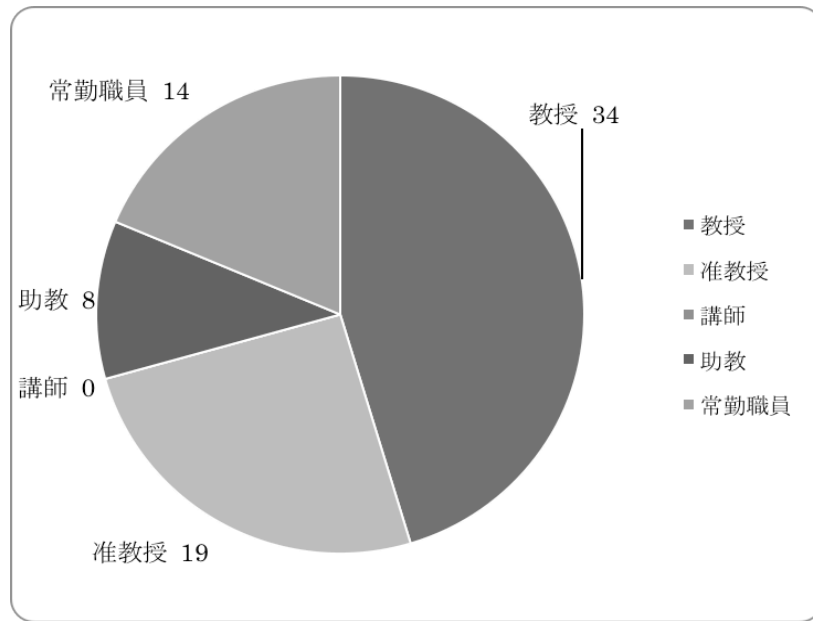


図 1-4-1-1 教職員採用枠（全 75 人）の内訳  
（平成 25(2013)年 4 月 1 日現在）

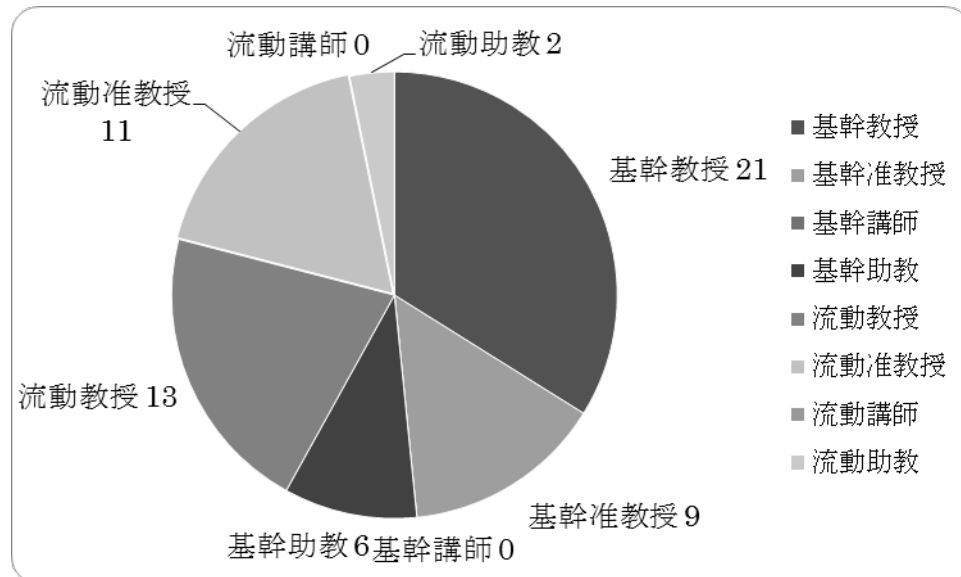


図 1-4-1-2 教職員採用枠（全 61 人）の内訳  
（平成 25(2013)年 4 月 1 日現在）

## 1.4.2 昇任・採用

中尾彰宏教授昇進報告（2013年12月1日）

人事選考委員会

暦本 純一 教授（委員長）

須藤 修 教授

坂村 健 教授

越塚 登 教授

馬場 章 教授

中尾准教授の教授昇進に関する審査報告を行う。本件は9月20日の人事教授会において昇進人事案および上記の選考委員案が承認されたことに基づくものである。10月19日に選考委員会を開催し、本人からの提出書類（履歴書、業績一覧、主要論文、過去の研究成果一覧および今後の研究計画に関するレジュメ）に基づいて審議を行った。

中尾准教授はコンピュータネットワーク研究に携わっており、ネットワークとOSの情報科学分野における知識と経験を活かし、複数の多様なネットワーク機能やサービスを柔軟に動的に導入可能とするための、深遠なプログラム性(Deep Programmability)を持たせた新しい情報通信基盤の構築を目指す研究を2000年頃より現在に至るまで遂行している。特にネットワーク仮想化、オーバーレイネットワーク、SDN (software defined network)の研究を勢力的に行っている。現在までに査読付き国際学会、国際学術論文誌に、当該研究分野のトップカンファレンスであるACM SIGCOMMをはじめ計約100報の原著論文を公表しており、国際的な学術研究の場で主導的な立場にある。SDNは次世代インターネットの中核技術として世界的に注目されており、従来の固定的なルーターの機能を超並列コンピューティングとソフトウェアで置換しようというもので、アプリケーションに最適化されたネットワークやセキュリティポリシーなどを柔軟に作り出すことができる。中尾准教授が率いるプロジェクトでは実際にマルチコアプロセッサによるルータシステムなどの試作を産官学連携で進めており、先端的な研究拠点として国際的に評価され、国内外での招待講演数は60件以上にのぼる。独立行政法人情報通信研究機構をはじめとする各種研究機関との共同研究実績や、各種の競争的研究資金を多く獲得していることも、研究内容の重要性と先端性を裏付けている。また、教育面でも多くの有能な研究者を排出している。さらに、部局内の委員会活動においても、学環長補佐、入試実施委員、企画広報委員、国際活動委員などを歴任し、部局運営に積極的に関わっている。

以上の審議結果より、中尾准教授の研究教育に関する業績は誠に顕著であり、選考委員会全員一致により中尾准教授の教授昇進に合意したことをここに報告する。

## 1.5 財務

平成 25 年度予算および決算に基づき、情報学環の財務構造を説明する。対象は、部局の研究教育に直接関係する運営費交付金と外部資金（科学研究費補助金等）とし、常勤教職員の人件費及び部局の管理が直接及ばない授業料及び入学検定料については特に言及しない。

具体的な数字を見る前に、情報学環財務の特徴である流動教員に関する資金の取り扱いについて説明しておく。

運営費交付金の配賦にあたっては、流動教員分も情報学環の予算として計上されるが、執行は原則として流動元の部局で行うこととなっている（支出委任）。

流動教員に係る外部資金についても、受け入れは情報学環で行っているが、執行は同じく流動元部局で行っている。また、間接経費については受入額全額を流動元部局に振り替えている。

すなわち、運営費交付金の配賦額、あるいは外部資金の受入額のうち、ある程度の割合については流動元部局において執行されている。この仕組みを前提とした上で、以下では具体的な数字を見ていくこととする。

平成 25 年度の収入総額は 963 百万円<sup>1</sup>だった。これは前年度比で約 103%であり微増と言えるが、前年度に大幅に減ったことを考慮すればほぼ同程度と言える。ただし内訳を見ると依然として受託研究費が減少している一方科研費が大幅に増えている。たまたま相殺する変化であったため総額に与える影響は小さいが、競争的資金である科研費や受託研究費はこのような不安定な性質を持つ点に留意する必要がある。財源は運営費交付金<sup>2</sup>が約 22% に対して外部資金が約 77% となっている<sup>3</sup>。

運営費交付金の使途内訳を見ると表 1-5-1 のとおりとなる<sup>4</sup>。前述した流動教員分の研究費 70,822 千円が全体のほぼ三分の一を占めている。したがって、運営費交付金のうち情報学環の裁量が及ぶのは残りおよそ三分の二の 140,544 千円となる。

その 1 億 4 千万円強のうち、ほぼ三分の二となるおよそ 95,200 千円が、消耗品等一般経費や非常勤職員人件費といった事務管理経費で、残りの 3 割強（約 45,300 千円）が直接の教育研究活動に充てられることになった。昨年度の年報でも触れたとおり、平成 25 年度には教員個人研究費および各委員会経費を前年度に引き続き一律 20%削減しているが、実際の執行においては各教員・委員会においてさらに支出が縮減された。事務管理経費についても前年度よりは減少しているが、こちらについては施設の維持管理費などの年度ごとのぶれの方が要因としては大きい。

---

<sup>1</sup> 昨年までの年報では収入総額を「運営費交付金総額+外部資金学環収入分」として算定していたが、それでは一貫性がないので本年度より「運営費交付金総額+外部資金受入総額」とする。昨年までの算定方法で平成 25 年度分を算定すると前年度比は 102% となるため論旨は変わらない。

<sup>2</sup> 本項では、運営費交付金のうち特別経費（大学防災情報システム：7,569 千円および知識コンテンツ：15,960 千円）については外数として扱っており、収入総額等には含んでいない。

<sup>3</sup> 註 1 に示した通り総額の算定方法が変わっているため、運営費の比率が下がっている。

<sup>4</sup> 本段落では、部局長裁量経費（約 15 百万円）については、外数として扱い、割合の算出の際には分母及び分子のいずれにも含まれない。



表 1-5-1 平成 25 年度実績（運営費交付金）

経費区分	執行額 (単位:千円)	備考
光熱水料	10,128	*執行実績(25,083 千円)のうち 14,955 千円は間接経費より支出
通信運搬費	1,802	
建物保守料	2,198	
業務委託料	9,401	
非常勤職員人件費（事務）	21,203	
非常勤職員人件費（教育研究）	19,869	
旅費交通費	377	
事務／教育研究一般用経費	19,766	
図書館全学共通経費	10,487	
教員研究費	16,007	
各種委員会等経費	29,306	*内訳は別表（表 1-5-2）に掲載
小計	140,544	
流動教員分	70,822	
総計	211,366	
部局長裁量経費	12,225	

表 1-5-2 平成 25 年度各種委員会等経費執行実績内訳

委員会名	執行額 (単位:千円)	備考
施設整備委員会	1,352	
情報ネットワーク委員会	664	
情報セキュリティ委員会		

業績評価委員会	10	
企画広報委員会	2,814	
図書・出版委員会	5,809	
国際活動委員会	989	
社会情報研究資料センター運営委員会	6,811	
教務委員会	2,980	
学生・留学生委員会	1,078	
入試実施委員会	1,436	
教育部委員会	1,250	
総合防災情報センター	2,809	
福武ホール管理運営委員会	1,304	
合計	29,306	

外部資金の収入内訳は表 1-5-3 のとおりである。ここに計上しているのは外部資金関係間接経費（情報学環分）を除いて直接教育研究に充当される資金である。外部資金のうち大学本部及び流動元部局の間接経費となる金額については計上していない。

表 1-5-3 平成 25 年度外部資金の収入内訳 (単位：千円)

区分	総額	うち流動元 執行分	学環収入分
寄付講座	27,000	0	27,000
寄附金	89,559	36,041	53,518
科学研究費補助金	199,674	107,694	91,980
厚生労働科学研究費補助金	0	0	0
その他補助金	35,850	0	35,850

受託研究費	252,626	113,799	138,827
共同研究費	112,081	18,231	93,850
間接経費（部局分）	25,163	-	25,163
外部資金合計	741,953	275,765	466,188

大学運営費交付金は毎年度削減されており、情報学環への配賦額においても例外ではない。表 1-5-1 にあるように、光熱水料にも外部資金の間接経費が充てられているのが現状である。

かような状況においては、外部資金獲得の重要性は高まる一方で、現在の社会情勢を鑑みると、その実現は一層難しくなっている。平成 25 年度の外部資金収入は前年度から若干増えてはいるが、先行きは依然不透明である。

情報学環では個人研究費および各委員会経費の大幅な削減を通じて、平成 25 年度単年度においては収支の均衡を達成した。これは、既存事業や業務の抜本的な見直しなどを通じて実現できたものである。平成 26 年度からは施設修繕準備金制度も開始されており、予算の少なからぬ割合を強制的に準備金として確保しなければならず、財政的な圧迫要因となっている。運営費交付金の削減が続く中にあることは、予算のあり方についての不断の検討と取組を進めることが必要である。

## 1.6 運営

### 1.6.1 情報学環教授会

大学院情報学環教授会が研究組織としての情報学環の意思決定機関である。教員が帰属するのは情報学環であり、情報学環教授会は基幹教員と流動教員によって構成され、両者の間に権利と義務において相違はない。教授会は月に 1 度開催され、重要事項を審議し決定する。人事に関しては人事教授会が開催される。

部局長たる情報学環長は教授会における選挙によって選任され、総長によって任命される。被選挙権は教授にあり、選挙権は講師以上にあるが、基幹教員と流動教員は同等の権利を持つ。学環長の任期は旧情報学環と旧社会情報研究所の統合後の最初の学環長は 2 年、その後の、つまり 2006 年 4 月からの学環長は 3 年（再任不可）となっていた。2012 年 4 月からの学環長に関しては、学環長の任期は、3 年とし、再任されることができるよう（ただし、引き続き 5 年を超えて在任することはできない）となった。学環長が副学環長を指名する。学環長が主宰する総務委員会が、教授会と教授会の間で諸案件や方針について協議し、教授会にかけるとの準備をする。また、総務委員会が決定し、教授会に報告すると定められた事項もある。総務委員会は学環長、副学環長、両学圏長、重要委員会の委員長、5 コース長、学環長補佐などによって構成され、ほぼ月に 1 度開催される。これが実質的な執行部である。

## 1.6.2 学府委員会

教育組織としての大学院学際情報学府の決定機関は、学府委員会である。そこで教務関係、入試関係、学生の身分の異動などの重要事項が審議され決定される。学府委員会の構成メンバーは学府の教育に関わる教員であり、情報学環の教員のほか兼任教員がこれに加わる。学府のもとに学際情報学専攻の専攻長が置かれており、学環長が指名する。専攻長は教務委員会と入試実施委員会を組織する。

学府は社会情報学コース、文化・人間情報学コース、先端表現情報学コース、総合分析情報学コース、アジア情報社会コースに分かれて入試を行い、合格した学生はそれぞれのコースの所属となるが、それぞれのコースの運営に責任を持つ、コース会議および運営委員会が置かれている。各コース長が責任者を務め、適宜開催される。

### 1.6.2.1 社会情報学コース

社会情報学コース運営委員会は、学生がより深く社会情報学を学習し、質の高い論文を執筆できる環境を整備することを目的とする。具体的には、教務委員会、入試実施委員会、他のコースと協力をしながら、主に以下の(1)~(12)の業務を担当した。2013年度は、特に、(a)学事暦変更に関する教育上の課題と解決策、(b)奨学金変換免除規定の継続審議、(c)社会情報学コースに所属する大学院生の研究生生活を支援するための様々な対応の検討、等に取り組んだ。また社会情報学コース志望および所属の学生たちのためによりよき教育指導を提供できるよう、教育環境の整備に取り組んだ。

(1)ガイダンス、研究構想発表会、社会情報学コース新入生歓迎会(4月) / (2)外国人研究生審査(5・11月) / (3)入試説明会(6月) / (4)修士中間発表会(7月) / (5)修士入学試験(8月) / (6)博士コロキウム(11月) / (7)次年度の開講科目、非常勤講師、RA・TA、共通入門科目(学際情報学概論)の計画・決定(1月) / (8)修士論文審査(2月) / (9)博士入学試験(2月) / (10)優秀学生論文の決定(3月) / (11)博士論文に関する審査委員会、審査結果の審議(随時) / (12)学生の休学、退学、復学の審議(随時)

### 1.6.2.2 文化・人間情報学コース

文化・人間情報学コースは、社会科学系の社会情報学コースと自然科学系の先端表現情報学コース、総合分析情報学コースとをつなぐ中間の位置にあり、文理の融合を進めながら、新しい学際的な情報学の創造に正面から取り組んでいる。このコースを担当している教員には、基礎情報学、科学技術社会論、進化生態学、生態心理学、科学技術コミュニケーション、知覚情報論、認知科学、記号学、映像学、カルチュラル・スタディーズ、歴史情報学、アーカイブ論、メディア・リテラシー、メディア表現、教授・学習設計、生命倫理学、医療社会学、人事管理論、科学思想史などの諸領域の専門家が揃い、新しい融合的な知の地平を拓きながら授業や学生の指導、いくつかの教育上のプロジェクトの実施に当たっている。このコースの教育は、①生命・身体・環境、②文化・表象・映像、③メディア表現・学習・リテラシー、④アーカイブ・歴史情報という、理論的なものから実践的なものまでの4つの大きな柱を軸にしつつ、生命現象や進化、身体知覚から現代文化、メディア、映像、テキスト、アーカイブ、リテラシー、学習環境までの幅広い21世紀的諸課題に理論的かつ実践的に取り組んでいる。教員の専門分野、また

学生の研究テーマも多岐に渡るため、基礎的な研究方法や学術リテラシーを涵養するために、コースの選択必修科目である文化・人間情報学基礎（4単位）と文化・人間情報学研究法（2単位）にはさまざまな工夫を凝らしており、上記の4つの柱に応じた基礎力増強のトレーニングとフィールドワーク型のグループ実習、量的・質的研究法の訓練、社会情報学コースとの合同科目などが用意されている。

### 1.6.2.3 先端表現情報学コース

先端表現情報学コースは、教員26名（学環基幹2名、流動9名、兼任・課程担当15名）が担当しており、毎年修士（定員19名）と博士（定員8名）の学生を受け入れて教育している。

コースは、先端表現情報学コース運営委員会（コース会議）のもとに、コース長、教務担当、入試担当が置かれ、他のコースと協力しながら運営されている。

このコースの特徴は、学環の基幹教員のみならず、関連部局（生産技術研究所、情報理工学系研究科、総合文化研究科、地震研究所、情報基盤センター、新領域創成科学研究科、工学系研究科など）からの多くの流動教員、兼任教員、さらには併任・客員教員の協力によって運営されていることである。これによって、多様な背景と目的を持つ学生の教育が可能になっている。一方で関係教員の負担が課題となっている。なお、12年度から、コース運営に関しては、情報理工学系研究科の兼任教員から学術委員を選出し、教務委員として教務委員会へ参画してもらうようになった。

また、多様な背景をもつ学生をより受け入れやすくするための、入試内容の改善にも取り組んできた。2011年に大きく入試を変更した。また、博士課程の入試についても、これまで冬のみであった試験時期を、夏と冬の2回に増やすなどの取り組みも進めた。

今後の課題としては、(1)幅広い部局からの教員の協力により成り立っているコース運営方法の改善、(2)学際性を維持しながら、専門を深めることのできるさらなる教育カリキュラムの検討、などが挙げられよう。

### 1.6.2.4 総合分析情報学コース

総合分析情報学コースは、平成18年4月に設立されたコースである。本コースでは、主にコンピュータサイエンスやコンピュータネットワークの基礎知識を基に、IoT（Internet of things）やM2M（Machine-to-Machine）技術を活用して大量のセンサー情報の取得、観測衛星からマクロなデジタル情報の取得、新世代型のコンピュータネットワークを利用した必要な場所や機器への通信、ビッグデータ技術による大量データの保存・解析、それらの解析結果を人間に伝えるための高度なHuman-Computer Interface、更に実社会においてそれらのデータを有効に活用する分析情報学の学際的な専門教育を実施している。

分析情報学が有効に適用できる分野は多岐にわたり、医学、薬学、農学、水産学、環境学、資源学、社会学、考古学といった学問分野をはじめ、災害支援や遭難救助、社会安全保障、国土や社会基盤の管理保全といった国レベルの施策、更には情報セキュリティポリシーの策定やインターネット等のサイバー空間の管理といった分野へも及ぶ。こうした現実社会に深く関わる技術課題とともにそれを支える社会制度までにも興味を持ち、膨大な情報を活用して確固たる決断を下すことが可能な人材並びに、分析情報学及び計算機科学の研究者を育成することを目標としている。

### 1.6.2.5 アジア情報社会コース

アジア情報社会コース International Master's/Doctoral Degree Program: Information, Technology, and Society in Asia (ITASIA) は、大学院情報学環と東洋文化研究所の協力に基づき、2008年4月に発足した、大学院学際情報学府の5番目のコースである。留学生、日本人を問わず、アジアや世界の舞台で専門的職業人として活躍することを志す学生を対象に、情報通信技術の発達に大きな影響を受けている現代アジアの社会と国際関係に対する分析力と洞察力を養う大学院教育を目指し、2007年度から準備が進められてきた。

本コースの最大の特徴は、すべての教育を英語で行い、学生に日本語能力を求めないことにある。入学時期は10月に一本化し、入学者の選抜も他コースのように筆記試験ではなく、TOEFL・GREのスコア、推薦書、研究計画書やこれまでの業績などを含む書類選考に基づいて行い、さらに学内外の支援により上位合格者に与える奨学金枠を用意することで、これまで英語圏に進学していたアジアの優秀な学生に対して、日本の東大で学ぶことを現実的な選択肢として提示した。

修士課程は、グローバル化するアジアにおける変容する政治的、経済的、社会的現実を把握できるよう、アジアの歴史と国際関係、メディア研究、社会調査方法論、情報技術という文理にまたがる4分野の必修基礎科目を軸に関連科目を提供するとともに、修士論文完成に向けた段階的行事と個別指導を通じて学生を訓練し、それぞれの専門分野で適切な判断や提言を行える修了生を送り出すことを目指している。

博士課程は、アジア研究および情報学の研究における高水準の研究者・専門家の養成を目的としており、文理にわたる広範な知識とともに、政治学、経済学、メディア研究その他の社会科学における先端的研究に必要な調査研究法と理論的分析能力を修得する機会を提供している。

発足して6年目に当たる2013年度は、修士課程10名が第4期生として9月27日(金)に卒業した。そのうち博士課程に進学した者はおらず、卒業後、日本国内で就職やインターンシップをしているか、母国で就職している。

2013年10月4日(金)には修士課程5名(後に1名は途中退学)、博士課程2名が入学し、同日にコースガイダンスを実施した。これで修士課程には20名、博士課程には18名の学生が、それぞれ在籍したことになる。通常、修士課程入試には多くの中国系学生の応募があるのだが、2012年は尖閣諸島をめぐる日中関係が冷却化したことから、応募が極端に少なくなってしまった。また、韓国系学生の応募も少なくなっており、これが結果的にコース内の学生の多様性を生み出す原因となった。

2013年10月1日時点での37名の国籍別構成は、図1-6-2-5-1の通りである(台湾は独立してカウント)。出身国・地域は16ときわめて多様である。

2013年10月7日(月)には修士2年生が修士構想発表会を実施、他方で、博士コロキウムについては、今年度から学際情報学府の他の4コースと合同で行うようになり、11月14日(木)、15日(金)の両日、福武スタジオ2・3を用いて実施した。

修士論文中間発表会(MPP)は2014年2月19日(水)に実施された。

学生による自治組織(Student Body Government)は、昨年度同様、授業についての評価をめぐって教員と意見交換をし、学生主催によるGraduate Student Conferenceを実施した(11月22日(金))。

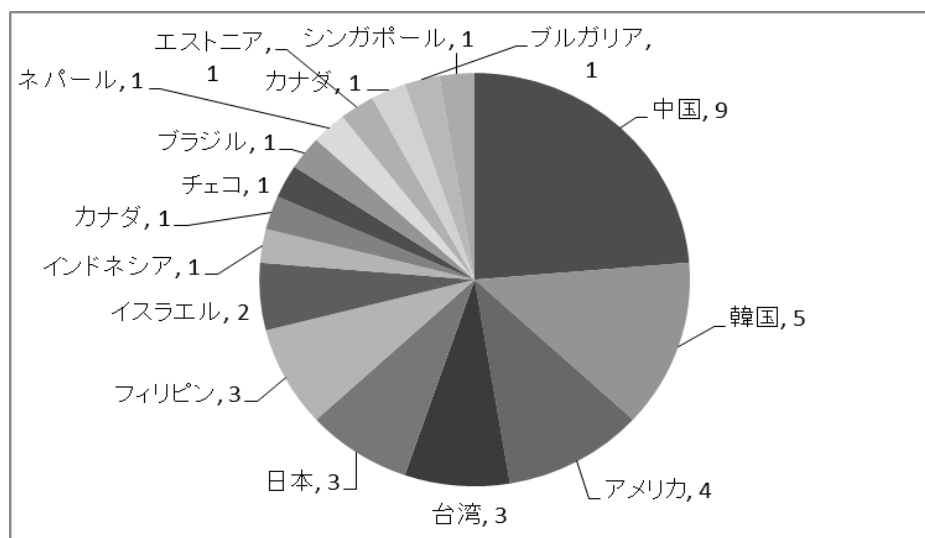


図 1-6-2-5-1 在籍学生の国籍別構成：2013 年 10 月現在（修士課程、博士後期課程含む）

Graduate Student Conference では、対外的にペーパーを公募するなどして、今まで以上に大きな規模で活動を行った（<http://www.h-net.org/announce/show.cgi?ID=206393>）。

なお、まだ本コースから博士号取得者は 1 名しか出ていないが、博士論文第一次審査を通過した者が本年度 7 名生まれた。

### 1.6.3 教務委員会

教務委員会は、大学院学際情報学府の教育運営の中核をなしている。大学院学際情報学府では、情報学環に属している基幹・流動の教員に加え、学内兼担教員、授業担当教員、客員及び非常勤講師などから成る教員スタッフが学生指導に当たっている。その数は、平成 25 年度現在で、基幹教員 26（教授 18、准教授 9）、流動教員 23（教授 13、准教授 10）、兼担・課程担当教員 32（教授 26、准教授 6）、兼担・授業担当教員 12（教授 10、准教授 2）、客員教員 1（教授 1）、非常勤講師 17、総計 111 名となっており、修士課程 200 名、博士課程 180 名、学府全体で約 380 人の大学院生を教育するにも十分な教師陣を備えている。教務委員会では、これらの多数の教員に協力を得ながら、カリキュラムの運営と改善、授業時間割の編成と講師の手配などの基本的な業務の他に、授業取材、特別研究生・大学院外国人研究生・大学院研究生（国内）による授業履修及び出席の承認、博士最終審査におけるテレビ及びインターネット会議システムによる参加のあり方、早期修了の要件、修士論文の提出媒体に関する検討など広く教育に関する制度設計業務も行っている。平成 25 年度は 24 年度に引き続き、情報倫理だけでなく研究倫理についての授業を行った。

### 1.6.4 予算委員会

予算委員会は、情報学環の事業計画及び決算に関して、原案を総務委員会に提出するのが任務である。

### 1.6.5 将来計画委員会

2012 年度に「情報学環戦略企画室」が廃止され、「将来計画委員会」を発展させて新たに設置した。2013 年度は、主に概算要求案の作成、定数再配分要求案の作成、秋入学制度に代表される学事暦の問題に関して関連する他の委員会と共同で議論を行なった。

### 1.6.6 入試・カリキュラム制度検討委員会

入試制度、カリキュラム制度にかかわる問題を、学環・学府の組織運営体制の根幹にまで立ち戻って再点検し、必要があれば改善・見直しを提案する検討委員会として 2008 年度に設置された。関連する常設委員会との協議やヒアリング、拡大検討会議をおこない、(1)組織運営上の一般的問題点、(2)教育体制上の一般的問題点、(3)研究体制上の一般的問題点について議論を重ねている。

#### 「入試・カリキュラム制度検討委員会」

委員長 佐倉統

副委員長 中尾彰宏

委員 石崎雅人 池内克史 上條俊介 北田暁大 須藤修 水越伸 山内祐平 暦本純一

事務 学務係

2013 年度は、4 学期制への移行に伴い、入試や教務カリキュラムをどのように対応させるかの検討が主要な課題であった。具体的な内容検討は 2014 年度におこなうことになるが、当委員会だけで検討するには大きすぎる課題であるので、教務委員会や将来計画委員会など関連する常設委員会との共同協議を中心とすることになる。

また、昨年度と同様、2011 年度に策定した研究倫理、アカデミックマナー資料(Web サイト)

日本語：<http://www.iii.u-tokyo.ac.jp/graduate.php?id=1259>

英語：<http://www.iii.u-tokyo.ac.jp/en/graduate.php?id=1272>

を利用して、情報学環の新生の導入教育として、研究倫理に関する講義を実施した（講義担当 佐倉、暦本）。受講者アンケートによればこの講義は好評であり「研究倫理に関する基本的な心構えや論文発表に関しての注意事項などがよく理解できた」といった感想が今年も多く得られた。

### 1.6.7 施設整備委員会

施設整備委員会の最大のミッションは現在の情報学環がおかれている最低必要面積が確保されていないという認識のもと、教育研究に必要な施設を確保することにある。これまで、護国寺にある東大病院分院跡地に学環プロジェクト共同ルーム、第二本部棟の 3 階のフロアの一部を確保した上に、更に、2008 年 3 月には福武ホールが竣工し、これらのスペースを有効に使って研究教育が実施できるようになった。そして 2010 年には、大和ハウス工業様からの寄附による暫定アネックスの建て替えが決まっ



た。2011年度には施設整備委員会内に新棟建設に関するWGを構築し、学内調整や暫定アネックス及び第二本部棟からの研究室の移設作業等を行なった。夏には、暫定アネックスの取り壊しが行なわれ、2014年3月竣工に向けた作業が進められている。また2012年度途中から開始されたリーディング大学院(GCL)プログラムのためのスペース確保などに務めた。施設整備委員会としては、当面はこの新棟の建設に関わる作業を実施するとともに、建設中に不足する教育研究環境の手当や整備などに注力しつつ、今後も教育・研究に必要な施設を確保できるように引き続き尽力する。

### 1.6.8 福武ホール管理運営委員会

福武ホール運営委員会の最大のミッションは、2008年3月に竣工した情報学環・福武ホールを有効活用し、教育研究活動を支援することである。2013年度、当該ホール地下2Fのラーニングシアターとラーニングスタジオを利用して開催されたシンポジウムやワークショップは計217件であり、情報学環内部のみならず外部に対しても、開かれた学びの施設となっている。特にラーニングスタジオ、1F会議室、1F学環コモンズは、情報学環教員・学生に対して、授業、ミーティング、授業外学習の場として活用されている。また、当該ホール1Fに併設されているUT Cafeにおいては、様々な領域で活躍している本学の教員をゲストとして招き、毎月開催するイベントである「UTalk (ユートーク)」を継続的に実施してきた。毎回の定員は15名であるが、情報学環の教員・学生のみならず、他大学の教員や学生、企業人など多様な参加者が多数集まり、定刻を過ぎても議論が続く盛況ぶりを見せている。情報学環・福武ホールが今後も学内外に開かれた学習空間となるよう、引き続き努力する。

表 1-6-8-1 2013年度 UTalk 実施テーマ一覧

実施月	タイトル	ゲスト所属	ゲスト氏名
2013・4	課題解決の方法としての「見える化」	「プラチナ社会」総括寄附講座・特任講師	菊池 康紀
5	砂漠で宇宙線をつかまえる	宇宙線研究所・助教	野中 敏幸
6	ポスト・アンコールの道・都・港	文学部東洋史学研究室・助教授	北川 香子
7	ネコとヒトの微妙な距離感	教養学部統合自然科学科・講師	斎藤 慈子
8	「産む」を科学する	医学系研究科・講師	松崎 政代
9	時空の振動で星をみる	広域システム科学系・宇宙地球科学教室・助教	吉田 慎一郎
10	哲学対話を体験する！	東京大学大学院総合文化研究科・准教授	梶谷 真司
11	錯覚をつくりだすテクノロジー	大学院情報理工学系研究科・助教	鳴海 拓志
12	色づけして見た生命の動き	理学系研究科化学専攻・特任助教	吉村 英哲
2014・1	つながりをつくる人生の豊かさ	社会科学研究所・助教	菅原 育子
2	資産バブルとお金	経済学部・准教授	青木 浩介

3	海底の隠された生態系	大気海洋研究所・助教	清家 弘治
---	------------	------------	-------

### 1.6.9 コンプライアンス委員会

学環・学府では、コンプライアンス推進体制、コンプライアンス事案の防止活動およびコンプライアンス事案への対応等を、従来よりもさらに拡充するために、平成 25 年 7 月の教授会・学府委員会において「東京大学大学院情報学環・学際情報学府コンプライアンス委員会規則」を制定し、東京大学コンプライアンス基本規則に定めるコンプライアンスに関する事項を審議するための常設委員会として、本委員会を設置した。

本委員会は、特に個別事案への対応においては、本学本部および学環・学府の関連の委員会等と緊密に連携しながら、また、関係者の権利や利益に十分に配慮しつつ、対応措置を講じることとしている。さらに、事案に応じて、適宜、本委員会の下に調査部会やワーキンググループ等をアドホックに設置して、調査、対応措置および再発防止措置の検討等を行ってきている。

本委員会は、本年度に 9 回の委員会を開催して、上記の事項に関する審議を行った。

### 1.6.10 情報セキュリティ委員会

必要に応じて、適宜対応を行うことができるように体制を整えている。

### 1.6.11 情報ネットワーク委員会

2000 年の情報学環発足以来、所属教職員ならびに学際情報学府学生に対して、部局内 LAN、学内 LAN である UTnet、さらにはインターネットへの接続環境を提供し、また部局としての電子メール・サーバ、WWW サーバ等を運営することなどを中心とする、情報ネットワークに関わるサービス提供と管理が要請されてきた。しかし、これを専門に担当する委員会は当初は存在せず、部局ウェブページのコンテンツ管理等も含め、「HP・ネットワーク担当」の数名の助教授および助手が任に当たっていた。2002 年 6 月になって、情報学環の広報及び情報システム等に関する事項の審議のため、「広報・情報委員会」が設置された。さらに、2004 年 4 月の社会情報研究所との組織合併に際して機能分化が図られ、部局ウェブページのコンテンツ管理に当たる「企画広報委員会ホームページ担当」とともに本委員会が設置された。本委員会は、2002 年 11 月に設置された情報倫理審査会が行う調査・審査等や、学生・留学生委員会その他が管理する個別端末、さらに 2006 年に設置された情報セキュリティ委員会の担当範囲等をも除き、インフラ等、部局の情報ネットワークに関して残る部分を、関係委員会等と協力しつつ、全般的に担当してきた。

具体的には、2005 年度以降、情報ネットワーク基盤の維持やセキュリティ事案への対応などの日常的管理実務を着実に行うとともに、情報ネットワーク運営管理体制の明確化・強化、基幹ネットワークの更新・整備、サーバ室の環境改善、基幹サーバの更新、諸規則の整備、iii-PKI(Public Key Infrastructure)に基づく安全な通信・情報共有のための基盤形成および VPN・会議資料オンライン閲覧システムの構築・運用などを順次進めてきた。

内規に従い、基幹的情報ネットワーク管理の実務(セキュリティ事案対応にあたる CERT 業務を含む)

は、情報ネットワーク基幹実務担当者（2012年の時点で准教授2名、助教2名）が担ってきたが、2008年度末に情報セキュリティ委員会主導で全学の情報セキュリティ・ポリシーの実施手順に相当する諸内規等が成立したことなどを受け、日常業務の諸局面で情報セキュリティをより一層考慮した運用を進める必要が生じた。ただ、この点について委員会内部で十分意思統一ができない事態が生じ、日常業務にも支障が出たことから、情報関係諸委員会の整理・再編も視野に入れた、当委員会についての見直しが始まるとともに、情報セキュリティ委員会の下で情報ネットワーク基幹実務担当者が必要な作業を正当に行えるようにする措置がとられた。2011年度末には、CERT等の関係体制を（規則上部局情報セキュリティ委員長である）部局CISO（最高情報セキュリティ責任者）の下に再編することを求める正式な要請も全学CISOからなされた。2013年度も、必要に応じて適宜対応を進めてきた。

### 1.6.12 情報倫理審査会

情報倫理審査会は、東京大学の情報倫理委員会が定める情報倫理規則にもとづき、情報倫理の遵守のための審査をおこなっている。2003年度の新情報学環の発足以来、構成員への連絡通知のためのMLをつうじてネットワーク利用者への注意喚起などをおこなってきた。2013年度は、例年通り新入生ガイダンスにおける啓蒙と注意喚起を行った他、既に違法化されていたダウンロード行為や、パソコンやデータの紛失等に関する注意喚起をおこなった。

### 1.6.13 業績評価委員会

業績評価委員会は、情報学環・学府の研究・教育活動に対して行われる、学内外の様々な評価に関連する業務を遂行することが任務である。

### 1.6.14 ヒトを対象とした実験研究および調査研究に関する倫理審査委員会

ヒトを対象とした実験および調査研究に関する倫理審査委員会では、情報学環の教員や学生がこれらの実験・調査をおこなう際に、事前に倫理審査をおこなうものであり、平成21年度に設置された。情報学環は教員・学生とも研究領域が多様であるため、どのような倫理審査が適しているのか、まだ手探りの段階であるが、学祭組織での研究倫理のあり方を確立することを目標に活動している。平成25年度の審査件数は4件で、倫理的にとくに大きな問題を含む申請はなかった。今後は、学環教員や学生に対する啓発活動が必要と思われる。

### 1.6.15 企画広報委員会

本委員会は、情報学環・学際情報学府の活動や行事（大学院入試説明会、シンポジウム、ワークショップ、ホームカミングデイ、教員研修会など）を企画・運営すること、および両組織の情報を、ニューズレター、ホームページ、メール等で、学内外に案内するなどの広報活動を行うために設置されている。その他、学環・学府関連のメーリングリストへの配信管理や、福武ホールや工学部2号館9階などの施設の利用管理なども行なった。

例年通り、ファカルティデベロップメントの一環として、学府委員会と教授会の間に教員が研究内容を紹介する「学環トーク」を企画した。10分間という限られた時間ではあったが、毎回興味深い話題が

提供され、学環教員の研究内容の多彩さ、学際性の高さを再認識できる機会となった。以下が、今年度の学環トーク講演者一覧である。

### 学環トーク担当教員一覧（平成 25 年度）

第 18 回 平成 25 年 5 月 17 日 鈴木 高宏 准教授（生産技術研究所）

第 19 回 平成 25 年 6 月 14 日 中尾 彰宏 准教授

第 20 回 平成 25 年 7 月 19 日 松山 裕 准教授（医学系研究科）

第 21 回 平成 25 年 9 月 20 日 丹羽 美之 准教授

第 22 回 平成 25 年 10 月 18 日 嶋田 正和 教授（総合文化研究科）

第 23 回 平成 25 年 11 月 29 日 石川 徹 准教授

第 24 回 平成 26 年 1 月 17 日 古村 孝志 教授（地震研究所）

## 1.6.16 図書・出版委員会

2007 年度から図書委員会と出版編集委員会が統合されて、図書・出版委員会となった。

### 1. 図書室関係

情報学環図書室は、新聞研究所、社会情報研究所以来のマス・メディア、ジャーナリズム研究の資料に加えて、2004 年度の情報学環との統合以降は、文系・理系を問わず、情報の学際的な研究に関する資料を幅広く収集し、利用に供している。

2013 年度も「図書購入方針」（2007 年 6 月図書出版委員会承認）にもとづいて、①見計らいによる推薦、②基幹教員による推薦、③授業用図書の推薦、の 3 方式で図書を購入した。見計らい図書選定については、選定リストの改善によって選定参加教員が文系・理系双方で大幅に増えて、各分野の基本図書が選定されるなど機能し始めている。

2011 年度から教務委員会の要請に基づき、図書・出版委員会で審議し、図書室内に「授業参考図書（Reserved Books for Courses）」コーナーを新設した。同コーナーには、学際情報学府の授業を担当する教員の授業に必須の図書を配架し、学生の利用に供している。

表 1-6-14-1 2013 年度図書受入冊数

	購入	寄贈	計
和書	127	154	281
洋書	141	43	184
計	268	197	465

表 1-6-14-2 貸出冊数の年度推移

年度	2011	2012	2013
図書	5,129	4,912	4,920
雑誌	706	744	640
計	5,835	5,656	5,560

### 2. 出版関係

(4.6 出版活動を参照されたい)

### 1.6.17 国際活動委員会

国際活動委員会は、情報学環への外国人研究員等の受け入れを審議し許可してきた。最近の受け入れ総数を見ると、平成18年度15名、平成19年度15名、平成20年度14名、平成21年度27名、平成22年度36名、平成23年度25名、平成24年度25名、平成25年度23名である。おおむね、増加の傾向をたどっており、情報学環の多様な研究背景を生かし、引き続きさまざまな教員を受け入れていくことが課題であろう。また、新たに韓国の高麗大学校・応用文化研究所、高麗大学校大学院・視覚文化学科との国際交流覚書を締結し、台湾の国立政治大学伝播学院との国際交流協定を更新した。このほか、メキシコのエル・コレヒオ・デ・メヒコ、ならびにインドのデリー大学、中国の南京大学との全学国際交流協定更新の際、関係部局として参画した。

また、2013年度には、次の2つの事業を創設した。

#### 1) 東京大学大学院情報学環 国際活動補助奨励費

学環内の国際活動は非常に活発であるが、そうした活動を一層奨励、ならびにサポートするために、国際活動のシードマネーを広く部局のメンバーに提供する仕組みをつくった。2013年度は、昨年度加盟した国際連合の下部組織である国際電気通信連合の電気通信標準化部門 (ITU-T、本部:スイス ジュネーブ) のメンバーシップ費に与えられた。

#### 2) Writing Support Desk (WSD)

WSDは、週一回、英語を母語とする博士課程学生が、学環の学生が英語論文執筆の際のさまざまな疑問に答え、英語表現を洗練させる支援をし、さらに長期的には学生の全体的な英語力、writing スキルを伸ばすことをめざしている。近年、学生の間でも国際学会での発表や英語査読論文投稿が増えてきており、そうしたニーズに応えるべく、教育事業の一環として創設した。創設当初から、学生に広く利用され好評を博している。

### 1.6.18 産学連携委員会

産学連携委員会は、情報学環・学際情報学府における研究・教育活動を、産業界との連携を通して社会還元をすることを目的として設置されている。2013年度の産学連携委員会の活動は、職務発明特許やそれに類する著作権等の知財に関する規定の策定に関して、東京大学産学連携委員会を通して参加をしている。また、東京大学産学連携協議会に参加し産業界との交流も行っている。学環・学府において、寄付講座・社会連携講座・受託研究などを通じて産業界と連携するケースが増加している。連携する上で生じた様々な課題に対応する。

### 1.6.19 知的財産室

知的財産室では、情報学環・学際情報学府の教職員が発明したり、著作物を作成した際の届け出を受け付ける。ここで、それらの発明や著作物が、職務上のものであるか、そうでないかを、届け出の内容から判断する。

### 1.6.20 利益相反アドバイザー

現在、東京大学の教職員は、東京大学が定める規定の範囲内で、様々な立場を学外において持つことが可能である。例えば、学会の役員や政府委員、他大学の非常勤講師、産学連携のための民間企業の兼職などがある。こうした立場に立って、様々な活動を行うと、東京大学の構成員としての利害と、学外の立場における利害がぶつかる場合がある。そのようなケースを利益相反と呼ぶが、利益相反アドバイザーは、情報学環内において、利益相反が心配されるときに相談を受け、本部事務とも連絡を取りながら、利益相反に関する対応をアドバイスする役割を担っている。今後、産学連携が進む上で、起こることが予想される利益相反の問題に対して適切に対応していきたい。

### 1.6.21 ハラスメント予防担当者

ハラスメント予防担当者は、アカデミック・ハラスメントあるいはセクシャル・ハラスメントなどの問題に対応するために設置され、引き続き活動を行っている。ハラスメントに関するパンフレット等を配布し、ハラスメント予防について教員および学生への周知を行っている。また、ハラスメントに関する相談に対して、ハラスメント相談所や男女共同参画室と連携を取り合いながら、具体的な相談を受けた場合に対応し、相談体制を整えている。

### 1.6.22 社会情報研究資料センター

社会情報研究資料センターは、新聞資料を中心に、各種メディア情報資料を研究のために収集、整理し、それらの資料を学内外の研究者に提供することを目的としている。現在、本センターの所蔵資料は製本済原紙約 20,000 冊、縮刷版約 8,000 冊、マイクロフィルム約 45,000 リールに達している。

本センターの沿革は、1964年に当時の新聞研究所に開室された「プレスセンター」が1967年、新聞研究所附属施設「新聞資料センター」として正式に発足し、1992年4月に新聞研究所が社会情報研究所に改組されるにあたって「情報メディア研究資料センター」と改称された。その後、2004年4月、大学院情報学環・学際情報学府と社会情報研究所の統合にともなって、「社会情報研究資料センター」と改称した。センター運営委員会は、この社会情報研究資料センターの運営にあたっており、2007年度から2011年度にかけては新規教育研究事業「社会情報研究資料センターの高度アーカイブ化事業」を推進した。

なお、本センターの現在の年間利用者数は1,000人を越えており、2013度における月別利用者数は、下記の通りである。

表 1-6-20-1 社会情報研究資料センター月別利用者数 (2013 年度)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
(開室 日数)	21	21	20	22	17	19	22	20	18	17	17	19	合計
学内	69	71	41	68	20	36	46	50	36	25	36	26	524

学外	62	58	68	65	42	42	53	27	34	16	23	46	536
合計	131	129	109	123	62	78	99	77	70	41	59	72	1060

### 1.6.22.1 情報学環メディア・コンテンツ研究機構

情報学環メディア・コンテンツ研究機構は、2009年9月、情報学環におけるメディア・コンテンツ分野の研究開発や教育推進、産・官・学の連携の発展、国際的な人材養成の展開のために設置されたネットワーク型の機構である。組織としては、情報学環附属研究施設の社会情報研究資料センターの下に置かれている。

情報学環は、「コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム」（2004年度～2008年度）や「コンテンツ創造教育研究コア」（2005年度～2009年度）をはじめとして、メディア・コンテンツ分野での研究教育に取り組んできた。本機構は、それらのメディア・コンテンツ研究をアカデミックに発展・深化させ、教育を根付かせ、国際的な研究協働と人材育成を支援するための体制の確立を目指している。産・官・学を結ぶ「知のトライアングル」の構造化、研究・教育・国際連携のための戦略的組織である。

本機構は、研究教育の軸として、デジタル・テクノロジーを共通の基盤に、1) クリエーション、2) プロデュース、3) アーカイブ、4) アナリシス、5) リテラシーの5つの柱を立て、それを円環的プロセスで連結し組織化することをめざしている。

2011年度からは、特別経費「国際的に卓越した教育研究拠点機能の充実」（2011年度～2015年度）の概算要求が認められ、「知識コンテンツ基盤拡充に向けた横断型教育モデルの国際展開」プログラムが開始された。これにもとづいて、2012年度からは、従来の学部横断型教育プログラム「メディアコンテンツ」に加え、大学院横断教育プログラム「デジタル・ヒューマニティーズ」が情報学環を世話部局として開始されることになった。

### 1.6.23 総合防災情報研究センター運営委員会

総合防災情報研究センターは、情報学環附属のセンターであるが、地震研究所、生産技術研究所と連携して運営されており、その具体的仕組みとして、平成19年10月12日付け大学院情報学環教授会決定の「情報学環総合防災情報研究センター運営委員会規則」に基づき情報学環総合防災情報研究センター運営委員会がその任に当たる。本センター運営委員会は3部局長および各部局から選出された委員各1名の合計6名から構成されている。運営委員会委員のうち、部局選出委員は、2013年4月1日現在で以下に示した3名である。

大学院情報学環	橋元良明教授
地震研究所	瀧瀧一起教授
生産技術研究所	古関潤一教授

2013年度は2回の運営委員会を開催した。いずれも、特任教員の採用にかかわる審議であった。

## 【総合防災情報研究センター運営委員会の記録】

### 第1回 総合防災情報研究センター運営委員会(持ち回り)

日時 10月1日、10月8日(持ち回り)

出席者

小屋口剛博地震研究所所長、中埜良昭生産技術研究所所長、須藤修情報学環長、  
額瀨一起教授(地震研究所)、古関潤一教授(生産技術研究所)、橋元良明教授(情報学環)

#### 1. 議題 特任准教授採用の件

個別に説明の上、承認を受けた。

### 第2回 総合防災情報研究センター運営委員会(持ち回り)

日時 1月16日、17日

議題 1. 特任助教採用の件

メール審議にて、承認を受けた。

### 報告事項

概算要求の件、メールにて、報告了承を得た。

## 1.6.24 ユビキタス情報社会基盤研究センター

ユビキタス情報社会基盤研究センターは、21世紀COEプログラム「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」(2004～2008年度)の研究成果を引き継ぎ、総合分析情報学コースの教育と連携して、ユビキタスコンピューティング、ユビキタスネットワークングに関する世界最高の教育・研究拠点の中核を担うことを目的として、2009年4月1日に設立された。現在7名の東京大学情報学環の教員がユビキタス情報社会基盤研究センターの教員を兼務している。

## 1.6.25 現代韓国研究センター

現代韓国研究センターは、グローバル化する東アジア地域のなかでダイナミックに変化している朝鮮半島及び現代韓国の諸相を学際的に研究し、その成果を世界に向けて発信する国際的拠点を目指して2010年設立された。本センターは、東アジア地域の国際的協力と地域主義的連携を展望しつつ、日本と韓半島の相互協働とパートナーシップの多面的な展開の可能性を探求する必要性から、情報学環内で現代韓国の政治や情報、文化を中心とする学術交流と共同研究のプログラムを策定・実施するとともに、東京大学内の現代韓半島研究に携わる諸組織・機関をネットワーク化し、研究者や大学院生の活発な相互連携を図り、韓国研究の水準の向上とその普及を目指している。さらに2011年には、駒場キャンパスに現代韓国研究センター駒場支所を開設し、駒場と本郷の現代韓国と関わる研究教育の連携を図っている。



### 1.6.26 駒場カリキュラム連携運営委員会

駒場カリキュラム連携運営委員会は、総合文化研究科・教養学部における、大学学部前期課程、学部後期課程の教育と情報学環・学際情報学府の教育に関する連携を協議し、連携に関わる授業科目を円滑に運営する目的で平成 20 年度から設置された。設置以来、教養学部前期課程で情報学環教員が担当する科目に関する調整と、同後期課程学際科学科総合情報学コースへの協力体制構築を主な案件として活動してきたが、前者についてはルーチンが確立し、後者についても基本的な役割分担が確定したため、平成 25 年度は、定例委員会を開催せずに、教務委員会委員長と相談の上で各科目担当者を決定した。

### 1.6.27 学生・留学生委員会

学生・留学生委員会では、大学院生全般を対象としたサービスに関して、主に、学際情報学府に在籍する大学院生（留学生を含む）の福利厚生に関する以下の業務を担当してきた。

- (1) 大学院生の勉強・研究用スペースの整備、維持
- (2) 大学院生用備品の購入、管理
- (3) 大学院生と教職員スタッフとのコミュニケーションの維持
- (4) 大学院生向け情報の提供
- (5) 大学院生奨学金および研究支援経費関係

これらに関して、今年度は、計 7 回の委員会を開催して、これまでの委員会業務を全般的に検討し、関係する教職員及び大学院生との対話を通じて、従来から指摘されてきた諸課題の解決に向けて一連の措置を講じた。

例えば、(1) については、本郷キャンパス情報学環本館 4 階に加えて福武ホール学環コモンズにおいて勉強する環境を用意しているものの、大学院生のためのスペースの増加は現状では難しいことから、1)既存のスペースを有効に活用するための情報提供をおこない、また、2)修士論文提出期間直前の時期には論文執筆のための教室・演習室の臨時開放等を実施した。

(2) については適宜学生の希望を募り、必要と認められた場合には、共通予算で備品購入をおこなっている。

(3) については、年に 1 回、院生向けの連絡会を開催し、情報の相互流通をはかるとともに、年度はじめの新生歓迎会、留学生旅行、年度末の謝恩会等を開催している（新生歓迎会は在校生が、謝恩会は当該年度の修了生が企画実施）。さらに、今年度は、大学院生と協力しながら新規行事を企画して、1)留学生旅行に関して、留学生と日本人学生との間の交流を図るために、学府主催の「文京区歴史散策（ウォーキングツアー）」を実施し、また、2)学環・学府のホームカミングデイ行事のプレイベントとして、アジア情報社会コース学生自主企画のキャリアイベント「ITASIA Career Panel 2013」を実施した。

(4) については、教務関係の情報は上記 (3) のルートのほか、適宜掲示板、学務係メールニュースでの情報配信をおこなっている。また、大学院生向けの奨学金・就職・住宅などの情報を、学務係横のスペースで閲覧できるようにしている。

(5) については、各種奨学金の付与に関して希望者を募り、適宜順位付けをして申請している。ま

た、今年度は、奨学金に関する制度整備をおこなった。

留学生を対象としたサービスに関しては、留学生専用の窓口となる留学生支援室を通じて積極的な留学生支援をおこなっており、今後も支援の充実・強化をおこなう予定としている。

### 1.6.28 教育部委員会

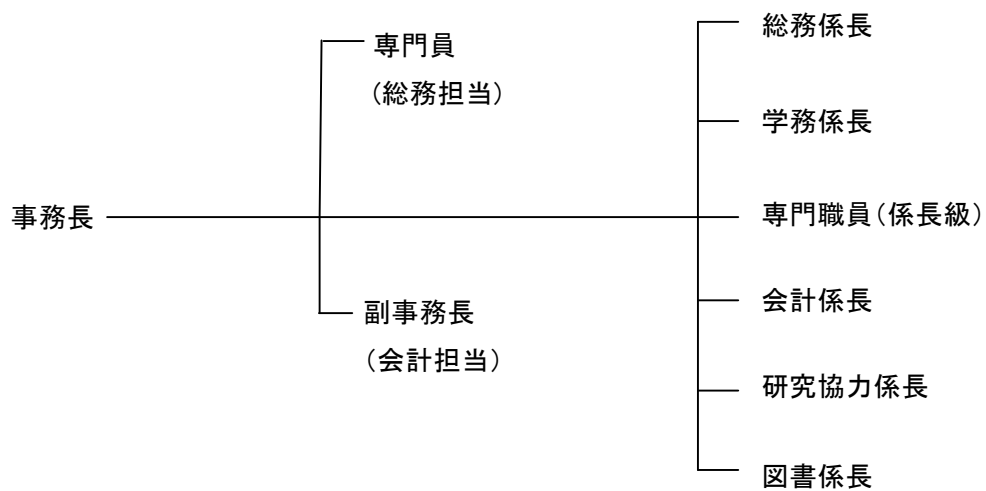
情報学環教育部は、情報、メディア、コミュニケーションについて学びたい人々のために、情報学の体系的な教育を行うユニークな教育組織である。修業年限 2 年。大学 2 年生以上であれば、東京大学の学生であるなしにかかわらず、社会人も含めて受験することができる。1949 年（昭和 24 年）に新聞研究所教育部として設置され、2004 年度（平成 16 年度）には社会情報研究所（元新聞研究所）との組織統合によって情報学環に引き継がれ、60 年を越える歴史を有している。

教育部委員会では、2011 年度に大幅な入試改革、カリキュラム改革を行った。すなわち、入試問題や資格要件を再検討し、定員を一学年 50 名程度から 30 名程度としぼった。同時に授業内容を講義からゼミや制作、実験など実践的な活動をおこなうものまで多様化させ、より手厚い教育ができる体制を敷いた。2012 年度以降、この新しい制度のもとで入試および授業を実施している。この改革の成果は着実に現れており、2013 年度は研究生の修了率が著しく向上した。

研究生たちは「ジャーナリズム、マスメディアをめぐる実践知」「情報コミュニケーション（ICT）技術、産業をめぐる実践知」「情報、メディア、コミュニケーションをめぐる文系知」「情報、メディア、コミュニケーションをめぐる理系知」をめぐる、きわめてユニークな教育を受けつつ、大変活発に、自主的な学習活動を展開している。

## 1.7 事務組織

図 1-7-1 事務部組織図(平成 24(2012)年 4 月 1 日現在)



事務長	副事務長	専門員	専門職員	係長	主任	係員	計
1	1	1	1	5	3	1	13

## 2 教育活動

### 2.1 概況

学際情報学府の教育は、情報学についての文理相互浸透の学際的カリキュラムとネットワーク型の教員編成による教育指導体制に最大の特色がある。学際情報学という分野が、すでに体系化された学問の修得と継承というよりも、従来の学問体系の組み換えと新しい学問の創生というところに目標を据え、そのような教育を実施しようと考えているからである。

学際性の学問論とネットワーク型の組織を引き継ぎつつ、2004年4月の組織統合にあたって、3コース制が導入された。これは、修士課程学生定員70名という規模に適合するためと、ディシプリンの基礎をもった学際性への教育効果のためと、2つの理由から導入された構成であった。現在は、2006年4月に総合分析情報学コース、2008年4月（学生受入れは同年10月）にアジア情報社会コースが設立され、5コース（修士課程学生定員100名）となっている。

このコース制は設立当初からの学際性の目標と矛盾するものではない。むしろ高水準の学際性を備えた人材を育成するために必要な措置であった。入り口で基礎学力のある優秀な学生を採用するためにコースごとの入試を行い、出口で学力の品質管理をするためにコースごとの修了試験を行う。しかし、入試における面接でも、修了試験の口述試験でも、学際的な教員構成での審査体勢がとられており、また入学後の学生はミニマムな選択必修科目のほかは全コースに開かれている多数の自由選択科目群から自分の研究計画と関心に合った科目を選んで、自分の学習メニューを組むことが可能となっている。

コースはあくまで学府学生が帰属するより小さな枠組みであり、研究科の専攻のようにそこに決して教員が帰属しているわけではない。教員はあくまで学環に帰属しているのであって、コースとの関わりはどのコースの学生を主として指導するかという点である。コース制は、学生が自らの学問的なアイデンティティを構築しつつ、同時に学際性へと越境していくための、バランスのよい舞台を提供しようとしているのである。

### 2.2 教育カリキュラム

学際情報学府の授業科目群は、(1) コース共通必修科目、(2) コース別選択必修科目、(3) コース共通選択科目、(4) コース横断科目の3つの科目群から構成されている。

第1のコース共通必修科目は、それぞれの学生の指導教員による個別研究指導のほか、学際情報学府の大学院生が、専門分野の視点や立場の違いを越えて、今日の情報学の様々なアプローチについての基礎知識を身につけてもらう「学際情報学概論」が主軸である。この科目には、情報学環のほぼすべての基幹・流動教員が関与し、学生はe-learningシステムでの受講も可能な仕組みになっている。同時に、学際情報学府院生には、修士1年では研究構想発表会における修士1年間の研究の成果発表が、修士2年では修士論文中間発表会での発表が、また博士課程では毎年の博士課程コロキウムでの発表が、大学院での必修カリキュラムの一部として課せられている。

第2のコース別選択必修科目は、修士課程の大学院カリキュラムとして設けられている科目群で、それぞれのコースにおいて専門的な研究能力のトレーニングをしていくためのものである。この科目群は、

「基礎」の4単位と「研究法」の2単位の6単位から成り、「基礎」は主として、各専門分野の基礎的方法論についてのトレーニング、「研究法」は、そのようにして習得した専門的方法論を生かした実習（調査、制作、実験、政策立案など）が分野に応じたやり方で実施されている。それぞれのコースの院生にとって、一般的に最もエネルギーを割かなくてはならない科目群であり、コースごとの特徴が最も明瞭に示されるカリキュラム編成になっている。

第3の共通選択科目群と第4のコース横断科目は、学府を担当しているそれぞれの教員が開講する大学院授業科目であり、形式としては一般的な大学院の授業科目と変わらない。但し、学際情報学府の共通選択科目の大きな特徴は、いずれも「情報」や「メディア」を中心的な対象としながらも、情報科学からジャーナリズム論までの幅広い専門家が集まっていることによる横断性にある。すなわち、ここでの共通選択科目には、自己組織情報、アジア情報政策、異文化コミュニケーション、学習環境デザイン、情報行動、映像文化、メディア表現、情報記号、情報倫理、自然言語処理、情報法、ジャーナリズム、ヒューマンインタフェース、数理言語、ユビキタスコンピューティング、知覚情報、ネットワーク経済、歴史情報、シミュレーションシステム、情報造形、視覚情報処理、医療福祉情報、身体情報認知、情報データベースなど、きわめて多様な分野が含まれている。これらの科目は、学際情報学府のカリキュラム編成においては、①情報・言語・行動系科目、②社会・制度系科目、③メディア・文化系科目、④表現・リテラシー系科目、⑤数理・システム系科目の5つの領域に分けられている。コース横断科目は、コースの専門性を越境して、より広く学際性を身に付けるための科目である。

## 2.3 カリキュラム支援体制

大学院学際情報学府では、上記のカリキュラムを大学院教育の基軸に据えながら、以下のような教育上の支援体制を組織し、運営している。

### 2.3.1 主指導教員・副指導教員の配置

学際情報学府では、指導教員の個別研究指導に加え、副指導教員による側面からの研究指導という複眼的な指導体制を整えている。情報に関する研究は、専門的であると同時に学際的な性格をもつため、既存の単一の学問分野の知識だけでは適切に対応できないことが多い。学際情報学府では、既存分野の専門的な知識や方法を十分に身につけつつ、それらを複眼的に結びつけて新しい情報研究に挑む若手研究者を効果的に育てるために、従来の指導教員による指導だけでなく、副指導教員を加えた指導体制を採用している。この体制は、学生の視野を広げ、より柔軟な学問的展開を可能にするといった効果を挙げてきた。

### 2.3.2 修士・博士 研究計画書の作成

学際情報学府の大学院生は、修士1年及び博士2年の段階で、自分の研究計画書を作成する。このうち修士1年の段階での研究計画書は、修士論文に向けての対象設定、およその研究視角を示す概要的なものであり、提出された計画書は、修士1年生全員がお互いの研究テーマについての認識を共有するための冊子にまとめられる。博士2年での研究計画書は、その学生が博士論文を執筆していくための第一

歩となる。

### 2.3.3 修士課程研究構想発表会

研究構想発表は、学際情報学府修士2年生が新年度の最初におこなう教育行事である。修士1年生の間に進めてきた学習や研究の成果をまとめ、約1年後に提出する修士論文の構想や進捗状況について発表する。この発表は、学際情報学府に所属する教員と学生に対して行われるもので、各自が研究の内容・計画をポスター発表（バザール）形式で行う。

1日を数セッションに分けて実施され、教員や在学生の他、発表者も自分の発表のないセッションでは聞き役に回り、コメントシートを提出する。

発表者は、このような中間総括と相互評価のプロセスを経ることで、修士論文に向けた残り1年間の研究をより一層充実させるための手がかりを得ることとなる。また、学際情報学府の新入生もオンライン発表を閲覧し、オフライン発表会の聞き役となることで、学府における研究の内容や修士論文に向けたプロセスについて具体的なイメージをつかむことができる。

### 2.3.4 修士論文中間発表会

学際情報学府では、多くの修士2年の学生が修士論文執筆に本格的に取り組む7月上旬に修士論文中間発表会を開催している。この発表会では、その年度に修士論文を提出するすべての学生が自分の研究の進捗状況を発表しなければならないことになっており、指導教員や福指導教員だけでなく、関連分野の教員や他の学府の大学院生が発表会に参加する。教務委員会は、それぞれの教員のスケジュールを調整して、90名超に及ぶ発表者の全体の進行表を作成し、中間発表会全体を組織する。この発表会には、学府の院生は誰でも参加することができるので、修士1年の院生たちにとっては、先輩たちがどのような研究を進めているのかについて広く知る貴重な機会となっている。

### 2.3.5 博士課程コロキウム

学際情報学府では、博士課程に在籍している学生を対象に、毎年11月上旬に博士課程コロキウムを開催している。このコロキウムでは、博士課程3年までに在籍しているすべての学生が、博士論文執筆に向けての研究の進捗状況を発表しなければならない。教務委員会は、それぞれの教員のスケジュールを調整して、90名超に及ぶ発表者の全体の進行表を作成し、博士課程コロキウム全体を組織する。このコロキウムには、学府の院生は誰でも参加することができるので、博士課程の学生たちにとっては、他の学生たちがどのような研究を進めているのかについて広く知る貴重な機会となっている。

## 2.3.6 E-learning 授業 (iii online)

### 2.3.6.1 iii online の目標

iii online は2002年4月に始まった学際情報学府のeラーニングサイトである。iii online は、学部・研究科レベルでは東京大学初のeラーニングサービスである。

eラーニングを開始した最大の理由が、社会人大学院生の学習機会の確保である。

学際情報学府は独立大学院であるために、多種多様な学生が集まっている。2003年度までは、実践

情報学コースという社会人学生をターゲットとしたコースが設けられており（現在は、社会人特別選抜枠に変更）、マスコミ関係者やシステムエンジニアなど、学生の 2 割程度が社会人という状況であった。学際情報学府に入学する社会人は、銀行や製造業につとめている一般的な社会人に比べ、比較的時間に自由がきく代わりに、忙しくなる時期とそうでない時期が交互にやってくる。たとえば、広告代理店に勤めている場合、コマーシャルの撮影などで 1 ヶ月間は仕事が超過密スケジュールで入るが、企画段階ではそれほど時間に制約がないという状態である。

このような状況では、講義に毎回出席することは難しくなる。iii online が始まる前は、出席しなければ自動的に欠席になり、全く講義の情報が手に入らない状態であった。2 回、3 回と欠席が続けば、当然講義の理解に影響が現れてくるので、教育水準の確保上、大きな問題となっていた。

通常社会人向けの大学院では授業を夜間に開講することによって、この問題を解決している。しかし、フルタイムの学生は昼間に授業が開講されることを望んでおり、学際情報学府で授業を夜間に持つてくることは、非現実的であった。

### 2.3.6.2 iii online の概要

iii online はこのような問題を解決するために、ビデオのストリーミングと掲示板を組み合わせたサービスを提供している。ビデオのアイコンを押すと、およそ 15 分×6 つにカットされた授業の映像を見ることができる。ストリーミングは FlashVideo 形式 500kbps エンコーディングで行っている。FlashVideo 形式を選んだのは、利用者として Windows ユーザー、Mac ユーザー、Linux ユーザーが混在しているからであり、エンコーディングレートは、ブロードバンドで十分スピードがでない場合でも対応できるという観点から設定してある。

15 分にカットしたのは、90 分の映像を一気に見るのは大変だからである。利用者アンケートからも、朝 30 分、会社の休憩時間に 30 分、夜帰ってから 30 分見ると行ったような分割視聴が日常的に行われていることが明らかになっている。

ビデオは、パワーポイント連動型ではなく、カメラで撮影したものをそのまま流している。理由はパワーポイントを使う授業スタイルを教員に押しつけるのは良くないと判断したからである。OHP を使う人もいれば、ホワイトボードの方がインタラクティブにできるという教員もいる。そういう多様な授業スタイルを認めなければ、e ラーニングを導入すると、かえって授業がやりにくくなるということになりかねない。日常的に e ラーニングを展開する場合には、「e ラーニングだから」といった制約条件を減らすことが重要である。

データのアイコンを押すと、授業の資料を見ることができる。資料はすべて PDF ファイル形式にしてある。これも前述の通りユーザー側が多様な環境にいるためである。

アンケート調査では、実際に利用するときには、この PDF ファイルを印刷し、それをノートとして使いながら授業を聞いている。



図 2-3-6-2-1 : iii online の画面

表 2-3-6-2-2 : iii online で閲覧可能な授業の一覧

配信年	講義名	授業者
2002	自然言語処理論	辻井潤一
	コミュニケーション・システム	原島博
	メディア表現論	水越伸
	情報政策論	浜田純一
	学際情報学概論	オムニバス
2003	情報リテラシー論	山内祐平
	情報記号論	石田英敬
	情報進化論	佐倉統
	シミュレーション・システム	荒川忠一
2004	学際情報学概論	オムニバス
	文化・人間情報学基礎	水越伸・山内祐平
	医療福祉情報学	山本隆一
	社会情報システム	松浦幹太
2005	学際情報学概論	オムニバス
	ネットワーク経済論 II	田中秀幸
	学際理数情報学概論 VI	鈴木高宏
2006	学際情報学概論	オムニバス



	身体行動情報論	深代千之
	能動情報論	奈良高明
2007	学際情報学概論	オムニバス
	学習環境デザイン論	山内祐平
	歴史情報論	本郷和人
2008	学際情報学概論	オムニバス
	学際理数情報学特論 IX	大島まり
	文化・人間情報学特論 V	前田幸男
2009	学際情報学概論	オムニバス
	組織学習システム論 II	中原淳
	科学技術コミュニケーション論	鈴木高宏・大島まり 佐倉統 ・丹羽美之
2010	学際情報学概論	オムニバス
	総合分析情報学特論 XI	堀 里子
	ネットワーク経済論 (2010)	田中 秀幸
2011	学際情報学概論	オムニバス
	ネットワーク経済論 (2011)	田中 秀幸
	歴史情報論	本郷 和人
2012	学際情報学概論 I	オムニバス
	学際情報学概論 II	オムニバス
2013	学際情報学概論 I	オムニバス
	学際情報学概論 II	オムニバス

## 2.4 学際情報学府への進学

2000年度に設立されて以来、2003年度まで、大学院学際情報学府は毎年、修士課程約50人、博士課程約20人の大学院生を受け入れてきた。2004年度の社会情報研究所との合併により、それまで人文社会系研究科社会情報学専門分野の定員であった修士課程14人、博士課程7人が統合され、2006年度からは総合分析情報学コース、2008年度からはアジア情報社会コースが新設されたため、学際情報学府の入学定員はさらに拡大し、現在では修士課程定員が100人、博士課程定員が44人となっている（詳しくは巻末資料参照）。

その結果、学際情報学府に在籍する大学院生数は、2000年度の修士52人（修士）から出発して、2014年度が380人（修士200人、博士180人）へと、10年強で7倍以上に増加した。これは学際情報学府の教育研究が順調に発展していることを象徴しているが、反面、短期間に急増したため、サポートスタッフの不足、教員と事務員の業務負担増加などの問題点も生じている。大学院生数は、教育学研究科、経済学研究科、薬学系研究科などとはほぼ同じ規模となっている。

また、本学際情報学府の大学院生の構成についてみると、(1) 東京大学以外の他大学出身者の割合が

高いこと、(2) 実践的キャリアを持つ人々や第一線で活動している社会人の割合が高いこと、(3) 外国人学生の割合が相対的に高いこと、(4) 入学者の男女比も、全体の 30～50%程度が女性とほぼ均衡がとれていることなど、きわめてハイブリッドな特徴がみられる。これらの特徴は、本学府が学生の構成という面からみても東京大学のなかできわめて新しい可能性をもった大学院組織であることを示している。

本学府への志願者についてみると、社会情報研究所との合併後の 2006 年度以降では、2006 年度入学試験が志願者 225 人(受け入れ予定人員 90 人、2.5 倍)、07 年度入学試験が 148 人(同 90 人、1.64 倍)、08 年度入学試験が 230 人(同 105 人、2.19 倍)、09 年度入学試験が 238 人(同 105 人、2.27 倍)、10 年度入学試験が 259 人(入学定員 100 人、2.59 倍)、11 年度入学試験が 264 人(同 100 人、2.64 倍)、12 年度入学試験が 255 人(同 100 人、2.55 倍)、13 年度入学試験が 246 人(同 100 人、2.46 倍)の志願者が応募している。今日、大学院重点化のなかで大学院生数の枠が急速に広がったために大学院入試への競争倍率が低下してきている全般的な傾向からすれば、顕著に異なる人気の高さを保っている。

## 2.5 修士論文及び博士論文の執筆

学際情報学府の修了者数は、修士修了者では、2001 年度が 38 人、02 年度が 40 人、03 年度が 51 人、04 年度が 57 人、05 年度が 62 人、06 年度が 59 人、07 年度が 61 人、08 年度が 71 人、09 年度 82 人と徐々に増え、10 年度は 84 人、11 年度は 83 人、12 年度は 87 人、13 年度は 82 人の修士修了者を輩出している。

また、博士課程の修了者についてみるならば、学際情報学府では、設立されたのが 2000 年度なので、最初の入学者が博士 3 年に達する 2004 年度に初めて 4 人の博士号取得者を輩出することになった。05 年度は 1 名だったが、06 年度は 7 人、07 年度は 3 人(他に論文博士 1 人)、08 年度は 13 人(他に論文博士 1 人)、09 年度は 8 人、10 年度は 3 人、11 年度は 11 人、12 年は 12 人、13 年は 14 人の博士号取得者を輩出するに至っている。

大学院学際情報学府では、新しい学生が修士課程に入学した段階から、入学ガイダンスでの丁寧な指導、M2 の先輩たちによる研究構想発表会への参加、主指導・副指導教員体制、修士課程研究計画書の提出、基礎演習および研究法授業、研究構想発表会の実施、修士論文中間発表会というように、修士論文完成に至る個々の段階で学生の研究をサポートしていく体制が完備している。また、博士課程進学後も、博士課程研究計画書や博士課程コロキウムの毎年の実施、主指導・副指導による指導というように修士論文、博士論文の執筆をサポートする体制を整えている。このような体制のなかで、これまで多様な分野の専門的な修士論文、博士論文が書かれてきており、その一例は、別表のようなリストに示される。

(別表)

2013 年度修士論文タイトル

反日表象としての「堤岩里事件」の構築

—1982 年の殉国遺跡化と新聞記事の変化を中心に

〈乳がん〉の語りとその変容

— 1970-2000 年代における乳がん闘病記をテキストに —

ソーシャルビジネスによる国際協力活動

—BOP ビジネスにおける CSV 戦略とエコシステムの分析—

1960 年代後半における高校生運動

—高校生による自主制作冊子を中心とした社会運動論的分析

日中関係が日中貿易に与える影響について

ジルベール・シモンドンの個体化論における〈特異性・普遍性〉問題の考察

—information と transduction の概念を手がかりに—

我が国におけるデジタル教科書導入際しての費用便益分析関す—考察

戦間期日本における地下出版組織の教養主義的読書実践

—〈変態〉概念を手がかりに—

「社会問題」の構築を方向づける「経路依存性」

—2008-13 年の「キャラクター文化規制」論争を事例として

情報通信分野の ODA が途上国の経済成長に与える影響に関する研究

研究開発が企業生産性に与える影響

「漫画界」構想から戦争協力へ

—大正・昭和期の漫画家集団活動を中心に—

防衛省・自衛隊広報誌のメディア論的考察

都市域の地域包括ケアシステムにおいて期待される情報通信技術の利活用について

—「連携」と「創発」の観点から—

中高生のネット利用倫理に関する実証的研究

オンラインゲームの依存と支払い行動への影響要因

—モチベーションタイプとジャンル比較の視点から—

フェイスブック、ツイッターにおける情報投稿の特徴について

—情報交換に関する互酬性の観点から—

「中国残留日本人」問題における「日本人」をめぐる言説空間の研究

人工光・霧を用いたインスタレーション作品の制作と研究

—知覚に着目して—

PR 映画にみる原発の表象

—平和利用・安全性・共存共栄—

ラーニングコモンズにおける大学生の学習実態についての探索的研究

「お知らせ」が生まれ死ぬとき

～文京区における地域の広報文書をめぐるメディア論的研究～

講義メモ書き込み状況に基づいた講義の聴き方支援システムの開発と評価

忘却された沖縄 —沖縄返還“密約”疑惑をめぐる言説—

展示のモダニズム

—1920年代のソシエテ・アノニム再考—

企業のボランティア活動に関する研究

—企業の社会貢献活動変遷と現状に着目して—

想像 - 想起としての映画経験

—映画館プログラムと「観ること」の再定義—

「OL」の誕生と変容

技術哲学史小論：生命と技術

複合現実ゲームのプレイフレームワークに関する研究

～『モンスターレーダー®プラス』を題材にして～

大学生のキャリア探索行動と入社後の初期キャリア形成に関する研究

職場のワーク・ライフ・バランス実現に向けた管理職研修の効果に関する研究

「ポスト・ヒューマン論」再考

—N. Katherine Hayles の視点をもとに

生活空間における写真のメディア論：物語行為としての写真实践とアイデンティティ構築

遊離対象の配置の観察

—レイアウトの持続と変化の相補性について—

非選択的注意条件下での物理的因果性判断における全体的知覚

新人看護師の入職初期の臨床実践能力の規定要因に関する研究

—中堅看護師からの支援とチームワークに着目して—

デジタルゲーム競技(e-Sports)の熟達者における遂行機能の研究

「近代言説としての悲劇と女性」

-1910~30年代日本と殖民朝鮮の文学空間と女性雑誌を中心に-

Prior knowledge modulates human gaze via spatial attention (事前知識に基づく空間的注意による視線行動の修飾)

安全マージンを考慮した路車間通信活用型およびデマンド型信号制御の研究

影からの屋外光源環境推定の高精度化

双腕ロボットによるブドウ収穫作業の実現のためのタスク・スキル解析

対面環境における共同ウェブ検索の実践的研究

カメラの光学的特性を考慮した光源放射強度分布の推定

自己再構成型人工生命の挙動生成シミュレーション

映像とのインタラクションを可能にする水中の気泡を用いたディスプレイ

『異なるモダリティどうしの対応』

コンテンツの総体としての SNS アカウントの可能性

首都直下地震時における病院への重傷者搬送ニーズに関する分析

体積変化を伴う流体の粒子法によるシミュレーション

転移学習を用いた医療画像読影支援

高速道路上における運転時間の未来予測提示に関する研究

手描きに応じた紙面へのマルチカラー発色型映像投影の研究

顔検出・合成による衣服コーディネート等身大表示システム

体躯屈曲に起因する跳躍挙動をとる生物を規範とした小型跳躍ロボットの研究

棒高跳びロボットの跳躍高さ向上のための能動的ポール曲げ動作

大脳皮質シミュレーションを用いた感覚統合に対する領野間結合構造の寄与に関する研究

非線形音場解析に関する基礎研究

Basic study on numerical simulation of nonlinear acoustics

SNAPPER：画像検索を用いたファッションコーディネート支援システム

身体反応のフィードバックによる感情体験の操作

調剤薬局における医療過誤防止のためのブリスタパック認識に関する研究

インシデント・アクシデント事例分析に基づく投薬ミス防止システムの開発

計量学的アプローチによる料理環境と食事環境のエンハンスメントに関する研究

オープンな空間データからの「空間情報の関係性」自動抽出手法

Automatic Extraction of "Spatial Relationships" from Open Spatial Data

動的に変化する RDF グラフの操作の高速化

The Implementation of Inter Processor Communication in Multicore Embedded System

(マルチコア組み込みシステムにおけるプロセッサ間通信の実装)

無線 AP 上の先読みコンテンツキャッシュの可視化によるユーザーアクセス誘導の研究

Toward Semantic Web of Things Device Coordination Framework: a case in Smart

Emergency Crime Report System(セマンティック・ウェブ・オブ・シングスにおける協調  
フレームワーク:知能的防犯緊急通報システムの実例をもとに)

伴走ロボットを用いたセルフイメージ提供に関する研究

実世界三次元空間中における持続的な情報収集プラットフォームの研究

多言語プレゼンテーションサポートシステムに関する研究

Ouroboros:Enabling Protocol Independent Forwarding on Network Processor

(Ouroboros:ネットワークプロセッサ上のプロトコル非依存転送(PiF)の研究開発)

Contesting Shanghai Gay Space: Identity, Consumption, and Cosmopolitanism in Post-Reform China

The Cost of Exchange: Cultural Discount and the International Film Industry

Dance with the "Visible Feet": The Government, Internet Content Provider and the Public in China's Social Media Sector

Style, Space, and Media: The Post-3.11 Anti-nuclear Social Movement in Japan

A Different Space: A Globalising Architectural Firm in Contemporary China

An Examination of Information Usage and Self-Censorship on Chinese Micro-Blogging Services

Idol Chatter: A Cross-Platform Analysis of Celebrity Social Media Usage in Japan

Informal Media Economy and Remediation: Fansubbing of Japanese Dramas in the Philippines

The Good Old Clothes: Consumption of Vintage Fashion in Thailand and the Seeking of Individuality in Globalized Subculture

Chinese Propaganda Posters and the Construction of Female Image during Cultural Revolution

## 2.6 学際情報学府からの就職・進学動向

修士課程修了者のうち、博士課程進学者は全修了者の35～40%程度である。したがって、修士課程を修了した者の約6割が就職することになる。一般に、理系では修士修了後に就職をするケースが多く、文系では博士課程に進学するケースが多いが、文理相互浸透の大学院組織である学際情報学府は、ちょうどその中間的な割合を示しているといえる。修士修了者の就職先は別表の通りであり（別表 修士修了者の進路状況）、シンクタンク、マスコミ、情報通信およびコンピュータ関連企業、出版社など知識集約型の企業への就職が多数を占めているところが特徴的である。

## 2.7 学際情報学府以外の教育活動

大学院情報学環では、大学院教育組織である学際情報学府と密接に連携しながら、教育部、学部横断型教育プログラム「メディアコンテンツ」、大学院横断型教育プログラム「デジタル・ヒューマニティーズ」、角川文化振興財団メディア・コンテンツ研究寄付講座、「情報技術によるインフラ高度化」社会連携講座、反転学習社会連携講座でも教育活動を行っている。

## 2.7.1 教育部

情報学環教育部は、情報、メディア、コミュニケーションについて学びたい人々のために、2年間にわたって情報学の体系的な教育を行うユニークな教育組織である。講義は、各自が所属する学部や大学院の授業などと両立できるように、おおむね夕刻（14：50分以降）から夜間にかけて開講されている。学部、研究科という「タテ糸」で成り立つ東京大学のなかに、情報というキーワードをめぐる教育研究を「ヨコ糸」で縫い合わせてできた情報学環。教育部は、その情報学環という斬新な組織の特性を活かした、魅力的な教育研究活動の場となっている。

情報学環教育部では、毎年、前年度後期に入学試験をおこない、一学年約30名の教育部研究生を選抜している。大学2年生以上（4月以降大学2年生になる見込みの人を含む。ただし、大学院に在学している人は含まない）であれば、東京大学の学生であるなしにかかわらず、社会人も含めて受験をすることができる。

情報学環教育部の歴史は古く、その起源は、1929年（昭和4年）の文学部新聞研究室にまでさかのぼる。小さな組織だった新聞研究室は、戦後まもない1949年（昭和24年）に、文系の学際的研究組織である新聞研究所へと発展した。新聞研究所は、その名のとおり、新聞をはじめとするマスメディアが巻き起こす社会情報現象やコミュニケーション変容を体系的に研究することを目的として設立されたが、同時に、マスメディアで働く記者などの実務家を育成することも目的としていた。

1992年（平成4年）、新聞研究所は社会情報研究所として改組され、マスメディアに限定しない、情報に関わるあらゆる社会現象の研究を総合的に進めていくことになった。2004年（平成16年）には、大学院情報学環と合併し、今日まで情報学の伝統を脈々と引き継ぎながら、文理融合の最先端の研究を推進し、また教育活動にも力を注いでいる。

参考として平成25年度開講科目を以下に示す。

（夏学期）

	4限 14：50～16：20	5限 16：40～18：10	6限 18：30～20：00
月		情報技術論 研究指導Ⅰ（情報と交通（演習）） 中野公彦 准教授	
火	特別演習Ⅲ（教育部概論） 水越伸 教授 他	情報社会論 研究指導Ⅱ （現代アート、福島と「動く」 ー『つちゆ アラフド アート アニュアル2013』のフィール ドワーク） 宋由美 講師、北田暁大 准教 授	情報産業論 講義Ⅲ （広告コミュニケーションビ ジネス論） 勝野正博 講師、中杉啓秋 講師
水		メディア・ジャーナリズム論Ⅱ 実験実習（映像制作） 桂俊太郎 講師、丹羽美之 准教授	



木	情報技術論 実験実習 I (Physical Computing) 米海鵬 助教	情報社会論 文献講読 IV (情報社会と法) 成原慧 助教	情報産業論 講義 IV (情報と法) 牧野二郎 講師
金			情報産業論 実験実習 I (書籍の見方・作り方と出版業 の実際) 中嶋廣 講師

(冬学期)

	4 限 14 : 50~16 : 20	5 限 16 : 40~18 : 10	6 限 18 : 30~20 : 00
月		メディア・ジャーナリズム 論 講義 III (1960年代のリアリティー ~テレビアーカイブを使っ て放送) 秋山浩之 講師	情報技術論講義 天野肇 講師
火	メディア・ジャーナリズム 論 講義 IV (新聞論) Martin Fackler 講師		メディア・ジャーナリズム論 文献講読 III (メディア思想) 長谷川一 講師
水	メディア・ジャーナリズム論 文献講読 IV (メディア・エ スノグラフィの理解) 金暁和 助教		
木			
金			

なお、2008年から2013年までの教育部志願者数、受験者数、合格者数についてはⅡ. 資料を参照していただきたい。

## 2.7.2 学部横断型教育プログラム「メディアコンテンツ」

学部横断型教育プログラム「メディアコンテンツ」は、東京大学横断型教育プログラムのひとつである。東京大学学部横断型教育プログラムは、狭い専門知識だけでなく、新たな学問的課題に果敢に挑戦し、幅広い分野を横断していく柔軟な思考力を備えた「知的にタフな東大生」を育成するために開設された学際的・分野融合的な教育プログラムである。学部や大学院の枠組みを超えて実施されている。現在開講されている横断型教育プログラムのなかでも、本教育プログラム「メディアコンテンツ」は、メディア上に流通するコンテンツの創造に関わる基礎教育と人材養成を目的として、最新のインターネットビジネスの動向などを踏まえた教育を行っている。「技術・創造」「文化・社会」「人間・心理」「総合」の分野からメディアコンテンツに関連する科目を開講している。本教育プログラムは、東京大学の学部

後期課程（3～4年生）を履修対象としているが、大学院生の履修も可能で必修科目や選択科目の区別はなく、各自の目的にあわせて履修できる。開講されている科目の中から、合計 12 単位以上を修得した学生に「プログラム修了証」が交付される。

### 2.7.3 大学院横断型教育プログラム「デジタル・ヒューマニティーズ」

大学院横断型教育プログラム「デジタル・ヒューマニティーズ」は、東京大学横断型教育プログラムのひとつである。東京大学横断型教育プログラムは、狭い専門知識だけでなく、新たな学問的課題に果敢に挑戦し、幅広い分野を横断していく柔軟な思考力を備えた「知的にタフな東大生」を育成するために開設された学際的・分野融合的な教育プログラムである。学部や大学院の枠組みを超えて実施されている。デジタル技術とウェブシステムの革新は、人類の知的資源の保存、研究、発信の方法を大きく変革し、現代社会の新たな知識基盤を形成しつつある。近年、世界ではこの変化に対応し、デジタル媒体による資料アーカイブの構築・分析・公開の方法をめぐる、文理の壁を超えて研究方法を模索する「デジタル・ヒューマニティーズ」の確立が重要な課題となり始めた。

本教育プログラム「デジタル・ヒューマニティーズ」は、1) デジタル・テクノロジーを用いた人文学資料のアーカイブ構築、2) デジタル・コンテンツ資源と結びついた映像分析やテキスト分析、3) 研究成果のプレゼンテーションやエキシビションを有機的に循環させて、人文学および情報学の各領域の学際的な体系化を目指した科目を開講している。多面的な観点から学術研究を深化させ、人文学の新たな方法論を実践的に学んでいく教育プログラムである。デジタル・テクノロジーを批判的に使いこなす学際的な人文学者、デジタル・コンテンツの知識基盤を創造的に構築する情報学者をはじめ、アーキビストやキュレーター、ライブラリアンといった知識や文化の担い手、さらには多様化する情報社会の諸領域を横断して活躍の場を見出そうとする批判力をそなえた人材の育成を目的としている。

本教育プログラムは、東京大学の大学院生を履修対象としている。人文系のみならず、人文学とのコラボレーションに興味のある理工系の大学院生の受講も歓迎している。プログラムは、〈コア科目〉、〈基礎科目〉、〈関連科目〉によって構成されている。コア科目内の必修科目を修得し、合計 12 単位以上を修得した学生に「プログラム修了証」を交付する（修了を目的とせず、個別の科目のみを履修することも可能である）。

### 2.7.4 角川文化振興財団メディア・コンテンツ研究寄付講座

角川文化振興財団メディア・コンテンツ研究寄付講座は、国際的見地から、アミューズメント・メディアを学問的に研究することを目的とし、一般財団法人角川文化振興財団からの寄付により、2013 年 11 月、情報学環に開設された。

現在、マンガ、アニメ、ゲームをはじめとする日本の文化的コンテンツは、世界で大きな注目を浴びている。一方でこれらの分野について、大学ではかならずしも学問的に深い研究が十分になされてきたとは言えない。本寄付講座は、東京大学がこれまでに蓄積してきた文化研究の方法を学際的に組み合わせ、第一線のクリエイターやコンテンツ産業の現場の担い手とコラボレーションし、アミューズメント・メディアを学問的に研究するための、新しい学術領域の開拓をめざしている。

アジアや欧米で国際的に活躍する研究者・表現者のネットワークを構築し、日本のアミューズメント・メディア研究の基礎となる知のプラットフォームを立ち上げる。そして、その研究成果を、産業の現場や文化政策にフィードバックするとともに、学術シンポジウムの開催等を通じてひろく国際社会に発信し、世界規模での日本およびアジアのポピュラー文化の発展に寄与する。また、海外の優秀な大学生・大学院生を広く受け入れるサマープログラムを実施し、東京大学の学生とともに、日本のアミューズメント・メディアをめぐる最前線の知を学ぶ機会を提供する。

2014年1月には、本寄付講座開設を知らせる記者会見を行い、2014年3月には本寄付講座開設を記念して、東アジアにおけるアニメーションの「起源」と今日におけるメディア環境とコンテンツ流通の関係性と可能性を考察したシンポジウム「メディアミックスの歴史と未来」を開催した。

### 2.7.5 「情報技術によるインフラ高度化」社会連携講座

「情報技術によるインフラ高度化」社会連携講座は2009年4月1日に開設され、現在、首都高速道路株式会社、東京地下鉄株式会社、東日本旅客鉄道株式会社、株式会社日立製作所と東京大学大学院 学際情報学府総合分析情報学コースを中核として運営されている。また、日本電信電話株式会社、アビームコンサルティング株式会社及びユビキタス情報社会基盤研究センターも協力している。本講座は、情報技術を活用した施設管理等に関するマネジメントを高度化するとともに、新たな情報基盤を活用した新たなビジネスを創出し、インフライノベーションの実現を目指す。また、こうした目的を達成するため、シーズとニーズ、技術と運用、理論と実践といった様々な知識や経験を結合し、新しい価値を産み出す実践的な研究プラットフォームの確立を目指す。設立された2009年度より、毎年4月に研究成果を発表するシンポジウムの開催及び、定例的なインフライノベーション研究会を開催している。2013年度は、本講座の最終年度であり、最後の研究教育成果をとりまとめた。また、その成果は高く評価され、2014年度より更に5年間の社会連携講座第二期の活動を行うこととなった。

### 2.7.6 反転学習社会連携講座

FLIT（反転学習社会連携講座）は、東京大学とNTTドコモが2013年10月に設置した社会連携講座である。対面授業とオンラインの動画授業を組み合わせ、授業と自宅学習の連続化による学習時間の確保と学習目標に合わせた時間の再配置を可能にする、ブレンド型学習環境の研究と実践を推進することを目的とし、以下の3つの活動を展開している。

#### 1) 反転学習に関連する学術的な理論の整理

ブレンド型学習（Blended Learning）など関連する学術研究の知見に接続しながら、反転学習の理論や方法論を整理する。

#### 2) MOOCと連動した反転学習モデルの開発

MOOCプラットフォームを活用した一般向け反転学習のモデルを開発し、2014年春から実証実験を行う。

#### 3) 大学の授業に反転学習をとり入れる際の対象領域別学習モデルの検討および教育効果の検証を行う。

また社会連携活動として、10月23日にMohammad Qayoumi氏（サンノゼ州立大学 学長）を招聘

して、「MOOCと反転授業で変わる21世紀の教育」というタイトルでセミナーを開催し、2月12日には島根大学教育開発センターと共催の形で、「授業の常識をひっくりかえす！反転授業を考える」というタイトルの大学教員向けセミナーを開催した。

## 3. 研究活動

### 3.1 概況

研究組織としての情報学環は、異領域の出会いの場である。同じ学問領域の研究者が集まり、その集積性によってその学問領域の体系化を図り、またそれまで解決できなかった問題に突破口を開こうとする目標の立て方とやり方が存在する。しかし、情報学環は違う目標をもっており、違うアプローチを採っている。情報学環は社会情報学の深化及び学際情報学の展開という新しいフロンティアを創出するという目標をもっており、異なった学問領域の研究者に出会いの場を提供し、異種交配と相互越境というやり方によって、それを達成しようとしている。そのような研究組織は規模においてそれほど大きいものである必要はないが、しかし特有の研究組織論が必要とされる。

#### 3.1.1 文理の相互作用と連携

伝統的に日本の大学においては、学問研究は文系と理系に大きく分けられてきたし、現在もそれが生きている。新しい分野、とりわけ社会情報学と学際情報学にとっては、その区分けを乗り越えて、文理連携、文理越境、文理相互浸透が必要であり、それなくして発展の展望はない。情報学環は最初からそのような文理連携の研究組織論に基づいて設立されたものである。しかも、その文理の比重がどちらかに大きく偏ることなく、バランスを取っているのが大きな特色である。

現在、情報学環では大小合わせてさまざまな文理連携型の研究プロジェクトが実施されている。政府予算に基づく大型の研究プロジェクトとして、特別教育研究経費による研究プロジェクト「災害緊急情報を活用した大学防災情報システムの開発」（2010年度～2014年度）が進められるとともに、同じく「知識コンテンツ基盤拡充に向けた横断型教育モデルの国際展開」（2011年度～2015年度）が進められ、また、東京大学の他部局、大学院医学系研究科、高齢社会総合研究機構、大学院工学系研究科との連携大規模研究プロジェクト「活力ある高齢社会の推進」（2013年度）も進められており、情報学環のスタッフ体制は、文理連携の大型研究プロジェクトを推進することが可能である。

文理連携は、組織の財政上、情報学環ならではの効用とメリットを発揮することに結びつく。国立大学に対する現在の財政政策の仕組みでは、文系の資金獲得には限界があり、困難が伴う。理系が必要とするような大きな額ではないにも関わらず、文系が運営費交付金や競争的資金を新たに得るのは容易なことではない。しかし、文理連携の研究計画のもとに競争的資金が獲得できることによって、結果的に文系の研究分野へ資金が流れ、これまで経済的な理由からできなかった研究活動を展開できるようになるのである。これは、文理連携で情報学を構築していくという組織論が、財務上も有益な影響を生み出していることを物語っている。こうした研究資金状況の改善によって、文系は文系の側から文理連携の企てを積極的に展開していくことが可能になるのである。

#### 3.1.2 流動教員制度

情報学環独特の仕組みとして、流動教員制度がある。これは設立当初、学内の情報関連教員を糾合し、ネットワーク組織型に新しい大学院を創設するため、学内関連部局の協力を得て作り出されたものである。これにより、情報学環に所属する教員には、基幹教員と流動教員の2種類が存在する。

基幹教員は、情報学環に固有のポスト、すなわち基幹教員枠（部局の「採用可能数」として割り当てられているポスト）で採用されている教員である。その教員室のスペースも学環によって手当てされている。それに対して、流動教員は、流動元の部局から情報学環へ時限で振替られている流動教員枠を使って、流動元の部局よりやはり時限で配置換えになって情報学環に所属している教員である。その教員スペースは現状では情報学環として手当てすることができず、流動元部局のスペースをそのまま使用している。

この流動教員制度により、情報学環の研究組織は研究者の循環と入れ替わりの仕組みを内蔵しており、もって研究活動に常にイノベーションの条件を保障しようとしているのである。流動教員の立場からすれば、情報学環に流動教員として参加することによって、元部局とは異なった学際的な教育研究環境に入ることが可能であり、また研究所が元部局の教員にとっては大学院教育に通常の義務と権利で加わる機会が得られることとなる。こうした条件が研究者同士に新たな刺激を生み出すとともに、従来の枠を脱する糧となると見込まれている。こうした組織論による利得は、現在、大小さまざまな研究プロジェクトの活動に見て取ることができる。

### 3.2 大型研究プロジェクト（1,000万円以上規模）

各教員が研究代表者となって行う研究プロジェクトでも、以下（事業規模1千万円以上）に示すとおり、大型研究プロジェクトを積極的に展開している。（すべての外部資金による研究の状況は、IV. 外部資金獲得状況を参照のこと）

#### <科学研究費補助金>

基盤研究(A)「視聴覚を利用した見まね学習によるアクティブな動的動作生成に関する研究」  
（研究代表者 池内 克史）

基盤研究(A)「法令・人事から見た近世政策決定システムの研究」（研究代表者 山本 博文）

基盤研究(A)「学習者の状況および知識構造に対応したシナリオ型防災教育教材の開発」  
（研究代表者 山内 祐平）

基礎研究(A)「時系列データの蓄積から社会変動モデルの構築へ：中国第三次四都市調査の挑戦」  
（研究代表者 園田 茂人）

基礎研究(A)「矢内原忠雄学生問題研究所未発掘資料から見る1950年代の学生運動と若者意識の分析」  
（研究代表者 吉見 俊哉）

基盤研究(B)「記録映画アーカイブに見る戦後日本イメージの形成と変容」（研究代表者 丹羽 美之）

基盤研究(B)「西欧教会ならびにオペラ劇場の動学的音場解析とその比較」(研究代表者 伊東 乾)

基盤研究(B)「路車異種センサー融合による衝突防止システムの統合的研究」(研究代表者 上條 俊介)

基盤研究(B)「培養神経回路と人工神経回路の身体化によるホメオダイナミクスの研究」  
(研究代表者 池上 高志)

基盤研究(B)「血管内治療のための in vivo 流体構造連成解析システムの開発」  
(研究代表者 大島 まり)

基盤研究(B)「メディア産業構造変動から見る報道職とジャーナリズムの将来:東アジア国際比較研究」  
(研究代表者 林 香里)

基盤研究(B)「【薬と健康食品】適正使用のためのリスクコミュニケーションの場とネットワーク創製」  
(研究代表者 堀 里子)

基盤研究(B)「リスク態度と情報探索態度が実場面での商品選択に与える影響」  
(研究代表者 植田 一博)

基盤研究(B)「人間拡張型テレプレゼンスシステムに関する研究」(研究代表者 暦本 純一)

基盤研究(B)「手の変形と接触特性を考慮した実時間把持操作モデル」(研究代表者 広田 光一)

基盤研究(B)「和解なき安定—民主成熟期台湾の国際政治経済学—」(研究代表者 松田 康博)

基盤研究(B)「ドライバの状態監視を行うハプティック・ステアリング・ガイダンス制御」  
(研究代表者 中野 公彦)

#### <その他外部資金関係>

総務省 戦略的情報通信研究開発推進制度(SCOPE)「市民の交通行動変容を促進する持続可能な生活交通情報フィードバックシステムの研究開発」(研究代表者 池内 克史)

総務省 戦略的情報通信研究開発推進制度(SCOPE)「キャッシュ指向ネットワークアーキテクチャ(CONA:Cache-Oriented Network-Architecture)の研究開発」(研究代表者 中尾 彰宏)

(独) 科学技術振興機構 戦略的創造研究推進事業(CREST)「差分法に基づくポストペタスケールアプリケーション開発環境」

(研究代表者 古村 孝志)

(独) 情報通信研究機構「新世代ネットワークを支えるネットワーク仮想化基盤技術の研究開発」

(研究代表者 中尾 彰宏)

大学共同利用機関法人情報・システム研究機構「超巨大データベース時代に向けた最高速データベースエンジンの開発と当該エンジンを核とする戦略的社会サービスの実証・評価」(研究代表者 須藤 修)

(独) 海洋研究開発機構「地震の予測精度の高度化に関する研究」(研究代表者 古村 孝志)

(独) 科学技術振興機構 戦略的創造研究推進事業「多人数調和型情報提示技術の構築と実践」

(研究代表者 苗村 健)

文部科学省 科学技術試験研究委託事業「南海トラフ広域地震防災研究プロジェクト」

(研究代表者 古村 孝志)

総務省 ICT 超高齢社会づくり推進事業「活力ある高齢者社会の推進」(研究代表者 須藤 修)

文部科学省 イノベーションシステム整備事業 大学発新産業創出拠点プロジェクト(プロジェクト支援型)「無線アクセスポイント仮想化による情報通信サービスの高度化」(研究代表者 中尾 彰宏)

(株) NTT ドコモ 「反転学習社会連携講座」(研究代表者 山内 祐平)

(株) 日立ソリューションズ 「メディア・コンテンツにおける知識構造」(研究代表者 吉見 俊哉)

(社) 角川振興財団角川文化振興財団 「メディア・コンテンツ研究」(研究代表者 吉見 俊哉)

### 3.3 附属センターの役割

#### 3.3.1 社会情報研究資料センター

大学院情報学環附属社会情報研究資料センターは、1964年1月、当時の新聞研究所内に開室された「プレスセンター」が1967年6月、新聞研究所附属施設「新聞資料センター」として正式に発足し、1992年4月に新聞研究所が社会情報研究所に改組されるにあたって「情報メディア研究資料センター」と改称されたものである。2004年4月、大学院情報学環・学際情報学府と社会情報研究所の統合に伴い、「社会情報研究資料センター」と改称し、今日に至っている。



本センターは、新聞資料を中心とした各種メディア情報資料を収集・整理し、学内外の研究者の利用に供することで、社会情報学に関する研究の発展に寄与している。現在、本センターの収蔵資料は製本済原紙約 20,000 冊、縮刷版約 8,000 冊、マイクロフィルム約 45,000 リールに達している。これらの新聞資料は情報学環書庫のほかに、駒場キャンパス内の旧宇宙航空研究所跡地などに別置されている。

センターの閲覧室には、利用者のために各種データベース閲覧用 PC とマイクロフィルムのデジタルデータ変換機能をもつマイクロリーダーを設置して利用者の便宜を図ると共に、従来のマイクロリーダーも継続利用して需要に応じている。また、本センターの定期刊行物として「社会情報研究資料センターニュース」を刊行している。

また、2007 年度から 2011 年度まで東京大学新規教育研究事業「社会情報研究資料センターの高度アーカイブ化計画」として、(1) 整理保存機能の高度化、(2) 利活用機能の高度化、(3) 教育研究機能の高度化、(4) 情報化アーカイブ機能全般の高度化に重点を置き、事業に着手した。その結果、デジタル化スタジオの整備、収蔵庫の整備、展示室を改築し閲覧室としての公開、『坪井家関連資料目録』・『小野秀雄関係資料目録』の 2 冊の目録発行、『文化資源のデジタル化に関するハンドブック』および『新規教育研究事業「社会情報研究資料センターの高度アーカイブ化事業」事業報告書』の発行を行った。

### 3.3.1.1 情報学環メディア・コンテンツ研究機構

情報学環メディア・コンテンツ研究機構は、2009 年 9 月の設置以来、メディア・コンテンツ分野の研究開発や教育推進、産・官・学の連携の発展、国際的な人材養成の展開のための活動を行ってきた。2011 年度からは、特別経費「国際的に卓越した教育研究拠点機能の充実」（2011 年度～2015 年度）の概算要求が認められ、「知識コンテンツ基盤拡充に向けた横断型教育モデルの国際展開」プログラムが開始された。これにもとづいて、2012 年度からは、従来の学部横断型教育プログラム「メディアコンテンツ」に続いて、二つ目の部局横断型教育プログラムとして、大学院横断教育プログラム「デジタル・ヒューマニティーズ」を立ち上げた。

2013 年 11 月には、高麗大学校応用文化科学センターとの共催で、ソウル市内高麗大学校安岩キャンパスにて、「第一回学生発表ワークショップ」を開催した。同ワークショップでは、「身体、イメージ、メディア」をテーマとし、東京大学および高麗大学校の教員・大学院生が集まり、基調講演に加えて、各大学の教員・大学院生による 10 の研究発表が行われた。続いて 2014 年 1 月にも、東京大学本郷キャンパスに場所を移し、高麗大学校応用文化科学センターとの共催で「第二回学生発表ワークショップ」を催し、両校の教員・大学院生の出席のもと、基調講演、アーティストを招いての「メディア・アート」をめぐる共同討議、9 つの研究発表が行われ、デジタル技術がメディア環境および文化に与えた影響に関して活発な議論が行われた。加えて、2013 年 7 月には仏国より研究者を招聘し、東京大学本郷キャンパスにて、「第一回コレージュ・ド・フランス講義」を開催し、二回にわたる連続講義を行った、

また、2013 年 7 月には一般社団法人放送人の会との共催で、シンポジウム「未来へのアーカイブー原発事故・放射能汚染の過去／未来」を東京大学駒場キャンパスにて開催、2014 年 2 月には同じく、一般社団法人放送人の会との共催で、研究会「テレビが社会を描き出そうとしていた時代」を東京大学本郷キャンパスにて開催した。その他、立命館大学衣笠・朱雀キャンパスで行われた日本デジタル・ヒ

ューマニティーズ学会の年次大会への参加などを通じて、デジタル・ヒューマニティーズやメディア・コンテンツに関する共同研究の推進を果たした。

さらには、東京国立近代博物館フィルムセンターおよび東京藝術大学大学院映像研究科とのコラボレーションによる「記録映画アーカイブ・プロジェクト」の推進、東京大学附属図書館「新図書館計画」と連動した「ハイブリッド図書館研究プロジェクト」など、メディア・コンテンツを批判的に分析し研究するための様々なプロジェクトを展開した。

### 3.3.2 総合防災情報研究センター

総合防災情報研究センターは、2008年4月1日に、東京大学の大学院情報学環、地震研究所、生産技術研究所の連携により、情報の概念を核とした文理融合型の総合的な防災研究機関として設立された。6年目を迎えた2013年には、研究面では、東日本大震災に関する継続的研究とともに、ミッションのひとつである「首都直下地震災害の全体像の把握」を推進する災害情報研究会を開催し、さらに南海トラフ沿岸地域と日本海沿岸地域とを対象にしたプロジェクトに新規に参画した。教育面では、情報学府コース横断型科目である災害情報論および学部前期課程学生向けに全学自由研究ゼミナールを継続して開講した。組織運営面では、社会科学系研究の充実に向けた

以下、2011年度の主な活動をミッション毎に示す。

#### 3.3.2.1 災害情報の生産－伝達－受容過程の解明

第5回CIDIR定期調査を実施するとともに、科学研究費補助金（代表者；山内准教授（CIDIR兼任））を用いて、首都圏住民が首都直下地震に対して構築している知識構造を専門家の知識構造と比較分析を行った。また、委託研究費により、南海トラフ沿岸住民および日本海沿岸住民の津波防災知識と避難にとモデルとについて、住民調査とその結果の分析を行った。

#### 3.3.2.2 首都直下地震災害の全体像の把握

災害時における首都圏固有の課題を抽出するとともに、危惧されている首都直下地震時の課題を分析するために、下記連続研究会を開催した。

- ・ 第5回「首都直下地震災害の論点整理と今後の研究の方向性」（平成25年6月17日）

話題提供：総合防災情報研究センター

- ・ 第6回「頻発する天井落下事故とその対策」（平成25年10月15日）

話題提供：川口健一教授（東京大学生産技術研究所）

- ・ 第7回「東日本大震災での対応と首都直下地震に向けたエレベーターに関する取り組み」（平成25年11月25日）

話題提供：株式会社日立ビルシステム

- ・ 第8回 「首都直下地震と火災」（平成25年2月4日）

「東日本大震災における従来型火災の特徴と課題」

話題提供：秦康範 准教授（山梨大学 地域防災・マネジメント研究センター）

首都直下地震による火災被害と対策における課題」

話題提供：関澤愛 教授（東京理科大学火災科学研究センター）

第9回「巨大地震時の火災リスクをいかに低減するか」（平成25年3月27日）

話題提供：室崎 益輝 氏（神戸大学名誉教授）

### 3.3.2.3 大学 SCM モデルの開発

概算要求「災害緊急情報を活用した大学防災情報システムの開発」では、緊急地震速報等の学内利用を推し進めるとともに、多言語化や放送設備との接続など高度化を図るとともに、高等教育機関が自らの防災を高めうるように、キャンパス周辺の災害環境や東日本大震災時の大学の災害対応実態を容易に把握できるシステムを開発した。

また、引き続き、大学本部の防災訓練の企画・運営に当たった。2013年度の訓練では、文系10部局と合同で実施し、部局指定避難場所の妥当性の確認と複数部局の合同災害対策本部の可能性を検討した。

### 3.3.2.4 災害情報教育の実施とプログラム開発

昨年に引き続き、情報学環各コース横断型の教育プログラムである「災害情報論」ならびに学部前期課程学生向けに全学自由研究ゼミナールを開講した。

また、ライフライン・マスコミ連携講座を各月に開催した。

### 3.3.2.5 その他

東日本大震災にかかわる研究として、第1に復興状況と復興課題とを把握するための第2回復興定点調査を実施した。また、地域産業再建策としてグループ化補助金の実態調査を2回にわたって実施した。

次期特別教育研究経費の獲得に向けて、医学部附属病院災害マネジメント部ならびに経済研究科所属教員と連携し「ヒューマンサイエンスに基づく首都圏大規模災害被害軽減に向けた教育研究の充実」を大学本部に申請した。前年ながら不採択となったが、改善の上で再度挑戦する予定である。

## 3.3.3 ユビキタス情報社会基盤研究センター

ユビキタス情報社会基盤研究センターは、ユビキタスコンピューティング、ネットワークングに関する世界最高の教育・研究拠点の中核を担うという目的を達成するため、以下のような研究を実施している。

#### (1) ユビキタス情報基盤技術の研究

これまでの COE プログラムで確立した、ユビキタスコンピューティング分野の基盤技術である、ユビキタス ID 技術や T-Engine/T-Kernel、eTRON を用いた、インターネットの次の新世代の情報インフラを確立する。具体的には、「国際ユビキタス ID センター」を世界各地に立ち上げ、本研究センターがこれらの連携の中核となる。

#### (2) ユビキタス情報社会研究

ユビキタス情報インフラの普及とともに、社会がどのように変化するかということ、実証的に研究し、かつそのために必要な新しい社会システムや制度、法律、ビジネスモデルを考案し、積極的に提案していく。

ユビキタスコンピューティング技術は、ICT 分野において、我が国がリーダーシップをとって普及を進めている技術である。本センターにおける研究を推進することによって、情報科学、情報社会学等の、学術的な分野の成果を輩出することはもちろん、更にそれを社会基盤として実社会に普及させ、顕在化している様々な社会問題を解決することが期待される。

### 3.3.4 現代韓国研究センター

現代韓国研究センターは、東アジア地域の国際的協力と地域主義的連携を展望しつつ、日本と韓半島の相互協働とパートナーシップの多面的な展開の可能性を探求する必要性から、2010 年度の研究テーマ「東アジア共同体と日韓パートナーシップ」と 2011 年度「現代韓国文化のアジア的還流と地域アイデンティティの可能性」、2012 年度「日韓における民主主義の変容と世論をめぐって」に引き続き、2013 年度の研究テーマを「東アジア学術共同体の模索」と設定し、東京大学内の現代韓半島研究に携わる諸組織・機関をネットワーク化するとともに、研究者や大学院生の活発な相互連携を図り、韓国研究の水準の向上とその普及を目指した。2013 年度開催された学術行事は、以下の通りである。

- (1) 2013 年 7 月 17 日 (水)、第一回研究会
- (2) 2013 年 8 月 2 日 (金)、東京大学・ソウル大学学生討論会
- (3) 2013 年 9 月 28 日 (土)、国際シンポジウム「東アジア国際秩序の形成・展開・未来構想」
- (4) 2013 年 12 月 2 日 (月)、第二回研究会
- (5) 2014 年 1 月 21 日 (火)、第三回研究会
- (6) 2014 年 1 月 24 日 (金)～25 日 (土)、大学院生ワークショップ
- (7) 2014 年 2 月 1 日 (土)、特別研究会「新たな視点で考える在日コリアン」
- (8) 2014 年 2 月 13 日 (木)、特別講演会「張成澤肅清以後の北朝鮮の対内外情勢」

## 4 社会との交流

情報学環教員は、以下に述べるとおり、国際的委員会や政府委員会委員、産学協同等を通じて社会との交流を進めながら、社会への貢献を積極的に行っている。

### 4.1 国際的委員会

情報学環教員は、IEEE、ACM 等の国際学会が開催する会議の運営委員等を通じて、国際的な研究の推進に貢献をしている。

池内 克史	日本 VR 学会デジタルミュージアム研究委員会	研究委員
池内 克史	日本電子情報通信学会ソサイエティ	会長
池内 克史	特定営利活動法人 ITS Japan	理事
池内 克史	情報処理学会 フロンティア領域委員会	委員長

池内 克史 日本情報処理学会 理事

池内 克史 International Journal of Computer Vision 編集委員長

池内 克史 CVPR2013 その他

池内 克史 MVA2013 組織委員長

池内 克史 MIRU2013 プログラム委員長

池内 克史 MIRU2013 その他

石崎 雅人 人工知能学会 言語・音声理解と対話処理研究会 主査

石崎 雅人 日本認知科学会 論文賞選考委員

石崎 雅人 日本認知科学会 運営委員

石崎 雅人 InterSpeech 2013, Reviewer

伊東 乾 Journal of Temporal Design, Associate Editor

植田 一博 International Journal of Design Creativity and Innovation, editorial board member

上田 博人 Lingüística Española Actual 編集委員

上條 俊介 Journal on Multimedia Tools and Applications (Springer), Editorial Board member

上條 俊介 International Journal of ITS Research (Springer), Editorial Board member

上條 俊介 ITS 世界会議 IPC (国際プログラム委員)

上條 俊介 IEEE-ITSC(The IEEE Intelligent Transportation Systems Conference ), 2013 Regional Program Chair for Asia/Australia

上條 俊介 ACECC Technical Committee WG16, Co-Chair

木宮 正史 韓国ソウル大学統一平和研究院 編集委員

木宮 正史 社会科学院 (韓国) 客員研究員

木宮 正史 日韓有識者間政策対話 日本側代表責任者

木宮 正史 Korean National Strategy Institute Asiative, Editorial Advisory Board

佐倉 統 East Asian Science, Technology and Society, Advisory Board

須藤 修 International CIO Academy, Adviser

須藤 修 Heidelberg Club International (HCI) organized by the Mayer of Heidelberg City (Germany), Member

須藤 修 Living Labs Global Award 2011(USA), The Jury Member

須藤 修 OECD Global Science Forum Expert Group, Member

中野 公彦 Recent Advancement in Structural Dynamics, member of organizing committee

水越 伸 the Journal of Mobile Communication, editorial board member

森 太志 International Workshop on Software for Peta-Scale Numerical Simulation, Local Arrangement Chair

山口いつ子 日本社会情報学会 理事

## 4.2 政府・自治体委員会

情報学環教員は、政府・自治体委員会の委員等としても活躍し、情報通信などにかかわる政策立案等に参画することで、社会に貢献している。

<政府>

池内 克史 総務省 独立法人評価委員会 情報通信・宇宙開発分科会情報通信研究機構部会 専門委員

池内 克史 文部科学省 独立行政法人日本学術振興会 平成 25 年度博士課程教育リーディングプログラム プログラムオフィサー

池内 克史 文部科学省 独立行政法人日本学術振興会 平成 25 年度博士課程教育リーディングプログラム 専門委員

池内 克史 NEDO IT 融合による新社会システムの開発・実証プロジェクト（都市交通分野）北海道観光における観光客導線による総合交通産業エコ事業」事業検討委員会 事業検討委員

石川 雄章 総務省等 オープンデータ流通推進コンソーシアム

石川 雄章 国土交通省 下水道における ICT 活用に関する検討会 委員

大島 まり 文部科学省 科学技術・学術審議会 臨時委員

大島 まり 文部科学省 科学技術・学術審議会（研究計画・評価分科会）核融合研究作業部会 委員

大島 まり 文部科学省 先端研究基盤部会 委員

大島 まり 文部科学省 研究開発評価部会 委員

大島 まり 文部科学省 人材委員会 委員

大島 まり 文部科学省 原子力科学技術委員会 「もんじゅ」研究計画作業部会 委員

大島 まり 文部科学省 先端研究基盤部会 数学イノベーション委員会 委員

大島 まり 国土交通省 交通政策審議会 委員

大島 まり 国土交通省 交通政策審議会技術分科会 委員

大島 まり 国土交通省 社会資本整備審議会 臨時委員

大島 まり 経済産業省 産業構造審議会 臨時委員

大島 まり 日本学術会議 連携会員

大島 まり 独立行政法人科学技術振興機構 国際科学技術コンテスト支援事業推進委員会 委員

大島 まり 独立行政法人科学技術振興機構 「科学の甲子園推進事業委員会」委員

大島 まり 人事院 第 24 回人事院総裁賞選考委員会 委員

大島 まり 独立行政法人国立科学博物館 重要科学技術史資料登録委員会 委員

大島 まり 独立行政法人 理化学研究所 次世代計算科学研究開発プログラム次世代生命体統合シミュレーション研究推進グループ 臓器全身スケール研究開発チーム 客員主管研究員

大島 まり 総務省 情報通信審議会 専門委員

大島 まり 内閣府 科学技術イノベーションシステム改革等検討委員会

大島 まり 文部科学省 「研究活動の不正行為への対応のガイドライン」の見直し・運用改善等に関する協力者会議 委員

大島 まり 独立行政法人科学技術振興機構 平成25年度日比谷高校SSH運営指導委員会 委員

大島 まり 文部科学省 中央教育審議会 委員

大島 まり 文部科学省 中央教育審議会初等中等教育分科会 委員

大島 まり 文部科学省 中央教育審議会大学分科会 委員

大島 まり 文部科学省 HPCI計画推進委員会 委員

大島 まり 独立行政法人 日本学術振興会 科学研究費委員会 専門委員

越塚 登 内閣官房 電子行政オープンデータ実務者会合 委員

越塚 登 内閣官房 電子行政オープンデータ実務者会合 データワーキンググループ 委員  
(主査)

越塚 登 総務省 ICT新産業創出推進会議 委員

越塚 登 総務省 G空間×ICT推進会議 委員

越塚 登 総務省 G空間×ICT推進会議 新産業・新サービスに関するアドホック会合 委員

越塚 登 総務省 G空間プラットフォーム構築に関する実務者会合 委員

越塚 登 総務省 情報伝達の共通基盤に在り方に関する研究会 委員

越塚 登 国土交通省 歩行者移動支援有識者委員会 委員

越塚 登 国土地理院 地理空間情報の共通・相互利用促進に関する専門部会 委員

越塚 登 文部科学省 デジタルコンテンツの質の保証に関する調査研究委員会 委員

坂村 健 内閣官房 国家戦略特区ワーキンググループ 委員

坂村 健 内閣官房 高度情報通信ネットワーク社会推進戦略本部 本部員

坂村 健 総務省 地域の元気創造有識者会議 委員

坂村 健 総務省 ICT国際競争力強化・国際展開に関する懇談会 座長代理

坂村 健 国土交通省 社会資本整備審議会 臨時委員

坂村 健 国土交通省 社会資本整備審議会河川分科会 臨時委員

坂村 健 国土交通省 交通政策審議 臨時委員

坂村 健 国土交通省 ICTを活用した歩行者の移動支援に関する勉強会 委員

坂村 健 国土交通省 新たな「国土のグランドデザイン」構築に関する有識者懇談会 委員

坂村 健 国土交通省 社会インフラのモニタリング技術活用推進検討委員会 委員

須藤 修 内閣官房「新戦略推進専門調査会マイナンバー等分科会」 委員

須藤 修 内閣官房「新戦略推進専門調査会電子行政分科会」 委員

須藤 修 内閣官房「情報セキュリティ政策センター技術戦略専門委員会」 委員

須藤 修 内閣府「地方分権改革有識者会議雇用対策部会」 専門委員

須藤 修 総務省情報通信審議会 委員

須藤 修 総務省情報通信審議会「情報通信政策部会」 部会長

須藤 修	総務省情報通信審議会「情報通信技術分科会」	委員
須藤 修	総務省情報通信審議会「2020-ICT 基盤政策特別部会」	委員
須藤 修	総務省「放送サービスの高度化に関する検討会」	顧問
須藤 修	総務省「ICT 成長戦略会議」	構成員
須藤 修	総務省「ICT 生活資源対策会議」	座長
須藤 修	総務省「ICT 街づくり推進会議」	構成員
須藤 修	総務省「ICT 街づくり推進会議」共通 ID 利活用ワーキンググループ	主査
須藤 修	総務省「ICT を活用した街づくりとグローバル展開に関する懇談会」	構成員
須藤 修	総務省「ICT 国際競争力強化・国際展開に関する懇談会」	構成員
須藤 修	総務省「行政事業レビュー外部有識者会合」	委員
須藤 修	総務省「地方公共団体における番号制度の活用に関する研究会」	座長
須藤 修	総務省「官民連携事業評価委員会」	委員
須藤 修	総務省「地域 ICT 利活用モデル構築事業評価会」	委員
須藤 修	経済産業省「情報共有基盤推進委員会」	委員長
須藤 修	国土交通省「自動車関連情報の利活用にかかる将来ビジョン検討会」	座長
須藤 修	厚生労働省「職業安定行政業務のハローワークシステム評価委員会」	委員
中野 公彦	警察庁	委員
中野 公彦	国土交通省	委員
橋元 良明	総務省	情報白書編集委員
山口 いつ子	総務省情報通信政策研究所	情報通信法学研究会 構成員
山口 いつ子	日本学術振興会	科学研究費委員会 専門委員

#### <自治体>

大島 まり	群馬県教育委員会	スーパーサイエンスハイスクール 運営指導委員
大島 まり	横浜市教育委員会	横浜市立サイエンスフロンティア高校 科学技術顧問
大島 まり	岩手県教育委員会	平成 25 年度岩手県立釜石高等学校スーパーサイエンスハイスクール運営指導委員会 委員
大島 まり	福井県教育委員会	福井県教育研究所機能強化検討委員会 委員
坂村 健	東京都	東京都 IC タグ実証実験実行委員会 委員
坂村 健	東京都	「東京ユビキタス計画・銀座」地区協議会 会長
須藤 修	福島県	IT 推進アドバイザー
須藤 修	高知県	「電子自治体推進協議会」 顧問
須藤 修	鳥取県	「地域活性化総合特区推進協議会」 アドバイザー
須藤 修	三重県	「ICT を活用した産業活性化推進協議会」 特別顧問
須藤 修	甲府市	「甲府 PMO 委員会」 副委員長
水越 伸	文京区	文京区アカデミー推進協議会長



### 4.3 学協会活動

情報学環教員は、国内外の関係学会の活動に積極的に参加しており、会長や副会長など、学会の要職等を通じて学協会活動に貢献している。

石川 雄章	ジャパンクラウドコンソーシアム 幹事
石崎 雅人	国際標準化規格委員会 (TC37/SC4) 国内対策委員
大島 まり	公益財団法人 日本技術士会平成 25 年度技術士試験 委員
大島 まり	一般財団法人 高度情報科学技術研究機構利用研究課題審査委員会 レビュアー
大島 まり	社団法人 発明協会 審査委員
岡本 剛和	情報通信政策研究所 特別上級研究員
上條 俊介	国際交通安全学会(IATSS)国際交流部会企画委員会 委員
上條 俊介	首都高速道路における交通安全対策の調査研究委員会 交通工学研究会委託事業 委員
上條 俊介	国際協力機構(JICA)トルコ国イスタンブール市歴史地区交通需要管理プロジェクト国内支援委員会 委員
上條 俊介	公益財団法人 土木学会技術推進機構 実践的 ITS 研究委員会 委員
上條 俊介	公益社団法人 日本道路協会第 30 回日本道路会議 論文・企画委員会 専門技術グループ 計画・環境・安全・情報 委員
上條 俊介	一般社団法人 交通工学研究会首都高速道路における交通安全対策検討会 委員
上條 俊介	公益社団法人 自動車技術会 ITS 部門員会 委員
越塚 登	株式会社横須賀テレコムリサーチパーク YRP ユビキタスネットワークワーキング研究所 副所長
越塚 登	T-Engine フォーラム学術教育 WG 主査
越塚 登	オープンデータ流通推進コンソーシアム 理事 (会長代理)
越塚 登	オープンデータ流通推進コンソーシアム技術委員会 委員 (主査)
越塚 登	独立行政法人情報処理推進機構共通語彙基盤ワーキンググループ 委員
越塚 登	独立行政法人情報処理推進機構共通語彙基盤ワーキンググループ 移動・交通ドメイン語彙検討会 委員 (座長)
越塚 登	独立行政法人情報処理推進機構語彙データベース検討会 委員
越塚 登	公益財団法人佐藤陽国際奨学財団 選考委員
坂村 健	独立行政法人国立新美術館 評議員
坂村 健	一般社団法人 樫の会企画委員会 委員
坂村 健	一般社団法人 日本プロジェクト産業協議会日本創生委員会 委員
坂村 健	一般社団法人 情報サービス産業協会 JISA Awards 2012 選考委員会 委員長
坂村 健	公益財団法人 佐藤陽国際奨学財団 運営諮問委員
坂村 健	公益財団法人 セコム科学技術振興財団 評議員

坂村 健 公益財団法人 東京都道路整備保全公社社会基盤サポート事業コンソーシアム運営委員  
 員会 委員

坂村 健 日本経済新聞社日経優秀製品・サービス賞 審査員

坂村 健 日経 BP 社日本イノベーター大賞 選考委員

須藤 修 国立情報学研究所 客員教授

須藤 修 日本学術会議連携会 会員

須藤 修 日本学術会議情報学委員会安全安心社会と情報技術分科会 委員

須藤 修 日本学術会議経済学委員会人口変動と経済分科会 委員

須藤 修 日本学術会議社会学委員会・法学委員会・政治学委員会・経済学委員会・経営学委員  
 会合同国民目線による統計調査・意識調査の方向性検討分科会 委員

須藤 修 日本学術会議総合工学委員会サービス学分科会 委員

須藤 修 日本学術会議情報科学技術教育分科会 委員

須藤 修 情報文化学会 会長

須藤 修 情報文化学会第 21 回全国大会 実行委員長

須藤 修 情報文化学会第 19 回情報文化学会賞選考委員会 委員

須藤 修 情報社会学会 理事

須藤 修 独立行政法人情報通信研究機構・総務省「新世代ネットワーク推進フォーラム」推  
 進委員

須藤 修 独立行政法人情報通信研究機構・総務省「新世代ネットワーク推進フォーラム」幹  
 事

須藤 修 独立行政法人情報通信研究機構・総務省「新世代ネットワーク推進フォーラム」アセ  
 スメントワーキンググループ 主査

須藤 修 財団法人自治体衛星通信機構理事会 評議員

須藤 修 財団法人国際 IT 財団 評議員

須藤 修 社団法人日本情報システム・ユーザ協会「イノベーション経営カレッジ委員会」委  
 員

須藤 修 一般社団法人「次世代放送推進フォーラム」 理事長

須藤 修 一般社団法人セコム科学技術振興財団 評議員

須藤 修 全国地域情報化推進協議会「技術専門委員会」 アドバイザー（総務省）

須藤 修 タイムビジネス協議会 顧問

須藤 修 一般社団法人 Open Government コンソーシアム 会長

須藤 修 一般社団法人「日本 IC カードシステム利用促進協議会」 顧問

須藤 修 「わたしたち生活者のための共通番号推進協議会」 幹事

須藤 修 「日本アカデメイア」 幹事

須藤 修 NPO「高度 IT 人材育成アカデミー」（福岡県） 副理事長

須藤 修 NPO「市民が主役の地域情報化推進協議会」 理事長

須藤 修 「ビッグデータ・オープンデータ活用推進協議会」(千葉市、奈良市、福岡市、武雄市) 特別会員

須藤 修 情報社会学会 2013 年度研究発表大会 Work in Progress 発表セッション (東京大学、2013 年 5 月 25 日) 座長

成原 慧 国際大学グローバル・コミュニケーション・センター個人情報保護分野におけるマルチステークホルダー・プロセス導入に関する研究会 構成員

丹羽 美之 公益財団法人放送文化基金放送文化基金賞 専門委員

丹羽 美之 一般社団法人日本民間放送連盟日本民間放送連盟賞 (テレビ部門) 中部・北陸地区審査会 審査委員

丹羽 美之 公益財団法人民間放送教育協会 評議員

丹羽 美之 特定非営利活動法人放送批評懇談会 理事 (選奨事業委員会・テレビ部門委員長)

丹羽 美之 JAMCO (一般財団法人放送番組国際交流センター) 番組評価委員

林 香里 公益財団法人東京大学新聞社 理事長

林 香里 日本フンボルト協会 評議員

#### 4.4 他組織役職

情報学環教員は、公益団体や他大学の役員・委員などとして、積極的に社会貢献を行っている。

池内 克史 株式会社 アスカラボ 外部取締役

池内 克史 マイクロソフト株式会社 顧問研究員

池内 克史 はこだて未来大学 非常勤講師

池内 克史 愛媛大学 非常勤講師

池内 克史 宮城大学 非常勤講師

植田 一博 東京財団・仮想制度研究所 フェロー

上田 博人 Observatorio de español en Japón 理事

大島 まり 芝浦工業大学 SIT 総合研究所 点検・評価委員

大島 まり 芝浦工業大学特別講義 講師

大島 まり 東京医科歯科大学大学院特別講義 講師

越塚 登 東京大学教養学部学際科学科総合情報学コース 兼任教員

越塚 登 東京大学理学部情報科学科 非常勤講師

越塚 登 中央大学 非常勤講師

坂村 健 一般社団法人 日本プロジェクト産業協議会 アドバイザー

坂村 健 一般財団法人 国土技術研究センター 研究顧問

佐倉 統 株式会社国際電気通信基礎技術研究所脳情報通信総合研究所 脳情報解析研究所動的脳イメージング研究室 客員研究員

佐倉 統 大学共同利用機関法人自然科学研究機構生理学研究所多次元共同脳科学推進センタ

## 一 客員教授

佐倉 統	独立行政法人理化学研究所理化学研究所脳科学総合研究センター 客員主管研究員
佐倉 統	中山科学振興財団 常任選考委員
佐倉 統	独立行政法人科学技術振興機構 日本科学未来館企画展示ゾーン等活用事業審査委員会 委員
佐倉 統	独立行政法人日本学術振興会科学研究費委員会 専門委員
佐倉 統	独立行政法人科学技術振興機構科学コミュニケーションセンター フェロー
佐倉 統	財団法人国際高等研究所研究プロジェクト「老いを考える」 参加研究者
佐倉 統	アクセンチュア株式会社「エネルギー政策の新たな広聴・広報のあり方に関する調査研究」 有識者委員会委員
佐倉 統	Discuss Japan 編集委員会海外向け政策論調発信ウェブ誌『Discuss Japan-Japan Foreign Policy Forum』 編集委員
佐倉 統	日本学術会議 連携会員
佐倉 統	財団法人国際花と緑の博覧会記念協会助成事業審査会 委員
園田 茂人	人事院法務省専門職員採用試験 試験専門委員
園田 茂人	人事院国家公務員採用総合職試験（人間科学） 試験専門委員
園田 茂人	科学技術振興機構・平成 25 年度テニユア・トラック普及・定着事業個人選抜型 選考委員（社会科学総合部会）
園田 茂人	警察大学校 講師
園田 茂人	アジア調査会アジア調査委員会 委員
鷹野 澄	IT 強震計研究会 代表
鷹野 澄	IT 強震計コンソーシアム 代表
中村 周吾	日本学術会議バイオインフォマティクス分科会若手小委員会 委員
丹羽 美之	CS テレ朝チャンネル番組審議会 委員
丹羽 美之	株式会社 mmbi 番組審議会 副委員長
林 香里	東京大学広報室 副室長
堀 里子	独立行政法人医薬品医療機器総合機構 専門委員
堀 里子	特定非営利活動法人 医薬品ライフタイムマネジメントセンター 理事
山口 いつ子	一般社団法人 モバイルコンテンツ審査・運用監視機構（EMA） 審査・運用監視委員会 委員

## 4.5 セミナー・研究会・公開講座

情報学環・学際情報学府の研究・教育活動の成果を公表ために、別表に示すようなさまざまな公開のイベントを実施した。

入試説明会は、学環・学府の全体像を受験生によく理解してもらうことに留意し、学環長に学環全体を、そして各コース長にコースでの教育研究について語ってもらう時間を設けた。また、各研究室や研

究プロジェクトを教員や学生が紹介し、受験生と直接交流する機会を設けた。大変熱心な議論が各所で展開され、イベント終了を宣するのが困難なほどであった。

今年度の東京大学ホームカミングデイでは学環から越塚登教授、山内祐平准教授による講演会を実施した。参加者数も例年にないほどであった。講演会後の、教育部交流会との合同での懇親会でも学環関係者の交流が深められた。

学環の特徴でもあるさまざまなプロジェクトは、公開研究会、シンポジウムなどを通して学際情報学・社会情報学の研究情報を発信している。下記がその一覧である。いずれも学際的なチャレンジをしている営みだといえる（学環ホームページ上に公開されたプロジェクトのみで、全てを網羅していないことを申し添えておく）。

## 【シンポジウム・講演会】

NO	実施日 場所	タイトル 主催団体
1	2013. 9.28 福武ホール	第3回東アジア共同体フォーラム「東アジア国際秩序の形成・展開・未来構想」 主催：東京大学大学院情報学環現代韓国研究センター 共催：JSPS 基盤研究東アジア地域史形成プロジェクト／高麗大学アジア問題研究所／清華大学国際問題研究所
2	2013. 10.04 工学部2号館	日本学術会議 公開シンポジウム「ユビキタス状況認識と時空間データの展開」 主催：日本学術会議情報学委員会ユビキタス状況認識社会基盤分科会 共催：東京大学大学院情報学環、ユビキタス社会情報基盤研究センター
3	2013. 10.19 福武ホール	情報学環ホームカミングデイ公開講演会 主催：情報学環 越塚登（情報学環教授） 「オープンデータ ～ Hack for Japan! 日本のために Hack しよう！～」 山内祐平（情報学環准教授） 「MOOC と反転授業—情報化で変わる大学」  学環・学府キャリアイベント2「教育部・学際情報学府 OB・OG 交流会」

4	2013. 11. 1 日本学術会議	日本学術会議 メディア・文化研究部会 公開シンポジウム「デジタル・メディア時代の政治と選挙—日本における民主主義の現在」  主催：日本学術会議社会学委員会メディア・文化研究分科会 協力：多文化メディア市民研究会、早稲田大学メディア・シティズンシップ研究所 コーディネーター・司会：林香里(情報学環教授)
5	2013 11. 24 福武ホール	記録映画アーカイブ・プロジェクト 第 11 回ワークショップ「戦後史の切断面(2)—1968・映像のコミュニケーション」  主催：東京大学大学院情報学環(記録映画アーカイブ・プロジェクト)
6	2013. 11. 07 山上会館	第 74 回公共政策セミナー KDDI 小野寺会長講演：「日本ではなぜイノベーションが進まないのか」
7	2013. 11. 18 福武ホール	マイナンバーに関するシンポジウム 主催：東京大学 情報理工学系研究科, 情報学環, 法学政治学研究科, 公共政策大学院 共催：東京大学ソーシャル ICT グローバル・クリエイティブリーダー育成プログラム 共催：東京大学 情報理工学系研究科 ソーシャル ICT 研究センター 後援：三菱 UFJ ニコス株式会社
8	2012. 11. 24 福武ホール	第二回東京大学大学院学際情報学府・院生国際学会 2nd Annual University of Tokyo-GSII Graduate Student Conference 主催：ITASIA 学生会
9	2014. 1. 3 伊藤国際学術研究センター	博士課程教育リーディングプログラム 多文化共生・統合人間学プログラム オープニングシンポジウム「多文化共生社会と新しい大学院教育」  主催：博士課程教育リーディングプログラム「多文化共生・統合人間学プログラム」
10	福武ホール 2014.1.24	東京大学・高麗大学校 第二回「学生発表ワークショップ」 主催：東京大学大学院情報学環 メディアコンテンツ研究機構 高麗大学校 応用文化科学センター

11	福武ホール 2014.2.22	第一回<日本テレビ史序説>研究会「テレビが社会を描き出そうとしていた時代」 主催:東京大学大学院情報学環メディアコンテンツ研究機構 共催:一般社団法人放送人の会
12	福武ホール 2014.3.1	記録映画アーカイブ・プロジェクト 第12回ワークショップ「戦後史の切断面(3)一万博とアバンギャルド」 主催:東京大学大学院情報学環(記録映画アーカイブ・プロジェクト)
13	福武ホール 2014.3.15	東京大学ソーシャル ICT グローバル・クリエイティブリーダー育成プログラム・グローバル・デザイン・ワークショップ(GDWS)第1回報告会 Workshoppers 2014 1st Annual Conference of the Global Design Workshop 主催:東京大学ソーシャル ICT グローバル・クリエイティブリーダー育成プログラム
14	福武ホール 2014.3.11	情報学環 角川文化振興財団 メディア・コンテンツ研究寄付講座 開設記念シンポジウム「メディアミックスの歴史と未来」 主催:東京大学大学院情報学環 メディア・コンテンツ研究機構
15	福武ホール 2014.3.27	「活力ある超高齢社会の推進」報告会 —ICT 利活用による社会イノベーション— 主催:情報学環「活力ある超高齢社会の推進(PAASP)」プロジェクト(総務省平成24年度補正予算「ICT 超高齢社会づくり推進事業」)
16	福武ホール 2014.3.9	3.11メモリアル・シンポジウム「生命をめぐる科学と倫理」問われる大学知 —エネルギー・リスク・ガバナンス— 主催 東京大学文学部東日本大震災復興支援哲学会議 共催 東京大学文学部応用倫理・哲学研究会 東京大学大学院情報学環伊東研究室 共催・制作協力 一般財団法人プラザ・ファウンデーション

### 【研究会等】

1	2013. 11.27 工学部二号館	佐倉統研究室特別公開ゼミ「対談:茂木健一郎×佐倉統『イグノランス—無知こそ科学の原動力—』翻訳出版先行公開ゼミ」 主催:情報学環佐倉研究室
2	2014. 1. 8 工学部二号館	情報学環林香里研究室<メディア研究のつどい> 情報学環丹羽美之研究室<みんなでテレビを見る会> 合同研究会「どう作る? 売れる

		TVフォーマット～世界的ヒットメーカーとNHKとの比較をもとに～ 主催:情報学環林研究室、情報学環丹羽研究室
3	2014.2.22 福武ホール	卵子提供に関する映画上映会 主催:代理出産を問い直す会+東大情報学環佐倉研究室
4	2014.3.12 福武ホール	デジタル化のチカラ Power of Digitization— 東日本大震災4年目に向けたジャーナリズムの課題と展望 主催:情報学環林香里研究室・メディア研究のつどい
5	2013.12.4 工学部二号館、他	第15回東京大学制作展 主催:情報学環、学際情報学府、他

## 4.6 出版活動

2004年の社会情報研究所との統合後は、社会情報研究所で出されていた定期刊行物と情報学環・学際情報学府の定期刊行物を統合し、新たな出版体制を整備しつつある。その中心となるのは、以下の5つの刊行物である。

- (1)研究紀要『東京大学大学院情報学環紀要情報学研究』（年2回刊）
- (2)調査実験紀要『同情報学研究・調査研究編』（年1回刊）
- (3)英文紀要（オンライン論文サイト"iii Online Research Journal"への移行を検討中）
- (4)年報『東京大学大学院情報学環年報』（年1回刊）
- (5)ニューズレター『学環学府』

これらはいずれも、情報学環にとって基幹的な出版活動であり、相互に役割を分担しながら有機的に結びついている。

なお、研究紀要『東京大学大学院情報学環紀要情報学研究』は85号、調査実験紀要『同情報学研究・調査研究編』は30号から冊子体の刊行を中止し、電子版のみの刊行に移行した。

表 4-6-1 情報学研究/同調査研究編の発行状況

東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究	
78号	2010年3月
79号	2010年11月
80号	2011年3月
81号	2011年10月
82号	2012年3月
83号	2012年10月
84号	2013年3月
85号	2013年10月
86号	2014年3月



情報学研究・調査研究編	
27号	2011年3月
28号	2012年3月
29号	2013年3月
30号	2014年3月

#### 4.6.1 『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』

『情報学環紀要 情報学研究』は、2004年の情報学環と社会情報研究所との統合により、旧社会情報研究所の『社会情報研究所紀要』を改称したものである。

同紀要は、1952年に『新聞研究所紀要』として創刊されて以来、新聞学、世論研究、マス・コミュニケーション論、ジャーナリズム、メディア史、マス・メディアの制度と受容、社会的コミュニケーションの諸過程、災害や地域情報化などの政策課題、高度情報化や新しいメディア接触と情報行動などを理論的、実証的に扱う多くの論考を掲載し、半世紀以上にわたって国内外の専門研究者や学生に多くの影響を及ぼしてきた。

社会情報研究所と情報学環との統合に際し、このような歴史と定評のある研究誌としての紀要の学問的な伝統と蓄積を、情報学環での教育研究基盤のうえでさらに発展させたいと考えた。このような視点から、『情報学環紀要 情報学研究』を、これまでの伝統を維持しつつも、理工学系において発展してきた情報学の基礎理論や応用分野の研究と融合した新しい研究成果が共に公開されていく場として位置づけた。

そのために、本紀要は、巻頭エッセイの「思考の環」、巻末の「フィールド・レビュー」をはじめ、情報学環教員の研究論文や学際情報学府博士課程院生の査読論文（博士課程在籍者の投稿論文は、外部査読者を含む複数の審査員による審査の上、掲載を許可している）などさまざまなセクションから複層的に構成されている。大学院情報学環において育まれる研究の創造的成果の主要な発表媒体として、また新たな学問的視座や調査研究の発表の場として、本紀要は内外から高い評価を得ている。

#### 4.6.2 『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究・調査研究編』

『情報学環紀要情報学研究・調査研究編』は、1992年から刊行されてきた『社会情報研究所調査研究紀要』を継承するものである。

『社会情報研究所調査研究紀要』は、同研究所におけるさまざまな社会調査、情報行動や災害情報、インターネットなどに関わる多くの調査の成果が発表されていく主要な媒体であった。これらの社会調査は、関係する研究者や学会、自治体などで高く評価されているものが多く、そのデータの価値が高く評価されていた。

このような社会情報研究所時代の伝統を生かしつつ、情報学環と社会情報研究所との統合後は、これまで主要な柱をなしてきた情報行動や災害行動の調査の成果に加え、情報工学や情報科学との融合分野での実験の成果、文理相互浸透分野でのフィールドワーク、情報教育分野での実験、デジタル・アーカ

イブに関する諸実践、デザイン表現論などの調査や実験、実践の成果が多分野にわたって発表される媒体となっている。

2014年3月に刊行されたNo.30には、「日本海沿岸住民意識調査にみる地震津波態度構造」「誰がネットで情報漏洩するのか？—企業従業員に対するTwitter利用調査—」「ネット選挙解禁はどう受け入れられたか—パネル調査による選挙情報利用行動の実態」「モバイルゲームの普及とゲーム行動の変化—都内私立高校における2011年と2013年の比較調査から—」の4本の論文が掲載された。

### 4.6.3 『英文紀要』

『情報学環英文紀要』は、前記の『社会情報研究所紀要』が発展していく中で研究の国際化、グローバル化に対応して独立したものであった。『英文紀要』は、基本的には研究者の個人研究論文とともに、社会情報研究所で開催された国際的なシンポジウムなどの記録を収録していた。

このような社会情報研究所時代の伝統を生かしつつ、情報学環・社会情報研究所の統合後は、情報、メディア、コミュニケーションをめぐるより広い学問分野の知見が掲載できるように体裁をあらため、和文紀要の一部に英語論文を掲載するとともに、英語のウェブサイトにも英語論文および和文論文の英訳を掲載している。

## 4.7 定期刊行物・ホームページ

### 4.7.1 定期刊行物

情報学環・学際情報学府では、日々の活動を学内外の方々に広く知ってもらうため、ニューズレター『学環学府』を発行している。『学環学府』は、情報学環教職員や学生だけでなく、学内他部局や本部役員をはじめ、学環にゆかりのある学外教員、そのほか広報用として入試説明会、ホームカミングデイ、学環来訪者などに随時配布している。内容は、教員へのインタビュー、研究室の活動報告、イベント予定、研究成果、受賞報告、展示会、各教員の書籍刊行情報など。2002年冬号から始まり、2012年度末までに通算39回発行した。デザイン性を高めた紙面は、情報学環・学際情報学府の特徴をよく表現しており、各方面から好評を得ている。

### 4.7.2 ホームページ

情報学環・学際情報学府は、これまでも教育・研究活動を広く国内外に周知すべく、ホームページを開設し情報発信を行っている。これによって、「学環」「学府」という有機的で複雑な組織の活動の全貌や相互の関係が、学環・学府の活動に関心をもつ一般の人や将来の学府受験生など、学環・学府の外部の人にも明快に把握できるようにしている。また、「学環・学府公式パンフレット」と統一的なデザインを採用することで、学環・学府のヴィジュアル・アイデンティティの確立を担っている。

サイト全体は、教員情報を軸にして構築されており、教員のプロフィールページから、担当する授業、参加しているプロジェクト、登壇したイベント、講演の動画など、関係するすべてのページに相互リンクされている。こうしたカテゴリー横断的な情報の関連付けによって、閲覧者がみずからの関心に応じて、回遊的にページを読み進めていけることを大きな特徴としている。また、グローバルナビゲーション

ンは、研究組織としての学環と、教育組織としての学府を明確に区別しながら、修士課程・博士課程や教育部研究生制度の入試に関する「受験情報」や、『紀要』や『ニューズレター』、『年報』など学環が発行する「紀要・出版物」といった基本情報をはじめとした各情報に、容易にアクセスできるようになっている。「イベント」ページでは、イベントの概要やプログラムといった基本的な情報はもちろんのこと、関連するイベントや教員も表示されるようになっており、サイト内での回遊を促すようデザインされている。また、「コース」ページでは、各コースの基本的な理念を掲げると同時に、受講できる授業や担当教員、関連する施設・研究センターやイベントも表示されるようになっている。

このように学環のホームページは学環の中心的な広報手段として重要であるが、現状のホームページをさらに充実させるために、今年度は以下の観点からホームページの刷新を行った：

- ・ 現状のホームページは Flash を利用したアニメーションが多用されているが、近年重要性を増しているスマートフォンやタブレットでは Flash が利用できず、掲載内容が快適に閲覧できない。そこで、現代的な Web サイト構築手法である HTML5 およびレスポンシブ・ウェブデザインを取りこみ再構成を施した。
- ・ ユーザの操作がより簡易になるように、アニメーションなどのビジュアル効果は控えめにし、シンプルで分かりやすい情報構造にする。

Web の利用環境もパソコンだけではなく、スマートフォンやタブレットなど、さまざまなデバイスによる閲覧が普及してきているが、それらの利用形態の変化も考慮したホームページとなり利用価値がさらに向上した。

## 4.8 国際交流

2013 年度の情報学環の国際交流事業は、活発で多彩な活動が展開された。以下、その経緯を時系列で記載する。

11 月 8～9 日（金、土）には、例年どおり、韓国・ソウル大学言論情報学科と「日韓共同シンポジウム」が、「Participatory Culture and Technology：参加型文化と技術」というテーマで開催された。学生達による研究交流プログラムとして展開してから 10 年目となる今年は、情報学環が開催役を務め、ソウル大学の教員及び学生合わせて 10 人が来日した。プログラムの一日目（8 日）の午前は福武ホール・シアターにて、現代韓国研究センターの木宮正史センター長の開会辞に続き、本学とソウル大学の教員による研究発表およびディスカッションのセッションが開かれた。本学からは国際活動委員長の林香里教授をはじめ、水越伸教授、佐倉統教授、金ヨニ助教以下 4 人の教員が、ソウル大学からはホン・ソッキョン副教授、イ・ジュンウォン副教授を含め 3 人の教員が来日し、最新研究業績について発表およびディスカッションを行った。続いて工学 2 号館 9 階教室にて開かれた午後のテーマ別セッションでは、事前選考で選ばれた修士・博士課程の学生 12 人（本学：5 人、ソウル大学：7 人）が各自の研究業績について発表を行い、ディスカッションを交わした。二日目の 9 日午前は、台場の日本科学未来館のメディアラボを訪問し、本学の苗村健教授の展示による仮想現実工房を視察した。午後は、六本木、テレビ朝日本社に移動し、放送局内を見学した後、現場のプロデューサー達を交えて意見交換会を行った。海外大学との合同プログラムとして 10 年の歴史を誇るだけに、本学とソウル大学の間協力のもと、充

実な2日間となった。

また、新たに韓国の高麗大学校・応用文化研究所、高麗大学校大学院・視覚文化学科との国際交流覚書を締結し、台湾の国立政治大学伝播学院との国際交流協定を更新した。このほか、メキシコのエル・コレヒオ・デ・メヒコ、ならびにインドのデリー大学、中国の南京大学との全学国際交流協定更新の際、関係部局として参画した。

以上のように、大学間国際交流協定に基づく研究交流活動や教育行事に加えて、学環の教員それぞれは、積極的に海外で研究調査活動を行ったり、学会やシンポジウムを企画したり参加したりしている。また、海外からの研究者を招聘して共同研究に取り組み、多彩なシンポジウムも主催している。今後とも、組織として、教員として、多様な国々の多様な研究機関やその他の社会における交流を深めることが課題である。

## Ⅱ．資料

---

### 1 沿革

(旧社会情報研究所)

- 1929年 東京帝国大学文学部新聞研究室
- 1949年 東京大学新聞研究所
- 1992年 東京大学社会情報研究所に改組
- 東京大学大学院情報学環・学際情報学府と組織統合

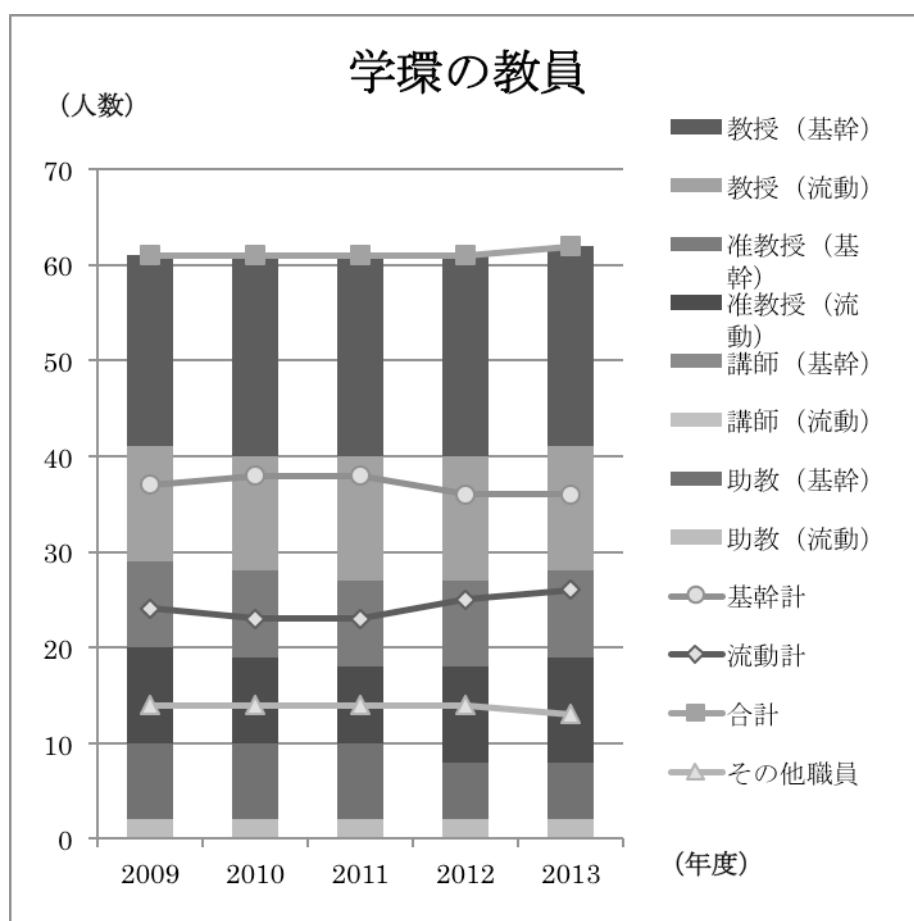
(大学院情報学環)

- 2000年 東京大学大学院情報学環・学際情報学府
- 2004年 東京大学社会情報研究所と組織統合  
文化・人間情報学コース、社会情報学コース、学際理数情報学コース設置  
社会情報研究資料センター設置
- 2006年 総合分析情報学コース設置
- 2008年 アジア情報社会コース設置  
総合防災情報研究センター設置
- 2009年 学際理数情報学コースが先端表現情報学コースへ変更  
ユビキタス情報社会基盤研究センター設置
- 2010年 現代韓国研究センター設置

## 2 学環の教員（定員）

・情報学環(平成16年4月 社会情報研究所と合併)

年度	教授		准教授 (助教授)		講師		助教 (助手)		計			その他 の職員
	基幹	流動	基幹	流動	基幹	流動	基幹	流動	基幹	流動		
2009	20	12	9	10	0	0	8	2	37	24	61	14
2010	21	12	9	9	0	0	8	2	38	23	61	14
2011	21	13	9	8	0	0	8	2	38	23	61	14
2012	21	13	9	10	0	0	6	2	36	25	61	14
2013	21	13	9	11	0	0	6	2	36	26	62	13



### 客員教員の状況

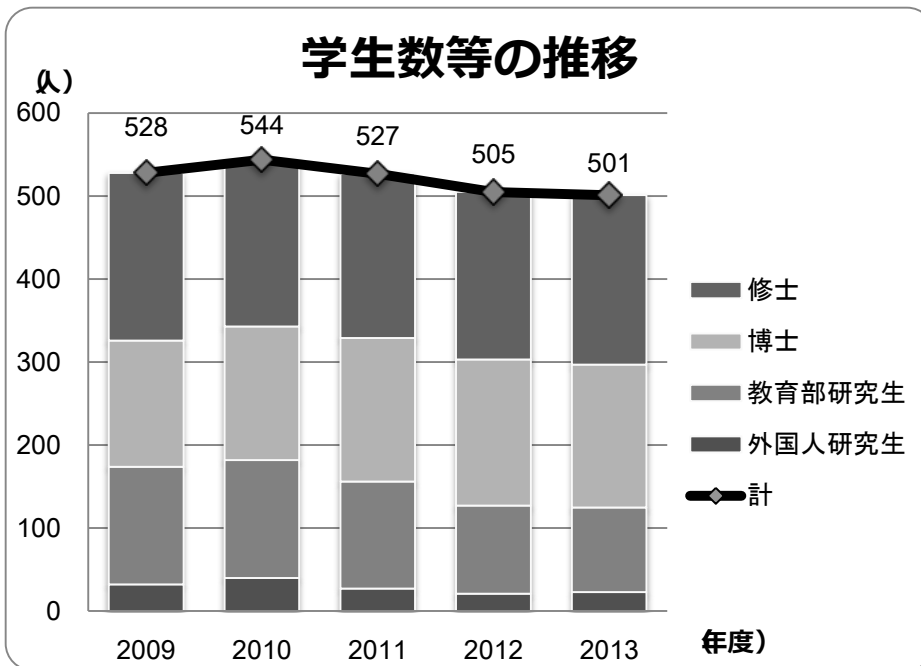
年度	職	氏名	担当授業	本務先
平成18	客員教授	佐藤 哲	文化・人間情報学特論Ⅷ	長野大学産業社会学部
	客員助教授	魏 晶玄	文化・人間情報学特論Ⅸ	ソウル(社)コンテンツ経営研究所
平成19	客員教授	飯吉 透		カーネギー財団知識メディア研究所
	客員准教授	奈良 高明		電気通信大学

	客員准教授	飯野 浩一	文化・人間情報学特論Ⅳ	凸版印刷総合研究所
	客員准教授	大場 光太郎		産業技術総合研究所
	客員准教授	下畑 光夫	総合分析情報学特論Ⅸ	沖電気
	客員准教授	荒牧 浩二		(株)日立製作所中央研究所
平成 20	客員教授	飯吉 透		カーネギー財団知識メディア研究所
	客員准教授	飯野 浩一	文化・人間情報学特論Ⅳ	凸版印刷総合研究所
平成 21	客員准教授	飯野 浩一	文化・人間情報学特論Ⅳ	凸版印刷総合研究所
平成 22	客員教授	水島 久光	社会情報学研究法Ⅰ	東海大学
	客員准教授	飯野 浩一	文化・人間情報学特論Ⅳ	凸版印刷総合研究所
	客員准教授	片田 敏孝	災害情報論	群馬大学
平成 23	客員教授	片田 敏孝	災害情報論	群馬大学
	客員教授	Roberson James	Information, Technology, and Society in Asia801	東京女学館大学
	客員教授	Paterson Robert Dunsmore	〃	国際基督教大学
	客員教授	水島 久光	社会情報学研究法Ⅰ	東海大学
	客員教授	遠藤 知巳	メディア社会学	日本女子大学
	客員准教授	飯野 浩一	文化・人間情報学特論Ⅳ	凸版印刷総合研究所
平成 24	客員教授	片田 敏孝	災害情報論	群馬大学
	客員教授	水島 久光	社会情報学研究法Ⅰ	東海大学
	客員教授	Paterson Robert Dunsmore	Information, Technology, and Society in Asia801	国際基督教大学
	客員准教授	飯野 浩一	文化・人間情報学特論Ⅳ	凸版印刷総合研究所
	客員准教授	田中 圭介	総合分析情報学基礎Ⅳ	東京工業大学
平成 21	客員准教授	宇陀 則彦	デジタル・ヒューマニティーズ 基礎論	筑波大学
平成 21	客員准教授	大向 一輝	〃	国立情報学研究所
平成 25	客員教授	片田 敏孝	災害情報論Ⅱ	群馬大学

### 3 学府の学生数

	2009	2010	2011	2012	2013
修士	202	201	198	202	204
博士	152	161	173	176	172
教育部研究生	142	142	129	106	102

外国人研究生	32	40	27	21	23
計	528	544	527	505	501





## 4 教育部

教育部入学試験

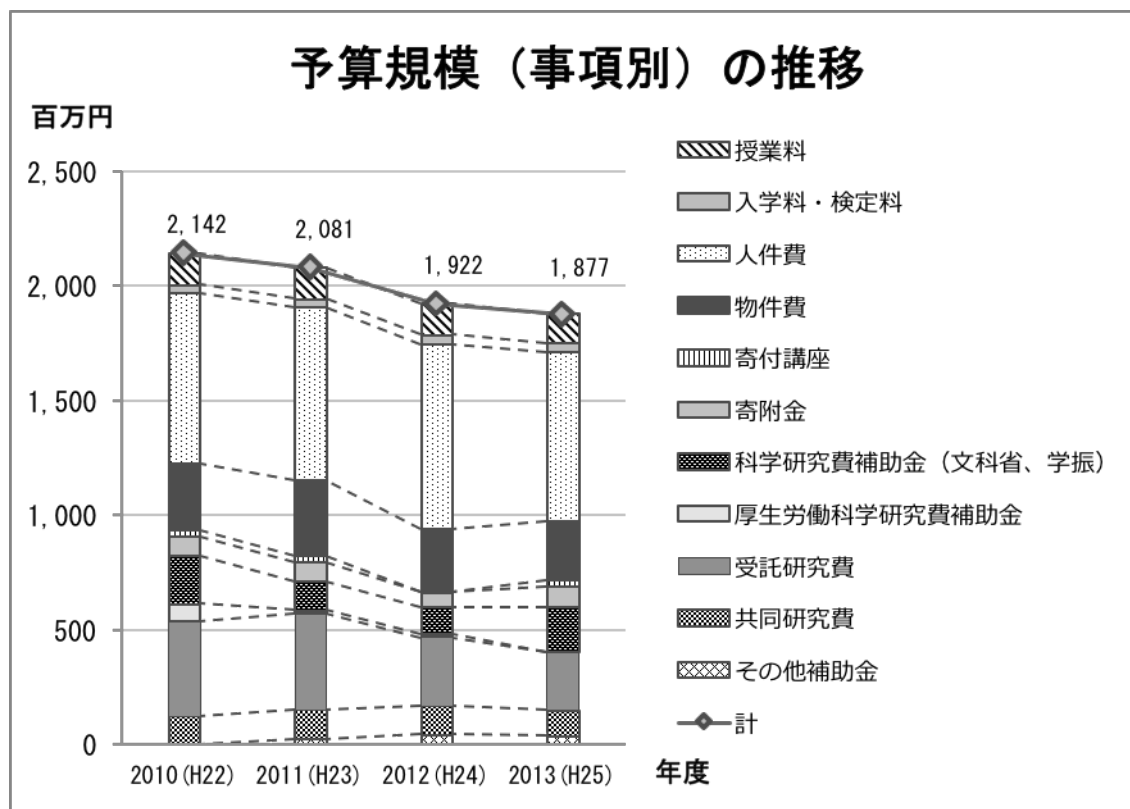
平成 21(2009)年度から平成 25(2013)年度入学志願者数・受験者数・合格者数

年度	受入 予定 人員	日本人/ 外国人	志願者			受験者			合格者		
			本 学	他 大 学	計	本 学	他 大 学	計	本 学	他 大 学	計
平成 21(2009) 年度	約 50	日本人	69	50	119	67	49	116	42	9	51
		外国人	0	2	2	0	2	2	0	0	0
		計	69	52	121	67	51	118	42	9	51
平成 22(2010) 年度	約 50	日本人	99	47	146	95	45	140	37	10	47
		外国人	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		計	99	47	146	95	45	140	37	10	47
平成 23(2011) 年度	約 50	日本人	121	53	174	112	51	163	32	10	42
		外国人	5	2	7	5	2	7	0	0	0
		計	126	55	181	117	53	170	32	10	42
平成 24(2012) 年度	約 30	日本人	76	51	127	72	51	123	22	11	33
		外国人	0	3	3	0	3	3	0	0	0
		計	76	54	130	72	54	126	22	11	33
平成 25(2013) 年度	約 30	日本人	46	38	84	41	37	78	19	10	29
		外国人	1	1	2	0	1	1	0	0	0
		計	47	39	86	41	38	79	19	10	29

## 5 予算

	2010 (H22)		2011 (H23)		2012 (H24)		2013 (H25)	
	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
授業料	-	138,116,530		138,088,930		136,486,210		128,086,749
入学料・検定料	-	33,850,600		37,398,800		38,418,200		36,312,800
人件費	-	744,968,962		753,689,804		806,775,260		738,829,519
物件費*	-	290,523,101		327,577,436		278,431,866		256,370,445
寄付講座	1	27,000,000	1	27,000,000	-	-	1	27,000,000
寄附金	39	82,902,448	40	85,963,505	27	62,948,565	27	89,559,278
科学研究費補助金** (文部科学省、学振)	69	211,625,326	58	126,197,516	71	119,643,805	88	199,675,050
厚生労働科学研究費 補助金	6	72,400,000	3	12,500,000	3	12,200,000	-	-
受託研究費	34	417,707,413	27	422,020,319	22	301,320,888	13	252,627,886
共同研究費	40	122,371,987	38	128,436,336	35	123,808,179	28	112,081,694
その他補助金	-	-	5	22,171,066	2	43,330,000	1	35,850,000

\*追加配分及び前年度からの目的積立金分を含む  
\*\* 特別研究員奨励費は除く



## 6 土地・建物面積

・建物（平成26年3月31日現在；借用部分を含む）

建物名	建築年度	面積（延面積・㎡）
情報学環本館	S27	472
	S29	26
	S33	360
	S58	4,171
	計	5,029
工学部2号館	*H18	*500
目白台西1号館	*H18	*492
目白台西2号館	*H18	*545
第2本部棟	*H18	*42
福武ホール	H19	**3,241
分生研1号館 （弥生キャンパス）	*H24	*30
駒場Ⅱ56号館	*H23	*473

\*使用開始年度・使用㎡数（借用部分であるため）

\*\*福武ホール面積については全学共用スペース分を除く

## 7 入試定数と受入数

	修士		博士	
	入学定員	受入予定人員	入学定員	受入予定人員
平成21(2009)	100	105	44	46
平成22(2010)	100	100	44	44
平成23(2011)	100	100	44	44
平成24(2012)	100	100	44	44
平成25(2013)	100	100	44	44

## 8 年度別入試データ詳細

修士

	2009	2010	2011	2012	2013
志願者	238	259	264	255	246
合格者	104	97	105	109	99

入学者	88	89	85	92	87
-----	----	----	----	----	----

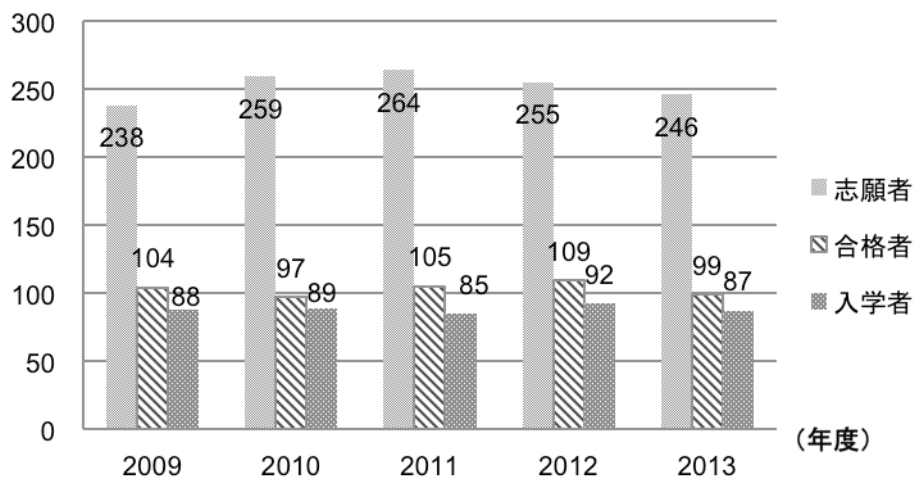
博士

	2009	2010	2011	2012	2013
志願者	65	70	69	55	64
合格者	38	41	40	35	32
入学者	36	39	39	34	29

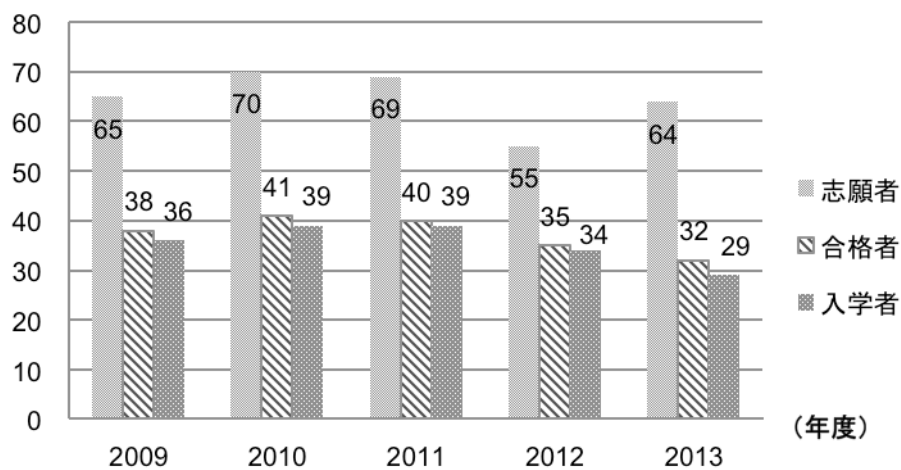
志願倍率（志願者／入学定員）

	2009	2010	2011	2012	2013
修士	2.38	2.59	2.64	2.55	2.46
博士	1.48	1.59	1.57	1.25	1.45

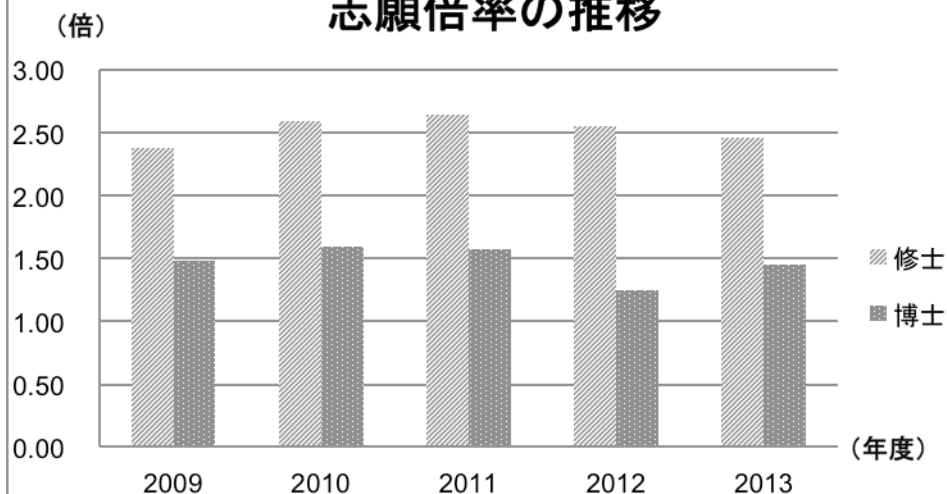
(人) 【修士課程】志願者・合格者・入学者の推移



(人) 【博士課程】志願者・合格者・入学者の推移



## 志願倍率の推移



### 2013 年度修士入学試験詳細

#### 志願者

本学	46
他大学	200
	246

#### 合格者

本学	29
他大学	70
	99

#### 入学者

本学	22
他大学	65
	87

#### 志願者

日本人	204
外国人	42
	246

#### 合格者

日本人	78
外国人	21
	99

#### 入学者

日本人	68
外国人	19
	87

#### 志願者

男	163
女	83
	246

#### 合格者

男	65
女	34
	99

#### 入学者

男	58
女	29
	87

#### 志願者

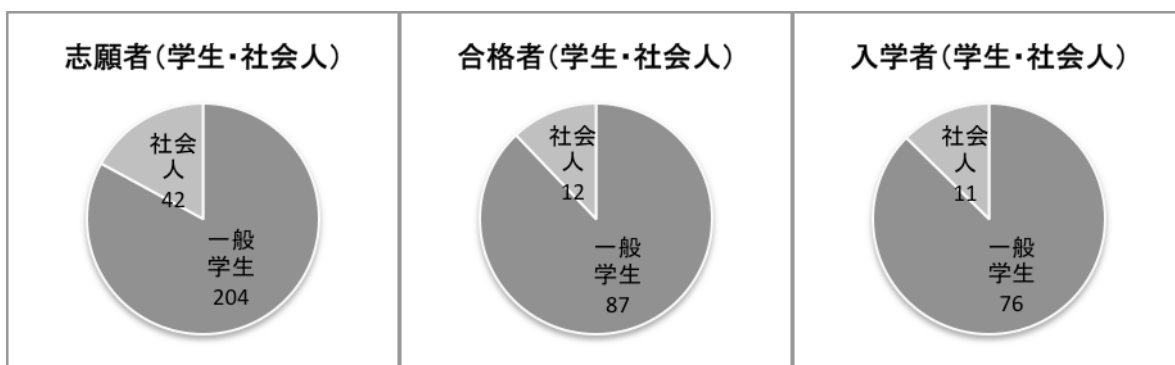
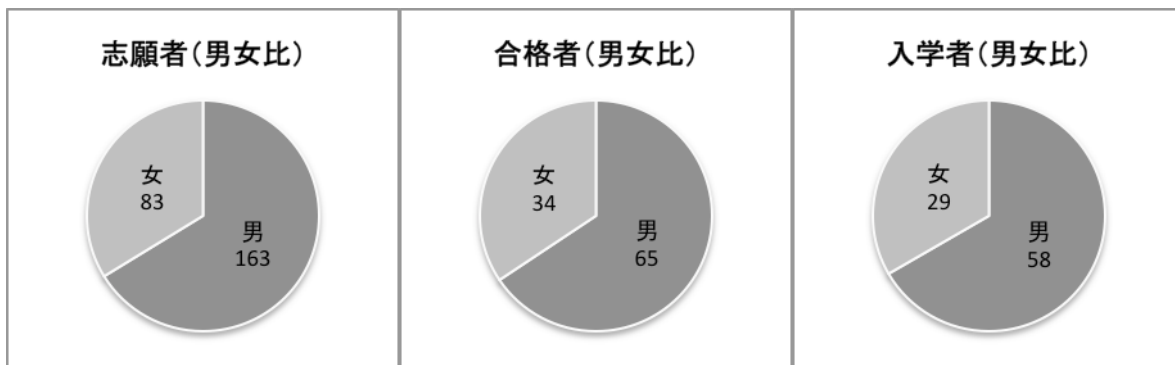
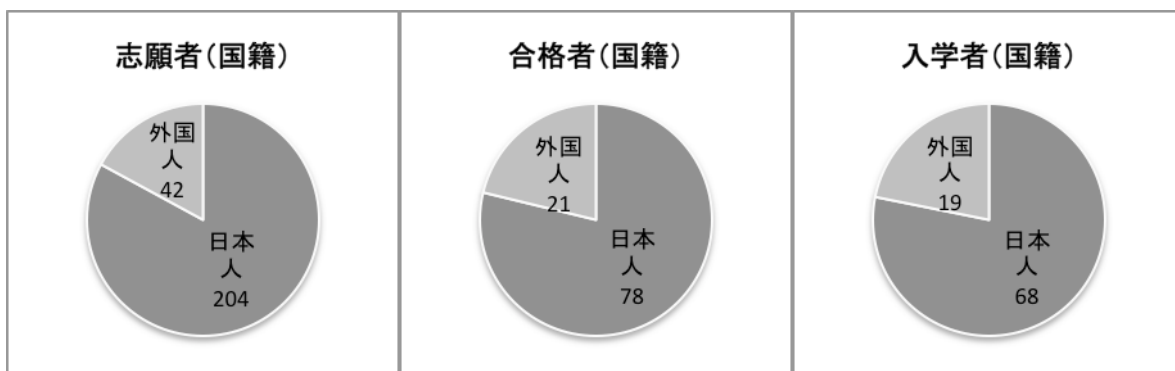
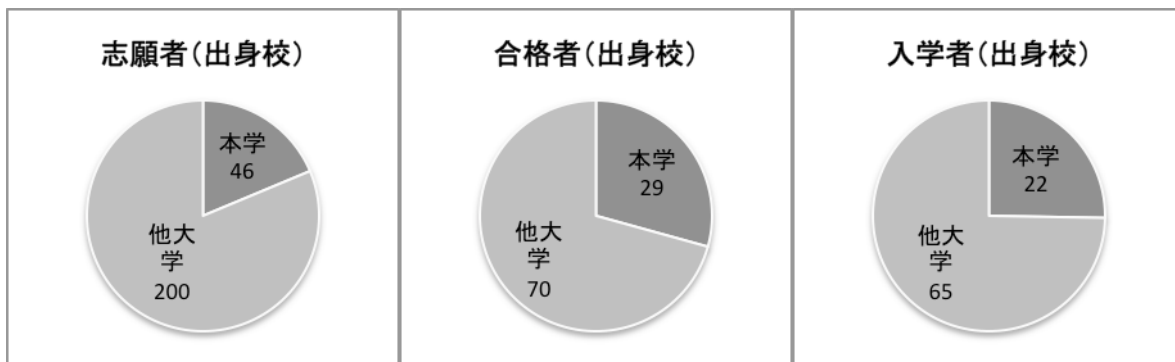
一般学生	204
社会人	42
	246

#### 合格者

一般学生	87
社会人	12
	99

#### 入学者

一般学生	76
社会人	11
	87



## 2013 年度博士入学試験詳細

### 志願者

本学府	26
他大学院	38
	64

### 合格者

本学府	19
他大学院	13
	32

### 入学者

本学府	18
他大学院	11
	29

### 志願者

日本人	40
外国人	24
	64

### 合格者

日本人	23
外国人	9
	32

### 入学者

日本人	20
外国人	9
	29

### 志願者

男	35
女	29
	64

### 合格者

男	13
女	19
	32

### 入学者

男	11
女	18
	29

### 志願者

一般学生	41
社会人	23
	64

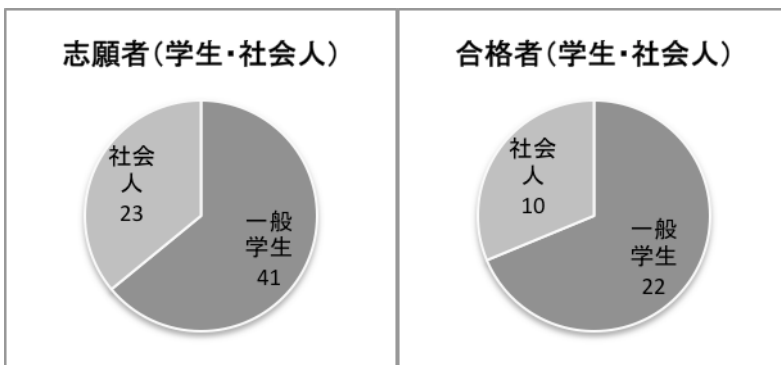
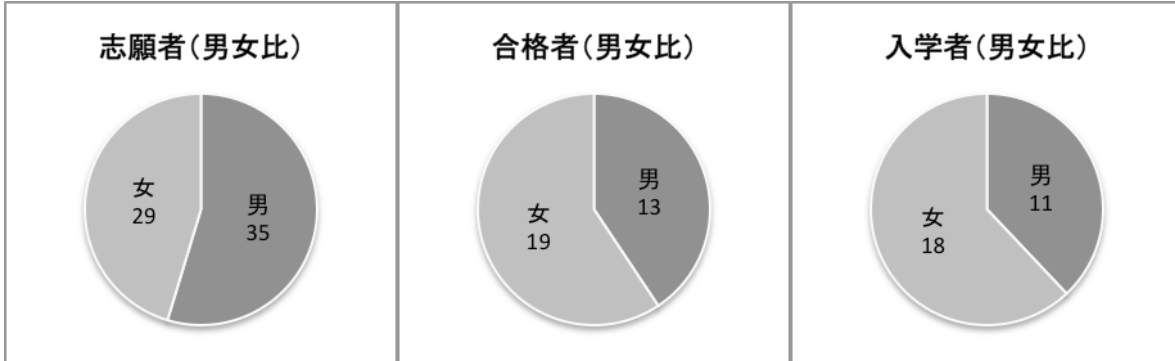
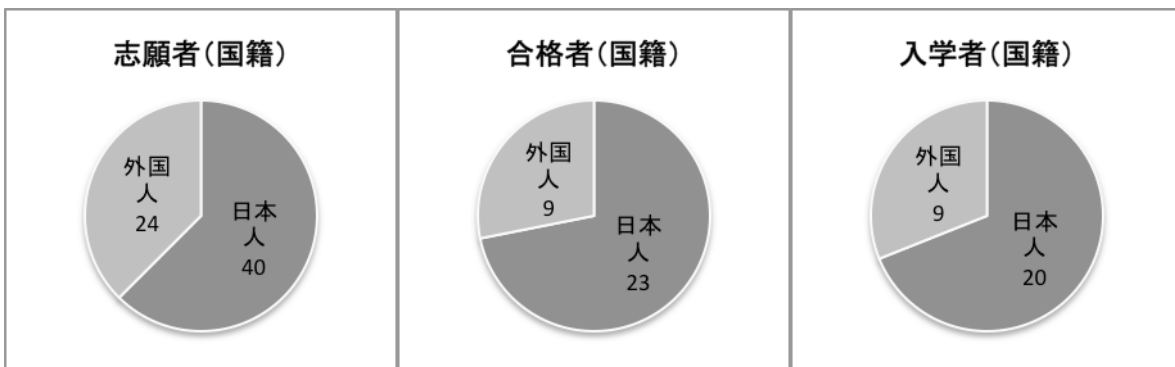
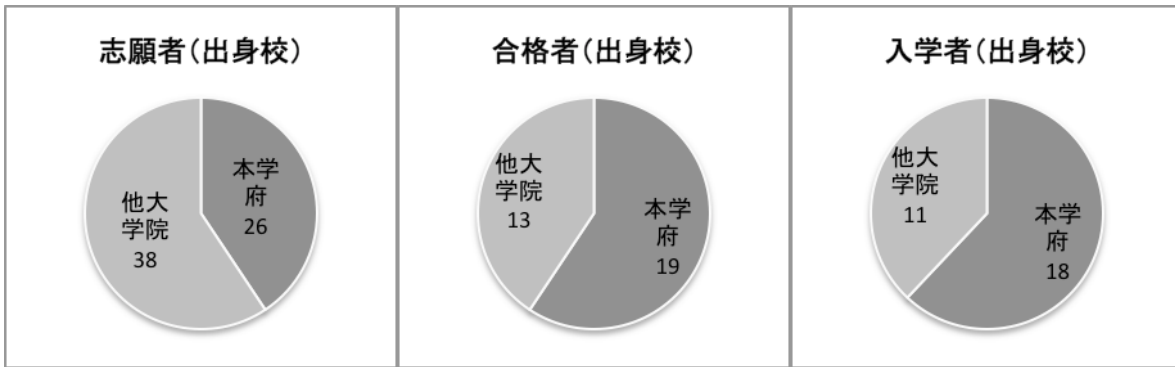
### 合格者

一般学生	22
社会人	10
	32

### 入学者

一般学生	21
社会人	8
	29



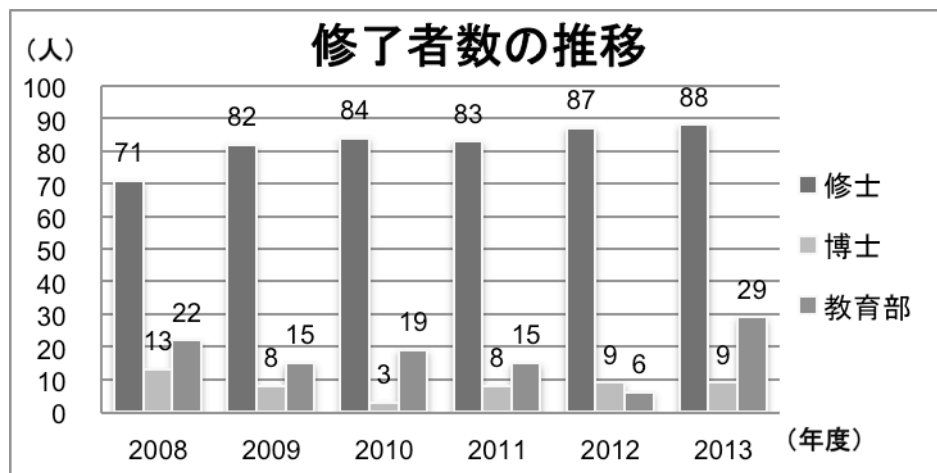


## 9 修了者数の推移

平成 20 (2008) 年度から平成 25 (2013) 年度修了者数 (教育部研究生)

年度		修了者		
		本学	他大学	計
平成 20 (2008) 年度	日本人	17	5	22
	外国人	0	0	0
	計	17	5	22
平成 21 (2009) 年度	日本人	9	6	15
	外国人	0	0	0
	計	9	6	15
平成 22 (2010) 年度	日本人	11	8	19
	外国人	0	0	0
	計	11	8	19
平成 23 (2011) 年度	日本人	7	7	14
	外国人	1	0	1
	計	8	7	15
平成 24 (2012) 年度	日本人	4	2	6
	外国人	0	0	0
	計	4	2	6
平成 25 (2013) 年度	日本人	13	16	29
	外国人	0	0	0
	計	13	16	29

	2008	2009	2010	2011	2012	2013
修士	71	82	84	83	87	88
博士	13	8	3	8	9	9
教育部	22	15	19	15	6	29



## 10 学生支援機構（旧育英会）奨学生数

	第一種		第二種		合計	
	修士	博士	修士	博士	修士	博士
2008	21	15	10	3	31	18
2009	20	13	6	1	26	14
2010	24	11	10	3	34	14
2011	25	7	7	1	32	8
2012	37	9	12	1	49	10
2013	19	5	4	0	23	5



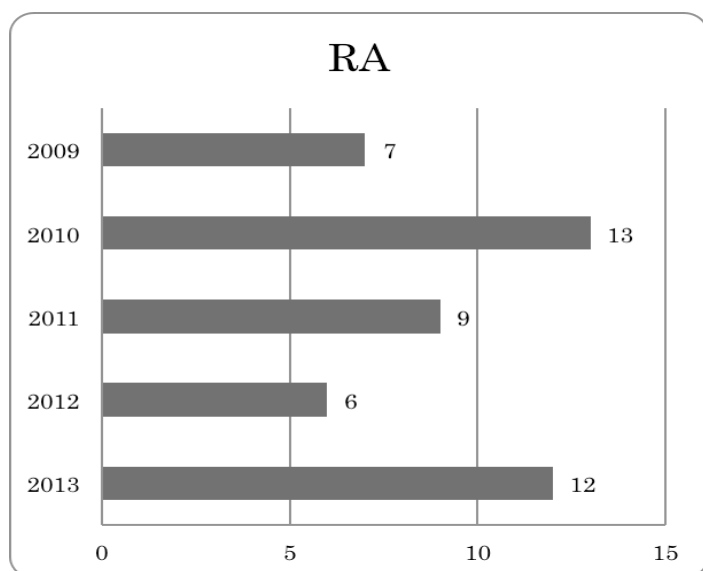
## 11 日本学術振興会特別研究員数

	DC1	DC2	合計
2008	5	8	13
2009	5	12	17
2010	6	9	15
2011	4	4	8
2012	2	9	11
2013	2	2	4

## 12 リサーチアシスタント数

年度	RA
2009	7
2010	13

2011	9
2012	6
2013	12

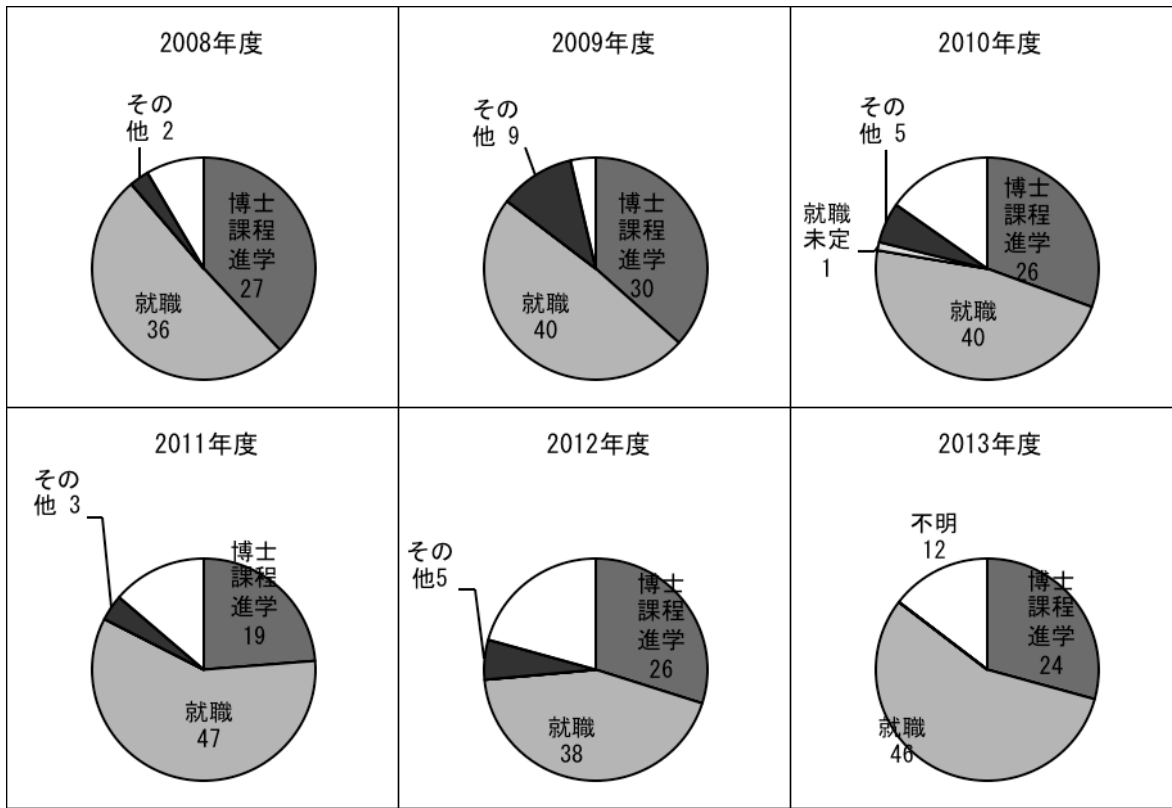


### 13 就職状況

#### 学際情報学府修士課程修了者 進路状況資料 (2007年度～2012年度)

区分		2008年度	2009年度	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度
博士課程進学	学際情報学府	27	24	19	19	19	22
	学内他研究科	1	1	2	4	2	2
	学外	2	1	1	3	1	
海外留学							
就職		36	40	40	47	38	46
大学院研究生	学際情報学府						
	学内他研究科						
帰国(外国人留学生)							
就職未定				1			
その他		2	9	5	3	5	
不明		6	3	13	1	18	12
合計		71	82	※85	83	87	82

※ 2010年度 「博士課程進学」と同時に「就職」した者1名を、それぞれの項目に計上(重複計上)している。



<就職先一覧>

2008年度	2009年度	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度
(株)日本アイ・ビー・エム 3	(株)電通 4	(株)電通 3	エヌ・ティ・ティ・コミュニケーションズ株式会社 3	(株)SONY 2	(株)NTT データ 2
(株)マイクロソフト 2	(株)NTT データ 3	(株)楽天 3	株式会社SONY 3	(株)電通 2	(株)SONY 2
(株)IBM ビジネスコンサルティングサービス 1	(株)ソニー 2	(株)ゴールドマン・サックス証券 2	株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ 2	(株)博報堂 2	(株)日立製作所 2
(株)NEC エンジニアリング 1	東京大学 2	(株)凸版印刷 2	アクセントチャリア株式会社 2	ゆうちょ銀行 2	株式会社ディー・エヌ・エー 2
(株)NTT ソフトウェア 1	(株)任天堂 2	CisCo Systems G.K. 1	株式会社電通 2	LIDEA & CO.,LTD 1	東京都庁 1

(株)NTT 東 日本	1	(株)Buffer Renaiss	1	Deloitte Touche Tohmatsu CPA Ltd. Dalian Branch	1	株 式 会 社 日 本 ア イ ・ ビ ー エ ム	2	NPO 法 人 Collable 代表理事	1	特別区	1
(株)アクセ ンチュア・テ クノロジー・ ソリューションズ	1	(株)NTT ソ フトウェア	1	(株)朝日新 聞社	1	グリー株式 会社	2	NTT 研 究 所	1	中 国 語 学 校	1
(株)ソフトバ ンク	1	(株)Sight Entertainm ent Japan	1	(株)セガ	1	株式会社テ レビ朝日	1	NTT コミュ ニケーショ ンズ	1	早 稲 田 大 学	1
(株)テレビ 朝日	1	(株)シリコ ンスタジオ	1	(株)ソニ ー・コンピ ュータエン タテイメン ト	1	有限会社リ ブレスク	1	(株)NSN	1	京 都 芸 術 大学	1
(株)日本技 芸	1	(株)りそな 銀行	1	(株)テムジ ン	1	株 式 会 社 生 活 の 友 社	1	(株)グリー	1	秋 田 公 立 美術大学	1
(株)ベネッ セコーポレ ーション	1	(株)楽天	1	(株)メディ ア・ゲート ジャパン	1	JFE スチー ル 株 式 会 社	1	(株)スクェ ア・エニツ クス	1	株 式 会 社 バッファロ ー	1
(株)ミキハ ウス	1	(株)ACCES S	1	(株)ソネッ トエンタテ インメント	1	株 式 会 社 博報堂	1	(株)テレコ ムスタッフ	1	イオン株式 会社	1
(株)モリサ ワ	1	(株)NTT ド コモ	1	(株)東京セ ンチュリー リース	1	株 式 会 社 ニトリ	1	(株)テレビ 朝日	1	株 式 会 社 内田洋行	1
(株)リサ・パ ートナーズ	1	(株)アクセ ンチュア	1	東京大学	1	朝 日 新 聞 社	1	(株)ビービ ット	1	グリー株式 会社	1
(株)ソラン	1	(株)サイバ ーエージェント	1	新潟県警 察(行政)	1	面白法人カ ヤック	1	(株)ビデオ リサーチコ ムハウス	1	日 本 オ ラ ク ル 株 式 会 社	1
(株)大和証 券 SMBC	1	(株)シオン	1	(株)日刊工 業新聞社	1	三 三 株 式 会社	1	(株)マクロ ミル	1	近 畿 日 本 鉄 道 株 式 会社	1
台湾銀行	1	(株)シグマ クス	1	(株)日興コ ーディアル 証券	1	Havok 株式 会社	1	(株)ミクシ ィ	1	マ ネ ッ ク ス グ ル ー プ 株 式 会 社	1

立川市役所	1	(株)スクウェア・エニックス	1	(株)日産自動車	1	任天堂株式会社	1	(株)ラーンウェル	1	株式会社コナミデジタルエンタテインメント	1
(株)テックファーム	1	(株)チャイナ・コンシェルジュ	1	(株)日本IBMソリューションサービス	1	株式会社ボストンコンサルティンググループ	1	キャノン株式会社	1	本田技研工業株式会社	1
東京藝術大学教育研究助手	1	(株)日本政策金融公庫	1	(株)日本無線	1	スカパーJSAT株式会社	1	グーグルジャパン	1	共同通信社	1
徳島文理大学	1	(株)三菱総研DCS	1	(株)日本ロレアル	1	コーエーテックモホールディングス株式会社	1	財団法人地方自治情報センター	1	日本電信電話株式会社	1
(株)日本航空インターナショナル	1	(株)三菱電機	1	(株)パナソニック	1	東芝ソリューション株式会社	1	東映アニメーション株式会社	1	株式会社日立コンサルティング	1
日本放送協会	1	(株)新日本製鉄	1	(株)パナソニックシステムソリューションズジャパン	1	株式会社三井住友銀行	1	日本オラクル株式会社	1	株式会社東芝	1
(株)根本特殊化学	1	(株)直島福武美術館財団	1	(株)パナソニックシステムネットワークス	1	日本放送協会	1	野村総合研究所	1	(株)富士通	1
(株)ブーズ・アンド・カンパニー	1	(株)日本アイ・ビーエム	1	(株)日立製作所	1	特許庁	1	富士ゼロックス株式会社	1	(株)日産自動車	1
(株)フォスター電機	1	(株)日本テレビ	1	(株)富士通	1	毎日新聞社	1	八千代エンジニアリング株式会社復職	1	株式会社猿人	1
(株)丸善	1	日本放送協会	1	(株)丸善	1	PR会社	1	ヤフー株式会社	1	(株)NTTドコモ	1
(株)朝日新聞社	1	農林中央金庫	1	(株)三井住友銀行	1	JSR株式会社	1	楽天株式会社	1	キャノン株式会社	1
(株)かんぼ生命保険	1	(株)博報堂アイスタジオ	1	(株)メルリリンチ日本証券	1	google	1	ラティス・テクノロジー株式会社	1	株式会社電通国際情報サービス	1
(株)新潮社	1	(株)富士通	1	(株)郵便局	1	シリコンスタジオ	1			株式会社講談社	1

(株)電通レ イザーフィ ッシュ	1	(株)豊田中 央研究所	1	(株)郵便事 業	1	株 式 会 社 キーエンス	1	株 式 会 社 学研ホール ディングス	1
(株)日本経 済新聞社	1	(株)野村総 合研究所	1	早稲田大 学	1	株 式 会 社 野 村 総 合 研究所	1	株 式 会 社 バンダイナ ムコスタジ オ	1
(株)野村総 合研究所	1	福山大学	1	警察官(台 湾)	1	マッキンゼ ー・アンド・ カンパニー	1	株式会社リ クルートホ ールディン グス	1
		(株)エリプ スガイド	1	企業名不 明(海外企 業)	1	トヨタ自 動 車 株 式 会 社	1	トヨタ自 動 車 株 式 会 社	1
						ニールセン カンパニー (上海)	1	株 式 会 社 電通	1
						株式会社テ ィーネット	1	株式会社チ ームラボ	1
						有 限 会 社 パークス	1	富 士 通 株 式 会 社	1
						プルデンシ ヤル生命株 式会社	1	株 式 会 社 サイバーエ ージェント	1
								株 式 会 社 MEDICA	1
								三 菱 総 合 研究所	1
								昭 和 電 工 株式会社	1



## 14 研究員（客員）等

情報学環

事項／年度	21	22	23	24	25
受託研究員	0	0	0	1	0
中国政府派遣研究員	0	1	1	0	0
客員研究員	22	35	28	20	27
東京大学特別研究員	7	11	7	9	6
内地研究員	0	0	0	0	0
国際研究員等	4	4	3	10	10
交流研究員	3	9	11	7	16
私学研修員	0	0	0	0	0

## 15 学会賞など受賞者リスト

- ・ Jun Kato, Daisuke Sakamoto, Takeo Igarashi 「Picode: Inline Photos Representing Posture Data in Source Code」 Best Paper Honorable Mention Award, CHI 2013
- ・ 村舘 靖之「貨幣と不均衡理論の関係を情報文化学を視座に解明した研究」第19回情報文化学会片方善次賞, 情報文化学会
- ・ 渋谷 友紀, 森田 ゆい, 福田 玄明, 植田 一博, 佐々木 正人「文楽人形遣いにおける呼吸と動作の非同期的関係: 日本古典芸能における『息づかい』の特殊性」2012年論文賞, 日本認知科学会
- ・ 福田 玄明, 植田 一博「ヒューマンロボットインタラクションにおける social touch」HAI-2012 Outstanding Research Award (優秀賞), HAI Symposium 運営委員会
- ・ 三浦 俊祐「3次元構造データを活用した都市部におけるGPSの測位精度改善に関する研究」修士論文, 専攻長賞
- ・ 金 暲和「世相を変えたメディア」2013年度優秀著作, 韓国出版文化産業振興院
- ・ 河口 洋一郎 平成25年度紫綬褒章
- ・ 河口 洋一郎 第46回MBC(南日本放送)賞
- ・ 須藤 修 一般社団法人「日本ICカードシステム利用促進協議会」永年貢献表彰
- ・ 石川 徹(共同受賞) 日本不動産学会2012年度学会賞・著作賞(学術部門), 日本不動産学会
- ・ 石川 徹(共同受賞) 都市住宅学会2013年学会賞・著作賞受賞, 都市住宅学会
- ・ 石川 徹(共同受賞) 日本地域学会2013年度学会賞・著作賞受賞, 日本地域学会
- ・ 林 香里『<オンナ・コドモ>のジャーナリズム ケアの倫理とともに』岩波書店, 第4回内川芳美記念マス・コミュニケーション学会賞受賞, 日本マス・コミュニケーション学会
- ・ Maureen M. Munn, Hiroki Oura, Mark Gallivan, Katie Van Horne, and Andrew W. Shouse 「Engaging High School Students in Research on Smoking Behavior」 Science Prize for

## 16 論文数

年度	件数	文理融合	学環・学府内協力
1999年度以前	323	1	0
2000年度	645	48	14
2001年度	654	49	18
2002年度	916	98	53
2003年度	949	107	54
2004年度	904	122	83
2005年度	846	232	91
2006年度	982	149	24
2007年度	947	45	17
2008年度	1100	47	6
2009年度	1002	125	22
2010年度	1070	86	24
2011年度	1208	88	12
2012年度	1067	96	24
2013年度	814	51	3

注：業績DB入力データに基づく各年度の論文数(著書，分担著書，雑誌論文，国際会議論文，その他の論文，講演発表)

## 17 特許出願・公開数

年度	出願件数	公開
2001年度	8	2
2002年度	5	5
2003年度	5	4
2004年度	1	2
2005年度	1	3
2006年度	2	1
2007年度	3	1
2008年度	4	2
2009年度	10	5
2010年度	17	6
2011年度	6	8
2012年度	5	16
2013年度	6	6
合計	73	61

## 18 国際団体役員・委員数

	学術的な団体の役員・委員*1	その他の団体役員・委員等*2
2009年度	16	1
2010年度	18	1
2011年度	13	1
2012年度	13	0
2013年度	8	0

\*1 「学会・会議等役職」のうち「国際性有」かつ「学会役員委員」であるもの

\*2 「団体役員・委員」のうち国際的なもの

## 19 政府関係委員会委員数

	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度
内閣官房	4	2	4	7
内閣府	5	4	2	2
総務省	23	25	26	27
経済産業省	3	5	2	2
文部科学省	7	8	2	13
厚生労働省	2	3	0	1
国土交通省	8	8	7	14
農林水産省	0	0	0	0
環境省	1	1	1	0
宮内庁	0	0	0	0
文化庁	0	0	0	0
特許庁	0	0	0	0
人事院	1	1	0	1
日本学術会議	0	0	0	1
その他	4	5	0	8
政府全体	58	62	44	76

## 20 地方公共団体関係委員会委員数

	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度
都道府県	3	4	6	10
市区町村	5	4	6	2
地方公共団体関係全体	8	8	12	12

## 21 ジャーナル編集・会議運営

	学会誌等編集査読*1	学術大会等運営*2
件数	16	10
うち国際的なもの	11	9

注：国内外の学会活動(学術誌編集委員，会議運営委員など) 注：2013年度のみ

\*1 「学会・会議等役職」のうち「ジャーナル編集査読」であるもの

\*2 「学会・会議等役職」のうち「大会組織運営」であるもの

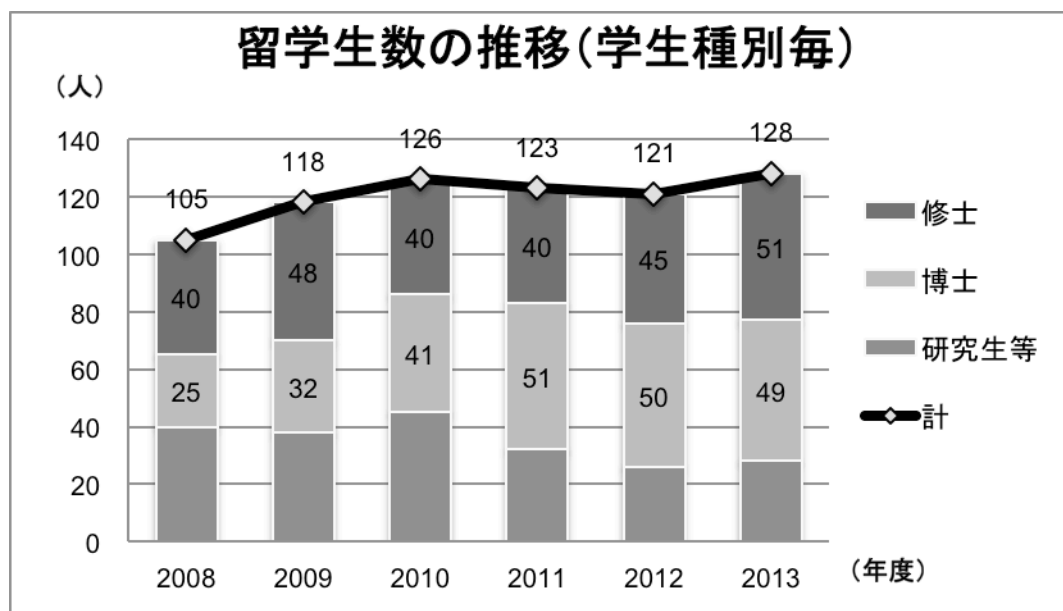
## 22 定期刊行物一覧

- ・『情報学研究 調査研究編』No.30 (2014年3月)
- ・『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』 No.85 (2013年10月), No.86 (2014年3月)
- ・ニューズレター『学環学府』No.39 (2013年6月)、No.40 (2013年10月)、No.41 (2014年2月)

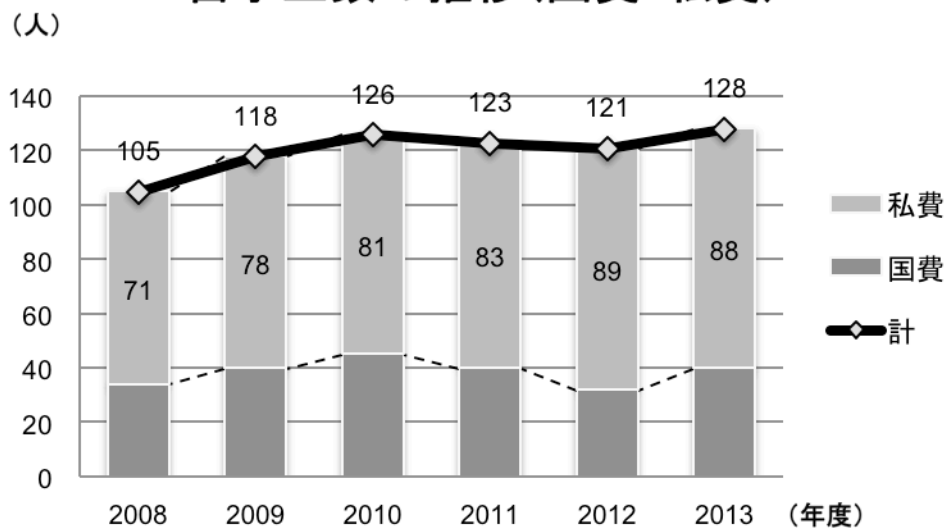
## 23 留学生数の推移

各年度5月1日現在

年度	修士		博士		外国人 研究生等		教育部 研究生	合計		総計
	国費	私費	国費	私費	国費	私費	私費	国費	私費	
2008	13	27	7	18	14	24	2	34	71	105
2009	15	33	13	19	12	24	2	40	78	118
2010	15	25	17	24	13	31	1	45	81	126
2011	10	30	22	29	8	23	1	40	83	123
2012	12	33	16	34	4	22	0	32	89	121
2013	15	36	14	35	11	17	0	40	88	128



## 留学生数の推移(国費・私費)



## 24 留学生国籍別一覧 (2013年5月1日現在)

国又は地域	国費	私費	計
<b>アジア</b>			
ネパール		1	1
タイ	1	3	4
マレーシア	1		1
シンガポール	1		1
インドネシア		3	3
フィリピン	1	2	3
韓国	11	13	24
モンゴル		1	1
中国	5	43	48
台湾		11	11
小計	20	77	97
<b>中近東</b>			
イラン	1		1
トルコ	2	1	3
イスラエル	3		3
小計	6	1	7
<b>アフリカ</b>			
アルジェリア	1	1	2
コンゴ民主共和国		1	1
小計	1	2	3
<b>北米</b>			
アメリカ合衆国	1	5	6

小計	1	5	6
<b>中南米</b>			
ブラジル	1		1
小計	1	0	1
<b>ヨーロッパ</b>			
イギリス	1		1
フランス	1		1
スペイン		1	1
ギリシャ	1		1
オーストリア	1		1
ポーランド	2		2
チェコ		1	1
ハンガリー	1		1
ブルガリア	2		2
ロシア	1	1	2
エストニア	1		1
小計	11	3	14
合計	40	88	128

## Ⅲ. 個人業績編

平成 26 (2014) 年 3 月 31 日時点で情報学環に在籍していた教員各人の研究テーマおよび 2013 年度の研究業績を、各自が入力したデータベースの内容に基づき、収録しています。教員の配列は、当時の肩書きに基づいた以下のカテゴリーの順、また同一カテゴリー内では氏名の 50 音順となっています。

1. 教授
2. 准教授
3. 講師
4. 助教
5. 客員准教授
6. 特任准教授
7. 特任講師
8. 特任助教
9. 特任研究員



---

## 池内 克史・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

## 文化遺産のデジタル化

世界各地の貴重な文化遺産をレーザ測定システムによって数ミリ精度で計測し、デジタルデータの形で保存するプロジェクトを進めています。これまでに鎌倉高德院の国宝阿弥陀仏像(鎌倉大仏)、奈良東大寺の国宝盧舎那仏坐像(奈良大仏)、タイ・スコタイのアチャナ仏、カンボジア・アンコールトムのパイヨン寺院などをデジタル化してきました。これらのデータは、VR(バーチャルリアリティ)のコンテンツ作成、文化遺産の破損、欠損時には修復のために、また製作当時の状態への仮想的復元といった応用など、幅広い分野での利用が期待されています。

## 人間行動観察学習ロボット

幼児の学習の大部分は、親の行動を見て真似ることから始まります。我々の研究室では、人間の行動を主に視覚によって観察し、これを理解して同じ行動を再現するロボットプログラムの自動生成を研究テーマとしており、主に「全身運動の獲得」と「手作業の獲得」の2つの課題について研究を進めています。

## 4次元仮想化都市

都市などの広域にわたる実空間の三次元モデル化を効率的に行うため、実験車両に搭載したカメラやレンジセンサおよび電子地図を利用して、要素技術となる画像・距離画像の処理手法を研究しています。また、実空間の動きを仮想空間に重畳する研究や、車両や車種を自動的に認識・判別する研究を行っています。

### 研究業績(2013年度)

#### 雑誌論文

B. Zheng, R. Ishikawa, J. Takamatsu, K. Ikeuchi, T. Endo, K. Sato, T. Ueno, T. Sugie, M. Toi, S. Kanao, and K. Togashi: "Breast MR Image Fusion by Deformable Implicit Polynomial (DIP)", IPSJ Trans. on Computer Vision and Applications (CVA), 2013年. 【査読有】

B. Zheng, Y.-Q. Sun, J. Takamatsu, and K. Ikeuchi: "A Feature Descriptor by Difference of Polynomials", IPSJ Trans. on Computer Vision and Applications (CVA), 2013年. 【査読有】

M. Lu, B. Zheng, J. Takamatsu, and K. Ikeuchi: "Intraclass Identifiable Region Detection", IPSJ Trans. on Computer Vision and Applications (CVA), 2013年. 【査読有】

B. Zheng, R. Ishikawa, J. Takamatsu, T. Oishi and K. Ikeuchi: "A Coarse-to-fine IP-driven Registration for Pose Estimation from Single Ultrasound Image", Computer Vision and Image Understanding (CVIU), 2013年. 【査読有】

猪瀬健二, 清水翔太, 川上玲, 向川康博, 池内克史: 「スカイモデルに基づく屋外照度差ステレオの高精度化」, IPSJ Transactions on Computer Vision and Applications, 2013年. 【査読有】

森本哲郎,猪瀬健二,小林由枝,影沢政隆,朽津信明,池内克史:「層状表面分解法による九州装飾古墳の壁画画像解析」, 日本文化財科学会, 2013 年. 【査読有】

内藤理,佐藤啓宏,工藤俊亮(電気通信大学),池内克史:「共著関係から見た国際的な研究者ネットワークにおいて日本出身研究者の採るべき連携戦略」, 日本ロボット学会誌, 2013 年. 【査読有】

Takahiro Okamoto, Takaaki Shiratori, Shunsuke Kudoh, Shin' ichiro Nakaoka, and Katsushi Ikeuchi: "Toward a Dancing Robot With Listening Capability: Keypose-Based Integration of Lower-, Middle-, and Upper-Body Motions for Varying Music Tempos", IEEE Transactions on Robotics (in Printing), 2014 年. 【査読有】

## 国際会議等

B. Zheng, Y. Zhao, Joey C. Yu, K. Ikeuchi, and S.-C. Zhu: "Beyond Point Clouds: Scene Understanding by Reasoning Geometry and Physics", IEEE Conf. on Computer Vision and Pattern Recognition (CVPR), 2013. 【査読有】

M. Lu, Y. Zhang, B. Zheng, T. Masuda, S. Ono, T. Oishi, K. Sengoku-Haga, and K. Ikeuchi: "Portrait Sculptures of Augustus: Categorization via Local Shape Comparison", 2013 International Congress on Digital Heritage, 2013. 【査読有】

B. Zheng, Y. Zhao, Joey C. Yu, K. Ikeuchi, and S.-C. Zhu: "Beyond PointClouds: Scene Understanding by Reasoning Geometry and Physics", SUNw: Scene Understanding Workshop jointed with CVPR 2013, 2013. 【査読有】

Y.J. Zhang, M. Lu, B. Zheng, T. Masuda, S. Ono, T. Oishi, K. Sengoku-Haga, and K. Ikeuchi: "Classical Sculpture Analysis via Shape Comparison", International Conference on Culture and Computing, 2013. 【査読有】

B. Zheng, S.-C. Zhu, and K. Ikeuchi: "Scene understanding by reasoning object stability", The 7th International on Robust Vision Technology, 2013.

Yujin Zhang, Min Lu, Bo Zheng, Takeshi Masuda, Shintaro Ono, Takeshi Oishi, Kyoko Sengoku-Haga and Katsushi Ikeuchi: "Classical Sculpture Analysis via Shape Comparison", Culture and Computing 2013, 2013. 【査読有】

B. Zheng, S.-C. Zhu and K. Ikeuchi: "Scene Understanding: From Physics to Risk Detection", The 8th International on Robust Vision Technology, 2014.

## その他論文

アシュワニ クマール,阪野貴彦,小野晋太郎,大石岳史,池内克史:「不十分な GPS 環境下における三次元地図モデルのグローバル位置合わせ」, 生産研究, 2013 年. 【査読有】

池内克史,桑原雅夫,大口敬,上條俊介,大石岳史,小野晋太郎,大島大輔,小出公平,堀口亮太,飯島護久,花房比佐友,吉村方男,亀田佳靖,森一夫,田中淳,松沼毅,後藤秀典,長谷川昌仁,佐々木卓,岸浩二,萬沙織,市川博一,光安皓,田村勇二,佐々木政秀 <巻, 号等>:「市民の交通行動は変わるか:CO2 情報などの配信により一般市民の交通行動変容を促進する社会フィードバックシステムに関する研究」, 生産研究, 2013 年. 【査読有】

光安皓,市川博一,田村勇二,長谷川雅人,須田昌仁,堀口良太,飯島護久,花房比佐友,吉村方男,佐々木卓,萬沙織,小野晋太郎,大口敬,池内克史:「環境に配慮した効率的な交通行動への変容を促す生活交通情報フィードバックシステムの構築に関する基礎調査」, 生産研究, 2013 年. 【査読有】

小出公平,牧野浩志,石名坂賢一,佐々木政秀,池内克史:「我が国最先端の ITS を活用した持続可能な街づくり-柏スマートシティの実現-」, 生産研究, 2013 年. 【査読有】

福元和真,川崎洋,小野晋太郎,子安大士,前川仁,池内克史:「映像検索手法を利用した車載ビデオ映像の位置同定手法」, 生産研究, 2013 年. 【査読有】

韓亜由美,小野晋太郎,佐々木正人,池内克史:「自転車の適格走行をガイドする路面マーカ-による実車実験-自転車向けシークエンスデザインオプティカルドットシステム-」, 生産研究, 2013 年. 【査読有】

郭仁成,小野晋太郎,洪性俊,中野公彦,山邊茂之,平沢隆之,牧野浩志,須田義大,池内克史,大口敬:「道路基盤地図情報を利用したドライビングシミュレータによる動労交通安全対策の事前評価」, 生産研究, 2013 年. 【査読有】

## 講演・口頭発表

Min Lu, Bo Zheng, Jun Takamatsu, Ko Nishino, Katsushi Ikeuchi: "A Linear Algebraic Approach to Intraclass Shape Analysis and Its Application in Archaeological Research", IPSJ SIG-CVIM, 2013.

影沢 政隆,王志鵬,薛 亮,小野 晋太郎,阪野 貴彦,大石 岳史,佐藤 啓宏,池内 克史:「遠赤外線カメラによるトンネル内位置同定アルゴリズムの開発」, 自動車技術会 2013 年春季大会, 2013.

Xiangqi Huang, Bo Zheng (The University of Tokyo), Takeshi Masuda, Atsuhiko Banno (AIST), Katsushi Ikeuchi (The University of Tokyo): "3D Shape Reconstruction by Dynamic Sensing with A Range Sensor", CVIM 研究会, 2013.

Katsushi Ikeuchi: "e-Heritage,Cyber Archaeology,and Cloud museum", Internationaler Museumstag am Leibniz-Rechenzentrum, 2013. 【招待講演】

池内 克史:「ITS 情報空間とスマートツーリズム」, ITS セミナーin 岩手, 2013. 【招待講演】

池内 克史:「人間行動観察学習ロボット」, はこだて未来大学特別授業, 2013. 【招待講演】

池内 克史:「デジタルミュージアムと観光」, 情報処理学会四国支部報告会, 2013. 【招待講演】

猪瀬健二,清水翔太,川上玲,向川康博,池内克史:「スカイモデルに基づく屋外照度差ステレオの高精度化」, MIRU2013, 2013.

吹上大樹,大石岳史,池内克史: "Reduction of Contradictory Partial Occlusion in Mixed Reality by using Characteristics of Transparency Perception", MIRU2013, 2013. 【招待講演】

Shaodi You, Rei Kawakami, Robby Tan, Katsushi Ikeuchi: "Adherent Raindrop Detection and Removal in Video", MIRU2013, 2013. 【招待講演】

Bo Zheng, Yibiao Zhao, Joey C. Yu, Katsushi Ikeuchi, Song-Chun Zhu: "Beyond PointClouds: Scene Understanding by Reasoning Geometry and Physics", MIRU2013, 2013. 【招待講演】

鈴木健太郎, Hongxun Zhao(東大), 川上玲(阪大), 池内克史(東大):「屋外撮影画像中の天空領域を用いた拡散反射物体の表面反射率の推定」, MIRU2013, 2013.

B. Zheng, R. Ishikawa, J. Takamatsu, K. Ikeuchi, T. Endo, K. Sato, T. Ueno, T. Sugie, M. Toi, S. Kanao, and K. Togashi: "Breast MR Image Fusion by Deformable Implicit Polynomial (DIP)", MIRU2013, 2013.

Min Lu, Bo Zheng, Jun Takamatsu and Katsushi Ikeuchi: "Intraclass Identifiable Region Detection", MIRU2013, 2013.

竹田智哉, 大石岳史(東大), 阪野貴彦(産総研), 池内克史(東大): 「MR 技術のための既存映像からの人物作成」, MIRU2013, 2013.

Kazuma Fukumoto, Hiroshi Kawasaki (Kagoshima Univ.), Shintaro Ono (Univ. of Tokyo), Hiroshi Koyasu (Saitama Univ.), Katsushi Ikeuchi (Univ. of Tokyo): "Identification of On-Vehicle Video by using Space-Time Feature Extracted from Online Video and Digital Map", MIRU2013, 2013.

池内 克史: 「大槌町役場旧庁舎 複合現実モニュメント化」, 都市大学付属高校 模擬授業, 2013.

Katsushi Ikeuchi: 「e-Heritage, Cyber-Archaeology, Cloud Museum」, 愛媛大学: 電気電子工学特別講義, 2013. 【招待講演】

Katsushi Ikeuchi: "e-Heritage, Cyber-Archaeology, Cloud Museum", 1st Thai-Japan International Workshop on Computer Vision, 2013.

Katsushi Ikeuchi: "e-Heritage, Cyber Archaeology, and Cloud Museum", 2013 日韓ワークショップ, 2013.

小林由枝, 森本哲郎, 佐藤いまり, 向川康博, 池内克史: 「薄膜干渉の画像ベース BRDF 推定」, CVIM 研究会, 2013.

池内 克史: "e-Heritage, Cyber Archaeology, and Cloud Museum", Culture and Computing 2013, 2013. 【招待講演】

Katsushi Ikeuchi: "tangible and intangible heritage", International Workshop on Information and Communication Technologies for Cultural Heritage Preservation, 2013. 【招待講演】

池内 克史: 「4次元仮想化都市空間とITS」, UTMS セミナー2013, 2013. 【招待講演】

池内 克史: 「滑らか拘束とバイヨン寺院」, FIT2013, 2013. 【招待講演】

吹上大樹, 大石岳史, 池内克史: 「奥行きてがかりとしての透明視知覚とその応用」, Young Perceptionists¥, 2013.

Huaichin Hu, Shunsuke Kudoh, Yoshihiro Sato and Katsushi Ikeuchi: "The Study of Taiwanese Indigenous Dance with Labanotation and an Application", Culture and Computing 2013, 2013.

川口達也, 佐藤啓宏, 工藤俊亮, 池内克史: 「人まねロボットのための人体動作の階層的記述」, 第31回日本ロボット学会学術講演会, 2013.

Yujin Zhang, Min Lu, Bo Zheng, Takeshi Masuda, Shintaro Ono, Takeshi Oishi, Kyoko Sengoku-Haga and Katsushi Ikeuchi: "Classical Sculpture Analysis via Shape Comparison", Culture and Computing 2013, 2013.

池内 克史: 「ITS 情報空間とスマートツーリズム」, ITS セミナー in 広島, 2013. 【招待講演】

池内 克史: 「COCN が DARPA から学ぶもの」, COCN フォーラム, 2013.

Katsushi Ikeuchi: "Learning-from-observation: from assembly robot through dancing humanoid", MSRA 講演, 2013. 【招待講演】

Katsushi Ikeuchi: "Four-dimensional virtual cities and their Applications to ITS", MSRA 講演, 2013. 【招待講演】

池内 克史: "e-Heritage, Cyber Archaeology, and Cloud museum", MSRA 講演会, 2013.

Morales Carlos, Zhao Hongxun, Kawakami Rei, Oishi Takeshi, Ikeuchi Katsushi: "Turbidity-based Aerial Perspective Rendering for Mixed Reality", CVIM 研究会, 2014.

Katsushi Ikeuchi: "Learning-from-observation: from assembly robot through dancing humanoid", 2014RoSEC Winter School, 2014. 【招待講演】

池内 克史: 「四次元仮想化都市空間とその ITS への応用」, 社会人のための ITS 専門講座, 2014.

Xiangqi Huang, Bo Zheng, Takeshi Masuda, Atsuhiko Banno, Katsushi Ikeuchi: "3D Shape Reconstruction by Dynamic Sensing with A Range Sensor", IPSJ SIG-CVIM, 2014.

小林由枝, 森本哲郎, 佐藤いまり, 向川康博, 池内克史: 「ハイパースペクトル画像を用いた単層膜の BRDF 推定」, CVIM 研究会, 2014.

進矢 陽介, 佐藤 啓宏, 鄭 波, 大石 岳史, 池内 克史: 「Implicit Polynomial を用いた発掘情報に基づく石敷きモデル生成」, CVIM 研究会, 2014.

川口 達也, 川上 玲, 池内 克史: 「ブドウ摘みロボットのための RGBD 画像認識手法の基礎検討」, CVIM 研究会, 2014.

石黒 慎, 川上 玲, 佐藤 啓宏, 池内 克史: 「遮蔽物の回避動作に注目したブドウ収穫作業の解析」, CVIM 研究会, 2014.

## 新聞・報道

池内 克史: 「古墳時代を仮想ガイド 奈良県の石舞台古墳 モベリオで実証実験」, 長野日報, 2013.

池内 克史: 「眼鏡型情報端末 観光ガイドに活用 奈良県明日香村などと実証」, 日刊工業新聞, 2013.

池内 克史: 「石舞台古墳築造 3D で実感」, 読売新聞, 2013.

池内 克史: 「石舞台の築造体感 あすから 2 日間「3D めがね」で」, 産経新聞, 2013.

池内 克史: 「石舞台古墳の築造 仮想体験 新型グラスで実証実験」, 新聞, 2013.

池内 克史: 「震災遺構 3D データ化 解体予定の大槌町旧庁舎 東大、津波被害研究に活用」, 読売新聞(朝刊)37 面, 2013.

池内 克史: 「東大・池内教授ら「デジタルモニュメント」処理 大槌町旧役場 3D 画像に「見たい人だけ見られる」保存方法」, 河北新報(朝刊)28 面, 2013.

池内 克史: 「被災庁舎 3D で保存 大槌で東大研究室が画像データ化 くまなく撮影、活用へ」, 朝日新聞(岩手版), 2013.

池内 克史: 「大槌旧役場 3D 保存 東京大津波の記憶を継承へ「防災教育に役立てて」」, 岩手日報, 2013.

池内 克史:「職員犠牲の大槌町 被災庁舎 立体画像に 風化防ぎ防災教育 東大など」, 日本経済新聞(夕刊)14面, 2013.

池内 克史:「震災の記憶」立体映像に 大破の庁舎や船 データ化し保存 東北大など 特殊眼鏡で仮想体験」, 北海道新聞(夕刊)8面, 2013.

池内 克史:「震災の記憶、立体画像で 東北大・東大 解体前にデータ保存」, 電気新聞(朝刊)9面, 2013.

池内 克史:「震災遺構を3次元再現 東大 岩手・大槌町役場 防災教育に活用」, 日刊工業新聞(朝刊)13面, 2013.

池内 克史:「先端技術生かし次代に 震災遺構を3D保存」, 読売新聞(朝刊)28面, 2013.

池内 克史:「3-D imaging technology helps bring the past to life」, The Japan Times, 2013.

池内 克史:「震災の記憶を残す 震災遺構のデジタル保存」, サイエンスチャンネル, 2013.

池内 克史:「大槌町旧役場」, テレビ岩手, 2013.

池内 克史:「米を手本に研究「目標が先」国防総省の手法」, 日本経済新聞, 2013.

---

## 池上 高志・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

#### 人工生命

人工システム(センサーネットワークや、コンピュータプログラム、ロボット)を用いて、自律的な振る舞いや複雑なダイナミクスを研究する。

### 研究業績(2013年度)

---

## 石崎 雅人・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

#### 専門家社会におけるコミュニケーション・デザイン

専門家社会において、より良い意思決定を行うためのコミュニケーションのあり方について研究をすすめている。専門家と非専門家を対立させる見方で常に問題となってきたのが paternalism(温情的庇護主義)であった。この問題に

対して、理論的には、専門家、非専門家それぞれが参加して意思決定をすることが望ましいが、現実には paternalism の問題を解消するものとして提案とされるのは、consumerism(消費者／非専門家至上主義)であった。consumerism が paternalism の問題点を解消できる面があることは否定できないが、それは、専門家に対して専門の能力を超えた要求に結びつくことがあり、専門家の能力を十全に活用できない問題があった。本研究では、医療、介護、司法など分野における専門家と非専門家の共同意思決定のあり方について、コミュニケーション・デザインの問題としてアプローチする。

## 医療コミュニケーションにおける共同意思決定

ケア学において、ケアする側とケアされる側がどのような関係にあるべきかという問題は、より良いケアを考える上で中心的課題である。本研究は、理想的な関係とされる共同意思決定に焦点をあて、ケアコミュニケーションの中の医師と患者のコミュニケーションを対象として、その実態の解明を行う。具体的には、共同意思決定の概念、共同意思決定への医師・患者の意識、共同意思決定コミュニケーション過程の具体的なあり方、情報環境等の要因の共同意思決定過程への影響を明らかにすることにより、ケア学、医療コミュニケーション研究へ実証的な観点からの貢献を行うことを目的とする。

## 介護コミュニケーションにおける多主体協働

介護とは、高齢者が「生きる」ことを支援する活動であり、家族とともに、多くの専門家がかかわる。介護職員(訪問介護員(ホームヘルパー)を含む)、介護支援専門員(ケアマネジャー)、生活相談員・支援相談員、理学療法士(PT)、作業療法士(OT)、言語聴覚士(ST)、看護職員、医師、弁護士や司法書士まで関係し得る。このような専門分化は、介護の問題を整理して検討することを可能にする利点がある反面、関係者が多すぎることは単に1対1のコミュニケーションだけを考えればよいのではなく、問題に関係する当事者への配慮や調整を必要とするという意味でコミュニケーションを難しくする。たとえば、高齢者本人と家族の希望が異なる場合、介護支援専門員は、両者の希望を調整しなければいけない。また、高齢者本人と良い関係をつくっている介護職員は、本人の希望が医療の観点からは望ましいものでない場合、本人と医療者の間で悩むことになる。本研究では、介護コミュニケーション研修に紛争解決の手法として発展してきたメディエーションの考え方にもとに、介護に関する多主体間のより良いコミュニケーションのあり方について検討する。

## 研究業績(2013年度)

### 著書

石崎雅人・野呂幾久子:「これからの医療コミュニケーションに向けて」, 篠原出版新社, 2012年.

### 分担著書

石崎雅人・三浦純一:「医療コミュニケーションにおける共同意思決定再考」, 石崎雅人・野呂幾久子 編, 篠原出版新社, 2013年.

### 雑誌論文

安藤信明・石崎雅人・田中圭子他:「Conflict & Change Peer Mediation Manual(翻訳)」, メディエーション研究, Vol.3, pp.1-64, 2013年.【一般向け】

辛昭静・石崎雅人・三浦純一:「医療面接における謝罪表現に対する患者と医師の認識」, 社会言語科学, Vol.16, No.1, pp.65-79, 2013年.【査読有】

辛昭静・石崎雅人:「医師の丁寧表現の不適用に対する患者と医師による認識の比較」, 待遇コミュニケーション学会, Vol.11, pp.69-85, 2013 年。【査読有】

石崎雅人:「専門家のことばが納得を生むとき(依頼)」, 日本語学, Vol.33, No.3, 2013 年。

片桐恭弘・石崎雅人・高梨克也・伝康晴・榎本美香:「会話を通じた相互信頼感形成ゲームの可能性」, 人工知能学会 言語・音声理解と対話処理研究会, 2013 年。

石崎雅人:「視線一気になる視線(依頼)」, 日本語学, Vol.32, No.5, pp.93-104, 2013 年。

## 国際会議等

Katagiri, Y., Takanashi, K., Ishizaki, M., Enomoto, M., Den, Y., and Okada, S.: "Analysis and Modeling of Concern Alignment in Consensus-Building", Proceedings of the 17th Workshop on the Semantics and Pragmatics of Dialogue, pp.202-203, 2013. 【査読有】

Katagiri, Y., Takanashi, K., Ishizaki, M., Den, Y., and Enomoto, M.: "Concern alignment and trust in consensus-building dialogues", Proceedings of the 9th International Conference on Cognitive Science, 2013. 【査読有】

## 講演・口頭発表

野呂幾久子・石崎雅人・小林伶:「抗がん剤治療に関する意思決定とその実際」, 第33回日本医療情報学連合大会, 2013.

Ishizaki, M.: "Examining Downward Spiral of Lethargy – Another Aspect of Conflict in Communication –", SSPNet Workshop on Conflict and Communication, 2013.

Noro, I., Ishizaki, M., and Kobayashi, R.: "Exploring Shared Decision Making for Cancer Patients", International Conference on Communication in Healthcare, 2013.

## 新聞・報道

医療・介護従事者:「始動する「介護メディエーション」」, 日経ヘルスケア, 2013.

---

## 植田 一博・教授

研究テーマ(主たるもの)

### 需要側イノベーションの分析(Demand-side Innovation)

既存のイノベーション研究では供給側に焦点があたりがちであるが, 実際には, 新しい製品・技術やその新しい使い方が消費者により発見され, 普及伝播する過程で, 消費者自身によってその意味や価値が再解釈・再定義されて, 結果的には予想を超えた大ヒットに至る場合がある。我々はこのような現象の事例検証と, この現象を可能にする個人の認知メカニズムや社会的な構造を, 実験やインタビュー等により明らかにしつつある。



## 日本の伝統芸能における身体性と表現の認知科学的分析

文楽とは、言語情報を用いずに3人の人形遣いがイキを合わせて、人工物でしかない文楽人形をあたかも人が動作しているかのように操作する日本独自の伝統芸能である。この文楽人形の動作解析とそれを演じる人形遣いの動作・生理計測を通じて、人形の動きのいかなる要素によって我々は人形に人間らしさを感じているのか、人形を複数の人間が言語情報なしで巧みに操るための協調メカニズムとは何かを科学的に分析している。文楽以外にも、能・狂言の動きの意味を運動力学的、認知科学的に探っている。

## 生物らしさの知覚に関する研究

我々は生物と非生物を見分けられると考えられている。このような生物らしさの知覚は、生物と非生物とを見分ける能力であるにも関わらず、実物の生物を用いては検討されてきていない。そこで当研究室では、生物らしさの知覚に関する脳内過程を明らかにするために、実際の生物とロボットを用いて脳波による事象関連電位を計測した。その結果、生物らしさの知覚には、対象を主観的に生物と見なす過程と対象の生物的特徴を知覚する過程の二つの独立な過程が含まれていることが示唆されている。

## 研究業績(2013年度)

### 雑誌論文

和田 有理, 植田 一博: 「読解に対する読み手の信念が科学論文の要約の質に与える影響」, 心理学研究, Vol.84, No.1, pp.69-73, 2013年。【査読有】

福田 玄明, 植田 一博: 「実験室における本物感」, 認知科学, Vol.20, No.2, pp.173-174, 2013年。

和嶋 雄一郎, 鷺田 祐一, 富永 直基, 植田 一博: 「ユーザ視点の導入による事業アイデアの質の向上」, 人工知能学会論文誌, Vol.28, No.5, pp.409-419, 2013年。【査読有】

植田 一博: 「アニマシー知覚: 人工物から感じられる生物らしさ」, 日本ロボット学会誌, Vol.31, No.9, pp.5-7, 2013年。

渋谷 友紀, 森田 ゆい, 福田 玄明, 植田 一博, 佐々木 正人: 「「息づかい」に現れる日本古典芸能の特殊性」, 認知科学, Vol.20, No.4, pp.394-395, 2013年。

植田 一博: 「若手研究者育成の場としての、実世界志向研究のすゝめ(巻頭言)」, 認知科学, Vol.20, No.4, pp.383-384, 2013年。

### 国際会議等

Ikuya Nomura, Kazuyuki Samejima, Kazuhiro Ueda, Yuichi Washida, Hiroyuki Okada, Takashi Omori: "Choosing unknown goods: fMRI study of product choice", Cognitive Neuroscience Society 2013 Annual Meeting, pp.178, 2013. 【査読有】

Sachiko Kiyokawa, Yoshimasa Ohmoto, Kazuhiro Ueda: "Effects of verbalization on lie detection", 35th Annual Conference of the Cognitive Science Society, 2013.

Haruaki Fukuda, Kazuhiro Ueda: "Can we perceive animacy from artificial agents? : A brain ERP study using a motion Turing Test", 1st International Conference on Human-Agent Interaction, 2013. 【査読有】

## 講演・口頭発表

植田 一博, 櫻 哲郎, 成田 友紀, 沢井 和也, 森田 寿郎: 「文楽人形遣いの協調のメカニズム」, 第 27 回人工知能学会全国大会, 2013.

和嶋 雄一郎, 鷺田 祐一, 富永 直基, 植田 一博: 「ユーザ視点の導入による事業アイデアの質の向上」, 第 27 回人工知能学会全国大会, 2013.

清河 幸子, 加藤 由梨子, 小松 孝徳, 松香 敏彦, 植田 一博: 「オノマトペによる動きの表現」, 第 27 回人工知能学会全国大会, 2013.

松香 敏彦, 本田 秀仁, 鷺田 祐一, 植田 一博: 「社会構造とイノベーションの創発に関する探索的マルチエージェントモデリング」, 第 27 回人工知能学会全国大会, 2013.

三輪 宏太郎, 植田 一博: 「Investor sentiment, growth forecast boldness, and cross-sectional stock returns」, 日本ファイナンス学会第 21 回大会, 2013.

蘭 悠久, 青野 直也, 福田 玄明, 植田 一博, 北岡 明佳: 「盲点における運動線分の補完の際の事象関連電位の測定」, 日本視覚学会 2013 年夏季大会, 2013.

植田 一博, 渡邊 克巳, 山田 歩, 熊田 孝恒, 鮫島 和行, 萩原 一平, 辻本 悟史: 「心理学がビジネスを変える!？」, 日本心理学会第 77 回大会, 2013.

清河 幸子, 植田 一博, 大本 義正: 「言語化が嘘発見に及ぼす影響」, 日本心理学会第 77 回大会, 2013.

山田 歩, 植田 一博: 「利用範囲が広いほどプリペイド・カードの魅力は高まるか」, 日本社会心理学会第 54 回大会, 2013.

浦谷 達也, 植田 一博: 「教示行動が進化的に有利になる条件の解明」, 日本人間行動進化学会第 6 回大会, 2013.

三輪 宏太郎, 植田 一博: 「Investor sentiment, growth forecast boldness, and cross-sectional stock returns」, 行動経済学会第 7 回大会, 2013.

三宅 明日香, 福田 玄明, 植田 一博: 「分散注意条件下での物理的因果性判断における全体的知覚」, 日本視覚学会 2014 年冬季大会, 2014.

## 受賞

渋谷 友紀, 森田 ゆい, 福田 玄明, 植田 一博, 佐々木 正人: 2012 年論文賞「文楽人形遣いにおける呼吸と動作の非同期的関係: 日本古典芸能における「息づかい」の特殊性」, 日本認知科学会, 2013 年.

福田 玄明, 植田 一博: HAI-2012 Outstanding Research Award (優秀賞)「ヒューマンロボットインタラクションにおける social touch」, HAI Symposium 運営委員会, 2013 年.

---

## 上田 博人・教授

## 研究テーマ(主たるもの)

### 言語情報分析

言語科学と情報科学の融合する。文系研究者にとってわかりやすい独自の方法と技術を開発し、分析プログラムをHPで紹介、配布する。

### 中世・近代スペイン語古文献の年代差・地方差研究

13世紀から18世紀までのスペイン語の変化を、デジタル化した資料で分析し、言語史を構築する。言語統計分析法を開発する。

### 広域スペイン語の語彙バリエーション

スペイン、アフリカ、ラテンアメリカ、フィリピンのスペイン語における語彙バリエーション資料を収集し、多変量解析法を応用して、全体的な把握を目指す。同時に独自の手法も開発する。

## 研究業績(2013年度)

### 分担著書

Luis Guerra, Hiroto Ueda: "Producción y evaluación de los materiales audiovisuales para ELE.", Luis Guerra, Hiroto Ueda 編, Madrid. Arco / Libros., 2013年.

### 雑誌論文

Hiroto Ueda: "La motivación a través del «valor» en la enseñanza-aprendizaje del español como lengua extranjera", Competencias y estrategias docentes en el contexto de Asia-Pacífico. Selección de artículos del II CELEAP (Manila, 2011), Instituto Cervantes en Manila., 2013年. 【査読有】

上田博人: 「広域スペイン語語彙バリエーション研究における新しい数量化の試みー日本語計量言語地理学の方法に学ぶー」, 東京外国語大学国際日本研究センター『日本語・日本学研究』vol.3, 59-90., 2013年. 【査読有】

Hiroto Ueda: "“Dialectometría en el proyecto de «Varilex». Historia y geografía de las voces variantes”, Estudios de Lingüística Galega, 5, Santiago de Compostela, pp.pp.127-143., 2013年. 【査読有】

Hiroto Ueda: "Una nota sobre el método de taxonomía cuantitativa de grandes datos: Coeficientes de asociación aplicados a los variantes del Diccionario de americanismos", Dialectología. Special issue, IV (2013), pp. pp. 221-235., 2013年. 【査読有】

Hiroto Ueda: "La función de la tilde en la grafía abreviada n del español medieval –Evidencias en los documentos notariales castellanos del siglo XIII al XV–", Cuaderno de Instituto Historia de la Lengua, Año 4, Num.8., pp. pp. 343-360., 2013年. 【査読有】

## 講演・口頭発表

Hiroto Ueda: "Analizador lingüístico común con parámetros de gramática, diccionario y cadenas de aplicación", V Congreso Internacional de Lingüística de Corpus, Universidad de Alicante, 2013.

Hiroto Ueda: "Prioridad valorativa en la enseñanza-aprendizaje de E / LE", en Encuentro con los Hispanistas Japoneses,, Instituto Cervantes de Tokio, 2013.

Hiroto Ueda: "Grafotáctica del español medieval y el origen de la letra eñe: Evidencias en los documentos notariales castellanos del siglo XIII al XVII", Congreso Internacional Tradición e Innovación: nuevas perspectivas para la edición, la investigación y el estudio de documentos antiguos, 2013.

Hiroto Ueda: 「Entre la filología española, la ciencia informática y la enseñanza de español como lengua extranjera – Grafías consonánticas dobles en el español medieval y el origen de la letra eñe,」, VIII Congreso Internacional de la Asociación Asiática de Hispanistas, Shanghái, Sesión plenaria,, 2013. 【招待講演】

Hiroto Ueda: 「Grafías dobles palatales en los documentos notariales del siglo XIII al XV: Sus implicaciones fonológicas y el origen de la letra española eñe – 」, Congreso Internacional sobre el español y la cultura hispánica en Japón, 2013.

Hiroto Ueda: 「スペイン語文字音韻史資料の作成と分析: デジタル文献学の方法」, 招待ワークショップ、南山大学, 2013. 【招待講演】

---

## 大島 まり・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

### 医用画像に基づく血管循環系のマルチスケール・マルチフィジックス解析

本研究は血管病変の発症、進行に関わる流体力学的な要因を数値解析により解明することを目的としている。実際の生体内を再現したモデルや境界条件を採用するために、ここでは CT や MRI などの医用画像から抽出した血管形状モデルを用い、末梢血管網など循環系全体の影響を考慮した境界条件を導出・適用した大規模血流解析システムを構築している。さらに血流および血管壁内での物質輸送・透過モデルを取り入れ、悪玉コレステロールなどの病変に関わる物質の血管壁内への蓄積についても予測を行っている。

### 血流と血管壁の相互作用を考慮した連成解析と in vitro モデルを用いた可視化計測

本研究では脳動脈瘤の発生・成長のメカニズムの解明を目的とし、血流によって変形する血管壁の力学応答メカニズムを考慮した数値解析を行うとともに、in vitro モデル実験による結果と比較することで評価を行っている。医用画像から再構築した脳動脈瘤モデルを対象として、数値解析では血管壁を超弾性体とした流体構造連成解析を行い、実験では速度 3 成分のデータを得られるステレオ PIV という計測手法を用い、内部の流動構造と血管壁の挙動、およびそれらの相互作用を評価している。

## 共焦点 Micro PIV による微小管路内混相流の可視化計測

微小血管を流れる赤血球やマイクロ分析チップのような微小流体デバイスの内部の混相流を可視化計測するツールとして、共焦点マイクロ PIV システムを開発している。本手法は、流れの中にトレーサ粒子と呼ばれる微小な蛍光ビーズを混濁させ、共焦点スキャナ・特殊な蛍光顕微鏡・高感度高速度カメラを用いて流れを撮影し、得られた画像を PIV 解析処理を用いて速度分布を求める。共焦点マイクロ PIV を用いることで、マイクロサイズの微小領域における 3 次元の  
流れの様子を定量的に知ることができる。

### 研究業績(2013 年度)

#### 分担著書

大島まり:「物理学ガイダンス」, 日本評論社編集部 編, 日本評論社, 2014 年.

#### 雑誌論文

大島まり:「計算屋と実験屋の融合」, 計算工学, Vol.18, No.2, pp.2919, 2013 年. 【査読有】

大島まり、小林匡治:「予測診断を目指した医用画像に基づく血流シミュレーション」, 日本画像学会誌, Vol.52, No.3, pp.212-218, 2013 年. 【査読有】

Yamada, S., Hashimoto, K., Ogata, H., Watanabe, Y., Oshima, M., Miyake, H: "Calcification at orifices of aortic arch branches is a reliable and significant marker of stenosis at carotid bifurcation and intracranial arteries", European Journal of Radiology, Vol.83, No.2, pp.384-390, 2014 年. 【査読有】

#### 国際会議等

Takahiro Odera, Haruyuki Kinoshita, Marie Oshima, Teruo Fujii: "Development of a Fundamental Soft Actuator Based on Microhydraulics", 7th World Congress on Biomimetics, Artificial Muscles and Nano-Bio (BAMN2013) , pp.107-108, 2013. 【査読有】

Ryota Abe, Kiyomi Niki, Shiori Yauch, Marie Oshima, Kei Fujisawa, Shu Takagi, Fuyou Liang, Motoaki Sugawara: "Simulation of ascending aortic flow using a computational model of the entire cardiovascular system: evaluation by wave intensity", Proceedings of u-Healthcare 2013, 2013. 【査読有】

M. Oishi, H. Kinoshita, T. Fujii1 and M. Oshima: "MEASUREMENT OF THREE DIMENSIONAL FLOW STRUCTURE DURING MICRODROPLET FORMATION USING PHASE-LOCKED MULTICOLOR CONFOCAL MICRO-PIV", :The 17th International Conference on Miniaturized Systems for Chemistry and Life Sciences, 2013. 【査読有】

Keisuke Yokoyama, Hideki Furukawa, Nobuko Okutani, Kunihiko Sasao, Toshiaki Oguchi, Masamichi Oishi, Marie Oshima: "Prismless Surface Plasmon Resonance (P-SPR) Sensor Using Periodic Nanostructure", The 12th International Symposium on Fluid Control, Measurement and Visualization FLUCOME2013, 2013. 【査読有】

F.Y. Liang, M. Oshima, and S. Takagi: "A computational study on cerebral hemodynamic changes associated with carotid arterial surgery", APCOM2013, 2013. 【査読有】

Marie Oshima, Masaharu Kobayashi : "Numerical investigation of cerebrovascular circulation after carotid artery stenting", The 3rd International Conference on Computational & Mathematical Biomedical Engineering, 2013. 【査読有】

Masaharu Kobayashi, Marie Oshima: "Development of an Image-based Modeling System to Investigate Evolution of the Morphological Changes of an Abdominal Aortic Aneurysm", APCOM & ISCM 2013 (5th Asia Pacific congress on computational mechanics & 4th international symposium on computational mechanics), 2013. 【査読有】

Shio K. Kawagoe, Marie Oshima, Kazuyuki Ishii: "Development of Teaching Materials based on New Educational Trials for Science and Technology", AAAS(The American Association for the Advancement of Science) 2014 Annual Meeting, pp.189-190, 2014. 【査読有】

Marie Oshima, Yuta Ishigami: "FSI simulation of a cerebral aneurysm with peripheral network of cerebrovascular circular system", Advances in Computational Fluid[Structure Interaction and Flow Simulation (AFSI 2014) , 2014. 【査読有】

## その他論文

藤澤慶、Fuyou Liang、小林匡治、山田茂樹、高木周、大島まり: 「全身循環を考慮した脳血流シミュレーションと可視化」, 生産研究, 2013 年. 【査読有】

## 講演・口頭発表

大島まり: 「脳動脈瘤の hemodynamics - CFD の現状と臨床応用への課題 -」, 第 33 回日本脳神経外科コングレス総会, 2013. 【招待講演】

Marie Oshima: "Integration of medical image data and simulation for predictive medicine", MEDICA EXPO 2013, 2013. 【招待講演】

大島まり: 「研究の進め方」, 日比谷高校 SSH 講演, 2013. 【招待講演】【一般向け】

大島まり: 「夢ナビ講義ライブ」, 夢ナビ, 2013. 【一般向け】

大島まり: 「特別講演」, 混相流シンポジウム 2013, 2013. 【招待講演】

大島まり: 「リケジョのすすめ」, 理系女子・講演@東京, 2013. 【招待講演】【一般向け】

大島まり: 「世界にはばたく人材育成のための SSH プログラム」, 滋賀県・膳所高校 SSH 講演, 2013. 【一般向け】

大島まり: 「リケジョのすすめ」, 理系女子・講演@大阪, 2013. 【招待講演】【一般向け】

川越至桜、大島まり、石井和之: 「産業界と教育界を結びつける新しい科学技術教育と教材開発」, 日本理科教育学会第 63 回全国大会, 2013.

大島まり: 「血液の流れをシミュレーションする」, 日本機械学会 2013 年度年次大会 市民フォーラム, 2013. 【招待講演】【一般向け】

矢島康治, 岩井俊憲, 本田 康二, 山下陽介, 村田彰吾, 藤田紘一, 渋谷直樹, 島崎一夫, 大村進, 大島 まり, 藤内祝:「咽頭におけるCFDを用いた流体力学解析時の流入境界条件による影響」, 第12回日本睡眠歯科学会総会, 2013.

矢島康治, 岩井俊憲, 本田 康二, 山下陽介, 村田彰吾, 藤田紘一, 渋谷直樹, 島崎一夫, 大村進, 大島 まり, 藤内 祝:「下顎後方移動術前後における咽頭部圧力損失の変化—CFDによる流体力学解析—」, 第12回日本睡眠歯科学会総会, 2013.

大石正道, 木下晴之, 藤井輝夫, 大島まり:「マイクロT字ジャンクションにおける液滴生成現象のマイクロPIV計測」, 日本機械学会 2013年度年次大会, 2013.

大島まり:「拡がる機械工学のすそ野」, 駿台「難関大フェア」, 2013.【一般向け】

大島まり:「工学者として母として」, 東京都立日比谷高等学校 PTA 文化部主催:PTA 会員対象講演会 大島まり講演会, 2013.【一般向け】

大島まり:「予測医療への展開を目指した患者個別の血管モデリングと血流シミュレーション」, バイオスーパーコンピューティング研究会, 2013.

大島まり:「これからの日本を支える人材とは～エンジニアリングの果たす役割を考える～」, 愛知・旭丘高校PTA講演会, 2013.【一般向け】

大島まり:「平成25年度岩手県立釜石高等学校「理数科課題研究中間発表会」」, 平成25年度岩手県立釜石高等学校「理数科課題研究中間発表会」, 2013.【一般向け】

大島まり:「ロールモデル・セミナー」, 大阪府立大学セミナー, 2013.【一般向け】

大島まり:「拡がるエンジニアリングのすそ野」, 熊本大学講演・「理系女子プロフェッショナルへの挑戦」, 2013.【一般向け】

矢島康治:「下顎骨後方移動術による上気道への影響と乱流シミュレーション」, TSFD 定例, 2013.

竹内浩明, 山本創太, 保科克行, 赤井隆文, 大島まり:「腹部大動脈瘤診断のための形態評価指標の基礎的検討」, 日本機械学会 第26回計算力学講演会(CMD2013), 2013.

松浦 佑樹, 大石 正道, 向井 信彦, 大島 まり, 張英夏:「混相流断層画像を基にした液滴の3次元形状の再構築」, 映像表現&コンピュータグラフィックス研究会, 2013.

大島まり:「パネルディスカッション:シミュレーションリテラシー」, 計算力学シンポジウム, 2013.

石上雄太, 山本創太, 大島まり:「血流の流体構造連成解析における材料特性が及ぼす影響」, 第27回数値流体力学シンポジウム, 2013.

大寺貴裕, 木下晴之, 大島まり, 藤井輝夫:「マイクロハイドロリクスに基づくソフトアクチュエータの開発」, 第14回公益社団法人 計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会 SI2013, 2013.

北島大朗, 大島まり, 岩井俊憲, 大原良仁, 矢島康治, 光藤健司, 藤内祝:「流体解析を用いた外頸動脈の抗癌剤分配シミュレーション」, 第26回バイオエンジニアリング講演会(東北大学片平キャンパス), 2014.

石上雄太、大島まり:「3次元流体構造連成解析と1次元0次元末梢欠陥モデルのカップリングを目指した血流シミュレーション」, 第26回バイオエンジニアリング講演会, 2014.

北島大朗、大島まり、岩井俊憲、大原良仁、矢島康治、光藤健司、藤内祝:「流体解析を用いた外頸動脈の抗癌剤分配シミュレーション」, 第26回バイオエンジニアリング講演会, 2014.

矢島康治、岩井俊憲、喜田壮馬、北島大朗、大原良仁、大村進、小野卓史、大島まり、藤内祝:「上気道狭窄が咽頭での吸気に及ぼす影響」, 第26回バイオエンジニアリング講演会, 2014.

石上雄太、大島まり:「血流と血管壁のマルチスケール流体構造連成解析」, 第29回生研TSFDシンポジウム, 2014.

長谷川智也、伊藤嵩格、山本創太、大島まり、保科克行、赤井隆文:「ステントグラフトの力学特性および腹部大動脈瘤内留置時挙動の生体力学的評価」, 日本機械学会 関東支部 第20期総会・講演会, 2014.

大寺貴裕、木下晴之、榊原隆、大島まり、藤井輝夫:「マイクロハイドロリックアクチュエータの開発と実証」, 2014年度精密工学会春季大会, 2014.

榊原隆、大寺貴裕、木下晴之、大島まり、藤井輝夫:「マイクロハイドロリックアクチュエータの構造解析シミュレーション」, 2014年度精密工学会春季大会, 2014.

興敬宏、鈴木貴之、寺島真人、山本創太、大島まり、大石正道:「壁面せん断応力負荷時間が血管内皮損傷に及ぼす影響の定量的評価」, 日本機械学会 関東支部 第20期総会・講演会, 2014.

## 新聞・報道

大島まり:「科学技術が日本の発展を支える」, 理系女性のきらめく未来, 2013.

大島まり:「育て、未来のリケジョ」, 読売新聞, 2013.

大島まり:「夢の扉+」, TBS テレビ, 2013.

大島まり:「モーニングバード!」, テレビ朝日, 2013.

大島まり:「理系女子を目指そう～大島まり教授からのメッセージ～」, Rimse ブックレット, 2013.

大島まり:「流体解析の技術を応用して脳の病気から人々を守りたい」, Dream Navi(四谷大塚), 2013.

大島まり:「流体工学の道を深めくも膜下出血から命を守る」, 致知, 2013.

大島まり:「血流で破裂を予測」, 朝日新聞, 2013.

大島まり:「「ガリレオ」監修、奄美通い」, 南海日日新聞, 2013.

大島まり:「特集1 選考委員会の模様」, 人事院月報, 2014.

大島まり:「理工系女性人材の育成への課題 一大島・東京大学大学院情報学環・生産技術研究所教授から聞く／企業行動委員会女性の活躍推進部会」, 週刊経団連タイムス, 2014.



大島まり:「視点「なぜ少ない日本のリケジョ サポート体制の整備が急務」」, ビジネス産経, 2014.

大島まり:「社会とのつながりで、子供を見るということ」, 初等教育, 2014.

大島まり:「インタープリターズ・バイブル 「研究に対する理解を得るには」」, 学内広報, 2014.

---

## 金森 修・教授

研究テーマ(主たるもの)

### フランスの現代哲学

フランスの 20 世紀哲学の研究。具体的にはベルクソン、バシュラール、カンギレム、フーコー、ドゥルーズなど。

### 生政治・生権力論

現代の生命科学とフランスの現代哲学との交叉地点で生じる問題群を扱う。主にフーコー、アガンベンらの研究を参考にしながら、現代の生政治・生権力のありようをみる

### 美的思考の思想史

科学思想史の知識基盤を背景に、美学・芸術学の伝統に接近し、科学文化論的な観点から人間の美的表象、美的表現についての考察をする

研究業績(2013 年度)

---

## 河口 洋一郎・教授

研究テーマ(主たるもの)

### CG によるメカニック造形研究

生き物のように反応するメカニックな立体造形ロボット技術ならびに新伝統芸能を演出しロボティックに凹凸する映像ディスプレイの造形研究

### 情感的なジェモーション(Gemotion)によるインタラクション研究

伝統芸能との融合によるパフォーマンスアーツとして、人にインタラクティブに反応する情感的な CG 映像空間の創出、および生き物のように映像に凸凹反応するジェモーション・ディスプレイの研究

---

## 自己増殖する複雑系のグロースモデル(Growth Model)による超高精細CG映像研究

スーパーハイビジョン(8K×4K)による超高精細のCG生物・物理シミュレーションによる映像生成研究

### 研究業績(2013年度)

#### 著書

Yoichiro Kawaguchi: "Diving to the DEEP COSMOS: Gemotional Bio-Machine【作品集】", Growth Co., Ltd., 2013年.

Yoichiro Kawaguchi: "GROWTH LAND with EGGY【絵本】", Growth Co., Ltd., 2013年.

#### 作品

河口洋一郎:「演奏ロボット作品展示「Fishy(宙魚)」, ZIMA イベント Z-MACHINES デビューライブ, 2013.

河口洋一郎:「立体造形ロボット作品展示「Fishy(宙魚)」, FREEDOMMUNE; ZIMA イベント Z-MACHINES ライブ, 2013.

Y. Kawaguchi: 「Art of the Space Creatures」, ACM SIGGRAPH 2013The 26th Anniversary CG Show, 2013.

河口洋一郎:「立体造形作品展示」, 新宿クリエイターズ・フェスタ 2013, 2013.

河口洋一郎:「作品展示」, かごしまアートフェスタ 2013, 2013.

河口洋一郎, 島津義秀(薩摩琵琶奏者), 白鳥五十鈴(バレエ):「Gemotion Dance」, 南日本放送 60周年記念イベント, 2013.

河口洋一郎:「プラネタリウム映像「EGGY LAND in SETO」ならびに立体造形作品「Eggy」展示」, 香川県瀬戸大橋リニューアルイベント, 2013.

河口洋一郎:「CG 着物発表」, 温故知新ファッションショー, 2013.

#### 国際会議等

Kei Fujisawa, Y. Kawaguchi: "Patient specific cerebral circulation model and three dimensional visualization method", ASIAGRAPH 2013 Forum in Kagoshima, Vol.8, No.2, pp.3-6, 2013. 【査読有】

Kinyo Kou, Y. Kawaguchi: "Aggregation Formation of Self-Replicating Artificial Life", ASIAGRAPH 2013 Forum in Kagoshima, Vol.8, No.2, pp.7-10, 2013. 【査読有】

Shun Iwasawa, Y. Kawaguchi: "Animating the GROWTH Model Using Human Motion Data", ASIAGRAPH 2013 Forum in Kagoshima, Vol.8, No.2, pp.11-14, 2013. 【査読有】

Masanori Shinkawa, Y. Kawaguchi: "Forming Sand into Arbitrary Shape without Precomputations", ASIAGRAPH 2013 Forum in Kagoshima, Vol.8, No.2, pp.15-18, 2013. 【査読有】

Yoichiro Kawaguchi: "From Space to Time ~Z-MACHINES' Artwork on a Musical Stage~", ASIAGRAPH 2013 Forum in Kagoshima, Vol.8, No.2, pp.47-50, 2013. 【査読有】

Shun Iwasawa, Y. Kawaguchi: "Color Designing for GROWTH Model with Lifelike Interaction", the 11th annual conference of Asia Digital Art and Design Association, pp.68-71, 2013. 【査読有】

Yoichiro Kawaguchi: "The Application of 8K Ultra-High Definition CG in the Planetarium", ASIAGRAPH 2013 Forum in Hawaii, Vol.7, No.1, pp.7-9, 2013. 【査読有】

Akihiko Fukushima, Y. Kawaguchi: "The Robot To Jump By Bending of The Body Like A Click Beetle", ASIAGRAPH 2013 Forum in Hawaii, Vol.7, No.1, pp.23-26, 2013. 【査読有】

Shun Iwasawa, Y. Kawaguchi: "Rendering Methods for the GROWTH Model with Structural Color", ASIAGRAPH 2013 Forum in Hawaii, Vol.7, No.1, pp.27-30, 2013. 【査読有】

Kou Kinyou, Y. Kawaguchi: "A Suggestion for Self-Replicating Artificial Life Based on Physical Simulation of 3D Environment", ASIAGRAPH 2013 Forum in Hawaii, Vol.7, No.1, pp.31-34, 2013. 【査読有】

Haipeng Mi, Y. Kawaguchi: "JECCO: A Robotic Sculpture --- From Design to Exhibition", ASIAGRAPH 2013 Forum in Hawaii, Vol.7, No.1, pp.35-38, 2013. 【査読有】

Yoichiro Kawaguchi: "Computer Graphics and Sculptures: The Possibility of Parallel Exhibition --- Beyond the Shinjuku Creators Festa", ASIAGRAPH 2013 Forum in Hawaii, Vol.7, No.1, pp.3-6, 2013. 【査読有】

Kei Fujisawa, Y. Kawaguchi: "Three dimensional visualization of cerebral circulation simulation", ASIAGRAPH 2013 Forum in Kagoshima 【ポスター発表】, 2013. 【査読有】

## 講演・口頭発表

Yoichiro Kawaguchi: "Computer Graphics and Sculptures: The Possibility of Parallel Exhibition --- Beyond the Shinjuku Creators Festa", ASIAGRAPH 2013 Forum in Hawaii, 2013.

Yoichiro Kawaguchi: "The Application of 8K Ultra-High Definition CG in the Planetarium", ASIAGRAPH 2013 Forum in Hawaii, 2013.

Akihiko Fukushima, Y. Kawaguchi: "The Robot To Jump By Bending of The Body Like A Click Beetle", ASIAGRAPH 2013 Forum in Hawaii, 2013.

Shun Iwasawa, Y. Kawaguchi: "Rendering Methods for the GROWTH Model with Structural Color", ASIAGRAPH 2013 Forum in Hawaii, 2013.

Kou Kinyou, Y. Kawaguchi: "A Suggestion for Self-Replicating Artificial Life Based on Physical Simulation of 3D Environment", ASIAGRAPH 2013 Forum in Hawaii, 2013.

Haipeng Mi, Y. Kawaguchi: "JECCO: A Robotic Sculpture --- From Design to Exhibition", ASIAGRAPH 2013 Forum in Hawaii, 2013.

Kei Fujisawa, Y. Kawaguchi: "Patient specific cerebral circulation model and three dimensional visualization method", ASIAGRAPH 2013 Forum in Kagoshima, 2013.

Kinyo Kou, Y. Kawaguchi: "Aggregation Formation of Self-Replicating Artificial Life", ASIAGRAPH 2013 Forum in Kagoshima, 2013.

Shun Iwasawa, Y. Kawaguchi: "Animating the GROWTH Model Using Human Motion Data", ASIAGRAPH 2013 Forum in Kagoshima, 2013.

Masanori Shinkawa, Y. Kawaguchi: "Forming Sand into Arbitrary Shape without Precomputations", ASIAGRAPH 2013 Forum in Kagoshima, 2013.

Y. Kawaguchi: "From Space to Time ~Z-MACHINES' Artwork on a Musical Stage~", ASIAGRAPH 2013 Forum in Kagoshima, 2013.

Shun Iwasawa, Y. Kawaguchi: "Color Designing for GROWTH Model with Lifelike Interaction", the 11th annual conference of Asia Digital Art and Design Association, 2013.

Yoichiro Kawaguchi: "生命造形の宇宙へ", ASIAGRAPH in Hawaii, 2013. 【招待講演】

河口洋一郎:「国際と日本と次世代のスピード感 ~生命宇宙の未来~」, 東京藝術大学講義, 2013. 【招待講演】

河口洋一郎:「国際と日本と次世代のスピード感 ~生命宇宙の未来~」, リードジャパン「日本のクリエイター・プロダクションが世界で勝つために!」, 2013. 【招待講演】【一般向け】

河口洋一郎:「原始生命の宇宙へ」, 屋久島会議, 2013. 【招待講演】【一般向け】

河口洋一郎:「紫綬褒章受章記念式典」, 河口洋一郎紫綬褒章受章記念パーティー, 2013. 【招待講演】【一般向け】

河口洋一郎:「未来の新伝統芸能の可能性」, 鹿児島県職員勉強会, 2013. 【招待講演】【一般向け】

河口洋一郎:「新宿大宇宙都市構造」, 新宿クリエイターズ・フェスタ 2013 オープニング, 2013. 【招待講演】【一般向け】

河口洋一郎, 愛華みれ氏(女優):「河口洋一郎の深海宇宙」, 鹿児島県特産品協会, 2013. 【招待講演】【一般向け】

河口洋一郎:「河口洋一郎の深海宇宙」, 日経新聞鹿児島支局, 2013. 【招待講演】【一般向け】

河口洋一郎, 池坊美佳(華道家):「河口洋一郎の深海宇宙~進化する花鳥風月~」, かごしまアートフェスタ 2013, 2013. 【招待講演】【一般向け】

河口洋一郎:「「きぼう」日本実験棟における文化・人文社会科学パイロットミッション最終報告会」, JAXA パイロットミッション最終報告会, 2013. 【招待講演】

河口洋一郎, 猪子寿之(チームラボ代表):「メディアートの可能性」, かごしまアートフェスタ 2013, 2013. 【招待講演】【一般向け】

河口洋一郎, 富田勲(作曲家), 樋口真嗣(映画監督):「未来のアートの行方」, かごしまアートフェスタ 2013, 2013. 【招待講演】【一般向け】

河口洋一郎:「Eggy 等作品紹介」, 香川県瀬戸大橋記念館リニューアルイベント, 2013. 【招待講演】【一般向け】

河口洋一郎, 樋口真嗣氏(映画監督), 清川あさみ氏(アーティスト):「匠賞創賞受賞記念トークセッション「技術とアートの融合が生み出す新しい表現」」, DIGITAL CONTENTS EXPO 2013, 2013. 【招待講演】【一般向け】

河口洋一郎:「宇宙造形の未来」, 九州大学統合十周年および紫綬褒章受章記念講演会, 2013. 【招待講演】【一般向け】

河口洋一郎, 名和晃平氏(彫刻家):「特別対談」, 名和晃平氏個展オープニング講演【対談】, 2013. 【招待講演】【一般向け】

Yoichiro Kawaguchi: “生命宇宙的芸術”, 精華大学講義, 2013. 【招待講演】【一般向け】

河口洋一郎:「中高生のためのハローワーク —生命造形の宇宙へ—」, ENJIN01 文化戦略会議 オープンカレッジ in 甲府, 2013. 【招待講演】【一般向け】

河口洋一郎, 増田順一氏(ゲームクリエイター), 手塚眞氏(クリエイター):「寝ても覚めてもゲーム!」, ENJIN01 文化戦略会議 オープンカレッジ in 甲府, 2013. 【招待講演】【一般向け】

河口洋一郎, 茂木健一郎(科学者), 南條史生(美術評論家):「想像力&創造力 —アートを語ろう—」, ENJIN01 文化戦略会議 オープンカレッジ in 甲府, 2013. 【招待講演】【一般向け】

河口洋一郎:「未来の生命造形」, 香川県立坂出高等学校特別講義, 2013. 【招待講演】【一般向け】

河口洋一郎:「生命の未来造形」, 高知県 高知工業高校講義, 2014. 【招待講演】【一般向け】

河口洋一郎:「重力に強い造形」, ENJIN01 文化戦略会議 住まいのクリニックセミナーin 沖縄, 2014. 【招待講演】【一般向け】

河口洋一郎:「進化する映像の魅力」, 情報通信交流館 e-とぴあ・かがわ開館 10 周年記念特別講演, 2014. 【招待講演】【一般向け】

## 新聞・報道

河口洋一郎:「春の褒章:723 人、13 団体が受章」, 毎日新聞, 2013.

河口洋一郎:「春の褒章、723 人 13 団体 松任谷由実さんら受章」, 朝日新聞 DIGITAL, 2013.

河口洋一郎:「春の褒章 723 人・13 団体 松任谷由実さんら」, 日本経済新聞 Web 刊, 2013.

河口洋一郎:「春の褒章」, 読売新聞 YOMIURI ONLINE, 2013.

河口洋一郎:「宇宙で試みる芸術表現 宇宙ステーション「きぼう」での実験」, サイエンスチャンネル, 2013.

河口洋一郎:「5 億年先の生物ロボ」, 東京新聞, 2013.

河口洋一郎:「映像宇宙の不思議な世界」, 鹿児島日経懇話会リポート, 2013.

河口洋一郎:「伝統と最先端織り成す」, 日経新聞九州版, 2013.

河口洋一郎:「大島紬による CG 着物」, 鹿児島県庁記者クラブ, 2013.

河口洋一郎:「生命や進化を感じる未来型ロボットを葛飾北斎のように作り続けたい!」, Y&M AGE Vol.91.

河口洋一郎, 生島ヒロシ:「TV 対談「咲くシーズ」」, BS 日テレ, 2013.

河口洋一郎:「サバイバル精神で自分の未来を切り拓いてほしい」, 九大広報 Vol.91, 2014.

河口洋一郎:「芸術選奨受賞結果発表」, 美術の窓,.

河口洋一郎:「高知の芸術 観光資源に」, 高知新聞, 2014.

## 受賞

河口洋一郎: 平成 25 年度紫綬褒章, 2013 年.

河口洋一郎: 第 46 回 MBC(南日本放送)賞, 2013 年.

---

## 木宮 正史・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

### 朝鮮半島をめぐる国際政治の展開

第二次世界大戦以後の、朝鮮半島をめぐる国際政治の歴史的展開を、日本、韓国、米国などの外交文書、一次史料を手掛かりに実証的に解明することを目的とする。特に、現在は、1970 年代、米中和解や日中国交正常化など東アジア冷戦体制が変容するのに対して、南北朝鮮がどのような対応を選択したのかを、南北朝鮮のパワー・バランスの変容に対応した南北朝鮮の政策選択の「対称関係の中の対照性」という観点から解明する。

### 現代韓国政治の展開

現代韓国は、1987 年まで、基本的には権威主義体制が持続してきたが、その後、民主化運動の高揚によって民主主義体制へ移行し、さらに、選挙による与野党政権交代を 2 度にわたり達成するなど、民主主義体制の堅固化を達成した。そうした現代韓国政治の展開を帰結させた政治力学を、冷戦体制への対応、経済開発戦略の選択、民主化運動とそれへの対応という観点から、抽出し、そうした政治力学が民主化後、どのように持続し、また、どのように変容しているのかを解明する。

### 日韓・日朝関係の展開

日本外交における韓国、朝鮮半島の位置づけがどのように変化したのか、また、韓国外交における日本の位置づけがどのように変化したのか、日本と朝鮮半島との関係をめぐる歴史的展開を、外交文書などの一次史料に基づいて解明する。さらに、そうした作業に基づいて、どのような日韓関係を日韓がともに選択しうるのか、また、するべきであるのか、日韓関係をめぐる政策構想、未来構想についても考察する。

## 研究業績(2013 年度)

### 著書

木宮正史(기미야다다시): “일본의 한반도 외교: 탈식민지화 냉전체제 경제협력(日本の韓半島外交: 脱植民地化、冷戦体制、経済協力)”, 제이 엔 씨(ジェイアンドシー), 2013 年.

### 分担著書

강상중, 권혁태, 기미야 다다시, 마이클 그린(姜尚中、クオンヒョクテ、木宮正史、マイケルグリーン): “동아시아와의 인터뷰: 공존의 길을 묻다(東アジアとのインタビュー: 共存の道を問う)”, 평화네트워크(平和ネットワーク) 編, 서해문집(西海文集), 2013 年.

통일연구원(統一研究院): “국제학술회의 한반도 신뢰프로세스 추진전략(國際學術會議 韓半島信賴プロセス推進戰略)”, 통일연구원(統一研究院) 編, 통일연구원(統一研究院), 2013 年.

岩波書店辞典編集部: 「岩波世界人名事典」, 岩波書店辞典編集部 編, 岩波書店, 2013 年.

### 雜誌論文

木宮正史: 「米中関係と朝鮮半島」, 國際問題(日本國際問題研究所), No.628, pp.15-23, 2014 年.

### 作品

木宮正史: 「朝鮮半島に関する項目中、「朝鮮戦争」「開城工業団地」「北朝鮮核実験(2013 年)」「中韓関係」「韓国国家情報院」「並進政策」「張成沢」など 7 項目」, デジタルイミダス 2014 <http://imidas.jp>, 2014.

木宮正史: 「긴급좌담 추락하는 한일관계 타개할 방안은 없는가?(緊急座談 墜落する韓日関係、打開する方案はないのか?)」, 일본공간(日本空間), 2014.

### 國際會議等

木宮正史: “일본의 북한인권에 대한 인식과 정책: 비판적 시각에서(日本の北朝鮮人權に対する認識と政策: 批判的な視角から)”, Seoul International Symposium on North Korean Human Rights, pp.117-124(韓国語原文), 317-324(英語翻譯), 2013.

木宮正史: “安倍政権の対外政策基調と対北朝鮮政策”, 동북아 전략환경의 변화와 한일 전략적 협력(東北アジア戰略環境と韓日戰略的協力), pp.75-98(韓国語翻譯). 101-115(日本語原文), 2013.

木宮正史: “安倍政権下の日韓(朝)関係と在日コリアン問題”, 東国大学文化学院日本学研究所第 49 回国際學術シンポジウム 새로운 한일관계의 출발과 재일코리안(新たな韓日関係の出発と在日コリアン), pp.1-30, 2013.

木宮正史: “朝鮮半島の統一と日本の利益、日韓協力”, 2013 日韓平和シンポジウム, pp.79-98, 2013.

木宮正史: “朝鮮半島の統一と日本の対朝鮮半島政策”, 第 7 回日韓政策フォーラム 北朝鮮・金正恩体制 2 年の評価と日韓政策協力, pp.28-42, 2013.

木宮正史: “岐路に立つ日韓関係の「診断」と「処方箋」”, 新しい百年のための日—韓セミナー, pp.8-13, 2013.

## その他論文

木宮正史: 「日韓関係の構造とその変容—市民社会の変動の観点から」, 日本政治学会 2013年度研究大会「市民社会は平和をもたらすか—両義性の観点から—」, 2013年.

木宮正史: 書評「劉仙姫『朴正熙の対日・対米外交 冷戦変容期韓国の政策 1968～1973年』(ミネルヴァ書房、2012年)」, 現代韓国朝鮮研究, 2013年.

## 講演・口頭発表

木宮正史: “일본의 북한인권에 대한 인식과 정책: 비판적 시각에서 (日本の北朝鮮人権に対する認識と政策: 批判的な視角から)”, Seoul International Symposium on North Korean Human Rights, 2013. 【招待講演】

木宮正史: “동아시아의 평화와 대학교의 역할 (東アジアの平和と大学の役割)”, Jeju Forum for Peace & Prosperity 2013 “New Waves in Asia”, 2013. 【招待講演】

木宮正史: 「討論」, 設立 60 周年記念アジア政経学会 2013 年度全国大会 「自由論題 8 日本をとりまく海」, 2013.

木宮正史: 「新政権下の日韓関係とその東アジア的含意」, 世田谷市民サマーフォーラム、統一テーマ「激動する世界情勢と日本～各国の指導者交代ラッシュの中、日本はどう生きるか～」, 2013. 【招待講演】【一般向け】

KIMIYA, Tadashi: “The Structure of South Korea–Japan Relations: Its Evolution and the Present Situation”, IARU グローバルサマープログラム Japan in Today’s World, 2013. 【招待講演】【一般向け】

木宮正史: 「安倍政権の対外政策基調と対北朝鮮政策」, 동북아 전략환경의 변화와 한일 전략적 협력 (東北アジア戦略環境と韓日戦略的協力), 2013. 【招待講演】

木宮正史: 「道下徳成「北朝鮮: 瀬戸際外交の歴史 1966年～2012年」』に関するブックトーク」, 『安倍フェローシップ・コロキアム』, 2013. 【招待講演】

木宮正史: 「日韓関係の構造とその変容—市民社会の変動の観点から」, 日本政治学会 2013年度研究大会部会「市民社会は平和をもたらすか—両義性の観点から—」, 2013.

KIMIYA, Tadashi: “Discussion”, International Conference on Strategies to Implement the Trust-building Process on the Korean Peninsula, 2013. 【招待講演】

木宮正史: 「討論」, 日本国際政治学会 2013年度研究大会、部会 4「日中韓 3 か国の国内政治と対外関係のリンクージ」, 2013.

木宮正史: 「訪朝帰国報告」, 日朝国交促進国民協会 訪朝帰国報告会, 2013. 【一般向け】

木宮正史: 「安倍政権下の日韓(朝)関係と在日コリアン問題」, 東国大学文化学院日本学研究所第 49 回国際学術シンポジウム 새로운 한일관계의 출발과 재일코리안 (新たな韓日関係の出発と在日コリアン), 2013. 【招待講演】



木宮正史:「朝鮮半島の統一と日本の利益、日韓協力」, 2013 日韓平和シンポジウム, 2013. 【招待講演】【一般向け】

木宮正史:「「共通論題:境界を越えるアジア研究(テッサ・モーリス・スズキ「日本と朝鮮戦争:越境的視点」)」に関する討論」, 設立 60 周年記念アジア政経学会 2013 年度西日本大会 「共通論題:境界を越えるアジア研究(テッサ・モーリス・スズキ「日本と朝鮮戦争:越境的視点」)」, 2013.

木宮正史:「朝鮮半島の統一と日本の対朝鮮半島政策」, 第 7 回日韓政策フォーラム 北朝鮮・金正恩体制 2 年の評価と日韓政策協力, 2013. 【招待講演】

木宮正史:“指定討論”, 「朴正熙時代の政治経済-1972 年 8・3 措置を中心に-」, 2013. 【招待講演】

木宮正史:「岐路に立つ日韓関係の「診断」と「処方箋」」, 新しい 100 年のための日-韓セミナー, 2013. 【招待講演】【一般向け】

木宮正史:「討論」, Sub-Forum of the SNU-Hokudai Forum: Democracy and Mutual Understanding in East Asia, 2013. 【招待講演】

木宮正史:「討論」, 第 13 回 日韓アジア未来フォーラム『ポスト成長時代における日韓の課題と東アジア協力』, 2014. 【招待講演】

木宮正史:「大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準地域研究分野」, 日本学術会議地域研究委員会基盤整備分科会小委員会主催、公開シンポジウム『学士課程教育における地域研究分野の参照基準』, 2014.

木宮正史:「金正恩体制と日朝関係」, 早稲田大学韓国学研究所主催朝鮮半島政策コロキウム北朝鮮専門家ワークショップ『金正恩体制 2 年の評価』, 2014. 【招待講演】

木宮正史:「主催者開会挨拶 総括討論」, 2014 韓日平和フォーラム, 2014. 【招待講演】

## 新聞・報道

木宮正史:「기미야 교수 “과거사 해결위해 한일관계 개선부터”(木宮教授「過去史解決のためには日韓関係の改善から」)現代韓国研究センター長就任に関するインタビュー」, 東亜日報, 2013.

木宮正史:「NHK 日曜討論「徹底討論 北朝鮮問題」」, NHK, 2013.

木宮正史:「NHK ラジオジャーナル日韓共同世論調査結果に関する解説」, NHK ラジオ, 2013.

木宮正史:「TBS CS チャンネル ニュースバード 飯島内閣官房参与訪朝に関する解説」, TBS, 2013.

木宮正史:「NHK ラジオ「夕方ホットトーク」朝鮮半島停戦 60 周年を考える」, NHK ラジオ, 2013.

木宮正史:「ニュースの本棚 朝鮮戦争停戦 60 年」, 朝日新聞, 2013.

木宮正史:「ニュースの本棚 朝鮮戦争停戦 60 年」, 朝日新聞, 2013.

木宮正史:「[일본 참의원 선거 현장을 가다] (상) 기미야 다다시 도쿄대 교수 인터뷰」, ソウル新聞, 2013.

木宮正史:「TBS ラジオ発信型ニュースプロジェクト荻上チキのセッション 22 外交フォーラム」, TBS ラジオ, 2013.

木宮正史:「[테소로 창간 한·일 대담] “위안부·강제징용 문제 등 현안 각각 분리해 해법 찾아야”」, ソウル新聞, 2013.

木宮正史:「日韓関係特集 専門家の診断と提言—日韓関係改善のために 慰安婦問題など事案別に解決策を」, TESORO, 2013.

木宮正史:「[한일 관계 이대로는 안된다]<下>전문가 4인의 제언“역사-안보 분리 접근… 양국 정상 만나 선순환 만들라”([韓日關係このままではだめだ]<下>専門家 4人の提言 歴史—安보 分離 接近、両国首脳があつて好循環を作れ)」, 東亜日報, 2013.

木宮正史:「[뉴스 분석] ‘아베의 기습’… 뒤통수 맞은 동북아(ニュース分析 安倍首相の奇襲 不意を突かれた東北アジア)」, ソウル新聞, 2013.

木宮正史:「インタビュー記事. 「기로에 선 한일 과거사 문제 먼저 풀고 영토분쟁 자체를(岐路に立つ韓日過去史問題をまず解決し領土紛争は自制を)」, 世界日報, 2014.

木宮正史:「春香クリスティーン of the GIRL’s BOARD 開講! ガールのミニ政治学 Vol.9 緊迫する日韓問題。なぜこんなにこじれてしまったの?」, エル・ガール, 2014.

木宮正史:「한반도 통일엔 일본이 최대 이익(朝鮮半島統一時には日本が最大の利益)」, 朝鮮日報, 2014.

---

## 越塚 登・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

### Ubiquitous Computing, IoT (Internet of Things)

Ubiquitous Computing、IoT (Internet of Things) は、生活空間の様々なところに埋め込まれたコンピュータが、現実世界の状況を認識し、認識した情報に基づき協調動作等を行いながら、人間生活をサポートする情報技術である。21世紀になり、Post-Internet、Post-Personal Computing の、Leading Concept として世界的に注目を集めている。Ubiquitous Computing は、様々な研究領域の成果を総合的に組み合わせることで初めて構築することができる高度な情報技術である。これらの要素技術には、RFID (Radio Frequency Identification)、Sensor Network、Smart Card、Secure Computing、Embedded Realtime System、Context-aware Computing、Augmented Reality/Mixed Reality、Wireless Communication 等があるが、これらのテーマに関して研究を進めている。

### Embedded Realtime Systems

Embedded Realtime System は、様々な「モノ」や「場所」に組み込むコンピュータのための基盤技術である。技術的には、実世界の動きに追従するリアルタイム性や、コンパクトな実装、高い信頼性などが求められる。また、現在では、我が国を代表する様々な電子機器製品を支える技術にもなっており、当研究室で坂村教授とともに生み出した TRON や、その最新版である T-Kernel は、両方を合わせると、我が国の組み込みリアルタイム OS のシェアの約半数程度を占めると考えられている。当研究室では主に、Kernel や OS を主とした、基盤ソフトウェアの研究を行っている。これらの研究成果や、標準カーネルである T-Kernel、より小型のワンチップマイコン向けの  $\mu$ T-Kernel、フア

イルシステムなどの高水準ミドルウェアを備えた T-Kernel Standard Extension、マルチコア向けの MP T-Kernel などの研究開発を行い、これらの成果は、T-Engine フォーラムから、オープンソースとして、世界中に配布され利用されている。

## Open Data

Open Data は、主に公益性の高いデータを、技術的にライセンス的にも、再利用しやすい形で、特に大きな利用制限などをつけずに公開することである。近年、世界的にもオープンデータの動きが進み、我が国でも一般的になってきており、政府を中心として多くの Open Data リリースされるようになってきた。Open Data を活用するためには、技術的に Linked Data や Semantic Web や、database に取り組み必要がある。また、社会的には、自由に利用できるためのライセンスが重要である。また、このオープンデータの仕組みを活用して、本来は政府自治体が提供するような、公共性の高い情報サービスの開発をクラウドソーシングすることによって、行政コストの軽減や効率化を実現する、新しいオープンガバメントの在り方も重要である。

## 研究業績(2013 年度)

### 国際会議等

Takeshi Yashiro, Shinsuke Kobayashi, Noboru Koshizuka, and Ken Sakamura: "An Internet of Things (IoT) Architecture for Embedded Appliances", Humanitarian Technology Conference (R10-HTC), 2013, IEEE Region 10, pp.314-319, 2013. 【査読有】

Tetsushi Watanabe, Shinsuke Kobayashi, Noboru Koshizuka and Ken Sakamura: "InfoScope: Smart Telescope System using Robust Feature Points Matching under Various Sunshine Conditions", 2013 IEEE 2nd Global Conference on Consumer Electronics (IEEE GCCE 2013), 2013. 【査読有】

Takeshi Yashiro, Shinsuke Kobayashi, Noboru Koshizuka and Ken Sakamura: "A Software HEMS Framework for Consumer Electronics", 2013 IEEE 2nd Global Conference on Consumer Electronics (IEEE GCCE 2013), 2013. 【査読有】

Jee-Eun Kim, Masahiro Bessho, Noboru Koshizuka, Ken Sakamura: "SaSYS: A Swipe Gesture-Based System for Exploring Urban Environments for the Visually Impaired", MobiCASE 2013, pp.54-71, 2013. 【査読有】

Takeshi Yashiro, Shinsuke Kobayashi, Noboru Koshizuka, and Ken Sakamura: "A Smart House Framework for Inter-Connecting Objects Based on the Internet-Oriented Architecture", 1st International Conference on Civil and Building Engineering Informatics (ICBEI 2013), 2013. 【査読有】

### 講演・口頭発表

越塚登: 「G 空間×オープンデータ」, 総務省第二回 G 空間×ICT 推進会議, 2013. 【招待講演】

越塚登: 「Open Data、IoT、Big Data」, IT Innovation Forum, 2013. 【招待講演】

越塚登: 「組み込みリアルタイムシステム入門:リアルタイムシステムとリアルタイム OS の概要」, T-Kernel/ITRON 入門、T-Engine Forum 講習会, 2013. 【招待講演】

越塚登: 「ユビキタス ID 入門」, ユビキタス ID 講習会、T-Engine Forum 講習会, 2013. 【招待講演】

越塚登: 「Internet of Things、M2M Ubiquitous Network の動向」, 情報技術標準化 Forum、一般社団法人 情報処理学会、情報規格調査会, 2013. 【招待講演】

越塚登: 「リアルタイム OS 概要と  $\mu$ T-Kernel の基本機能解説」,  $\mu$ T-Kernel 入門(協力:富士通セミコンダクター)、T-Engine Forum 講習会, 2013. 【招待講演】

越塚登: 「基調講演: オープンデータの利活用の可能性と課題」, IBM i 25 周年記念セミナー, 2013. 【招待講演】

越塚登: 「公共交通関連情報の実証実験について」, オープンデータイノベーション・カンファレンス～公共データ開放で変わる未来とビジネスチャンス, 2013. 【招待講演】

越塚登: 「空間情報とオープンデータ」, 情報学環・空間情報科学研究センター シンポジウム「ユビキタスで知る空間、ユビキタスで探る人間行動」, 2013. 【招待講演】

越塚登: 「リアルタイム OS 概要と  $\mu$ T-Kernel の基本機能解説」,  $\mu$ T-Kernel 入門(協力:ルネサスソリューションズ)、T-Engine Forum 講習会, 2013. 【招待講演】

越塚登: 「組込みリアルタイムシステム入門:リアルタイムシステムとリアルタイム OS の概要」, 組込みリアルタイムシステム入門(T-Kernel 2.0 入門、協力:パーソナルメディア)、T-Engine Forum 講習会, 2013. 【招待講演】

越塚登: 「基調講演: オープンデータの利活用の可能性と課題」, IBM i 25 周年記念セミナー(大阪), 2013. 【招待講演】

越塚登: 「基調講演: オープンデータの利活用の可能性と課題」, IBM i 25 周年記念セミナー(名古屋), 2013. 【招待講演】

越塚登: 「リアルタイム OS 概要と  $\mu$ ITRON 4.0 の基本機能解説」, ITRON 入門(協力:グレープシステム)、T-Engine Forum 講習会, 2013. 【招待講演】

越塚登: 「すぐに始められる、ucode を用いたトレーサビリティシステム(実習編)」, 食品トレーサビリティ公開講座, 2013. 【招待講演】

越塚登: 「組込みリアルタイムシステム入門:リアルタイムシステムとリアルタイム OS の概要」, T-Kernel/ITRON 入門、T-Engine Forum 講習会, 2013. 【招待講演】

越塚登: 「Open Data: Hack for Japan! 日本のために Hack しよう!」, 東京大学情報学環ホームカミングデイ, 2013. 【招待講演】【一般向け】

Noboru Koshizuka: "Open Data of Public Transportation in Tokyo", HS19: Data Integration Issues and Standardization -- Creating Connected World Around Vehicles, World ITS Congress 2013, 2013. 【招待講演】

越塚登: 「RTOS( $\mu$ ITRON)を使ったリアルタイムシステム開発手法入門」, ITRON 中級編(協力:グレープシステム)、T-Engine Forum 講習会, 2013. 【招待講演】

越塚登: 「リアルタイム OS 概要と  $\mu$ T-Kernel の基本機能解説」,  $\mu$ T-Kernel 入門(協力:スパンション・イノベイツ)、T-Engine Forum 講習会, 2013. 【招待講演】

越塚登: 「公共交通オープンデータ」, Open Data セッション 2(日経 BP 共同セッション):「オープンデータがもたらす新しい公共、イノベーション、ビジネス」, TRONSHOW 2014, 2013. 【招待講演】

越塚登:「組み込み産業の魅力、IT をモノにする:組み込み産業の魅力」, TRONSHOW 2014, 2013. 【招待講演】

越塚登:「公共交通分野をはじめとしたオープンデータへの期待」, 地域オープンデータ戦略セミナー～オープンデータによる新サービス創出に向けて～, 総務省信越総合通信局、信越情報通信懇談会、一般社団法人テレコムサービス協会信越市部, 2013. 【招待講演】

越塚登:「ICT 新産業創出へオープンデータの期待」, 総務省第一回 ICT 新産業創出推進会議, 2013. 【招待講演】

越塚登:「リアルタイム OS 概要と  $\mu$ T-Kernel の基本機能解説」,  $\mu$ T-Kernel 入門(協力:ルネサスソリューションズ)、T-Engine Forum 講習会, 2014. 【招待講演】

越塚登:「オープンデータ、IoT(Internet of Things)時代のビッグデータ活用技術」, 四国情報通信懇談会 ICT 研究交流フォーラム 第 10 回技術セミナー, 2014. 【招待講演】

越塚登:「組み込みリアルタイムシステム入門:リアルタイムシステムとリアルタイム OS の概要」, 組み込みリアルタイムシステム入門( $\mu$ T-Kernel 入門、協力:ルネサスソリューションズ)、T-Engine Forum 講習会, 2014. 【招待講演】

越塚登:「オープンデータとインフラマネージメント」, 東京大学「情報技術によるインフラ高度化」社会連携講座 第 20 回 インフラインノベーション研究会, 2014. 【招待講演】

越塚登:「世界の中の日本」, 文部科学省「科学技術予測に資する将来社会ビジョンの検討」ワークショップ「世界の中の日本」, 2014. 【招待講演】

Noboru Koshizuka: "IoT, Ubiquitous Computing, and Open Data for Smart Environments", ITU Workshop on the ¥"Internet of Things-Trend and Challenges in Standardization¥", 2014. 【招待講演】

越塚登:「オープンデータの動向と今後の展望について」, HITACHI アカデミックシステム研究会「オープンデータは社会にイノベーションをもたらすか? 社会の活性化を導く新たな IT の潮流」, 2014. 【招待講演】

## 新聞・報道

越塚登:「情報通信技術の利活用による経済再生を目指して」, 月刊経団連, 2013.

越塚登:「Open Data セッション 1:広がるオープンデータ」, 特集 TRONSHOW 2013, TRONWARE Vol. 145, 2014.

越塚登:「Open Data セッション 2(日経 BP 共同セッション):オープンデータがもたらす 新しい公共、イノベーション、ビジネス」, 特集 TRONSHOW 2013, TRONWARE Vol. 145, 2014.

越塚登:「学生向けセッション:IT をモノにする～組み込み産業分野の魅力～」, 特集 TRONSHOW 2013, TRONWARE Vol. 145, 2014.

---

## 坂村 健・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

## TRON (The Real-time Operating system Nucleus)

リアルタイムオペレーティングシステム(RTOS)はコンピュータ組込システム構築の際に最も中核となる基本ソフトウェアである。本研究では、RTOSの基礎研究であるリアルタイムスケジューラのアルゴリズムやアーキテクチャ設計など、基礎分野の研究から、RTOSの開発環境、応用システムまで幅広く研究をすすめている。1980年から20年以上にわたり進めているライフワーク的な研究となっており、TRONは現在、携帯電話や車のエンジン制御、デジタルカメラ、電子辞書、レーザープリンタなど多くの機器で使われている。基本哲学はオープンアーキテクチャで、誰でもフリーでソースコードまで含み利用できる。2010年6月に7年かけて地球に帰還した宇宙航空研究開発機構(JAXA)の小惑星探査機「はやぶさ」の制御にもTRONが使われている。

## Ubiquitous Computing

コンピュータを身の回りのあらゆるものに埋め込み、それらをネットワークで結び、互いに協調動作させることで、人間生活をあらゆる面から支援するコンピュータシステム、ユビキタスコンピューティングの考え方や手法を1980年初頭に提唱し、研究を進めてきた。これは、現在ではユビキタスコンピューティングやIoT(Internet of Things)と呼ばれている分野である。研究室では、Context-aware Computingや超小型チップのアーキテクチャ、ネットワークプロトコル、セキュリティシステム等の基礎的研究から応用システムまで幅広い研究を行っている。最近では、uIDアーキテクチャの研究に力を入れており、すでに火災報知器等長期にわたりメンテナンスを要する製品のトレーサビリティシステムなどに、数百万のuコードが使われている。

## Open Data Platform

情報通信技術の発展とともに、様々な情報が世界のどこかでは電子データとして存在するようになった。行政、民間企業、個人といった社会を構成する様々な人々が自分のもつ情報を再利用可能な形で公開することにより、Government 2.0と呼ばれるような市民参加型の新しい行政の実現や、高度で革新的な情報サービスの相乗効果的な実現が期待されている。本研究では、このようなオープン・データを実現するためのプラットフォーム構築を目指した研究を推進している。具体的には、公開に適したデータ・フォーマットやデータ交換のプロトコルといった基盤技術の研究や、オープン・データを活用したビッグデータ解析技術の研究、さらに様々な組織との連携によるオープン・データが可能にする新たな応用サービスの構築と検証などを行っている。

## 研究業績(2013年度)

### 国際会議等

Yashiro, T., Kobayashi, S., Koshizuka, N., and Sakamura, K.: "An Internet of Things (IoT) architecture for embedded appliances", IEEE Humanitarian Technology Conference 2013 (R10-HTC2013), pp.314-319, 2013. 【査読有】

Takeshi Yashiro, Shinsuke Kobayashi, Noboru Koshizuka, and Ken Sakamura: "A Smart House Framework for Inter-Connecting Objects Based on the Internet-Oriented Architecture", IEEE Region 10 Humanitarian Technology Conference 2013 (R10-HTC2013, 2013. 【査読有】

Khan, M., and Sakamura, K.: "Towards securer and smarter smartcard applications", IEEE Third International Conference on Consumer Electronics Berlin (ICCE-Berlin), pp.302 - 306, 2013. 【査読有】

Watanabe, T., Kobayashi, S., Koshizuka, N., and Sakamura, K.: "InfoScope: Smart telescope system using robust feature points matching under various sunshine conditions", IEEE 2nd Global Conference on Consumer Electronics, pp.94-95, 2013. 【査読有】

Sakamura, K.: "Keynote addresses & special symposiums", IEEE 2nd Global Conference on Consumer Electronics, pp.24-28, 2013.

Yashiro, T., Kobayashi, S., Koshizuka, N., and Sakamura, K.: "A software HEMS framework for consumer electronic", 2013 IEEE 2nd Global Conference on Consumer Electronics, 2013. 【査読有】

Kim, J. E., Bessho, M., Koshizuka, N., and Sakamura, K.: "SaSYS: A Swipe Gesture-Based System for Exploring Urban Environments for the Visually Impaired", Fifth International Conference on Mobile Computing, Applications and Services, pp.54-71, 2013. 【査読有】

## その他論文

坂村健:「ユビキタスネットワークで道路を守れ - 人手と予算が足りない時代の処方箋 -」, 中央公論, 2013 年. 【一般向け】

坂村健:「特別寄稿 汎用 ID「ucode」で製造業が変わる ネットワーク型ものづくりの連携基盤」, 日経ものづくり, 2013 年. 【一般向け】

坂村健:「特別寄稿 汎用 ID「ucode」で製造業が変わる ネットワーク型ものづくりの連携基盤」, 日経ものづくり 2013 年 4 月号, 2013 年. 【一般向け】

## 新聞・報道

坂村健:「正論 : ネット選挙、情報の中身で勝負を」, 産経新聞, 2013.

坂村健:「正論 : ネット選挙、情報の中身で勝負を」, 産経ニュース, 2013.

坂村健:「坂村健の目 : 公衆電話 置き換えの時」, 毎日新聞, 2013.

坂村健:「正論:ネット選挙、情報の中身で勝負を」, 産業経済新聞東京本社, 2013.

坂村健:「科学 坂村健の目:公衆電話 置き換えの時」, 毎日新聞社, 2013.

坂村健:「半歩遅れの読書術 : 電子版での出会い「十歩遅れ」で読む魯山人」, 日本経済新聞, 2013.

坂村健:「坂村健の目 : 3D プリンター 教育現場へ」, 毎日新聞, 2013.

坂村健:「半歩遅れの読書術 : 北欧発の 3 部作 フィクションが映す実像」, 日本経済新聞, 2013.

坂村健:「半歩遅れの読書術:電子版での出会い「十歩遅れ」で読む魯山人」, 日本経済新聞社, 2013.

坂村健:「科学 坂村健の目:3D プリンター 教育現場へ」, 毎日新聞社, 2013.

坂村健:「半歩遅れの読書術:北欧発の 3 部作 フィクションが映す実像」, 日本経済新聞社, 2013.

坂村健:「半歩遅れの読書術:ソーシャル読書 SF 小説が描く究極の本」, 日本経済新聞社, 2013.

坂村健:「科学 坂村健の目:多様性こそが「善」」, 毎日新聞社, 2013.

坂村健:「科学 坂村健の目:社会支える「オープンデータ」」, 毎日新聞社, 2013.

坂村健:「科学 坂村健の目:医療とビッグデータ」, 毎日新聞社, 2013.

坂村健:「正論:ビッグデータ利用に賠償規定を」, 産業経済新聞東京本社, 2013.

坂村健:「科学 坂村健の目:旅するボイジャー」, 毎日新聞社, 2013.

坂村健:「科学 坂村健の目:分析に至らぬ国際調査」, 毎日新聞社, 2013.

坂村健:「坂村健の目:オープンサイエンスの時代」, 毎日新聞社, 2013.

坂村健:「坂村健の目:開発レースのイノベーション」, 毎日新聞社, 2013.

---

## 佐倉 統・教授

研究テーマ(主たるもの)

### 科学技術コミュニケーション

科学技術の専門家と非専門家間のコミュニケーションを、円滑化、活性化するための方法論や制度策定および科学的・文明論的な理論枠組みの構築。

### 脳神経倫理(ニューロエシックス)

脳神経科学の倫理的、社会的、哲学的諸問題を考察し、教育現場や社会とのコミュニケーションなどにおける実際の問題の解決をめざす。

### 進化生物学史、動物行動学史

とくに日本における進化生物学、動物行動学の歴史を、諸外国の事例と比較しつつ、特徴を抽出する。

研究業績(2013年度)

### 著書

佐倉統:「「便利」は人を不幸にする」, 新潮社, 2013年.

### 分担著書

青木重幸他327名(執筆者):「行動生物学辞典」, 上田恵介、岡ノ谷一夫、菊水健史、坂上貴之、辻和希、友永雅己、中島定彦、長谷川寿一、松島俊也 編, 東京化学同人, 2013年.



## 国際会議等

Sakura, O., Ban, N., Kohayagawa, Y., Miyazaki, M. and Nakagawa, K.: "Toward Community-based Participatory Risk", Society for Social Studies of Science(4S) Annual Meeting, San Diego, CA,USA., 2013.

## その他論文

佐倉統:「風疹の流行と何もしないことの暴力性」, 中央公論, 129(2):18-19, 2013 年. 【一般向け】

佐倉統:「東京都知事選挙と「ベンツ」」, 中央公論, 129(3):16-17, 2013 年. 【一般向け】

Taichi Isobe, Nozomi Mizushima, Osamu Sakura: "Public Participation as a Potential Counter Strategy against Unethical Optimism", THE FUTURE OF BIOETHICS International Dialogues, 69-74, 2013 年.

佐倉統:「科学とはどういうものか——『物理学はいかに創られたか』」新入生に今、読んでほしい本」, 東京大学新聞, 2013 年. 【一般向け】

磯部太一・佐倉統:「BMIについての倫理的・社会的問題の概要—脳神経倫理学における議論から」, 医学のあゆみ, 247(2):198-199, 2013 年.

佐倉統:「バナメイエビと放射線」, 中央公論, 129(1):18-19, 2014 年. 【一般向け】

茂木健一郎・佐倉統:「【対談】「無知こそ科学の原動力」」, 現代化学, 515:25-30, 2014 年. 【一般向け】

## 講演・口頭発表

佐倉統:「私たちはどこから来てどこへ行くのか?——進化から見た人間論——」, 早稲田大学「理工文化論」講義, 2013. 【招待講演】【一般向け】

磯部太一・水島希・加瀬郁子・大津奈都子・内田麻理香・佐倉統:「熟議型ワークショップの試行:一般市民は BMI についてどのような論点を有しているのか【ポスター】」, Neuro2013, 2013.

佐倉統(コメンテーター):「文化系統学・文化進化研究の現在—『文化系統学への招待』合評会」, 京都大学大学院白眉センター&CAPE 共催セミナー, 2013. 【招待講演】【一般向け】

佐倉統(シンポジスト):「生物学を学ぶということ——ヒトの生物学の必要性」, シンポジウム「これからの生物教育:学習の目的と目標を踏まえて」日本生物教育会全国大会 2013 東京大会, 2013. 【招待講演】

浅田稔(司会)石黒浩(パネリスト)・不二門尚・苧阪満里子・佐倉統・藤井直敬:「パネルディスカッション「認知脳 システム学の未来」」, 第 31 回日本ロボット学会学術講演会, 2013. 【招待講演】

佐倉統:「脳科学の倫理」, エヌ・ティ・ティ・データ経営研究所主催応用脳科学アカデミーベーシックコース「応用脳科学の基礎」第 3 回, 2013. 【招待講演】【一般向け】

佐倉統・水島希・加瀬郁子・伴信彦・黒田佑次郎・坂田尚子・作美明・中川恵一:「放射線リスクの「正しい」伝え方——既知の他のリスクと比較するのは是か非か?——」, 日本放射線影響学会第 56 回大会, 2013.

佐倉統:「好きこそものの上手なれ」, 東京都立日比谷高等学校, 2013. 【招待講演】【一般向け】

佐倉統:「科学の専門知は地域の生活場面とどう関われるか?」, 科学技術社会論学会第12回年次研究大会, 2013.

佐倉統:「私たちはどこから来てどこへ行くのかー進化から見た人間理解ー」, 白鷗大学足利高等学校 SSH 科学体験講座, 2013. 【招待講演】【一般向け】

佐倉統:「私たちはどこから来て、どこへ行くのかー進化から人間を考えるー」, 京都大学大学院教育学研究科「生命科学に基礎づけられた教育の可能性ー学生たちとの対話で未来を育むー」講演, 2013. 【招待講演】【一般向け】

佐倉統、茨木希、木村浩、飯本武志、山口一郎、土屋智子、田中幹人、市野美夏、菊地乃依瑠、吉戸智明:「専門的・科学的知見と社会の対話」, 福島第一原子力発電所事故由来放射性物質調査研究分野横断ワークショップ, 2014.

佐倉統:「好きこそものの上手なれ」, 桜修館中等教育学校, 2014. 【招待講演】【一般向け】

佐倉統:「脳と情報」, 白鷗大学足利高等学校 SSH 科学体験講座 講義、ワークショップ, 2014. 【招待講演】【一般向け】

## 新聞・報道

佐倉統:「「便利」は人を不幸にする」, 東京新聞, 2013.

佐倉統:「「便利」は人を不幸にする」, 中日新聞, 2013.

佐倉統:「ジャムザワールド「「便利」は人を不幸にする」」, ラジオ J-WAVE, 2013.

佐倉統:「お伝と伝じろう第12回『それって本当?』」, NHK E テレ(教育テレビ), 2013.

---

## 佐藤 博樹・教授

研究テーマ(主たるもの)

ワークライフバランス

人材活用の多元化と働き方の変化

人材ビジネスの社会的機能

研究業績(2013年度)

---

## 嶋田 正和・教授

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2013 年度)

---

## 須藤 修・教授

研究テーマ(主たるもの)

### ICT の発展とそれに伴う経済システムの変容に関する研究

北アメリカ、EU、アジア諸国、日本という 21 世グローバルシステムに大きな影響力を行使する地域経済システム (Regional Economic System) の動向を比較検討しながら、ICT の発展とそれぞれの経済構造との相互作用的な関係について、また ICT の発展と経済活動のグローバル化との相互作用的な関係に関して研究を行い、ネットワークを基盤にした知識創造型社会経済システムを構想する。

### センサーネットワークを用いた予防医療システムに関する研究

産・官・学の連携を促しながら、センサーネットワーク、高度データ分析、グリッド・コンピューティングを組み合わせた ICT 基盤を用いて、糖尿病を中心とした生活習慣病の予防に関する実証実験を推進し、その実験と連動させて、産・官・学・民の共創を活性化させるセンサーネットワーク基盤地域コミュニティの形成とそのガバナンスに関する制度構想の研究を進めたいと考えている。そして、電子行政および医療情報基盤について、社会基盤としての ICT プラットフォームに関する政策科学的研究を推進する。

### 活力ある超高齢社会に関する研究

在宅医療・介護体制の構築、独居高齢者の増大への対応、予防医療の在り方などに関する抜本的な検討と新たな社会制度設計が必要となる。このことは、地域コミュニティの在り方、地方行政の在り方などさまざまな観点から社会システムを抜本的に考え直さなければならない。活力ある超高齢社会デザインについて研究を推進する。

研究業績(2013 年度)

### 著書

池田幸也、須藤修、立岩真也: 『『新現代社会・最新版』』, 清水書院 【共著】312 ページ, 2013 年.

須藤修・中村裕一郎・榎並利博・諸橋昭夫: 『『番号制度導入・運用のロードマップ』』, 地域科学研究会 【共著】232 ページ, 2013 年.

## 雑誌論文

村舘靖之・須藤修:「鳥取県 2012 年の資本マトリックスの分析」,『情報処理学会第 76 回全国大会発表論文集』(情報処理学会、2014 年 3 月), 2013 年。【査読有】

須藤修:「これからの IT 社会の行方—番号制度のインパクト<その 1>」,『日本歯科医師会雑誌』(日本歯科医師会、2013 年 5 月), Vol.66, No.2, pp.14-15, 2013 年。

須藤修:「これからの IT 社会の行方—番号制度のインパクト<その 2>」,『日本歯科医師会雑誌』(日本歯科医師会、2013 年 6 月), Vol.66, No.3, pp.18-19, 2013 年。

須藤修:「ICT を用いた政策の意思決定に向けた制度設計—ICT を活用した地域社会発展」,『環境情報科学』(一般社団法人環境情報科学センター、2013 年 8 月), Vol.42, No.2, pp.28-33 ページ, 2013 年。

須藤修:「番号制度導入と自治体のこれから」,『ガバナンス』(ぎょうせい、2013 年 9 月号), No.149, pp.36-39 ページ, 2013 年。

村舘靖之・須藤修:「オンライン家計簿ココマネにおける鳥取県の消費動向の分析」,『情報処理学会 FIT 発表論文集』(情報処理学会、2013 年 9 月 4 日), 2013 年。

Yu Suzuki, Yasuyuki Muradate, Osamu Sudoh:「Analysis of Household Accounts : Regional Characteristics of Household Expenditures」,『情報処理学会 FIT 発表論文集』(情報処理学会、2013 年 9 月 4 日), 2013 年。

村舘靖之・須藤修:「情報貨幣論に向けて—貨幣・情報・不均衡」,『情報文化学会誌』(情報文化学会、2013 年 9 月), Vol.20, No.1, pp.3-9 ページ, 2013 年。【査読有】

村舘靖之・須藤修:「オンライン家計簿ココマネにおける消費行動パターンの分析」,『2013 年社会情報学会 (SSI) 大会研究発表論文集』(日本社会情報学会、2013 年 9 月), pp.69-72 ページ, 2013 年。

村舘靖之・須藤修:「オンライン家計簿ココマネと震災時における家計の消費行動」,『情報文化学会大会講演予稿集第 21 号』(情報文化学会、2013 年 10 月 12 日), pp.29-32 ページ, 2013 年。

## その他論文

須藤修:「須藤修意見陳述」,『第 183 回国会衆議院内閣委員会議事録』, 第 6 号 1-20 ページ, 2013 年。

須藤修:「総務省 ICT 地域実証プロジェクト・「活力ある高齢者社会の推進」(研究代表:須藤修)編『総務省 ICT 地域実証プロジェクト・「活力ある高齢者社会の推進」(研究代表:須藤修)』,『総務省 ICT 地域実証プロジェクト・活力ある高齢者社会の推進成果報告書』, (東京大学、2014 年 3 月), 2013 年。

須藤修:「問われる自治体の企画カーマイナンバー法成立」,『生産性新聞』, 第 2401 号(2013 年 7 月 5 日付け), 2013 年。

須藤修、鈴木正朝、岡本正、楠正憲:「討論・社会保障・税番号制度で、行政が変わる、医療・福祉が変わる」, マイクロソフト・パブリックセクターソリューションフォーラム(日本マイクロソフト)2013 年 7 月 17 日, 公式サイト <http://www.microsoft.com/ja-jp/business/industry/gov/psf.aspx>, 2013 年。

須藤修:「既存のテレビに未来はない、挑戦のための基盤を構築」、『日経エレクトロニクス』(日経 BP 社、2013 年 8 月 5 日)、第 1114 号、67-70 ページ、2013 年。

須藤修:「4K への道程——来年の 4K 試験放送は CS と BS での実現をオールジャパン体制でめざしています」、『月刊 HiVi』(ステレオサウンド、2013 年 8 月 17 日)、第 31 巻第 9 号(通巻 358 号)38-41 ページ、2013 年。

須藤修:「番号制度を官民連携に活用し、自律的な地域社会の構築を」、『時評』(時評社、2013 年 9 月 4 日)、第 55 巻第 9 号(通巻 606 号)112-121 ページ、2013 年。

須藤修:「番号活用に自治体の創意工夫が表れる」、『日経 BP ガバメントテクノロジー』(日経 BP 社、2013 年 10 月 3 日)、第 28 号、15 ページ、2013 年。

須藤修:「オープンなクラウド技術でスマートシティを実現」、『BCN』、第 1508 号(2013 年 12 月 2 日)、7-9 ページ、2013 年。

須藤修:「2014 年は 4K/8K の次世代放送に加え、新たな産業応用を開拓する年に」、『月刊ニューメディア』、通巻 370 号(株式会社ニューメディア、2013 年 12 月)10-11 ページ、2013 年。

Osamu Sudoh: "Coming Up Next...Smart TV", The Japan Journal, Dec.2013, Vol.10 No.9, pp.14-16., 2013 年。

(共同執筆)須藤修:「わたしたち生活者のための「共通番号」推進協議会編『発足から番号法実現までの軌跡』」,(わたしたち生活者のための「共通番号」推進協議会、2013 年 12 月 25 日)、pp.1-51(共同執筆)、2013 年。

須藤修:「番号制度と情報連携」、『LASDEC』、第 44 巻第 2 号(財団法人地方自治情報センター、2014 年 2 月)4-10 ページ、2014 年。

須藤修:『「在宅医療と介護の連携のための情報システムの共通基盤のあり方に関する調査研究報告書」』、在宅医療と介護の連携における情報システム利用に関するガイドライン検討委員会(委員長:須藤修)編、(東京大学高齢社会総合研究機構、2014 年 3 月)、2014 年。

## 講演・口頭発表

須藤修:「衆議院内閣委員会意見陳述および質問への応答」, 衆議院内閣委員会、2013 年 4 月 5 日、2013。

須藤修:「オープンデータ戦略とビッグデータ分析」, 一般社団法人 OGC 総会(日比谷図書文化館、2013 年 4 月 22 日)、2013。

須藤修:「ICT を活用した新たな街づくり」, 会津若松市主催『情報通信政策講演会』(会津大学、2013 年 5 月 22 日)【基調講演】【招待講演】、2013。

須藤修:「クラウドと成長戦略」, 国際エグゼクティブフォーラム主催『国際エグゼクティブフォーラム定例朝食会』(パレスホテル、2013 年 5 月 29 日)【招待講演】、2013。

須藤修、鈴木正朝、岡本正、楠正憲:「討論・社会保障・税番号制度で、行政が変わる、医療・福祉が変わる」, 日本マイクロソフト主催『パブリックセクター・ソリューションフォーラム 2013』(大手町サンケイプラザ、2013 年 5 月 30 日)、2013。

須藤修:「データ・インテンシブな科学はいかに経済政策に貢献できるか」, 日本経済政策学会全国大会(東京大学、2013 年 5 月 25 日)【招待講演】、2013。

須藤修:「マイナンバー制度の導入と自治体・ベンダー」, 電子自治体推進パートナーズ主催『自治体クラウド講座』(内田洋行東京協創広場 CANVAS、2013年6月3日)【基調講演】【招待講演】、2013.

須藤修:「我が国の ICT 成長戦略とオープンガバメント」, 福島県主催『情報通信月間特別講演会』(ホテルサンルートプラザ福島、2013年6月5日)【基調講演】【招待講演】、2013.

須藤修:「番号制度の概要と導入によって変わる社会について」, 内田洋行主催『ウチダ公共フォーラム 2013』(ファッションタウンビル、2013年6月6日)【基調講演】【招待講演】、2013.

須藤修:「クラウドコンピューティングと e サイエンス」, 日本社会情報学会主催『情報社会論の新展開:被災地コミュニティに、地域 SNS を導入する社会情報学的挑戦』(中央大学駿河台記念館、2013年6月8日)、2013.

西垣通、大黒岳彦、山本佳世子、須藤修、藤井史朗、関谷直也:「討論・情報社会論の新展開—情報とネットワークが創り出す社会」, 日本社会情報学会主催『情報社会論の新展開:被災地コミュニティに、地域 SNS を導入する社会情報学的挑戦』(中央大学駿河台記念館、2013年6月8日)、2013.

須藤修:「新たなビジネスチャンスを生み出すモバイルシステムの可能性」, シマンテック主催『Symantec Security Day 2013』(ナレッジキャピタル・カンファレンスルーム、2013年6月13日)【招待講演】、2013.

須藤修:「個人番号制度と ICT 成長戦略」, 一般社会法人日本 IC カードシステム利用促進協議会主催『JICSAP 講演会』(安田コミュニティプラザ、2013年6月19日)【招待講演】、2013.

須藤修:「自治体の IT 戦略」, 総務省自治体大学校『政策専門課程新時代・地域経営コース第 6 期研修』(総務省自治体大学校、2013年7月24日)、2013.

須藤修:「番号制度と地方公共団体」, 電子自治体推進パートナーズ主催『番号制度の仕組み・導入体制・スケジュール・システム改修準備』(内田洋行東京・大阪ユビキタス協創広場 CANVAS、2013年7月1日)【招待講演】、2013.

諸橋昭夫、三木浩平、坂下知司、遠藤兼美、須藤修、榎並利博:「討論・番号制度の導入体制・全体スケジュール・システム改修準備」, 電子自治体推進パートナーズ主催『番号制度の仕組み・導入体制・スケジュール・システム改修準備』(内田洋行東京・大阪ユビキタス協創広場 CANVAS、2013年7月1日)、2013.

須藤修:「電子自治体と地方行政の展開」, 総務省自治体大学校『第 1 部課程第 120 期研修』(総務省自治体大学校、2013年7月4日、18日)、2013.

須藤修:「クラウドコンピューティングと社会システム」, 一般社団法人日本メーリングサービス協会主催『メーリング・アドバイザー資格認定講座』(アクセス渋谷フォーラム、2013年7月5日)【招待講演】、2013.

須藤修:「オープンデータとビッグデータ分析」, 三重県主催『ICT を活用した産業活性化セミナー in 津』(ホテルグリーンパーク津、2013年7月17日)【基調講演】【招待講演】約 150 名・須藤修「自治体の IT 戦略」総務省自治体大学校『政策専門課程新時代・地域経営コース第 6 期研修』(総務省自治体大学校、2013年7月24日)、2013.

須藤修:「番号制度とこれからの電子自治体—地域成長戦略に向けて」, 財団法人地方自治情報センター主催『平成 25 年度コンビニ交付推進セミナー—名古屋会場』(ホテルサンルートプラザ名古屋、2013年8月1日)【招待講演】、2013.

須藤修:「社会保障・税番号制度(マイナンバー)導入に伴う課題解決に向けて」, 北日本コンピューターサービス株式会社主催『ふれあい』(東京国際フォーラム、2013年8月2日)【基調講演】【招待講演】、2013.

須藤修:「番号制度とこれからの電子自治体—地域成長戦略に向けて」, 財団法人地方自治情報センター主催『平成 25 年度コンビニ交付推進セミナー—東京会場』(海運クラブ国際会議場、2013 年 8 月 6 日)【招待講演】、2013.

須藤修:「番号制度導入と地方公共団体の情報システム改修 電子自治体推進パートナーズ主催『番号制度と自治体情報システム』(内田洋行東京・大阪ユビキタス協創広場 CANVAS、2013 年 8 月 23 日)【招待講演】」, 「番号制度導入と地方公共団体の情報システム改修」電子自治体推進パートナーズ主催『番号制度と自治体情報システム』(内田洋行東京・大阪ユビキタス協創広場 CANVAS、2013 年 8 月 23 日)【招待講演】、2013.

須藤修:「行政事務基盤から行政サービス基盤へ進化する ICT」, 都道府県 CIO フォーラム主催『都道府県 CIO フォーラム第 11 回年次総会』(広島国際会議場、2013 年 8 月 30 日)【招待講演】【招待講演】、2013.

須藤修:「番号制度と自治体の在り方」, 日本マイクロソフト主催『第 18 回電子自治体戦略会議』(KPP 東京八重洲ビル、2013 年 9 月 9 日)、2013.

須藤修:「電子行政サービスの構築と今後の展望」, 市町村職員中央研究所主催『ICT による情報政策～マイナンバー制度への対応に向けて』(市町村アカデミー、2013 年 9 月 11 日)【招待講演】、2013.

須藤修:「番号制度と ICT による社会イノベーション」, 三菱金曜会主催『三菱金曜会定例会』(三菱商事本社 21 階、2013 年 10 月 11 日)【招待講演】、2013.

須藤修:「ICT/クラウドによって実現する未来」, 一般社団法人日本企業家育成・株式会社 IT 戦略研究所主催『ICT 最先端セミナー』(東京国際フォーラム、2013 年 10 月 17 日)【基調講演】【招待講演】、2013.

須藤修:「番号制度と ICT による社会イノベーション」, 日立製作所主催『特別講演会』(日立製作所、2013 年 11 月 25 日)【基調講演】【招待講演】、2013.

須藤修:「番号制度と ICT による社会イノベーション」, 政府税制調査会(財務省、2013 年 11 月 8 日)【招待講演】、2013.

樋渡啓祐、仲川げん、高島宗一郎、須藤修、榊原彰、光延裕司、熊谷俊人:「パネル討論・ビッグデータ・オープンデータの活用の展望」, ビッグデータ・オープンデータ活用推進協議会主催『Bigdata/Opendata Market 公開シンポジウム』(東京ベイ幕張ホール、2013 年 11 月 10 日)、2013.

須藤修、市原健一、清原慶子、森雅志、大橋秀行:「パネル討論・ICT を活用した新たな街づくり実現のために～自治体情報化への首長の役割～」, 財団法人地方自治情報センター主催『地方自治情報化推進フェア 2013』(東京ビッグサイト、2013 年 11 月 13 日)、2013.

須藤修、向井紀治、山口英、宇賀克也:「パネル討論・番号制度の課題と展望」, 東京大学大学院情報理工学研究所、同大学院情報学環、同大学院法学政治学研究科、同大学院公共政策教育部共同主催『マイナンバーシンポジウム』(東京大学弥生講堂、2013 年 11 月 18 日)、2013.

須藤修:「オープンデータ時代の情報利活用戦略」, 特定非営利活動法人 UML モデリング推進協議会主催『10 周年特別企画 Modeling Forum 2013』(2013 年 11 月 20 日)【基調講演】【招待講演】、2013.

須藤修:「ICT と社会イノベーション」, オープンガバメント・コンソーシアム(会長:須藤修)主催『OGC シンポジウム 2013—世界最先端 IT 社会実現に向けて』(全国町村会館、2013 年 12 月 2 日)、2013.

須藤修:「活力ある超高齢社会の推進」, 東京大学「活力ある超高齢社会の推進」プロジェクト(研究代表:須藤修)主催『活力ある超高齢社会の推進—ICT 利活用による社会イノベーション』(東京大学大学院情報学環福武ホール、2013年12月9日), 2013.

須藤修、辻哲夫、秋下雅弘、武藤真祐、美馬秀樹、矢島鉄也:「討論・ICT 利活用による社会イノベーションの実現を目指して」, 東京大学「活力ある超高齢社会の推進」プロジェクト(研究代表:須藤修)主催『活力ある超高齢社会の推進—ICT 利活用による社会イノベーション』(東京大学大学院情報学環福武ホール、2013年12月9日), 2013.

坂本泰男、浜口雄一、須藤修、小尾敏夫:「パネル討論・世界最先端 IT 立国実現と電子政府推進の戦略」, 国際CIO学会主催『日本産業の未来』(早稲田大学井深ホール、2013年12月11日), 2013.

須藤修:「番号制度とICTによる社会イノベーション」, 一般社団法人日本企業家育成・株式会社IT戦略研究所主催『ICT 最先端セミナー』(岡山プリアリティまきび、2013年12月19日)【基調講演】【招待講演】、2013.

須藤修:「次世代放送推進フォーラムの紹介」, 『新世代ネットワーク推進委員会』(NICT、2014年1月8日), 2014.

須藤修:「社会イノベーションと医療 ICT」, 東京大学主催『医療産業イノベーションフォーラム』(東京大学医学系研究科鉄門講堂、2014年1月14日)【招待講演】、2014.

須藤修:「ICT イノベーションと地域医療」, 一般社団法人宮城県情報サービス産業協会主催『MISA 第3回ビジネスフォーラム in 宮城』(ホテルモントレ仙台、2014年1月22日)【基調講演】【招待講演】、2014.

須藤修:「イノベーションに求められる学び」, 公益社団法人私立大学情報教育協会主催『産学連携事業<社会スタディの場>』(株式会社ディスコ神楽坂 HCS スタジオ、2014年2月14日)【招待講演】、2014.

須藤修:「ICT は地域をつなぐ」, 彩の国さいたま人づくり広域連合主催『すてっぷあっぷ講座』(埼玉県民健康センター大ホール、2014年2月22日)【基調講演】【招待講演】、2014.

須藤修:「電子自治体と地方行政の展開」, 総務省自治大学校主催『第1部課程第121期研修』(総務省自治大学校、2014年3月3日), 2014.

須藤修:「ICT イノベーションと番号制度」, 電子情報通信学会 ICM 研究会主催『ビッグデータとオープンデータがもたらす可能性とその管理』(久米島イーフ情報プラザ、2014年3月13日)【招待講演】、2014.

須藤修:「全体プロジェクトの成果報告と今後の展望」, 東京大学「活力ある超高齢社会の推進」プロジェクト(研究代表:須藤修)主催『<活力ある超高齢社会の推進>成果報告会』(東京大学大学院情報学環福武ホール、2014年3月27日), 2014.

## 新聞・報道

須藤修:「ビッグデータ活用探る協議会—千葉市など4市が設立」, 『日本経済新聞』2013年4月2日付け朝刊, 2013.

須藤修:「オープンガバメント・コンソーシアム、社団化で実践的活動目指す」, 日本経済新聞社デジタル編成局編成部『日経オープンデータポータル』2013年4月22日, 2013.

須藤修:「エンジニアの心を萎えさせないために改革が必要、オープンガバメント・コンソーシアムが会見」, 『日経BP ITPro』2013年4月22日, 2013.



須藤修:「OGC、一般社団法人に」,『日経産業新聞』2013年4月23日付け朝刊,2013.

須藤修:「電子政府目指した任意団体が社団法人に、スマートシティに向けた政策提言や実証活動を強化」,『IT Leader』2013年4月23日,2013.

須藤修:「次世代の放送推進へ 団体設立発表会」,『NHK』2013年6月17日,2013.

Osamu Sudoh, :「Osamu Sudoh」, (in) Marquis Who's Who in the world 2014 (31st edition), Nov.2013, 2013.

須藤修:「4K/8K テレビは成長の起爆剤となるか」,『現代ビジネス』2013年5月14日,2013.

須藤修:「<効率化する><悪用も>成立のマイナンバー法に賛否」,『中国新聞』2013年5月25日付けほか地方紙多数(共同通信配信),2013.

須藤修:「OGC が一般社団法人化—スマートシティ実現へ本格始動」,『週刊 BCN』第 1482 号(2013 年 5 月 27 日), 2013.

須藤修:「高まるマイナンバーへの期待と不安、医療・行政・福祉はどう変わる」,『日経 BP ITPro』2013 年 5 月 30 日, 2013.

須藤修:「テレビの次世代規格開発の新組織、日本独自規格でガラパゴス化の懸念」,『Business Journal』2013 年 6 月 2 日, 2013.

須藤修:「総務省、次世代衛星放送テストベッド事業の委託先候補に NexTV-F を選定」,『Pronews』2013 年 6 月 7 日, 2013.

須藤修:「次世代放送推進フォーラム 設立発表会—民放各社など 21 社参加」,『FNN』2013 年 6 月 17 日, 2013.

須藤修:「次世代テレビ開発に向け企業連携組織が発足」,『テレビ朝日』2013 年 6 月 17 日, 2013.

須藤修:「4K 普及へ技術開発促進 <次世代放送推進フォーラム>民間一丸」,『SankeiBiz』2013 年 6 月 17 日, 2013.

須藤修:「高精細テレビ<世界最速で>放送推進団体が事業方針」,『SankeiBiz』2013 年 6 月 17 日, 2013.

須藤修:「三つの委員会で活動を推進、次世代放送推進フォーラムが設立発表会」,『ITpro』2013 年 6 月 17 日, 2013.

須藤修:「4K/8K は“成長戦略”、オールジャパンの<次世代放送推進フォーラム>が始動」,『IT Media』2013 年 6 月 17 日, 2013.

須藤修:「オールジャパンで4K/8K 推進<次世代放送推進フォーラム>設立」,『AV Watch』2013 年 6 月 17 日, 2013.

須藤修:「4K/8K 放送の実現を目指す<NexTV-F>が設立会見」,『ASCII.JP』2013 年 6 月 17 日, 2013.

須藤修:「<次世代放送の推進>へ連携」,『デイリースポーツ』2013 年 6 月 17 日, 2013.

須藤修:「次世代放送推進フォーラム(NexTV-F)設立 — 8K/4K 実用化へ“オールジャパン”体制」,『Phile-web』2013 年 6 月 17 日, 2013.

須藤修:「次世代 TV<世界最速で> = 推進団体が設立会見」, 『ウォール・ストリート・ジャーナル日本版』2013 年 6 月 17 日, 2013.

須藤修:「次世代放送推進フォーラムが事業内容発表 撮影機材貸し出しから専用 LSI 開発まで」, 『産経新聞』2013 年 6 月 17 日付け, 2013.

須藤修:「<次世代放送の推進>へ連携、民放、電機など計 21 社」, 『共同通信』配信、『河北新報』2013 年 6 月 17 日付けなど地方紙多数, 2013.

須藤修:「次世代 TV ヘフォーラム」, 『読売新聞』2013 年 6 月 18 日付け朝刊, 2013.

須藤修:「4K 放送の規格を協議へ」, 『朝日新聞』2013 年 6 月 18 日付け朝刊, 2013.

須藤修:「次世代テレビ放送、推進団体が発足 4K・8K 世界標準狙う」, 『日本経済新聞』2013 年 6 月 18 日付け朝刊, 2013.

須藤修:「共通番号の経済効果試算」, 『朝日新聞』2013 年 6 月 18 日付け朝刊, 2013.

須藤修:「社説・共通番号制—幅広い利用認める検討進めよ」, 『日刊工業新聞』2013 年 6 月 18 日付け朝刊, 2013.

須藤修:「4K、8K、スマートテレビ…次世代型放送のオールジャパン体制が発足」, 『Web ザ・テレビジョン』2013 年 6 月 19 日, 2013.

須藤修:「次世代放送推進フォーラム—超精細テレビの推進役、オールジャパンを掛け声に船出」, 『Tech On!』2013 年 6 月 19 日, 2013.

須藤修:「4K、8K テレビ普及ヘフォーラム設立」, 『毎日新聞』2013 年 6 月 27 日付け夕刊, 2013.

須藤修:「放送サービスの高度化に関する検討会」検討結果まとまる」, 『放送研究と調査』(日本放送協会放送文化研究所)2013 年 7 月号, 2013.

須藤修:「フォーカス・須藤修・異業種まとめる<奇跡>実現」, 『日本経済新聞』2013 年 7 月 29 日付け夕刊, 2013.

須藤修:「次世代放送推進フォーラム(NexTV-F)設立発表会」, 『月刊 New Media』通巻 365 号(2013 年 8 月号), 2013.

須藤修:「<CIO フォーラム>マイナンバーで「自治体の個性や創意工夫の有無が表れる」東大の須藤教授」, 『ITpro』2013 年 8 月 30 日付け, 2013.

須藤修:「NexTV-F が目指す 4K/8K テレビ時代とデジタルメディア、産業、文化」, 『月刊 New Media』通巻 366 号(2013 年 9 月号), 2013.

須藤修:「県成長戦略 8 分野経済効果 1054 億円」, 『読売新聞』2013 年 9 月 7 日付け朝刊(喜連川教授、須藤修東大教授ほか鳥取県との共同研究成果報告), 2013.

須藤修:「成長戦略、波及効果 1054 億円—鳥取県など達成後推計」, 『日本経済新聞』2013 年 9 月 10 日付け朝刊(喜連川教授、須藤修東大教授ほか鳥取県との共同研究成果報告), 2013.

須藤修:「4K 音楽ライブ伝送を映画館で体験。アリス武道館公演中継」, 『AV Watch』2013 年 11 月 3 日, 2013.

須藤修:「NexTV-F とスカパーJSAT が 4K ライブビューイング--アリスのコンサート映像を衛星伝送」,『C-Net Japan』2013 年 11 月 5 日, 2013.

須藤修:「ビッグデータ活用法でコンテスト—千葉市や福岡市など」,『日本経済新聞 Web 版』2013 年 11 月 12 日付け, 2013.

須藤修:「地デジ開始 10 周年式典。難視対策で“完全デジタル化”、東京五輪の 4K/8K 本格放送実現へ」,『AV Watch』2013 年 12 月 1 日, 2013.

須藤修:「地上デジタル放送開始 10 年」,『NHK News』2013 年 12 月 1 日, 2013.

須藤修:「地デジ放送 10 周年、都内で記念式典」,『TBS News』2013 年 12 月 1 日, 2013.

須藤修:「地デジ放送開始から 10 年:記念式典が開催」,『読売テレビ News and Weather』2013 年 12 月 1 日, 2013.

須藤修:「地デジ放送 10 周年の記念式典:「4K」などの次世代テレビも展示」,『フジニュースネットワーク』2013 年 12 月 1 日, 2013.

須藤修:「地デジ放送開始から 10 年:記念式典が開催」,『日テレ News24』2013 年 12 月 1 日, 2013.

須藤修:「<構想を企業と行政が一緒に提案>、オープンガバメント・コンソーシアムがシンポジウム開催」,『Nikkei BPnet』2013 年 12 月 3 日付け, 2013.

須藤修:「都内で地デジ放送 10 周年の記念式典、次世代テレビの展示も」,『AFPBB News』2013 年 12 月 4 日付け, 2013.

須藤修:「世界最先端 IT 国家は実現するか? OGC がシンポジウムを開催」,『IT Leaders』2013 年 12 月 5 日付け, 2013.

須藤修:「次世代放送推進フォーラムが、4K 映像の実証トライアルを実施」,『AFP BB News』2013 年 12 月 26 日付け, 2013.

須藤修:「CIO の役割は 10 年前より進化——世界最先端 IT 立国の実現に向け責任はますます重くなる」,『IT media エグゼクティブ』2014 年 1 月 29 日付け, 2014.

## 受賞

須藤修: 永年貢献表彰「一般社団法人「日本 IC カードシステム利用促進協議会」永年貢献表彰」, 一般社団法人「日本 IC カードシステム利用促進協議会」, 2013 年.

---

## 園田 茂人・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

## 変動するアジアの比較社会学

アジア、とりわけ中国系社会を対象に、アジア・バロメーターや中国四都市調査のデータを用い、その変化の諸層をひかくの視野から実証的に研究している。最近は、特に新中間層の台頭を視野に、その社会・文化的特徴や政治的な特徴から、どのようにアジアの変化をもたらすかについて考察を深めている。

## 日系企業のアジア進出への社会学的アプローチ

1991年から、日系企業のアジア進出をテーマに、社会学的調査を積み重ねている。2006年から07年にかけて、15年前に調査した日系企業(台湾、中国、タイ、マレーシア、インドネシア)を訪問し、その時系列的変化を追いかけて、2005年にはインドの日系企業調査を実施し、現地従業員の日系企業評価の比較を試みている。2009年からは、2001年に調査した中国の日系、韓国系、台湾系企業を対象に時系列調査を実施する計画をたてている。

### 研究業績(2013年度)

#### 著書

園田茂人(編):「はじめて出会う中国」, 有斐閣, 2013年.

園田茂人(編):「日中関係史 1972-2012 IV 民間」, 東京大学出版会, 2013年.

#### 分担著書

園田茂人:「社会学ワンダーランド」, 山本泰・佐藤健二・佐藤俊樹 編, 新世社, 2013年.

園田茂人:「グローバリゼーションと社会学—モダニティ・グローバリティ・社会的公正」, 宮島喬・船橋晴俊・友枝敏雄・遠藤薫 編, ミネルヴァ書房, 2013年.

Shigeto Sonoda: "Chinese Middle Classes: China, Taiwan, Macao and Hong Kong ", Michael Hsiao Hsin-Huang 編, Routledge, 2013年.

#### 雑誌論文

園田茂人:「佐々木先生、中国研究、そして社会学——ある共同研究者による追憶」, 社会学雑誌, No.30, pp.22-36, 2013年.

園田茂人・岸保行:「アジア日系企業における現地従業員の『まなざし』:時系列分析による知見から」, 組織科学, Vol.46, No.4, pp.19028, 2013年. 【査読有】

園田茂人:「まだ来ぬ政治の時代と中国理解」, 書齋の窓, No.10月, pp.75-79, 2013年. 【査読有】【一般向け】

園田茂人:「『社会爆発仮説』をめぐる」, 東亜, No.2月, pp.2-3, 2014年. 【一般向け】

## 講演・口頭発表

Shigeto Sonoda: "Is Asian Sociology Possible? : Challenges and Attainment of Three-year Project 'Frontier of Comparative Studies of Asian Societies'", Colloquium, Asia Center, Seoul National University, 2013. 【招待講演】

園田茂人: 「アジアのアジア認識図」, アジア政経学会設立 60 周年記念シンポジウム: アジア研究における「ボーダー」の意味とその変化, 2013. 【招待講演】

園田茂人: 「中国・アジア市場の特徴と拠点としての香港」, 関西日本香港協会: 香港・中国ビジネスセミナー, 2013. 【招待講演】【一般向け】

Shigeto Sonoda: "Comparing Citizen", New Tendency of Urban Transformation in East Asia: Internatinal Symposium, 2013. 【招待講演】

Shigeto Sonoda: "Reexamining Myth of the Social Volcano: Challenges and Attainments of Chinese Four-city Survey, 1997-2006", Internatinal Workshop on "Middle Class and Social Change in Contemporary China", 2014. 【招待講演】

園田茂人: 「中国人の心理と行動: 『関係』の作り方」, 九州日本香港協会「2014年春節セミナー」, 2014. 【招待講演】【一般向け】

Shigeto Sonoda: "Cancer Care as a Regional Issue: Insights from AsiaBarometer", 日韓共同セミナー「がんをめぐる日韓学際研究の検討」, 2014. 【招待講演】

Shigeto Sonoda: "IASA as a Geisha House: How we deal with Interdisciplinary Studies", New Horizons of Asian Studies: Asia Research Directors Conference, 2014. 【招待講演】

## 新聞・報道

園田茂人: 「注目される『動く中国人』の役割」, 毎日新聞 2 月 10 日, 2014.

---

## 鷹野 澄・教授

研究テーマ(主たるもの)

### IT を活用し情報で人の命と暮らしを守るという研究

地震災害など大規模災害に対して、情報通信技術(IT)を活用して情報を適切に提供して、人々の命と暮らしを守ることについて研究します。

### 建物や大型構造物の構造物ヘルスマモニタリングの研究

建物や大型構造物の劣化などの健康診断(ヘルスマモニタリング)のために、IT 強震計などのセンサーを活用して技術開発や応用の研究を進めています。

## 緊急地震速報などの即時的地震情報システムに関する研究

気象庁の緊急地震速報を活用するためには、利用者側でどのような対策をしたらいいのか、そのハード面での対策の研究からソフト面での取り組みなどについて研究します。

### 研究業績(2013 年度)

#### 雑誌論文

鷹野澄・鶴岡弘:「緊急地震速報はどのように放送すべきか—後続報の活用方法と放送開始条件の検討とその放送装置の開発—」, 東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究, Vol.86, pp.1-22, 2013 年.

鷹野澄・瀬藤一起:「首都圏強震動総合ネットワーク(SK-net)」, 東日本大震災合同調査報告書・共通編 1・地震・地震動, pp.96-99, 2013 年.

豊田堯博・鷹野澄:「弱い地震動を用いた建物の減衰定数の推定:東京大学の建物を対象として」, 地震研究所彙報, Vol.88, pp.1-36, 2013 年.【査読有】

#### 講演・口頭発表

瀬藤一起・鷹野澄・古村孝志・大木聖子・増田徹・伊藤貴盛:「インドヒマラヤ地域における強震動観測ネットワーク」, 日本地球惑星科学連合 2013 大会, 2013.

鷹野澄・伊藤貴盛:「建物用 IT 強震計を用いた地域防災情報システム～地域の地震速報メールの活用～」, 日本地球惑星科学連合 2013 大会, 2013.

鷹野澄・鶴岡弘・石黒佳彦:「緊急地震速報はどのように放送すべきか(2)—構内放送の開始条件はどうあるべきか—」, 日本災害情報学会第 15 回学会大会, 2013.

伊藤貴盛・鷹野澄・瀬藤一起・増田徹:「インドにおける建物常時微動観測」, 日本地震学会 2013 秋季大会, 2013.

鷹野澄・豊田堯博:「弱い地震動を利用した建物の減衰定数の推定」, 日本地震学会 2013 秋季大会, 2013.

鷹野澄・瀬藤一起・増田徹・伊藤貴盛:「ヒマラヤ地域における建物振動観測」, 日本地震学会 2013 秋季大会, 2013.

ト部卓・鷹野澄・鶴岡弘・中川茂樹:「 JDXnet/SINET4 上に実現した観測データ中継システム」, 日本地震学会 2013 秋季大会, 2013.

ト部卓・鷹野澄・鶴岡弘・中川茂樹:「地震観測データ流通システム JDXnet の現状とクラウド化」, ADVNET2013 シンポジウム・電子情報通信学会 IA 研究会共済, 2013.

---

## 田中 淳・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

## 災害情報論

災害による被害を軽減するために求められる災害情報の要件を、住民や市町村等利用者側の意志決定過程に関する実証研究の知見に基づき、実証的・理論的に解明し、具体的な提言に結び付けている。災害期の警報や避難勧告等、復旧・復興期の生活再建情報、事前の防災意識向上や防災教育など、各段階での課題を対象とする。

## 災害弱者対策

阪神・淡路大震災で高齢者や障害者に被害が大きかったことやハリケーン・カトリーナにおける人種や所得によって被害が異なったように、災害による影響は社会集団によって差違が生じる。この際は、地震や火山噴火、あるいは爆発と行った外力による被害の程度に留まらず、避難のしやすさや生活再建の円滑さなど長期的な側面を持つ。災害の過程で生じる社会格差の視座から、研究を進めている。

## 集合行動論

20世紀初頭に誕生した集合行動論は、パニックや都市暴動、社会運動など多様な創発的社会行動を理論的に分析してきた。ある意味、災害の社会学的研究もまたその流れをくんでいる。日常の制度や組織、役割など社会秩序が、災害により修正を余儀なくされるためである。災害研究の理論的バックグラウンドとして、集合行動論ならびにその批判的研究として登場した集合行為論の研究を行っている。

## 研究業績(2013年度)

### 雑誌論文

田中:「港湾機能からみた南海トラフ巨大地震津波被害想定の意味」, 港湾, Vol.vol.90, pp.6-7, 2013年. 【査読有】

田中 淳:「社会システムの想定外を防ぐ」, 予防時報,, No.No.256, pp.pp.6-7 , 2014年. 【一般向け】

田中 淳:「日本海沿岸住民意識調査にみる地震津波態度構造」, 東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究・調査研究編, Vol.Vol. 30, pp.pp.1-51, 2014年. 【査読有】

### 講演・口頭発表

田中 淳・地引泰人・黄欣悦・山内祐平:「知識構成過程への介入から見た防災教育の方向」, 日本災害情報学会 第15回 研究発表大会, 2013.

Atsushi Tanaka: "Lessons to our society for socail management from 3.11", The 9th International Symposium on Social Management System, 2013. 【招待講演】

---

## 田中 秀幸・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

## 産業技術のイノベーション・システムに関する研究

技術的限界に直面した産業においては、それを乗り越えるために不確実性の高い技術の方向性を明らかにするような焦点化が求められる。市場メカニズムは、そのような焦点化の機能が全般的に弱いために、従来は、国家のイニシアティブによって、企業の境界を越えたイノベーションの取り組みが進められてきた。しかしながら、近年、最先端の技術限界を突破するためには、必ずしもドメスティックな企業間協力だけでは対応が困難になってきており、それに伴い、国家でもなければ企業でもない非営利の中間組織がグローバルに展開することで、新たなイノベーション・モデル形成する例が生まれつつある。以上のような問題意識の下、産業技術のイノベーションにおける、市場、国家、企業、そして中間組織の機能などについての研究を進めている。

## 情報セキュリティの経済的相互依存関係に関する分析

情報システムのネットワーク化の進展によって、情報セキュリティは相互依存性が高まっている。相互依存的な環境下では、ある主体の情報セキュリティ水準は自らの管理努力だけではなく、ネットワークで接続された相手方のセキュリティ・マネジメントの影響も受けるようになる。こうした相互依存性は、外部効果を通じて市場の失敗をもたらすことになり、何らかの制度的な手当が必要となる。このような情報セキュリティを巡る組織の境界の変容に対して、いかなるインセンティブ設計があり得るのかなどについての研究を進めている。

## 地域情報化に関する研究

現在進められている電子自治体の取り組みは、行政内部の業務プロセスを抜本的に変えるのみならず、従来、行政の外側にあった主体との関係にも大きな変化をもたらす。具体的には、地域住民、地域企業やNPOとの相互関係を深めることで、新たな地域づくりが実現しつつある。電子自治体を契機として展開する地域情報化の中で、行政の境界がどのように変容し、いかなる制度が求められるかなどについての研究を行っている。

### 研究業績(2013年度)

#### 新聞・報道

田中 秀幸: 『『地域部活』で街ににぎわい』, 日本経済新聞, 2013年8月13日夕刊, 2013.

田中 秀幸: 「閑上の記憶 地図に刻む」, 河北新報, 2014年2月11日, 2014.

---

## 苗村 健・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

### 研究業績(2013年度)

---

## 中尾 彰宏・教授



## 研究テーマ(主たるもの)

### ネットワーク仮想化・オーバーレイネットワーク基盤構築技術の研究

オーバーレイネットワークの研究分野では、現在そして新しい将来のインターネットを支える様々なネットワークサービスやネットワークの仕組みを、インターネット内に埋め込まれた実験基盤(オーバーレイネットワークテストベッド)を用いることで実証実験し、性能評価や問題発見などを行うことを目的とする。本研究テーマでは、このような実証実験を広域で可能にする実験基盤の構築やノードの高度化技術の研究を目的とする。

### ネットワーク仮想化・オーバーレイネットワークを用いた経路制御技術の研究

オーバーレイルーティング(Overlay Routing)と呼ばれる、インターネットの可用性を向上したり様々なデータ通信の特性(QoS)を最適化する技術の研究を進めている。

### サステナブル・ネットワーク・サービス基盤技術の研究

インターネット上に実装されたネットワークサービスへの DoS アタックや DDoS アタックなどの脅威に対し、サーバの仮想化とプロセスのマイグレーションを利用してサステナブルなサービスを実現するための基盤技術を研究開発し可用性を向上する研究を進めている。

## 研究業績(2013 年度)

---

## 橋元 良明・教授

## 研究テーマ(主たるもの)

### 情報行動に関する社会心理学的分析

メディア利用やコミュニケーション行動などが、社会変化に伴ってどのような変容を遂げているのか、そうした情報行動のパターンを規定する要因は何か、等について社会心理学的観点から実証的に分析している

### メディアの効果、とくに青少年に及ぼす影響の研究

テレビやインターネットなどが社会生活や世論形成過程、青少年の精神的発達に及ぼす影響、携帯電話などの新しいコミュニケーション・ツールが対人関係、家族関係に及ぼす影響などを調査等の実証的手法で分析している。

### 言語的コミュニケーションの了解・伝達過程、変容に関する研究

言語的コミュニケーションに関し、おもに語用論的視点から了解・伝達構造を研究している。また、日本人の言語行動が、社会システムの変化とどのようににかかわっているか、あるいはマスメディアや新しいメディア・ツールの普及によってどのような影響をこうむっているのかに関する研究をおこなっている。

## 研究業績(2013年度)

### 雑誌論文

Yoshiaki HASHIMOTO: “Socio-Informatics and the World: Toward New Sharing and Creation”(シンポジウム発言録), Journal of Socio-Informatics, Vol.Vol.6, No.No.1, pp.29-57, 2013年.【査読有】

橋元良明:「新たな時代の情報の受容と発信」,『情報の科学と技術』, Vol.Vol.63, No.No.12, pp.480-485, 2013年.【査読有】

橋元良明:「曲がり角にきたマスメディア」,『日経広告研究所報』, Vol.vol.273, pp.28-34, 2014年.

橋元良明:「ほかのヒトの立場や考えが排除された中で自分たちにとって都合のいい情報の共有化が進む」,『Journalism』, No.No.285, pp.5-14, 2014年.【一般向け】

橋元良明、千葉直子、関良明、河井大介、菅野千尋:「誰がネットで情報遺漏するのか?」,『東京大学大学院情報学環 情報学研究 調査研究編』, No.No.30, pp.53-111, 2014年.【査読有】

橋元良明、小笠原盛浩、河井大介、長濱憲、菅野千尋:「ネット選挙解禁はどう受け入れられたか—パネル調査による選挙情報利用行動の実態」,『東京大学大学院情報学環 情報学研究 調査研究編』, No.No.30, pp.111-184, 2014年.【査読有】

### その他論文

橋元良明他:「社会情報額と世界—新たな共有と創造に向けて(実証篇)[シンポジウム発言録]」,『社会情報学』, 2013年.【査読有】

橋元良明:「ネット依存にならないために」,『東京くらしねっと』, 2013年.【査読有】【一般向け】

橋元良明、小笠原盛浩、河井大介、長濱憲、菅野千尋:「『初めてのネット選挙—調査から見たその受容と影響』」, 報告書, 橋元研究室・電通パブリックリレーションズの共同研究成果, 2013年.

橋元良明:「ネット依存の日本の特徴は「きずな依存」」, nippon.com(ネットジャーナル), 2013年.【一般向け】

橋元良明:「インターネット利用の光と影」,『ヘルシスト』vol.37,No.6, 2013年.【一般向け】

橋元良明:「インターネット利用の光と影」,『ヘルシスト』vol.37,No.6, 2013年.【一般向け】

### 講演・口頭発表

・大野志郎、堀川裕介、橋元良明:「青少年のモバイル利用とネットワーク依存—東京大学橋元研究室・総務省情報通信政策研究所共同研究から」, 情報通信学会, 2013.

橋元良明、千葉直子、堀川裕介、松田美佐、天笠邦一:「青少年のスマートフォン利用と有害情報接触・親子関係」, 情報通信学会情報行動研究会, 2013.

橋元良明:「『ネット依存』とは何か?—調査から見たその現実」, 東京都青少年問題協議会 講演, 2013.【招待講演】

橋元良明:「はじめてのネット選挙—調査から見たその受容と影響」, 電通パブリックリレーションズ役員会 講演, 2013. 【招待講演】【一般向け】

Yoshiaki HASHIMOTO: “Trends in Japanese Information Behavior over the Past 15 Years”, The 5th International Conference on Social Informatics (SocInfo2013), 25–27 November 2013. Keynote speech, 2013. 【招待講演】

橋元良明:「日本人の情報行動、この 20 年の変化」, 第 20 回社会情報システム学記念シンポジウム～社会情報システム学のこれまでとこれから, 2014. 【招待講演】

橋元良明:「ネット時代のメディア利用状況」, マスコミ倫理懇談会, 2014. 【招待講演】【一般向け】

橋元良明:「ネット依存を考える」, 日本パーソナリティ心理学会主催 公開シンポジウム, 2014. 【招待講演】

橋元良明:「どうなる! タブレット・スマホ時代」, コンピュータ教育推進センター「教育の情報化推進フォーラム 総括パネルディスカッション」, 2014. 【招待講演】

## 新聞・報道

橋元良明:「子どものネット依存 対策は?」にコメント, 『毎日新聞』(朝刊 9 面), 2013.

橋元良明:「若者、文字離れしていない」で 2012 年情報行動調査結果の紹介、コメント, 『朝日新聞』(夕刊 11 面), 2013.

橋元良明:「ネット選挙解禁」、インタビュー, NHK 朝のニュース「おはよう日本(7 時～)」, 2013.

橋元良明:「つぶやかれた河村氏、ネット露出効果どこまで」, コメント, 『朝日新聞』(名古屋本社版、朝刊 35 面), 2013.

橋元良明:「テレビは信頼されているか?」, TBS「TBS レビュー」, 2013.

橋元良明:「シニアに好評 新家電」でタブレット型端末の普及についてコメント, 『毎日新聞』(朝刊 25 面), 2013.

橋元良明:「ネット選挙解禁の効果に関する調査結果、インタビュー」, NHK 午後 6 時のニュース, 2013.

橋元良明:「ネット選挙、『接した』2 割」でネット選挙解禁の効果に関する橋元研究室の調査結果について報道、コメント, 『朝日新聞』(朝刊 37 面), 2013.

橋元良明:「なぜ増える、YouTube への犯罪的動画投稿」コメントインタビュー, テレビ朝日『モーニング・バード』, 2013.

橋元良明:「ネット依存の子どもたち(上)“つながり”に縛られ」「ネット依存の子どもたち(下)絶対悪視は逆効果」ともにコメント, 『東京新聞』(朝刊 18 面 19 面), 2013.

橋元良明:「軽い投稿 重い代償—ネットに写真 告訴・賠償請求も」にコメント, 『朝日』(大阪本社版、朝刊 33 面), 2013.

橋元良明:「中高年を蝕む『ネット依存』」にコメント, 『週刊朝日』11 月 1 日号, 2013.

橋元良明: 「「SNS との付き合い方」, インタビュー記事」, 『東京大学新聞』(3 面), 2013.

橋元良明: 「『東京大学新聞』(3 面), 『読売新聞』(朝刊 15 面), 2013.

橋元良明: 「「サイバーウォーズⅢ」に「ネットでのトラブルを防ぐ主なコツ」のコメント」, 『読売新聞』(朝刊 36 面), 2013.

橋元良明: 「「ネット投稿 悪ふざけダメ」にコメント」, 『読売新聞』(朝刊 25 面), 2014.

橋元良明: 「Media Times 欄「ネットのデマ 許す空気」にコメント」, 『朝日新聞』(朝刊 37 面), 2014.

橋元良明: 「「歯止めなく次々炎上 ネット上のデマ拡散」にコメント」, 『東京新聞』(朝刊 28 面), 2014.

---

## 林 香里・教授

研究テーマ(主たるもの)

### ジャーナリズムの自由主義イデオロギーについて、フェミニズム倫理「ケアの倫理」からの批判的検討

ジャーナリズムは 17 世紀より自由主義イデオロギーとともに発展してきた。それはマスメディアというシステムとともに自由市場で拡大することによって、そのイデオロギーを一層先鋭化させてきた。しかし、今日の情報化とグローバル化状況において、自由主義思想も再検討を迫られており、ジャーナリズムにおいても自由主義的発想の対案を考えていかななくてはならない。こうした新しいジャーナリズムの倫理について、とくに自由主義の批判理論であるフェミニズム倫理である「ケアの倫理」を応用して研究を進めている。

### 各国のジャーナリズム制度ならびに言説の国際的比較分析

欧米や東アジア諸国のジャーナリズム研究者と共同で、各国のジャーナリズムの制度および言説の比較研究を行っている。制度の違いがニュース報道の内容にどこまで影響するかについて、さまざまな事例をもとに行っている。日本証券奨学財団、二十一世紀文化学術財団学術奨励金、三菱財団から、寄附金を受け、多角的な報道比較研究を進めている。1) 東アジアを中心としたテレビ・ニュース番組の比較。とりわけ制度的相違から演繹される内容の多様性の位相を研究している。2) 福島第一原子力発電所事故に際して、日、独、米、中、韓国の 5 か国比較を行っている。3) メディアシステム、政治文化と市民の情報力の連関について: 8 か国国際比較研究(科学研究費補助金(B) 2009-2012)の成果をもとに、さらに発展的にテレビ、およびウェブジャーナリズムの比較を行っている。4) 以上の実証的研究とともに、「国際メディア比較論」の方法論の洗練をめざしている。

### メディア産業構造変動から見る報道職とジャーナリズムの将来: 東アジア国際比較研究

従来のマスメディア産業は、コンジット(conduit, 伝送経路)とコンテンツ(contents)の垂直統合を基本にして、コンテンツはプロフェッショナルが媒体ごと、会社内の枠組みごとに制作するという仕組みを踏襲してきた。しかし、近年、垂直統合は解体され、コンテンツの制作方法では多様化と分業が進んでいる。こうして、報道の世界でも、産業構造、ならびにジャーナリスト(報道職)という職業プロフィールは大きな変動期にある。本プロジェクトは、科学研究費補助

金(B)を受けて、産業構造分析の専門者とメディア研究の専門者との共同研究とし、メディア産業の構造変動を見極め、それに規定されるジャーナリスト(報道職)の職業プロフィールの変容過程を明らかにし、現代ジャーナリズムの総合的考察を試みる。調査では、韓国、台湾、中国(香港)、日本の東アジア4カ国を対象とし、グローバル化する情報産業において各国の状況を比較・相対化することによって新しい時代のジャーナリズムのモデルを模索する。

## 研究業績(2013年度)

### 著書

林香里(谷岡理香と共編著):「テレビ報道職のワーク・ライフ・アンバランス 13局男女30人の聞き取り調査から」, 大月書店, 2013年.

### 分担著書

林香里:『エンサイクロペディア 現代ジャーナリズム』項目「自由主義理論」「社会的責任理論」「ステレオタイプ」「タブロイド化」「世論(世論調査)」「公衆」「ジェンダー」, 花田達朗 早稲田大学ジャーナリズム教育研究所編 編, 早稲田大学出版会, 2013年.

林香里:「「報道職」不在が問うローカル放送局のあり方」『テレビの未来と可能性 —関西からの発言』高橋信三記念放送文化振興基金創立20周年記念論文集, 公益信託高橋信三記念放送文化振興基金20周年記念事業事務局 編, 大阪公立大学共同出版会, 2013年.

林香里:「Giving Voice to the Voiceless 声なき人たちに声を与える」『グローバル・ジャスティス 新たな正義論への招待』第3章, 内藤正典・岡野八代 編, ミネルヴァ書房, 2013年.

林香里(鄭佳月と共著):「事故報道としての「福島」、政治報道としての「Fukushima」『メディアが震えた テレビ・ラジオと東日本大震災』, 丹羽美之、藤田真文 編, 東京大学出版会, 2013年.

### 雑誌論文

Rodney Tiffen, Paul K. Jones, David Rowe, Toril Aalberg, Sharon Coen, James Curran, Kaori Hayashi, Shanto Iyengar, Gianpietro Mazzoleni, Stylianos Papathanassopoulos, Hernando Rojas & Stuart Soroka: "Sources in the News. A Comparative Study.", *Journalism Studies.*, Vol.DOI:10.1080/1461670X.2013.831239., 2013年. 【査読有】

» Curran, James, Sharon Coen, Toril Aalberg, Kaori Hayashi, Paul K. Jones, Sergio Splendore, Stylianos Papathanassopoulos, David Rowe, Rod Tiffen: "Internet Revolution Revisited: A Comparative Study of Online News.", *Media Culture & Society*, Vol.35, No.7, pp. 880-897., 2013年. 【査読有】

Kaori Hayashi: "Japan's Newspaper Industry: Calm Before the Storm" published at <http://www.nippon.com/en/currents/d00097/> published on Nov. 6, 2013, 2013年. 【一般向け】

### 作品

林香里研究室、朝日新聞共同研究:「チラシでたどる震災1000日」2013年12月4日1面+デジタル版  
<http://www.asahi.com/articles/TKY201312040001.html>  
[http://www.asahi.com/shinsai\\_fukkou/otsuchiad/index\\_ie.html](http://www.asahi.com/shinsai_fukkou/otsuchiad/index_ie.html), 2013.

## 国際会議等

» Nakano, Kunihiro, Jingyuan YU, Rie Sakakibara, Toshiyuki Kitahara, Masaru Ariga, Kaori Hayashi, and Hideyuki Tanaka: "How Japanese Newspapers Contribute to Community Engagement", e-CASE & e-Tech, 2013, Kitakyushu: Kitakyushu International Conference Center, April 3-5, 2013. 【査読有】

Kaori Hayashi: "Professionalism in a Different Cultural Key: Who are "Journalists" in Japan?", Paper presented at the Conference "Advancing Media Production Research." International Communications Association (ICA) Post-Conference. International Association for Media and Communication Research (IAMCR) Pre-conference. University of Leeds, June 24 2013. 【査読有】

June Woong Rhee, Yukio Maeda, Lee Misook, Kaori Hayashi: "Social Impacts of Public Broadcasting. News in Japan and South Korea", International Communications Association (ICA) London. 19 June 2013. 【査読有】

Stuart Soroka, Blake Andrew, Toril Aalberg, Shanto Iyengar, James Curran, Sharon Coen, Kaori Hayashi, Paul Jones, Gianpetro Mazzoleni, Yukio Maeda, June Woong Rhee, David Rowe, Paul Jones and Rod Tiffen: "Media Systems, Public Knowledge and Political Engagement.: An 11-Nation Study.", International Communications Association (ICA) London, 21 June 2013. 【査読有】

## その他論文

信濃毎日新聞社: 「信濃毎日新聞創刊 140 周年特集、座談会。池澤夏樹さん、吉岡忍さんとともに。」, 信濃毎日新聞 2013 年 7 月 5 日、18, 19 面, 2013 年。【一般向け】

林香里: 「書評『東日本大震災 希望の種をまく人びと』(明石書店、寺島英弥著)」, 河北新報書評欄、2013 年 3 月 17 日。、2013 年。【一般向け】

## 講演・口頭発表

マーティン・ファクラー(ニューヨーク・タイムズ東京支局長)、デイヴィッド・マクニール(インディペンデント紙記者)、徐義東(ソ・ウイドン)(京郷新聞記者)、コーディネーター 林香里(東大大学院情報学環教授): 「MIC 主催 緊急シンポジウム「外国特派員が見る今の日本」」, 2013 年 4 月 27 日(土) 13:30-17:00 アカデミー茗台・レクリエーションホール B, 2013. 【招待講演】【一般向け】

Kaori Hayashi: "Reassessing the "Publicness" of Japanese Mass Media after the Earthquake, Tsunami and Nuclear Disasters of March 2011.", Key note speech at the China Communication Society 2013 Annual Conference and 9th Media and Environment International Conference. July 13, 2013 at the Fu Jen Catholic University, Taipei, Taiwan. Conference Theme "Reflections and Challenges on the Public Nature of Media in the Changing Environment", 2013. 【招待講演】

林香里: 「世界から見る日本のメディア」, 2013 年 9 月 5 日、平成 25 年政策担当秘書研修、衆議院, 2013. 【招待講演】

林香里: 基調講演「<オンナ・コドモ>のジャーナリズムから福島を見る」, シンポジウム「<オンナ・コドモ>のジャーナリズム 福島のお母さんたちとともに」 主催 さぼ一と紡(つむぎ・避難ママの会)、(特) OurPlanetTV・龍谷大学松浦さと子研究室 後援(特) 京都コミュニティ放送、2013 年 9 月 23 日(月・祝) 11 時~17 時 龍谷大学アバンティ響都ホール(アバンティ 9F), 2013.

三宅洋平 ミュージシャン 日本アーティスト有識者会議(NAU)ほか、林香里司会:「デジタル・メディア時代の政治と選挙—日本における民主主義の現在」, 協力: 多文化メディア市民研究会、早稲田大学メディア・シティズンシップ研究所、主催 日本学術会議社会学委員会メディア文化研究分科会シンポジウム, 2013.

## 受賞

林香里: 第4回内川芳美記念マス・コミュニケーション学会賞受賞『<オンナ・コドモ>のジャーナリズム —ケアの倫理とともに』岩波書店, 日本マス・コミュニケーション学会, 2013年.

---

## 馬場 章・教授

研究テーマ(主たるもの)

### 日本近世経済史

日本近世の度量衡をはじめとする計量制度、三貨を中心とする貨幣制度を文献資料と現物資料の連関に注目して実証的に解明する。

### デジタルアーカイブズ科学

文化資源のデジタル化の理論と方法について研究する。

### コンテンツ創造科学

デジタルコンテンツ、とりわけ電子的なゲームの面白さの解明とそれを構造化した制作理論の構築、およびシリアスゲームについて研究する。

研究業績(2013年度)

---

## 古村 孝志・教授

研究テーマ(主たるもの)

### 地震とその揺れの可視化

大地震による強い揺れの発生と、平野での揺れの増幅を高密度地震観測データ解析と、地震波伝播のコンピュータシミュレーションをもとに調べている。地震波伝播の可視化技法の開発と、地球シミュレータおよび次世代スパコンを用いた大規模並列シミュレーションの開発も進めている。

## 研究業績(2013 年度)

---

### 松田 康博・教授

#### 研究テーマ(主たるもの)

#### 東アジア国際政治研究

日・米・中・台関係を中心とした東アジアの地域政治の研究を行っている。

#### 中国および台湾の政治・対外関係・安全保障

中国および台湾の内政と対外関係がどのような連関を有しているか、また安全保障の観点からそれぞれが米国や日本など第三国との関係をどのように発展させようとしているか等について研究を行っている。

#### 中台関係論

アーカイブ、二次資料、インタビュー等を基に、実証的な中台関係史研究(1945-現在)を行っている。主たる関心は、軍事闘争から外交闘争やアイデンティティ政治や経済ゲームへと変遷してきた中台関係の将来展望である。

## 研究業績(2013 年度)

### 分担著書

松田康博:「蔣介石研究—政治・戦争・日本—」, 山田辰雄, 松重充浩 編, 東方書店, 2013 年.

松田康博:「馬英九政府下の兩岸関係—自立與繁榮の困境」, 松田康博・蔡增家 編, 国立政治大学当代日本研究中心, 2013 年.

松田康博:「中国と台湾の『共生』は可能か?」, 今村弘子 編, 原書房, 2013 年.

Yasuhiro Matsuda: “Japan-Taiwan Relations under DPJ and KMT Administrations in International Context”, Ocean Policy Research Foundation and Prospect Foundation 編, Tokyo: Ocean Policy Research Foundation, 2013 年.

### 雑誌論文

松田康博:「台湾をめぐる米中関係の変動要因とは何か?」, 東亜, No.549, pp.PP92-100, 2013 年.

Yasuhiro Matsuda: “How to Understand China’s Assertiveness since 2009: Hypotheses and Policy Implications”, Working Paper for Strategic Japan Project, Center for Strategic & International Studie, pp.118-136, 2014 年.

松田康博:「馬英九政権下の中台関係(2008-2013)—経済的依存から政治的依存へ?」, 東洋文化, No.94, pp.P205-233, 2014 年.【査読有】



## 国際会議等

松田康博: “日本の対華戦略—面向穩定的日中関係—”, 中国太平洋論壇, 2013. 【査読有】

## 講演・口頭発表

松田康博: 「日本の国家安全保障会議(NSC)はどうあるべきか?」, 日本防衛学会平成 25 年度秋季研究大会・共通論題部会, 2013. 【招待講演】

## 新聞・報道

松田康博: 「中国の過剰反応は尖閣諸島問題に関する弱さの現れ」, AJW フォーラム, 2013. 【一般向け】

松田康博: 「現実主義に徹し周辺国と関係強化を」, 朝雲, 2013. 【一般向け】

松田康博: 「友好条約違反 極めて不適切」, 日本経済新聞, 2013. 【一般向け】

松田康博: 「南方周末の記事書き換え事件について」, news every (日本テレビ), 2013. 【一般向け】

松田康博: 「軍独走の可能性」, 読賣新聞(夕刊), 2013. 【一般向け】

松田康博: 「台湾海峡危機と尖閣諸島危機—戦争と平和の間で」, 『情報学研究』No.84, 2013. 【一般向け】

松田康博: 「中国の軍拡と対日関係について」, 今日日本(BS 朝日), 2013. 【一般向け】

松田康博: 「中国の新体制と中台関係について」, スーパーニュース(フジテレビ), 2013. 【一般向け】

松田康博: 「始動した習近平外交について」, TBS ニュースバード(TBS), 2013. 【一般向け】

松田康博: 「日本の孤立化も狙い 関係安定化望む」, 共同通信, 2013. 【一般向け】

松田康博: 「従来の安保政策見直しが必要」, 日本経済新聞, 2013. 【一般向け】

松田康博: 「現代中国を理解するための視点—直面する『四つの罨』—」, 『歴史地理教育—いま知りたい素顔の中国—』 No. 807, 2013. 【一般向け】

松田康博: 「中国の戦略トレンド—岐路に立つ大国が直面する機会と罨」, 公益財団法人日本国際問題研究所ホームページ, 2013. 【一般向け】

松田康博: 「尖閣問題をどのように解決していけばいいのか」, 言論 NPO, 2013. 【一般向け】

松田康博: 「日本版 NSC 設置へ—『人材』と『組織』が機能強化のカギ—」, 『WEDGE』第 25 巻第 11 号(通巻 273 号), 2013. 【一般向け】

松田康博: 「日中衝突の懸念高まる」, 熊本日日新聞, 2013. 【一般向け】

松田康博: 「相当な挑発行為」, 河北新報, 2013. 【一般向け】

松田康博:「情報の質カギ」, 日本経済新聞, 2013. 【一般向け】

松田康博:「政府、議事録に腰重く」, 毎日新聞, 2013. 【一般向け】

松田康博:「習近平・バイデン会談について」, WIDE! SCRAMBLE(テレビ朝日), 2013. 【一般向け】

---

## 水越 伸・教授

研究テーマ(主たるもの)

### ソシオ・メディア論

メディアを情報技術の側からだけでなく、人間や社会の営みの側からもとらえるメディア論の構築。そのための思想的方法論として「批判的メディア実践」を構想、実践している。

### メディア史

19世紀後半から20世紀半ばにかけての電氣的メディア、電子的メディアをめぐる技術と社会のダイナミズムについての歴史的研究。

### メディア・リテラシー

メディア・リテラシーについての理論と実践に関する総合的な研究。

研究業績(2013年度)

### 著書

水越伸:「改訂版 21世紀メディア論」, 放送大学教育振興会, 2014年.

### 分担著書

水越伸:「書きとめられた光たち」(嶋田厚著作集第1巻『生態としてのコミュニケーション』所収), 嶋田厚 編, 新宿書房, 2013年.

水越伸:「メディアと社会」(『現代用語の基礎知識 2014』所収), 自由国民社 編, 自由国民社, 2013年.

### 作品

水越伸、安齋勇樹:「Ice Break 01」, 東京大学ソーシャル ICT グローバル・クリエイティブリーダー育成プログラム(GCL)／グローバル・デザイン・ワークショップ(GDWS)WS A, 2013.

水越伸、大谷智子:「科学技術戦隊 WS 2」, 東京大学ソーシャル ICT グローバル・クリエイティブリーダー育成プログラム (GCL) / グローバル・デザイン・ワークショップ (GDWS) WS A, 2013.

水越伸、安齋勇樹:「Ice Break 02」, 東京大学ソーシャル ICT グローバル・クリエイティブリーダー育成プログラム (GCL) / グローバル・デザイン・ワークショップ (GDWS) WS A, 2013.

水越伸、安齋勇樹:「科学技術戦隊 WS 3」, 東京大学ソーシャル ICT グローバル・クリエイティブリーダー育成プログラム (GCL) / グローバル・デザイン・ワークショップ (GDWS) WS A, 2013.

水越伸:「生涯学習サポーター養成コース「区民メディアリポーターになろう!」」, 平成 24 年度中央区民カレッジ, 2013.

## 講演・口頭発表

Shin Mizukoshi and Kiyoko Toriumi: "Long Term-Redesigning: Mass Media and Grass-roots activities after 3.11", London Asia Pacific Cultural Studies Forum, 2013. 【一般向け】

Kiyoko Toriumi and Shin Mizukoshi: "Comikaruta: A practical and critical examination of mobile media play for civic engagement in Japan", Nordmedia 2013: Defending Democracy, 2013.

Shin Mizukoshi: "Case Fukushima: People's reflections after 3/11 and nuclear influence", Case Pyhäjoki, 2013. 【招待講演】【一般向け】

水越伸:「ラジオ生態系の遷移(司会)」, シンポジウム「ラジオのメディア・エコロジー」, 2013. 【一般向け】

水越伸:「ラジオの身体・ラジオの政治(パネリスト)」, シンポジウム「ラジオのメディア・エコロジー」, 2013. 【一般向け】

水越伸:「基調講演「メディアの森の育て方」」, 第二回いわき地域復興センターフォーラム, 2013. 【招待講演】【一般向け】

Shin Mizukoshi: "Media Literacy in East Asia: Reflecting and Exploring the Trial of "MELL"" , 2013 UT-SNU Joint-Symposium, 2013.

水越伸:「デジタル民芸としてのメディア遊び:ラジオ、ケータイ、ストーリーテリング」, 総括コロキウム「社会システム〈芸術〉とその変容」, 2014.

水越伸:「情報化と社会教育」, 社会教育主事講習, 2014. 【招待講演】【一般向け】

## 新聞・報道

水越伸:「こちら特報部 ニュースの追跡「ツイッター速報で評価?」」, 東京新聞, 2013.

水越伸:「デジタルの利点を生かせ」, 東京大学新聞, 2013.

## 目黒 公郎・教授

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2013 年度)

### 雑誌論文

近藤伸也, 目黒公郎: 「防災関連学会における研究分野の動向分析に関する基礎的研究」, 地域安全学会論文集, No.No.19, 2013 年. 【査読有】

---

## 山口 いつ子・教授

研究テーマ(主たるもの)

### 情報環境のスマート化の下での情報法の理論体系と価値調整に関する日米欧比較制度研究

本研究は、長期的目標としている情報法の理論体系の構築に向けて、その中核となる短期・中期的プロジェクトとして位置づけられる。すなわち、本研究は、「ユビキタス化」の進化形とも言える最近の情報環境の「スマート化」に牽引される先端的な技術動向が、個人の自由・権利や社会制度等にもたらすインパクトを探るとともに、グローバル化の中で共通の課題に直面する米欧との比較制度分析の方法を用いて、これまでに積み重ねてきた、1) 情報法の基底にある諸価値をめぐる原理論的考察、2) 上記 1) よりも実践的なレベルでの、互いに対立する価値・利益間の調整をめぐる個別具体的な課題の検討、3) 上記 1) と 2) を総合して体系化するための理論枠組みに関する研究、という三つの軸での考察を、さらに拡充・深化させることを目的としている。

研究業績(2013 年度)

### 雑誌論文

山口いつ子: 「取材フィルムの提出命令と取材の自由—博多駅事件(最高裁昭和 44 年 11 月 26 日大法廷決定)」, 長谷部恭男・石川健治・尖戸常寿編『憲法判例百選 I(第 6 版)』別冊ジュリスト, No.217, 2013 年.

### その他論文

山口いつ子: 「ユビキタス時代の情報法における基底的価値とエンフォースメントに関する比較制度研究」, 科学研究費助成事業(科学研究費補助金)研究成果報告書[2009 年度~2012 年度], 2013 年.

---

## 吉見 俊哉・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

## 20 世紀日本とアメリカニズム

1920年代から敗戦を経て現在に至る日本の文化的アメリカニゼーションを焦点に、占領期における大衆意識の屈折、米軍基地の文化的影響、アメリカからの視線を媒介にした戦後のアイデンティティの再構築、消費社会的なリアリティを演じる自己の他者化といった歴史的展開を構造的に把握してきている。これまで国際関係や政治経済的な面からの日米関係の分析は多数なされてきたのに比べ、大衆文化やメディア文化、都市文化の面から戦後日本におけるアメリカニズムを歴史的に掘り下げていく研究をリードしてきた。とりわけ本研究は、日本と韓国、台湾、フィリピン、東南アジア諸国との連続性に視点を広げ、これらの東アジア諸国に点在したアメリカ軍基地と同地域に大衆文化の関心に関心を向けている。帝国主義期から冷戦期への流れのなかで、ポスト植民地主義や文化研究、新しい文化史の視座を十分に消化しながらこのテーマに本格的に取り組むものである。

## MALUI 連携とデジタル知識基盤

デジタル技術は活字と視聴覚を架橋し、これまで多様な方式で蓄積されてきた文化的記憶を統合的に扱う。こうした技術的可能性にいち早く着目し、新たな記憶のプラットフォームを構築してきたのは、グーグルをはじめとするグローバル企業である。しかし、20世紀の大衆消費社会における文化資源の生産・流通・消費のサイクルを支えたマスメディア産業に代わり、やがて地球規模で広がる新たな知識循環型社会における文化資源の保存と活用、価値の創造のサイクルを支えていくのは、これまで公共的な文化施設として整備されてきた図書館、博物館・美術館、文書館・資料館、フィルムセンター、番組アーカイブなどの機関と大学、この新たな体制に適応した文化産業の横断的な連携、すなわち MALUI 連携である。この場合、M は Museum、A は Archives、L は Library、U は University、I は Industry を示す。これらの公共的な文化・知識機関の連携により、いかにした新たなデジタル知識基盤を構築していくことができるかについて探究を進めている。

## 20 世紀東アジア文化史を書く

東アジアの若手研究者が共同で、20世紀全体を通じた東アジア文化史を書くことを目指している。これまで、Inter-Asia Cultural Studies や、Cultural Typhoon のプロジェクトで展開してきたネットワークと蓄積を基礎に、20世紀の東アジアが経験した様々な歴史をそれぞれの国民国家の枠を越えた仕方でも記述したい。特に、第一次世界大戦と西洋の後退の東アジアにおける文化的インパクト、1920～30年代の東アジアの諸都市におけるモダン文化の浮上、日本の軍事侵略と終戦、植民地独立戦争、冷戦と朝鮮戦争、ベトナム戦争、様々な「戦後」と「成長」の時代の到来、トランスナショナルなメディア文化と、東アジアが経験した20世紀を共通の歴史として、最初から国民国家を越えた視座と枠組みのなかで集团的に記述していく。

### 研究業績(2013年度)

#### 分担著書

吉見俊哉:「教育する大学:何が求められているのか」, 廣田照幸他 編, 岩波書店, 2013年.

吉見俊哉:「文化社会学基本文献集 別巻」, 吉見俊哉 編, 日本図書センター, 2014年.

## 雑誌論文

吉見俊哉:「知識循環型社会における現代日本文化資産のデジタル化 : ビジネスアーカイブズへの提言のために」, 拡がるアーカイブズの世界, No.8, pp.44-59, 2013 年. 【一般向け】

吉見俊哉:「メディアとしての大学:大学の危機を思想史から問う」, 近代教育フォーラム, No.22, pp.121-133, 2013 年.

吉見俊哉:「デジタル時代における知識循環型社会の価値創造基盤」, 情報管理, Vol.56, No.8, pp.491-497, 2013 年.

吉見俊哉:「2020 年の東京オリンピックに注文する」, 東京人, Vol.28, No.12, pp.120-123, 2013 年. 【一般向け】

吉見俊哉:「セゾン文化とは何だったのか」, 東京人, Vol.29, No.4, pp.129-132, 2014 年. 【一般向け】

吉見俊哉:「〈近代〉の入口と出口のあいだ : 異なる回路へ」, 書齋の窓, No.632, pp.25-29, 2014 年. 【一般向け】

## 講演・口頭発表

YOSHIMI Shunya: "Visuality and City : Movie Theaters, Street Corner TV and Kamishibai in Postwar Tokyo", Israeli Association for Japanese Studies, 2013. 【招待講演】

吉見俊哉:「新たなる大航海時代、大学に未来はあるか?」, 電通育英会 奨学生の集い, 2013. 【招待講演】【一般向け】

YOSHIMI Shunya: "Fostering Human Resources in the Age of Globalization Global Academic Miyamoto Musashism?", Norway-Japan Workshop 2013, 2013. 【招待講演】【一般向け】

吉見俊哉:「災後の地域と文化:文化のサスティナビリティと記憶の拠点化」, 地域創造フェスティバル 2013, 2013. 【招待講演】【一般向け】

吉見俊哉:「大学に未来はあるか? : 21 世紀の大学像を求めて」, IDE 九州支部セミナー, 2013. 【招待講演】

吉見俊哉:「大学の未来: 21 世紀の難問」, 近畿地区大学教育研究会, 2013. 【招待講演】

YOSHIMI Shunya: "Japan's 'Othering' of America and Asia: Self-Occidentalism/Orientalism in the Postwar Period", East Asian Images of Japan, Kyushu University, 2013. 【招待講演】

YOSHIMI Shunya: "University as Media A Frontier for Media Studies Tomorrow", ICA Shanghai Regional Conference, 2013. 【招待講演】

YOSHIMI Shunya: 「Atoms for Dream Holding the American Umbrella in the Atomic Driving Rain」, U.S.- Japan Research Institute, 2014. 【招待講演】

---

## 暦本 純一・教授

研究テーマ(主たるもの)

Human Computer Interaction

Ubiquitous Computing

Reality Sensing

研究業績(2013 年度)

---

石川 徹・准教授

研究テーマ(主たるもの)

空間における人間の認知・心理・行動

空間とは、その中で生活・行動する人間にとって、身近でありかつ欠くことのできない存在ですが、われわれはいつたいどのように周りの空間をとらえているのでしょうか。私たちが周辺の空間・場所についての知識を獲得し、頭の中に記憶し、その知識を利用する一連のプロセスと、得られた知識(「頭の中の地図」)の構造について、とくに興味をもって研究をおこなっています。また、空間能力や方向感覚、広く科学・工学分野において重要性が指摘されている空間的思考の問題についても、実証的な研究を進めています。さらに、私たちはどのような都市空間に住みたいと思うのか、今後の縮小社会に求められる新たな都市計画の枠組みはどのようなものかなどといった、広く都市居住の諸問題に関する心理的分析も、重要な研究課題のひとつです。

空間情報の表現・伝達と利用

視覚化という方法は、空間的(および非空間的)現象を表現するのに適した方法ですが、その一方で、地図やグラフの理解はそう単純ではないこともわかっています。また、認知や学習のスタイル・好みにも個人差があり、たとえば、視覚的な方法を好む人と、言語的な方法を好む人がいます。さらに、空間の情報を伝える言葉(表現)に関しては、特有の「曖昧さ」が存在します。このような問題を意識しながら、利用者の属性や目的に応じて効果的に空間の情報を提示する方法はあるのでしょうか。とくに、ユビキタスネットワークを代表とする新しい情報技術とそれを利用する人間の認知・行動の問題(ユビキタス都市における空間行動)に関心をもって研究を進めています。

ユビキタスコンピューティング技術の都市空間への応用

最近の情報通信技術の発達により、「いつでも、どこでも、だれでも」が必要な情報を状況に応じて取得できる技術環境、いわゆるユビキタスコンピューティングが発達を遂げていますが、それと同時に、近年、地理空間情報および場所情報システムが社会的注目を集めており、ユビキタスコンピューティングの技術を現実の都市空間に展開していこうという動きが盛んになりつつあります。このような背景のもと、自律移動支援や公物管理業務の情報化など空間分野でのユビキタス技術の応用について、「空間と情報と人間のつながり」という視点から研究をおこなっています。

## 研究業績(2013 年度)

### 雑誌論文

石川 徹, 浅見泰司:「都市における用途混在および形態規制に対する居住者の意識と評価—嫌悪要因解消の効果と性能規定の可能性についての考察—」, 都市計画論文集, Vol. 48, No.1, pp.1-8, 2013 年. 【査読有】

石川 徹, 浅見泰司:「都市の居住環境と用途混在についての居住者の意識の分析」, 都市住宅学, Vol.81, pp.98-107, 2013 年. 【査読有】

石川 徹, 浅見泰司:「便利施設の住宅地への混在に関する居住者の心理的評価」, 都市計画論文集, Vol.48, No.3, pp.909-914, 2013 年. 【査読有】

Gao, X., Asami, Y., Zhou, Y., & Ishikawa, T.: "Preferences for floor plans of medium-sized apartments: A survey analysis in Beijing, China", Housing Studies, Vol.28, pp.429-452, 2013 年. 【査読有】

Wen, W., Ishikawa, T., & Sato, T.: "Individual differences in the encoding processes of egocentric and allocentric survey knowledge", Cognitive Science, Vol.37, pp.176-192, 2013 年. 【査読有】

Ishikawa, T.: "Geospatial thinking and spatial ability: An empirical examination of knowledge and reasoning in geographical science", The Professional Geographer, Vol.65, pp.636-646, 2013 年. 【査読有】

Ishikawa, T.: "Retention of memory for large-scale spaces", Memory, Vol.21, pp.807-817, 2013 年. 【査読有】

Takemiya, M., & Ishikawa, T.: "Strategy-based dynamic real-time route prediction", Spatial Information Theory (Lecture Notes in Computer Science), Vol.8116, pp.149-168, 2013 年. 【査読有】

Ishikawa, T.: "Spatial primitives from a cognitive perspective: Sensitivity to changes in various geometric properties", Spatial Information Theory (Lecture Notes in Computer Science), Vol.8116, pp.1-13, 2013 年. 【査読有】

### 国際会議等

Takemiya, M., & Ishikawa, T.: "On the relationship between individual differences in wayfinding performance and route prediction", International Geographical Union Kyoto Regional Conference (IGU 2013), 2013.

Takemiya, M., & Ishikawa, T.: "Strategy-based dynamic real-time route prediction", 11th International Conference on Spatial Information Theory (COSIT 2013), 2013. 【査読有】

Ishikawa, T.: "Spatial primitives from a cognitive perspective: Sensitivity to changes in various geometric properties", 11th International Conference on Spatial Information Theory (COSIT 2013), 2013. 【査読有】

### 講演・口頭発表

Takemiya, M., & Ishikawa, T.: "On the relationship between individual differences in wayfinding performance and route prediction", International Geographical Union Kyoto Regional Conference (IGU 2013), 2013.

Takemiya, M., & Ishikawa, T.: "Strategy-based dynamic real-time route prediction", 11th International Conference on Spatial Information Theory (COSIT 2013), 2013.



Ishikawa, T.: "Spatial primitives from a cognitive perspective: Sensitivity to changes in various geometric properties", 11th International Conference on Spatial Information Theory (COSIT 2013), 2013.

石川 徹, 浅見泰司:「利便施設の住宅地への混在に関する居住者の心理的評価」, 2013 年度(第 48 回)日本都市計画学会学術研究論文発表会, 2013.

石川徹:「ユビキタスと空間情報で知る人間・空間・行動」, 第 2 回情報学環・空間情報科学研究センター共同シンポジウム「ユビキタスで知る空間、ユビキタスで探る人間行動」, 2013. 【一般向け】

## 受賞

石川 徹(共同受賞): 日本不動産学会 2012 年度学会賞・著作賞(学術部門), 日本不動産学会, 2013 年.

石川 徹(共同受賞): 都市住宅学会 2013 年学会賞・著作賞受賞 都市住宅学会, 2013 年.

石川 徹(共同受賞): 日本地域学会 2013 年度学会賞・著作賞受賞, 日本地域学会, 2013 年.

---

## 伊東 乾・准教授

研究テーマ(主たるもの)

### 作曲・指揮

伊東は第二次世界大戦後の音楽思潮を前提に、セリエリズムなどアナログ技術を背景に進化した作曲技法をデジタルベースの音楽思考に拡大し、作曲と演奏の新たな可能性を開拓している。また特に指揮技法については筋の運動と音楽的な呼吸に基づき関節の回転角速度 Angular velocity に一元化した Boulez-Etoevoes-Ito の動生理的なメソッドを確立した。

### 動学的音楽基礎論

伊東はヒト聴覚のモード分節をもとに周期関数のスペクトルに基づくフーリエ解析の静的な枠組みを超えるべく複素周波数を導入、ラプラス解析に基づく動学的枠組みを定式化した。これにより時間に依存する音楽の 3 次元ダイナミクスを準線形モデル、非線形相関モデルなどを用いた一元的な解析が可能となる。従来経験的な暗黙知に留まった創作と上演の叡智を健在化し、音楽の可能性をシステムティックに拡大している。

### コンテンツ情報社会システム論

19 世紀、録音技術の発明、20 世紀ラジオ放送の創始以降、音楽・芸術表現と情報メディアとは切り離すことが不可能になった。1930 年代には人類初のファシズム状況を創発させてもいる。一メディア・コンテンツの脳認知評価等、具体的な実測データを採取しつつ、厚生経済や確率微分方程式など数理のモデル枠組みを併用しつつ、音声動画コンテンツの観点から情報社会システムを検討し、またその倫理の評価を行う。

研究業績(2013 年度)

## 著書

伊東 乾:「なぜ猫は鏡をみないか 音と心の進化誌」, NHK 出版, 2013 年.

## 雑誌論文

Y. Soeta, K. ITO: "Measurement of acoustic characteristics of Japanese Buddhist Temples in relation to sound source location and direction", J. Acoust. Soc., Vol.133, No.5, pp.2699-2710, 2013 年. 【査読有】

## 作品

伊東 乾(指揮):「楽劇「トリスタンとイゾルデ」完全ノーカット日本初演」, 東京クラングフォーラム 聖アンデレ教会 慶応義塾大学アートセンター, 2013.

辻井喬+伊東 乾:「海蜃の歌」, 福島能オペラプロジェクト, 2013.

Paul Celan / Ken Ito: 「Jenseits」, 東京クラングフォーラム, 2013.

澁澤龍彦／伊東 乾:「高丘親王航海記 儒艮」, 東京クラングフォーラム, 2013.

澁澤龍彦／伊東 乾:「高丘親王航海記 猿園」, 東京クラングフォーラム, 2013.

J. W. Goethe – K. ITO: 「Schlussgesang – FUKUSCHIMA FAUST」, Tokio Klangforum, 2013.

## 国際会議等

ITO, K et al: "A Proposal for New Methods for the Evaluation in the Changes of Sound Sources' Vertical Altitude", International Symposium on Temporal Design 6, 2013. 【査読有】

ITO, K. et al: "Dynamical Studies over the "Raum-Zeit" of Richard WAGNER's Music Drama 2 : The Wagner Tuba, Bass Trumpet and Seating Arrangements", International Symposium on Temporal Design 6, 2013. 【査読有】

ITO, K et al: "Dynamical Studies over the "Raum-Zeit" of Richard WAGNER's Music Drama 2 : The Wagner Tuba, Bass Trumpet and Seating Arrangements", International Symposium on Temporal Design 6, 2013. 【査読有】

ITO, K et al: "Several Remarks for the Possible "Spatial-Temporal Ethics" --- Towards the Enlargement of Temporal Design for Moral, Philosophical Religious and Musical Targets", International Symposium on Temporal Design 6, 2013. 【査読有】

WATANABE, I. ITO, K. : "Non-linear Dynamical Sound Analysis of Ancient Buddhist Chant in Shu-ni-e Ritual of Todaiji Temple", International Symposium on Temporal Design 6, 2013. 【査読有】

WATANABE, I. ITO, K. : "Collective Phenomena in Ancient Buddhist Chant in Shu-ni-e Ritual of Todaiji Temple", International Symposium on Temporal Design 6, 2013. 【査読有】

## 講演・口頭発表

伊東 乾:「創造的復興教育の推進」, 慶応義塾大学 GSEC 福島復興プロジェクト, 2013. 【招待講演】

釈 徹宗+伊東 乾:「「笑う親鸞」と「おてらくご」」, 真宗大谷派名古屋別院・スペースサラナンセミナー, 2013. 【招待講演】【一般向け】

## 新聞・報道

伊東 乾:「常識の源流探訪」, 日経ビジネスオンライン, 2013.

伊東 乾:「世界の中の日本」, 日本ビジネスプレス, 2013.

---

## 大原 美保・准教授

研究テーマ(主たるもの)

### 緊急地震速報の効果的な利用法に関する研究

緊急地震速報を効果的に活用するために、地域における海溝型地震・活断層型地震の発生リスクを考慮した速報効果の検証、技術的戦略の提案を行うとともに、実際の速報発表時の住民の対応行動の調査や対応行動力向上のための環境整備を行っている。

### 人口減少を考慮した減災に向けた土地利用および防災施設配置に関する研究

わが国は長期の人口減少過程にある。将来の災害による被害を軽減するためには、災害リスクの少ない土地にあらかじめ人口・産業を誘導し、被害発生を未然に防ぐことが効果的である。本研究では、人口減少を考慮した上で、将来的に減災効果を生み出す土地利用方策や避難場所・避難所等の防災施設の配置方針について検討している。

### 組織の危機管理対応力の向上に関する研究

首都直下地震などの大規模災害時に、組織の事業・サービスを途絶することなく継続させるためには、組織の危機管理対応力を日頃から向上させておく必要がある。大原研究室では、大学・病院などの各種組織を対象とした、危機管理マニュアルのあり方や危機管理対応力を向上させるための方法論を研究している。

研究業績(2013 年度)

## 雑誌論文

藤生慎, 沼田宗純, 大原美保, 目黒公郎:「東日本大震災における建物被害認定調査の実態に関する分析」, 社会技術論文集, Vol.10, 2013 年. 【査読有】

## 新聞・報道

大原美保:「減災 男女の意識の違いから考える」, 山梨日日新聞, 2013.

---

## 岡本 剛和・准教授

研究テーマ(主たるもの)

### 情報通信政策論

情報通信に関する政策論とその客観的裏付けのための理論・手法を研究するもの。経済学からのアプローチ(実証分析を含む。)を第一義とするが、法制度論にも目配りする。研究対象国は我が国を含む OECD 加盟諸国が主たるものとなるが、論点によっては開発途上国をも視野に入れ検討を行う。

研究業績(2013 年度)

### 雑誌論文

岡本剛和、中村彰宏:「ローカル・ループ・アンバンドリングが OECD 加盟国における既存電気通信事業者の投資に与える影響について」, 公益事業研究, Vol.65, No.3, pp.13-24, 2013 年. 【査読有】

### 国際会議等

Yoshikazu Okamoto and Akihiro Nakamura: "The influence of local loop unbundling on investment by incumbent telecommunications operators in the OECD member countries", 24th European Regional Conference of International Telecommunications Society, pp.1-17, 2013. 【査読有】

---

## 上條 俊介・准教授

研究テーマ(主たるもの)

### 車載画像センサーの開発

交差点等の一般道において、歩行者や自転車を車の事故から守るための安全運転支援システムの開発が世界的に行われている。当研究室では、独自の画像処理技術を活かし、歩行者や自転車を車載カメラを用いて認識する技術を開発している。

## 路車協調型安全運転支援技術

路側センサーから交通状況を的確に把握し、危険状況をドライバーに知らせることで事故を回避するシステムの開発を行っている。本研究では、情報提供を受けたドライバーの受容性を考慮したセンサ開発を行うことが重要である。

## 時空間 Markov Random Field Model による時空間画像の領域分割

コンピュータ・ビジョンでは画像上で移動物体同士が重なった場合(オクルージョン)において、個々の物体を分離して追跡することが困難であった。そこで、本研究では、この問題を時空間画像の領域分割と等価であることを明確にし、時空間 Markov Random Field Model を定義した。これにより、オクルージョンが生じている場合でも正確に移動物体を画像上で分離することが可能となった。さらに、本手法は、低画角画像のようにオクルージョンが激しい場合でも効果的であることが証明された。

## 研究業績(2013 年度)

### 雑誌論文

Shunsuke Miura, Shoma Hisaka, Shunsuke Kamijo: "GPS Positioning with Multipath Detection and Rectification using 3D Maps", International Journal of Automotive Engineering, Vol.Vol.5, No.No.1, pp.pp. 23-29, 2013 年。【査読有】

Shoma Hisaka, Shunsuke Kamijo: "Object Detection using RSSI with Road Surface Reflection Model for Intersection Safety", IEICE, Vol. Vol.E96-A, No.No.6, pp.pp.1451-1459, 2013 年。【査読有】

Shunsuke Miura, Shunsuke Kamijo: "GPS Error Correction by Multipath Adaption", International Journal of Intelligent Transportation Systems Research, Vol.ISSN1348-8503, pp.pp.1-8, 2014 年。【査読有】

### 国際会議等

Shoma HISAKA, Shunsuke MIURA and Shunsuke KAMIJO: "Performance Assessment Study of Road User Sensing Method by RSSI Combinations at Real Intersections", 20th ITS World Congress, pp.3952, 2013. 【査読有】

Shunsuke Miura, Shoma Hisaka, and Shunsuke Kamijo: "GPS Positioning with Multipath Detection and Rectification using 3D Maps", 20th ITS World Congress, pp. 4172, 2013. 【査読有】

Hiromasa Niimi, Naohisa Aoki, Shunsuke Kamijo: "Offset optimization to maximize green-time overlap considering a platoon for network signal control", 20th ITS World Congress, pp.4074, 2013. 【査読有】

T. Matsunuma, H.Goto, A.Tanaka, S.Kamijo: "Development and Field-Testing of an image Sensor System with Existing Cameras", 20th ITS World Congress, pp.3918, 2013. 【査読有】

K.Ikeuchi, T.Oguchi, M.Kuwahara, S.Ono, T.Oishi, S.Kamijo, A.Mitsuyasu, K.Koide: "Social Feedback System for Promoting General Citizens to Change Their Travel Behavior using the CO2 Information System", 20th ITS World Congress, pp.3277, 2013. 【査読有】

Shunsuke Miura, Shoma Hisaka, and Shunsuke Kamijo: "GPS Multipath Detection and Rectification using 3D Maps", 16th International IEEE Annual Conference on Intelligent Transportation Systems, ITSC2013, pp.pp.1528-1534, 2013. 【査読有】

Naohisa Aoki, Hiromasa Niimi and Shunsuke Kamijo: "Offset Optimization of Traffic Signals to Maximize Green Time Overlap Considering the Vehicle Arrival Profile for Two-Dimensional Networks", 16th International IEEE Annual Conference on Intelligent Transportation Systems, ITSC2013, pp.pp.738-743, 2013. 【査読有】

Noriaki Kakiuchi and Shunsuke Kamijo: "Pedestrian Dead Reckoning for Mobile Phones through Walking and Running Mode Recognition", 16th International IEEE Annual Conference on Intelligent Transportation Systems, ITSC2013, pp.pp.261-267, 2013. 【査読有】

Shunsuke Miura, Feiyu Chen, Shunsuke Kamijo: "GPS Error Correction with Multipath Evaluation using 3D Maps", the Transportation Research Board 93th Annual Meeting 2014(TRB), 2014. 【査読有】

## その他論文

上條俊介:「マーケティング映像におけるパラメータ間関係を考慮した人物姿勢認識およびトラッキング」, 画像ラボ, 日本工業出版社,2014年3月,Vol.25 No.3, pp46-54, 2013年.

上條俊介:「車車・歩車間通信の相対RSSI計測によるポジショニング」, 自動車技術会会誌, 2014年2月, Vol.68, pp35-41, 2013年.

新見洋正,青木尚久,上條俊介:「大都市圏における車両センサを用いたリアルタイム交通信号制御」, 土木学会論文集, No.400/I-22, 2013年. 【査読有】

Hiroshi Makino, Shunsuke Kamijo and Takayasu Osara: "ITS-BASED SOLUTIONS FOR URBAN TRAFFIC PROBLEMS IN ASIA PASIFIC COUNTRIES", 生産研究,, Vol.65 No.6 通巻 695号, pp141-146, 2013年.

矢野進也, 上條俊介:「HOG特徴量とパーティクルフィルタを用いた車載カメラからの歩行者向き推定」, 自動車技術会 2013秋季大会, 126-20135753, 2013年. 【査読有】

## 講演・口頭発表

青木尚久,上條俊介:「車両到着プロファイルを考慮した青時間オーバーラップ最大化による二次元ネットワーク信号制御」, 電子情報通信学会技術研究報告, ITS2013-9, pp19-24, 2013.

垣内紀明,上條俊介:「歩行/走行モードを考慮した携帯端末向け歩行者デッドレコニング」, 電子情報通信学会技術研究報告, ITS2013-11, pp31-36, 2013.

三浦俊祐,上條俊介:「3次元地図情報を用いたマルチパス推定によるGNSS測位精度の改善」, 電子情報通信学会技術研究報告, ITS2013-12, pp37-42, 2013.

矢野進也,上條俊介:「車載カメラと歩車間通信による対歩行者衝突回避支援技術の研究」, STARCシンポジウム, 2014.

## 受賞

三浦俊祐: 修士論文「専攻長賞」3次元構造データを活用した都市部におけるGPSの測位精度改善に関する研究, 2013年.

## 特許

上條俊介、三浦俊祐:「位置検出装置及び位置検出方法」, 特願特願2013-106442, 2013年05月.

上條俊介、三浦俊祐:「位置検出装置、位置検出システム及び位置検出方法」, 特願特願2013-182191, 2013年09月.

上條俊介、三浦俊祐:「位置検出装置、位置検出システム及び位置検出方法」, 特願特願2014-060084, 2014年03月.

上條俊介、三浦俊祐:「位置検出装置、位置検出システム及び位置検出方法」, 特願特願2014-060111, 2014年03月.

---

## JASON G. KARLIN・准教授

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2013年度)

### 講演・口頭発表

Jason G. Karlin: "Precarious Consumption after 3.11: Mass Media and Idols in Risk Society", Cultural Typhoon, Tokyo Keizai University, 2013.

Jason G. Karlin: "Precarious Consumption after 3.11: Television, Charity, and the Semiotics of Tears", Contemporary Japan Group, Institute of Social Science, University of Tokyo, 2013.

---

## 菊地 大樹・准教授

研究テーマ(主たるもの)

### 日本仏教史

中世仏教については、8世紀から10世紀ごろまでの古代の状況を踏まえ、さらに11世紀から14世紀ぐらいまでの中世社会前期において、それが歴史・思想的にどのように継承され、展開していったのかという切り口から、「思想的

系譜論」を重視して研究してきました。6世紀ごろに仏教が渡来すると、列島側は単にそのインパクトに圧倒されていたわけではなく、それを柔軟に受け止めて列島的な要素を加え、徐々に自分のものとしていきます。中世の列島には、法然・親鸞・道元・日蓮ら、中世日本文化に大きな足跡を残し、現代にいたるまで強い文化的影響を与えた仏教史上の人物を多く輩出しています。私は、このような僧たちが出現する思想的背景に興味を引かれ、民衆仏教に関心を持っています。そこで、そのような民衆仏教を担ったヒジリの一群である持経者という宗教者に注目しています。今後は、さらにこのような中世の聖について研究するとともに、民衆の側からのみではなく、制度や権力の側からの中世仏教論の研究も進めていきたいと考えています。

## 金石文・石造物論

金石文とは、広く金属や石など紙以外の媒体に記された文字のことを指します。主に、対象物に紙を水張りし、上から油性の墨を置いて文字や図像を浮かび上がらせる拓本という伝統的な技法によって史料化を進めています。金石文研究は私の場合、宗教史研究から発展して興味を持つにいたった分野です。なぜならば日本の場合、中国やヨーロッパなどと異なり、特に中世の金石文・石造物はほとんどが宗教的な契機によって作成されています。それは何故か？この問いは単純なようですが、日本の金石文全体の特徴を考えてゆくうえで根本的な問題提起を含んでいます。私自身、日々そのことを念頭に置きながら研究を進めることにより、単に金石に書かれたテキストだけではなく、それが記された環境や受容者、歴史的な脈における意味づけについて考えを深めています。

## 古記録論

古記録とは、主に日記史料を指します。私の場合、史料編纂所では古記録研究のセクションに所属し、鎌倉時代の三条実朝という貴族の日記を中心に研究を進めています。前近代、特に中世貴族にとって、日記は家の継続のために日々の政務や儀式の内容を記録し、子孫に伝えるという機能を持ちました。しかしそのような機能的な日記の中にも、様々な当時の風俗が記され、時として個人の内面を吐露するような記述がなされることもあります。この意味で、日記史料は中世社会全般の実態を明らかにするうえで無限の可能性を秘めた史料群であるといえます。史料編纂所では、日記史料についても、単に書かれたテキストだけではなく、原本を詳細に観察して、そこから得られる様々な情報や日記の裏側に描かれた文書の研究をも進めています。

## 研究業績(2013年度)

### 分担著書

菊地大樹:「信念を説き続けた日蓮の書状を読む」, 大塚紀弘 編, 朝日出版社, 2013年.

菊地大樹:「事典日本の仏教」, 菱輪顕量 編, 吉川弘文館, 2014年.

### 雑誌論文

菊地大樹:「惣領制の展開と信心の継承—武蔵熊谷氏を中心に—」, 東京大学日本史研究室紀要別冊中世政治社会論叢, pp.115-129, 2013年.

### 講演・口頭発表

菊地大樹:「中世石造物にみる種子(悉曇)について」, 多分野交流の視角から見た日本仏教の国際的研究第3回例会, 2014.

菊地大樹:「悉曇・偈頌から見た中世金石文の教理的背景」, 日本宗教研究における新史料ワークショップ, 2014.



---

## 北田 暁大・准教授

研究テーマ(主たるもの)

### 日本メディア史の実証的研究

広告、映画、新聞など近代のコミュニケーション文化において重要な役割を果たしてきたメディアを、歴史社会学的な手法で分析している。その成果を公刊したのものとして、『広告の誕生』(2000年、岩波書店)、『<意味>への抗い』(2004年、せりか書房)などがある。

### 若者のコミュニケーション研究

現代若者たちのコミュニケーションの変容を、「保守化」傾向や「バックラッシュ」などの現象とあわせ、メディアの果たす役割に着目しつつ分析している。その成果を公刊したのものとして、『広告都市・東京』(2002年、廣済堂出版)、『嗟う日本の「ナショナリズム」』(2005年、NHK出版)などがある。

### 理論社会学、コミュニケーション理論についての基礎的研究

「行為の同定問題」、「行為(者)責任の生成メカニズム」など社会学基礎論にかかわるテーマについて、政治哲学、倫理的行為論なども射程に入れつつ、考察を加えている。その成果を公刊したのものとして『責任と正義』(2003年、勁草書房)がある。

研究業績(2013年度)

---

## Jordan Alexander Sand・准教授

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2013年度)

---

## 中野 公彦・准教授

研究テーマ(主たるもの)

## 生体信号計測を利用したモビリティ工学

運転している人の筋電位、発汗、脳波などの生体信号を計測し、緊張度、乗り心地、眠気などの運転者の状態を推定しています。これにより、車両特性および道路・インフラなどの評価を行っています。 ¥r¥n

## 視線計測によるカーナビゲーションディスプレイの安全性評価

カメラを使ってドライバの視線を計測することによって、様々なディスプレイサイズや位置に置かれたカーナビゲーション使用時の安全性などを評価しています。 ¥r¥n

## 力覚支援操舵

理想とする軌道からの偏差に応じた操舵反力をハンドルに与えることによって、なめらかな操舵を実現させることを目的とした運転支援です。運転者とシステムの意図が反するとより危険を増加させる可能性もあるため、人間の特性を考慮した制御方法の検討を行っています。

## 研究業績(2013年度)

### 雑誌論文

Rencheng Zheng, Kimihiko Nakano, Yuji Okamoto, Masanori Ohori, Shigeyuki Hori, Yoshihiro Suda: "Evaluation of Sternocleidomastoid Muscle Activity of a Passenger in Response to a Car's Lateral Acceleration While Slalom Driving", IEEE Transactions on Human-Machine Systems, Vol.43, No.4, pp.405-415, 2013年。【査読有】

Chihiro Nakagawa, Kimihiko Nakano, Yoshihiro Suda, Yuki Hirayama: "Steering performance of an inverted pendulum vehicle with pedals as a personal mobility vehicle", THEORETICAL & APPLIED MECHANICS LETTERS, Vol.3, 2013年。【査読有】

Rencheng Zheng, Kimihiko Nakano, Honggang Hu, Dongxu Su, Matthew P. Cartmell: "An application of stochastic resonance for energy harvesting in a bistable vibrating system", Journal of Sound and Vibration, Vol.333, No.12, pp.2568-2587, 2013年。【査読有】

中野公彦, 中森大樹, 鄭仁成, 大堀真敬, 須田義大: 「人間の動きを考慮した倒立振り子型パーソナルモビリティビークルの安定性解析」, 日本機械学会論文集(C編), Vol.79, No.801, pp.1427-1440, 2013年。【査読有】

中村弘毅, 中野公彦, 内山康宏, 柿原正治: 「路面状態推定のための独立成分分析の応用」, 日本機械学会論文集(C編), Vol.79, No.805, pp.3002-3013, 2013年。【査読有】

李昇勇, 中野公彦, 大堀真敬: 「絶対速度を利用した大型車両のヨー慣性モーメントの推定」, 日本機械学会論文集(C編), Vol.79, No.806, pp.3347-3357, 2013年。【査読有】

## 国際会議等

Kimihiko Nakano, Matthew P Cartmell, Honggang Hu, Rencheng Zheng: "Feasibility study on energy harvesting using stochastic resonance", RASD 2013, 2013。【査読有】

Hiroki Nakamura, Kimihiko Nakano, Takafumi Takagi, Fang Fang, Rencheng Zheng, Masanori Ohori, Sadahiro Kawahara: "Effectiveness of Haptic Guidance Steering under Distracted Situations", IAVSD 2013, 2013. 【査読有】

Rencheng Zheng, Shigeyuki Yamabe, Kimihiko Nakano, Toshiyuki Sugimachi, Yoshihiro Suda, Takeshi Watanabe, Shirou Nakano: "Lateral Control for Automatic Platooning of Trucks on a Truck Driving Simulator", IAVSD 2013, 2013. 【査読有】

Seungyoung Lee, Kimihiko Nakano, Masanori Ohori: "Estimation of the Parameters of a Vehicle Using GPS Sensor", The 3rd Japan-Korea International Joint Symposium on Dynamics& Control, 2013. 【査読有】

Rencheng Zheng, Kimihiko Nakano, Yonggeun Yi, Masanori Ohori, Yoshihiro Suda: "A novel automatic transport system using personal mobility vehicles", The 3rd Japan-Korea International Joint Symposium on Dynamics& Control, 2013. 【査読有】

Seungyoung Lee, Kimihiko Nakano, Masanori Ohori: "Identification of Yaw Moment of Inertia of a Truck during Travelling", 7th IFAC Symposium on Advances in Automotive Control, 2013. 【査読有】

Hiroki Nakamura, Kimihiko Nakano, Rencheng Zheng, Tatsuo Takahashi, Masanori Ohori, Takahumi Takagi, Shiro Nakano: "Evaluation of Driving Performance with Haptic Guidance Steering under Distracted Situation", Second International Symposium on Future Active Safety Technology toward zero-traffic-accident, 2013. 【査読有】

Yoshihiro Suda, Terrapat Rojana-arpa, Masahiko Aki, Kimihiko Nakano, Naohito Takasuka, Toshiki Isogai, Takeo Kawai: "Study on Road Surface Condition Monitoring Using Laser Radar", Second International Symposium on Future Active Safety Technology toward zero-traffic-accident, 2013. 【査読有】

Rencheng Zheng, Kimihiko Nakano, Shin Kato, Takeki Ogitsu, Shigeyuki Yamabe, Keiji Aoki, Yoshihiro Suda: "Human-Machine Interface System for Simulation-based Automatic Platooning of Trucks", 16th International IEEE Annual Conference on Intelligent Transportation Systems, 2013. 【査読有】

Seungyoung Lee, Kimihiko Nakano, Masanori Ohori, Masahiko Aki: "Estimation of the Yaw Moment of Inertia of a Vehicle for Automatic Platooning", 20th ITS WORLD CONGRESS TOKYO, 2013. 【査読有】

Hiroki Nakamura, Kimihiko Nakano, Rencheng Zheng, Masanori Ohori: "Estimation of a Drivers Stress based on Steering Admittance Measurement", 20th ITS WORLD CONGRESS TOKYO, 2013. 【査読有】

Shigeyuki Yamabe, Rencheng Zheng, Takeki Ogitsu, Shin Kato, Keiji Aoki, Kimihiko Nakano, Yoshihiro Suda, Masaya Segawa: "An Applicable Evaluation of Human Machine Interface for Cooperative Adaptive Cruise Control of Trucks using a Truck Driving Simulator System", 20th ITS WORLD CONGRESS TOKYO, 2013. 【査読有】

Rencheng Zheng, Kimihiko Nakano, Shigeyuki Yamabe, Yoshihiro Suda: "Safety Evaluation of System Failures in Formation and Separation Processes of Automatic Platooning of Trucks", 20th ITS WORLD CONGRESS TOKYO, 2013. 【査読有】

Rencheng Zheng, Shintaro Ono, Sungjoon Hong, Kimihiko Nakano, Shigeyuki Yamabe, Takayuki Hirasawa, Hiroshi Makino, Yoshihiro Suda, Katsushi Ikeuchi, Takashi Oguchi: "Preliminary Evaluation of Road-Traffic Safety Countermeasures utilizing National Digital Map in a Driving Simulator System", 20th ITS WORLD CONGRESS TOKYO, 2013. 【査読有】

Hiromitsu Ishiko, Kimihiko Nakano, Rencheng Zheng, Kenji Hagita, Makoto Kihira, Toshiya Yokozeke, Motohiko Takayanagi, Kenichiro Yano: "Evaluation of Safety of Car Navigation Systems using a Driving Simulator", 20th ITS WORLD CONGRESS TOKYO, 2013. 【査読有】

Masahiko Aki, Teerapat Rojanaarpa, Kimihiko Nakano, Yoshihiro Suda, Tomonori Kishinami, Naohito Takasuka, Toshiki Isogai, Takeo Kawai, Kazunori Onoguchi, Keiji Aoki: "Field Operation Test of Sensing System and ECU Function for Automatic Driving of Trailer-Type Truck", 20th ITS WORLD CONGRESS TOKYO, 2013. 【査読有】

Masahiko Aki, Kimihiko Nakano, Yoshihiro Suda, Yoshitada Suzuki, Hiroki Kawashima: "Development of Back-Up Brake System for Automatic Platooning Trucks", 20th ITS WORLD CONGRESS TOKYO, 2013. 【査読有】

Yoshihiro Suda, Kimihiko Nakano, Takayuki Hirasawa, Hidenori Yoshida, Takahiro Suzuki, Tomonori Hasegawa, Ichiro Sakamoto, Yasunori Yamamoto, Kouichi Kojima, Hideki Fujimoto, Koichi Higashi: "FOT of Innovative ASV in Hiroshima - V2V by Communication between Tramcars and Cars", 20th ITS WORLD CONGRESS TOKYO, 2013. 【査読有】

Chihiro Nakagawa, Kimihiko Nakano, Takaaki Koga, Yoshihiro Suda, Yohishiro Kawarasaki, Yusuke Kosaka: "Evaluation of Personal Space for Pedestrians Encountering Personal Mobility Vehicles", 20th ITS WORLD CONGRESS TOKYO, 2013. 【査読有】

Dongxu Su, Kimihiko Nakano, Honggang Hu, Matthew P. Cartmell, Masanori Ohori, Rencheng Zheng: "Further Application of Stochastic Resonance for Energy Harvesting", ASME 2013, 2013. 【査読有】

## その他論文

櫻井俊彰, 槇徹雄, 竹原昭一郎, 中野公彦, 須田義大: 「快適性向上レイアウト乗用車における前面衝突安全性の検討」, 自動車技術, No.05, Vol.67, pp.59-64, 2013 年.

Rencheng Zheng, Kimihiko Nakano, Shigeyuki Yamabe, Yoshihiro Suda: 「Safety Evaluation of System Failures in Formation and Separation Processes of Automatic Platooning of Trucks」, 生産研究, 2013 年.

Rencheng Zheng, Shigeyuki Yamabe, Takeki Ogitsu, Shin Kato, Keiji Aoki, Kimihiko Nakano, Yoshihiro Suda, Masaya Segawa: 「An Applicable Evaluation of Human Machine Interface for cooperative Adaptive Cruise Control of Trucks using a Truck Driving Simulator System」, 生産研究, 2013 年.

Hiromitsu Ishiko, Kimihiko Nakano, Rencheng Zheng, Kenji Hagita, Makoto Kihirakoto, Toshiya Yokozeke, Motohiko Takayanagi, Kenichiro Yano: 「Evaluation of Safety of Car Navigation Systems using a Driving Simulator」, 生産研究, 2013 年.

Seungyong Lee, Kimihiko Nakano, Masanori Ohori, Masahiko Aki: 「Estimation of the Yaw Moment of Inertia of a Vehicle for Automatic Platooning」, 生産研究, 2013 年.

Masahiko Aki, Teerapat Rojanaarpa, Kimihiko Nakano, Yoshihiro Suda, Tomonori Kishinami, Naohito Takasuka, Toshiki Isogai, Takeo Kawai, Kazunori Onoguchi, Keiji Aoki: 「Field Operation Test of Sensing System and ECU Function for Automatic Driving of Trailer-Type Truck」, 生産研究, 2013 年.

Masahiko Aki, Kimihiko Nakano, Yoshihiro Suda, Yoshitada Suzuki, Hiroki Kawashima: 「Development of Back-Up Brake System for Automatic Platooning Trucks」, 生産研究, 2013 年.

Yoshihiro Suda, Kimihiko Nakano, Takayuki Hirasawa, Hidenori Yoshida, Takahiro Suzuki, Tomonori Hasegawa, Ichiro Sakamoto, Yasunori Yamamoto, Kouichi Kojima, Hideki Fujimoto, Koichi Higashi: 「FOT of Innovative ASV in Hiroshima – V2V by Communication between Tramcars and Cars」, 生産研究, 2013 年.

Hiroki Nakamura, Kimihiko Nakano, Rencheng Zheng, Masanori Ohori: 「Estimation of a Drivers Stress based on Steering Admittance Measurement」, 生産研究, 2013 年.

## 講演・口頭発表

安藝雅彦: 「自動隊列走行におけるレーザレーダ路面状態推定に関する研究-エネルギーITS 推進事業における自動運転・隊列走行の開発-」, 自動車技術会学術講演会, 2013.

中野公彦: 「ドライビングシュミレータを用いた自動運転隊列走行トラックのドライブ行動解析」, 自動車技術会学術講演会, 2013.

須田義大: 「自動隊列走行における保安ブレーキ開発による安全性向上-エネルギーITS 推進事業における自動運転・隊列走行の開発-」, 自動車技術会学術講演会, 2013.

中村弘毅: 「ハプティックガイダンスステアリングに対する運転者の操舵挙動変化」, 自動車技術会学術講演会, 2013.

中村弘毅: 「速度適応型ハプティックガイダンスによる曲線通過精度の検討」, 第 13 回「運動と振動の制御」シンポジウム, 2013.

ギアダナファビオ: 「トラックドライビングシュミレータのダイナミクスにおけるドライバの感性評価」, 第 13 回「運動と振動の制御」シンポジウム, 2013.

李昇勇: 「GPS 計測システムを用いた走行中の車両ヨー慣性モーメント推定」, 日本機械学会 Dynamics and Design Conference 2013, 2013.

中野公彦: 「数値計算による鉄道車両における追従制御の実現可能性検討」, 日本機械学会 2013 年度年次大会, 2013.

石河宏光: 「ドライビングシュミレータによるカーナビゲーションシステムの安全性評価」, 日本機械学会 2013 年度年次大会, 2013.

須田義大: 「タイヤのひずみ計測による接触特性に関する研究」, 日本機械学会 2013 年度年次大会, 2013.

鄭仁成: 「ドライビングシュミレータを用いた CACC 走行用の HMI 評価」, 自動車技術会学術講演会, 2013.

中野公彦: 「ドライビングシュミレータを用いたエコドライブ支援システムの評価」, 自動車技術会学術講演, 2013.

鄭仁成: 「道路基盤地図情報を活用した交通安全対策の評価手法に関する研究」, 第 30 回日本道路会議, 2013.

中野公彦: 「カントの影響を考慮した走行車両のヨー慣性モーメントの推定」, 第 56 回自動制御連合講演会, 2013.

中村弘毅: 「速度適応型ハプティックガイダンスによる運転挙動変化の検討」, 第 56 回自動制御連合講演会, 2013.

中野公彦:「車間距離制御による鉄道車両の追従走行の実現可能性検討」, 第 20 回鉄道技術連合シンポジウム (J-RAIL2013), 2013.

李昇勇:「走行車両のヨー慣性モーメントの実時間推定」, 日本機械学会第 22 回交通・物流部門大会, 2013.

平沢隆之:「公共交通車両との車車間通信型 ASV 実証実験結果の速報」, 日本機械学会第 22 回交通・物流部門大会, 2013.

杉町敏之:「平時および災害時の先進モビリティにおける人間行動解析システムの研究開発」, 日本機械学会第 22 回交通・物流部門大会, 2013.

高橋樹生:「力覚操舵制御による進路誘導」, 日本機械学会第 22 回交通・物流部門大会, 2013.

石河宏光:「ドライビングシュミレータによる車内での情報提示方法の安全性評価」, 日本機械学会第 22 回交通・物流部門大会, 2013.

山邊茂之:「トラックドライビングシュミレータを用いた隊列走行形成時の危険に対するドライバの回避分析」, 日本機械学会第 22 回交通・物流部門大会, 2013.

李曙光:「脳の計測に基づくドライバの運転特性分析」, 日本機械学会第 22 回交通・物流部門大会, 2013.

杉町敏之:「ドライビングシュミレータによる道路標識、交通信号の安全運転への効果の評価」, 日本機械学会第 22 回交通・物流部門大会, 2013.

中野公彦:「鉄道車両における追従制御の実現性検討」, NU-Rail, 2013.

中野公彦:「運転支援・自動運転に向けての研究開発」, 第 17 回グローバル自動車産業研究会, 2013. 【招待講演】

中野公彦:「人間を中心にしたモビリティ工学」, 第 5 回先端技術導入促進セミナー, 2013. 【招待講演】

中野公彦:“Human Factor Research Using a Driving Simulator”, Global/Local Innovations for Next Generation Automobiles, 2013. 【招待講演】

中野公彦:「アクティブセーフティを目指したモビリティの計測と制御」, MAT LAB EXPO 2013, 2013. 【招待講演】

李昇勇:「絶対速度の計測による車両のヨー慣性モーメントの実時間推定」, 自動車技術会学術講演, 2014.

---

## 中村 周吾・准教授

### 研究テーマ(主たるもの)

### コンピュータによる生体分子の立体構造および機能の解析・予測

コンピュータを用いて、タンパク質や核酸などの生体分子の立体構造あるいは生体機能を、アミノ酸・塩基配列データから予測する。また、それらの分子の立体構造データをもとに、タンパク質同士、タンパク質と核酸あるいはタンパ

ク質と低分子リガンドの複合体の構造の予測と、分子シミュレーションによるダイナミクス解析を行う。これらにより、それらの分子の機能発現のメカニズムを解明する。

## 研究業績(2013 年度)

### 分担著書

中村周吾:「実験農芸化学」, 東京大学大学院農学生命科学研究科応用生命化学・応用生命工学専攻 編, 朝倉書店, 2013 年.

---

## 丹羽 美之・准教授

### 研究テーマ(主たるもの)

#### メディア研究

テレビやラジオ、映画や写真、新聞や雑誌、広告やマンガ、携帯やインターネットなど、様々なメディアについて、歴史的、社会的、実践的な観点から研究を行っている。

#### ジャーナリズム研究

現代のジャーナリズムが直面する課題や問題について、歴史的、実践的な観点から研究している。またドキュメンタリーの制作や批評を中心に、次世代のジャーナリストの教育と養成にも取り組んでいる。

#### ポピュラー文化研究

現代のポピュラー文化が作り出す様々な文化や社会意識について、社会学的な観点から研究している。テレビ番組や映画など、ポピュラー文化のアーカイブにも取り組んでいる。

## 研究業績(2013 年度)

### 著書

丹羽美之・藤田真文:「メディアが震えた テレビ・ラジオと東日本大震災」, 東京大学出版会, 2013 年.

### 分担著書

丹羽美之:「テレビの未来と可能性」, 高橋信三記念放送文化振興基金 編, 大阪公立大学共同出版会, 2013 年.

### 雑誌論文

丹羽美之:「民放もアーカイブの公開・活用を！」, 月刊民放, Vol.43, No.11, pp.24-28, 2013 年.

## その他論文

丹羽美之:「活断層と原発、そして廃炉～アメリカ、ドイツ、日本の選択」, GALAC(2013年4月号), 番組批評, 2013年. 【一般向け】

丹羽美之:「YOUは何しに日本へ」, GALAC(2013年5月号), 番組批評, 2013年. 【一般向け】

丹羽美之:「探偵! ナイトスクープ」, GALAC(2013年7月号), 番組批評, 2013年. 【一般向け】

丹羽美之:「選考を終えて 震災から2年目、見えてきた課題」, GALAC(2013年7月号), 番組批評, 2013年. 【一般向け】

丹羽美之:「僕はまだ死にません～はだしのゲンが伝えるもの～」, GALAC(2013年11月号), 番組批評, 2013年. 【一般向け】

丹羽美之:「内容も、編成も、自由気ままな『旅猿』」, GALAC(2014年2月号), 番組批評, 2013年. 【一般向け】

## 講演・口頭発表

丹羽美之:「テレビ60年とアーカイブの課題」, 日本マス・コミュニケーション学会2013年度春季研究発表会, 2013.

丹羽美之:「3.11とメディアのこれから—震災・原発事故からの教訓」, 公益財団法人放送文化基金設立40周年記念研究報告会(主催:公益財団法人放送文化基金), 2013. 【招待講演】

## 新聞・報道

丹羽美之:「NNNドキュメントで授業」, 「読売新聞」2013年12月3日夕刊文化面(コメント), 2013.

丹羽美之:「過去の番組 教育に活用」, 「民間放送」2013年12月3日3面(コメント), 2013.

丹羽美之:「問われる政治との距離 NHK次期会長に榎井氏決定」, 「信濃毎日新聞」「高知新聞」ほか(共同通信配信), 2013年12月21日朝刊政治面(コメント), 2013.

丹羽美之:「東大で“ヒロシマ”講演」, 広島テレビ「テレビ派」2014年1月22日放送(コメント), 2014.

丹羽美之:「ETV特集 よみがえる色彩 激動の20世紀 アーカイブ映像の可能性」, NHK・Eテレ, 2014年3月22日放送(スタジオ出演), 2014.

---

## 原田 至郎・准教授

### 研究テーマ(主たるもの)



## 情報社会のガバナンスに関する研究

ICT に依存する情報社会のガバナンスについて、特に技術的側面とそれを支える制度および専門家に着目した研究

## クメール文字やその他の文字のコンピュータ処理に関する技術的・制度的研究

クメール文字やその他の文字のコンピュータ上での利用に関する技術的研究開発、およびその標準化をめぐる制度的研究

## アジアにおける政治システムや価値観・政治意識に関する研究

カンボジアを中心とする、文献調査やフィールドワーク、アジア・バロメーター・プロジェクトの調査結果などに基づいた分析

### 研究業績(2013 年度)

#### 講演・口頭発表

HARADA Shiro: "Comments", Consultative workshop on technical issues for solving irregularities, 2013. 【一般向け】

原田至郎: 「カンボジア王国国民議会選挙の結果および評価に関する分析的考察」, 日本カンボジア研究会 第 6 回プノンペン部会, 2013.

#### 新聞・報道

Shiro Harada: 「Slim margins in NEC data」, Phnom Penh Post, 2013.

Shiro Harada: 「Funcinpec joins call for probe」, Phnom Penh Post, 2013.

Shiro Harada: 「NEC's verification is questioned by NGO」, Phnom Penh Post, 2013.

Shiro Harada: 「NEC ends investigation」, Phnom Penh Post, 2013.

Shiro Harada: 「NEC checks continue」, Phnom Penh Post, 2013.

---

## 広田 光一・准教授

### 研究テーマ(主たるもの)

### 研究業績(2013 年度)

---

## 堀 里子・准教授

研究テーマ(主たるもの)

### 医薬品・健康食品の有用性・安全性情報ネットワークの構築

- \* 臨床事例を活用した医療従事者間情報交換・研修システムの構築と展開
- \* 健康食品の有用性・安全性情報ネットワークの構築と展開

### 新規医薬品情報を創製するための研究

- \* ヒト胎盤組織を用いた薬物の胎児移行性及び胎児毒性の定量的評価
- \* 薬物輸送担体や代謝酵素の阻害を介した消化管における薬物間相互作用の検討

### 薬物動態・薬力学理論に基づくテーラード・処方設計システムの開発

研究業績(2013年度)

#### 分担著書

堀 里子, 澤田 康文 他: 「これからの医療コミュニケーションへ向けて」, 石崎雅人、野呂幾久子 監 編, 篠原出版新社, 2013 年.

#### 雑誌論文

Mikami A, Ohtani H, Hori S, Sawada Y: "Pharmacokinetic model incorporating mechanism-based inactivation of CYP2D6 can explain both non-linear kinetics and drug interactions of paroxetine.", *Int. J. Clin. Pharmacol. Ther.*, Vol.51, No.5, pp.374-82, 2013 年. 【査読有】

Nagai M, Ohtani H, Satoh H, Matsuoka S, Hori S, Fujii T, Taketani Y, Sawada Y: "Characterization of Transplacental Transfer of Paroxetine in Perfused Human Placenta: Development of a Pharmacokinetic Model to Evaluate Tapered Dosing", *Drug Metab. Dispo.*, Vol.41, No.12, pp.2124-2132, 2013 年. 【査読有】

平山匡彦、田中秀和、鈴木慎太郎、永富亜紀、作元誠司、北原敏弘、宮崎長一郎、吉谷清光、佐藤 宏樹、堀 里子、三木晶子、澤田康文: 「離島における一般用医薬品のインターネット購入に関する意識調査—インターネットを使用する居住者を対象として—」, *医薬品情報学*, Vol.15, No.2, pp. 57-63, 2013 年. 【査読有】

平山匡彦、田中秀和、鈴木慎太郎、井上広平、永富亜紀、作元誠司、北原敏弘、宮崎長一郎、吉谷清光、佐藤 宏樹、堀 里子、三木晶子、澤田康文: 「離島での対面調査から見てきた一般用医薬品使用に関する実態と課題」, *薬学雑誌*, Vol.133, No.8, pp.913-922, 2013 年. 【査読有】

栗本 蒔、堀 里子、佐藤宏樹、三木晶子、澤田康: 「患者・消費者を対象とした医薬品情報収集・提供ネットワークの構築」, *薬学雑誌*, Vol.133, No.9, pp.1023-1034, 2013 年. 【査読有】

藤田優美子、堀 里子、佐藤宏樹、三木晶子、澤田康文:「経口抗がん剤の調剤に関する実態調査」, 医療薬学, Vol.39, No.12, pp.741-749, 2013 年.【査読有】

堀 里子、澤田康文:「徹底理解! 添付文書にある情報 ポリカルボフィルカルシウムとプロトンポンプ阻害剤との相互作用とは」, 薬局, Vol.64, No.5, pp.1770-1773, 2013 年.

堀 里子、澤田康文:「徹底理解! 添付文書にある情報 モキシフロキサシンによる心室性頻拍、QT 延長の副作用」, 薬局, Vol.64, No.6, pp.1990-1993, 2013 年.

堀 里子、澤田康文:「徹底理解! 添付文書にある情報 副腎皮質ステロイドによる特発性大腿骨頭壊死症」, 薬局, Vol.64, No.7, pp.2186-2189, 2013 年.

堀 里子、澤田康文:「徹底理解! 添付文書にない情報 MATE1、MATE2 トランスポーターの遺伝子変異がメトホルミンの体内動態及び薬効に及ぼす影響」, 薬局, Vol.64, No.8, pp.2560-2564, 2013 年.

堀 里子、澤田康文:「徹底理解! 添付文書にある情報 アンジオテンシン受容体阻害薬による味覚異常」, 薬局, Vol.64, No.9, pp.2704-2708, 2013 年.

堀 里子、澤田康文:「徹底理解! 添付文書にある情報 シクロスポリンとエンドセリン受容体阻害薬との相互作用」, 薬局, Vol.64, No.10, pp.2896-2899, 2013 年.

堀 里子、澤田康文:「徹底理解! 添付文書にある情報 チザニジンとリファンピシンや喫煙との相互作用」, 薬局, Vol.64, No.11, pp.3084-3087, 2013 年.

堀 里子、澤田康文:「徹底理解! 添付文書にある情報 母乳および乳製品摂取中止や減量によるフレカイニドの血中濃度上昇」, 薬局, Vol.64, No.12, pp.3280-3283, 2013 年.

堀 里子、松岡 紗代、佐藤 宏樹、藤井 知行、澤田 康文:「ヒト胎盤灌流法におけるフルボキサミンの胎盤透過特性」, 臨床薬理の進歩, Vol.34, pp.26-32, 2013 年.

小俣 裕康、堀 里子、佐藤 宏樹、三木 晶子、澤田 康文:「経口抗がん剤の特殊な調剤業務に関する薬剤師の意識調査について」, 新薬と臨牀, Vol.62, No.1, pp.72-79, 2013 年.

辻野靖彦、三木晶子、堀 里子、佐藤宏樹、佐々木豊明、澤田康文:「患者宅における残薬の保管状況調査のための手法の開発と予備的調査」, 新薬と臨牀, Vol.62, No.3, pp.520-529, 2013 年.

杉山清子、辻野靖彦、近藤康則、内海 勝、間辺寛人、八束 弓、堀 里子、三木晶子、佐藤宏樹、澤田康文:「テガフル・ギメラシル・オテラシルカリウム配合抗癌剤の疑義照会の実態調査」, 新薬と臨牀, Vol.62, No.10, pp.1896-1901, 2013 年.

堀 里子、澤田康文:「徹底理解! 添付文書にある情報 黄体ホルモン、卵胞ホルモン配合剤による血栓症」, 薬局, Vol.65, No.1, pp.128-131, 2013 年.

堀 里子、澤田康文:「徹底理解! 添付文書にある情報 CYP を介した阻害と誘導によるポリコナゾールとエファビレンツとの相互作用」, 薬局, Vol.65, No.2, pp.300-304, 2013 年.【査読有】

堀 里子、澤田康文:「徹底理解! 添付文書にある情報 サラゾスルファピリジンによる葉酸欠乏症とそのメカニズム」, 薬局, Vol.65, No.3, pp.474-477, 2013 年.

---

## 松山 裕・准教授

研究テーマ(主たるもの)

### 医学研究データの統計解析

### 統計的因果推論

研究業績(2013 年度)

### 分担著書

杉本充宏、島田三恵子、藤井知行、関和男、前田津紀夫、松山裕、上村夕香理:「科学的根拠に基づく快適で安全な妊娠出産のためのガイドライン」, 14) 厚生労働科学研究・妊娠出産ガイドライン研究班 編, 金原出版株式会社, 2013 年.

### 雑誌論文

Seyama Y, Imamura H, Inagaki Y, Matsuyama Y, Tang W, Makuuchi M, Kokudo N.: "Intermittent clamping is superior to ischemic preconditioning and its effect is more marked with shorter clamping cycles in the rat liver.", *Journal of Gastroenterology*, Vol.48, No.1, pp.115-124, 2013 年. 【査読有】

Shindoh J, Hasegawa K, Matsuyama Y, Inoue Y, Ishizawa T, Aoki T, Sakamoto Y, Sugawara Y, Makuuchi M, Kokudo N.: "Low hepatitis C viral load predicts better long-term outcomes in patients undergoing resection of hepatocellular carcinoma irrespective of serologic eradication of hepatitis C virus.", *Journal of Clinical Oncology*, Vol.31, No.6, pp.766-773, 2013 年. 【査読有】

Takayasu K, Arai S, Sakamoto M, Matsuyama Y, Kudo M, Ichida T, Nakashima O, Matsui O, Izumi N, Ku Y, Kokudo N, Makuuchi M.: "Clinical implication of hypovascular hepatocellular carcinoma studied in 4,474 patients with solitary tumour equal or less than 3 cm.", *Liver International*, Vol.33, No.5, pp.762-770, 2013 年. 【査読有】

Hasegawa K, Kokudo N, Makuuchi M, Izumi N, Ichida T, Kudo M, Ku Y, Sakamoto M, Nakashima O, Matsui O, Matsuyama Y.: "Comparison of resection and ablation for hepatocellular carcinoma: A cohort study based on a Japanese nationwide survey.", *Journal of Hepatology*, Vol.58, No.4, pp.724-729, 2013 年. 【査読有】

Ohki T, Tateishi R, Akahane M, Mikami S, Sato M, Uchino K, Arano T, Enooku K, Kondo Y, Yamashiki N, Goto T, Shiina S, Yoshida H, Matsuyama Y, Omata M, Ohtomo K, Koike K.: "CT with hepatic arteriography as a pretreatment examination for hepatocellular carcinoma patients: A randomized controlled trial.", *American Journal of Gastroenterology*, Vol.108, No.8, pp.1305-1313, 2013 年. 【査読有】

Fujita R, Iimuro S, Shinozaki T, Sakamaki K, Uemura Y, Takeuchi A, Matsuyama Y, Ohashi Y.: "Decreased duration of acute upper respiratory tract infections with daily intake of fermented milk: A multicenter, double-blinded, randomized comparative study in users of day care facilities for the elderly population.", *American Journal of Infection Control*, Vol.41, No.12, pp.1231-1235, 2013 年. 【査読有】

Kato H, Nakagami G, Iwahira Y, Otani R, Nagase T, Iizaka S, Tamai N, Matsuyama Y, Sanada H.: "Risk factors and risk scoring tool for infection during tissue expansion in tissue expander and implant breast reconstruction.", *The Breast Journal*, Vol.19, No.6, pp.618-626, 2013 年. 【査読有】

## その他論文

松山 裕: 「欠測データにどのように対応するか」, *医学のあゆみ*, 2013 年.

松山 裕: 「データの要約: 要約統計量と分布の視覚化. 」, *心身医学*, 2013 年.

松山 裕: 「統計的仮説検定と効果の推定. 」, *心身医学*, 2013 年.

松山 裕: 「研究デザインと統計解析手法の選択. 」, *心身医学*, 2013 年.

松山 裕: 「カテゴリカルデータの解析」, *心身医学*, 2013 年.

松山 裕: 「連続データの解析」, *心身医学*, 2013 年.

松山 裕: 「生存時間解析」, *心身医学*, 2013 年.

Taguri M., Matsuyama Y.: "Comments on 'An information criterion for marginal structural models' by R. W. Platt, M. A. Brookhart, S. R. Cole, D. Westreich, and E. F. Schisterman.", *Statistics in Medicine*, 2013 年.

## 講演・口頭発表

川原拓也, 松山裕, 大橋靖雄: 「採取済み検体を用いたケース・コントロール研究における逐次検定手法の比較」, 2013 年度日本計量生物学会年会, 2013.

高本幹大, 篠崎智大, 松山裕, 大橋靖雄: 「長期毒性を考慮した抗悪性腫瘍薬の用量設定試験デザイン」, 2013 年度日本計量生物学会年会, 2013.

Shinozaki T, Matsuyama Y, Ohashi Y.: "Sensitivity analysis in randomized trials with partial compliance using generalized methods of moments applied to structural nested models", 34th Annual Conference of the International Society for Clinical Biostatistics, 2013.

Yokota I, Matsuyama Y, Ohashi Y.: "Extension on a landmarking model using a fractional polynomial function for dynamic prediction.", 34th Annual Conference of the International Society for Clinical Biostatistics, 2013.

和泉志津恵, 松山 裕, 浜田知久馬: 「大学の医歯薬学分野(看護学を含む)における統計教育の参照基準の改訂案の作成. 」, 2013 年度 統計関連学会連合大会, 2013.

Nakamura M, Muramatsu T, Yokoi H, Okada H, Ochiai M, Suwa S, Matsuyama Y, Nanto S.: "J-DESsERT 3-Year Outcomes: Largest randomized trial stratified by diabetes mellitus presence, comparing sirolimus and paclitaxel eluting stents.", *Transcatheter Cardiovascular Therapeutics (TCT)*, 2013.

Matsuyama Y.: "Semiparametric estimation of treatment effect in a randomized clinical trial with missing data.", *International Symposium Incomplete Data Analysis and Causal Inference*, 2013.

---

## 三谷 武司・准教授

### 研究テーマ(主たるもの)

#### 社会学理論

〈社会的〉と形容される対象の存在様式を、タルコット・パーソンズやニクラス・ルーマンらの社会的システム理論を中心に批判的に検討する。その関連で、哲学者のジョン・サールが近年提唱している「社会的存在論」も重要な検討対象となる。

#### 社会的選択理論

ケネス・アローの不可能性定理およびそれを端緒として提出された様々な定理について、不可能性からの数理的な脱却が必ずしも選択の倫理性に重要な意義を有するものではないという観点から分析する。ジョン・ハーサニらの功利主義的社会的厚生関数の検討はその一例である。

#### 翻訳論

一般書、小説、学術書などの各ジャンルにおいて翻訳はいかなるものであるべきかについて、実際に翻訳実務(とりわけ出版翻訳)に携わりながら考察する。

### 研究業績(2013 年度)

#### 著書

ローター・ミュラー, 三谷武司(訳): 『メディアとしての紙の文化史』, 東洋書林, 2013 年.

デニス・マッカラ, 三谷武司(訳): 『スローメディシンのすすめ——年老いていく家族のケアに向き合うあなたへ』, 勁草書房, 2013 年.

コンドリーザ・ライス, 福井昌子/波多野理彩子/宮崎真紀/三谷武司(訳): 『ライス回顧録——ホワイトハウス激動の 2920 日』, 集英社, 2013 年.

ヴィヴェカ・ステン, 三谷武司(訳): 『静かな水のなかで』, 早川書房, 2013 年.

ニクラス・ルーマン, 高橋徹/赤堀三郎/阿南衆大/徳安彰/福井康太/三谷武司(訳): 『社会構造とゼマンティック 3』, 法政大学出版局, 2013 年.

ヴィヴェカ・ステン, 三谷武司(訳): 『夏の陽射しのなかで』, 早川書房, 2014 年.

ヴィヴェカ・ステン, 三谷武司(訳): 『煌めく氷のなかで』, 早川書房, 2014 年.

## 講演・口頭発表

三谷武司:「日本の社会学研究における理論・学説・翻訳の在り方を問う」, 科学・技術と社会の会, 第187回月例会, 2014.【招待講演】

---

## 森本 一夫・准教授

研究テーマ(主たるもの)

ムスリム諸社会におけるムハンマド一族の地位・役割

ペルシア語文化圏研究

イスラーム思想史

研究業績(2013年度)

### 分担著書

Kazuo Morimoto: "The Prophet's Family as the Perennial Source of Saintly Scholars: Al-Samhudi on 'Ilm and Nasab", Catherine Mayeur-Jaouen and Alexandre Papas (eds.), *Family Portraits with Saints: Hagiography, Sanctity, and Family in the Muslim World* 編, Berlin: Klaus Schwarz Verlag and École des Hautes Études en Sciences Sociales, 2013年.

'Abd Allāh b. Muḥammad Ibn Katīla Ḥusaynī; Kāzū' ū Mūrīmūtū (ed.): "Bayān al-ad'iyā'", Rasūl Ja'fariyān [ed.], *Jashn-nāmāh-i Ustād Sayyid Aḥmad Ishkiwarī*, Tehran: Nashr-i 'Ilm, Qom: Kitābkhānah-i Takhaṣṣuṣī-i Tārīkh-i Islām wa Īrān and [Tehran:] Khānah-i Kitāb-i Tīhrān, 2013年.

## 講演・口頭発表

Kazuo Morimoto: "Varying Criteria for a True Sayyid: Discrepancy between Genealogists and Jurisprudents", *The Sixth Biennial Convention of the Association for the Study of Persianate Societies (ASPS)*, 2013.

---

## 山内 祐平・准教授

研究テーマ(主たるもの)

## 情報通信技術を利用した学習環境のデザイン

教育の情報化が急速な勢いで進んでいるが、学習は空間／活動／共同体／人工物の微妙なバランスの中で発生する複雑な事象である。インターネットなどの情報通信技術を学びの場に導入する際に、様々な要因をどうデザインすれば適切な学習環境を構成できるかを、実践研究の中で明らかにする。

### 研究業績(2013 年度)

#### 著書

山内祐平、森玲奈、安斎勇樹:「ワークショップデザイン論 -創ることで学ぶ」, 慶應大学出版会, 2013 年.

山内祐平、重田勝介、風間正弘、八木玲子:「MOOC -大学の革命-」, 日経パソコン, 2013 年.

#### 雑誌論文

高橋薫、藤本徹、荒木淳子、高橋淳、谷内正裕、山内祐平:「Facebook を利用したキャリア学習環境の実践と評価」, 日本教育工学会論文誌, Vol.37, No.3, pp.269-285, 2013 年. 【査読有】

高橋薫、藤本徹、荒木淳子、大辻雄介、鈴木久、山内祐平:「Facebook を活用した高校生小論文作成グループの実践」, 日本教育工学会論文誌, Vol.37, No.suppl, pp.印刷中, 2013 年. 【査読有】

山内祐平:「大学における対面空間とオンライン学習環境」, 大学教育学会誌, Vol.35, No.2, pp.15-17, 2013 年. 【査読有】

山内祐平:「教育工学とインフォーマル学習」, 日本教育工学会論文誌, Vol.37, No.3, pp.187-195, 2013 年. 【査読有】

#### 国際会議等

Sato, T., Takahashi, K., Fujimoto, T., Kiyoshi, T., Yachi, M., and Yamauchi, Y.: "Proposal for a Computer System with Structured Chat and Social Stamp Functions to Support Social Reading for High School Students", ICoME2013, pp.Digital Version A05, 2013. 【査読有】

#### その他論文

高橋薫、荒木淳子、藤本徹、大辻雄介、鈴木久日、山内祐平:「ソーシャルメディアを活用したキャリア学習支援プロジェクトを通しての高校生のキャリア観の変容」, キャリアデザイン研究, 2013 年.

山内祐平、池尻良平、田中淳、大原美保、地引泰人、吉川筆子、鈴木克明、藤本徹:「学習者の状況に対応したシナリオ型防災教育教材の開発」, 日本教育工学会第 29 回全国大会講演論文集, 2013 年.

田中淳、地引泰人、黄欣悦、山内祐平:「知識構成過程への介入からみた防災教育の方向」, 日本災害情報学会第 15 回研究発表大会予稿集, 2013 年. 【査読有】



## 講演・口頭発表

山内祐平:「学生の学習支援について—教育学の知見を基盤とした学術的なアプローチ」, 神戸大学教育推進機構, 2013.【招待講演】

山内祐平:「学習環境のデザイン」, 京都大学, 2013.【招待講演】

山内祐平:「オープン教育の未来を拓く日本初 MOOC の展開」, JMOOC 新春講演会, 2014.【招待講演】

山内祐平:「授業の常識をひっくりかえす!「反転授業」と考える」, 島根大学教育開発センター, 2014.【招待講演】

## 新聞・報道

山内祐平:「世界の頭脳を発掘せよ～超名門大学のオンライン授業」, NHK クローズアップ現代, 2013.

山内祐平:「小学校に「反転授業」」, 朝日新聞, 2013.

---

## 山本 隆一・准教授

研究テーマ(主たるもの)

### 医療情報の安全性確保とプライバシー保護に関する研究

医療情報の可用性、完全性、機密性の適切な確保と、情報主権者の権利としてのプライバシーと教育・研修・研究・公益目的の利用を調和させるための技術的課題および制度や運用を中心とする人的要素の課題についての研究。

### 広域分散診療情報データベースへの知識発見手法の応用

電子カルテが普及した際に構成されると予想される広域分散診療情報データベースをモデル化し、随時蓄積される診療情報に対して動的な知識発見手法の適応についての研究

### 医療における公開鍵基盤の応用に関する研究

公開鍵基盤を医療ドメインに応用するにあつての、資格属性の取り扱いなどの問題の解決と国際的な調和に関する研究

研究業績(2013 年度)

---

## KHAN, M. Fahim Ferdous・助教

## 研究テーマ(主たるもの)

## 研究業績(2013 年度)

## 国際会議等

M. Fahim Ferdous Khan and Ken Sakamura: "Towards Securer and Smarter Smartcard Applications", 3rd IEEE International Conference on Consumer Electronics – Berlin (IEEE ICCE–Berlin 2013), pp.302–306, 2013. 【査読有】

---

## 朝倉 敬子・助教

## 研究テーマ(主たるもの)

## 日本人の食塩摂取量の推定

## 栄養に関する知識と栄養摂取の関連

## 研究業績(2013 年度)

## 雑誌論文

Kobayashi S, Asakura K, Suga H, Sasaki S.: "High protein intake is associated with low prevalence of frailty among old Japanese women: a multicenter cross-sectional study.", *Nutr J*, Vol.12, pp.164, 2013 年. 【査読有】

Asakura K, Nakano M, Yamada M, Takahashi K, Sueoka K, Omae K.: "Effect of bidet toilet use on preterm birth and vaginal flora in pregnant women.", *Obstet Gynecol.*, Vol.121, No.6, pp.1187–94, 2013 年. 【査読有】

Hirata K, Suzuki H, Imaeda H, Matsuzaki J, Tsugawa H, Nagano O, Asakura K, Saya H, Hibi T: "CD44 variant 9 expression in primary early gastric cancer as a predictive marker for recurrence", *Br J Cancer*, Vol.109, No.2, pp.379–86, 2013 年. 【査読有】

Fukumoto A, Asakura K, Murakami K, Sasaki S, Okubo H, Hirota N, Notsu A, Todoriki H, Miura A, Fukui M, Date C: "Within- and between-individual variation in energy and nutrient intake in Japanese adults: effect of age and sex differences on group size and number of records required for adequate dietary assessment", *J Epidemiol*, Vol.23, No.3, pp.178–86, 2013 年. 【査読有】

Taniguchi E, Asakura K, Murakami K, Masayasu S, Sasaki S: "Relationship Between Diet Texture and Discharge Due to Deteriorating Health Condition in Nursing Home Residents in Japan: A Multicenter 1-Year Prospective Study", *Asia Pac J Public Health*, 2013 年. 【査読有】

Matsuzaki J, Suzuki H, Okuda S, Tanimoto A, Asakura K, Fukuhara S, Okada S, Hirata K, Mori H, Masaoka T, Higuchi H, Hozawa S, Kuribayashi S, Takebayashi T, Hibi T: "Biliary Findings Assist in Predicting Enlargement of Intraductal

Papillary Mucinous Neoplasms of the Pancreas”, Clin Gastroenterol Hepatol, Vol.11, No.5, pp.584-54, 2013 年。【査読有】

Michikawa T, Nishiwaki Y, Nakano M, Iwasawa S, Yamada M, Asakura K, Yoshioka N, Kuwahara E, Takebayashi T: “Higher Serum Dehydroepiandrosterone Sulfate Levels Are Protectively Associated With Depressive Symptoms in Men, But Not in Women: A Community-Based Cohort Study of Older Japanese”, Am J Geriatr Psychiatry, Vol.21, No.11, pp.1154-63, 2013 年。【査読有】

---

## 加藤 綾子・助教

### 研究テーマ(主たるもの)

### 技術変化と社会・経済・産業システムの変動に関する研究

ドミナントであった技術が新技術に取って代わり、それに伴いシステム全体が変動して遷移することに着目し、経済・経営学的な観点から、このような変化を捉えようとしている。これまで対象としてきたコンテンツ産業分野を中心に、今後はより広い分野を研究対象とするつもりである。

### コンテンツ産業の進化・変動に関する研究—生産消費者の定量分析

コンテンツ産業の進化・変動を解明する一端として、技術変化を受けて顕在化している消費者の生産活動について、先行研究に基づき構成概念や測定項目を再考し、定量的な調査・分析を実施している。本研究は平成25-27年度科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)挑戦的萌芽研究(課題番号 25590071)の支援を受けた。

### 高齢者の ICT 利用に関する分析

超高齢社会を目前に、高齢者の ICT 利用に関する調査分析が多数なされているが、従来の社会科学系の研究においては個々人の身体状況に踏み込んだ調査分析が難しかった。そこで本研究は、総務省平成24年度補正予算 ICT 超高齢社会づくり推進事業「活力ある高齢者社会の推進」にて取得された、身体に関する情報を含むデータを参照することによって、高齢者の身体状況の相違と ICT 利用実態を分析した。

### 研究業績(2013 年度)

### 雑誌論文

加藤綾子: 「生産消費者の定量分析—音楽の生産消費者の特徴、制作ツール、生産目的」, 社会・経済システム, No.34 号, pp.59-71, 2013 年。【査読有】

### 国際会議等

Kato, Ayako: “A Quantitative Research on Consumers’ Production: the Possibility of Forming Alternative Path beyond Recording Industry”, The 17th Biennial Conference of the International Association for the Study of Popular Music (IASPM), Gijon, Spain, [Poster Presentation], 2013.

## 講演・口頭発表

加藤綾子:「生産手段のデジタル化と生産消費者に関する定量分析」, 第12回情報科学技術フォーラム(FIT2013), 於鳥取大学, K-028, 講演論文集第3分冊 pp.617-618, 2013.

加藤綾子:「技術革新と消費者の生産行為に関するイノベーション論的考察」, 社会・経済システム学会, 於京都産業大学, 3-A 分科会 III「技術と社会」, 2013.

加藤綾子:「産業構造の進化モデルの第四段階に関する検討」, 経営情報学会, 於流通科学大学, 情報化社会(2/2) A3-3, 2013.

---

## 金 暲和・助教

研究テーマ(主たるもの)

### モバイル文化に関するエスノグラフィー

(1) パフォーマンス・エスノグラフィー(performance ethnography)と呼ばれる文化人類学の技法を使ったモバイル文化について考察を行う。身体や口述を使ったパフォーマンスを持って普通の人々のモバイル・メディアの使い方を明らかにする。その結果を分析し、モバイル・メディアを中心に再編される社会空間のあり方について考察を行う。

(2) 普段は気づきにくいモバイル・メディアの文化的なあり方についてエスノグラフィー記述を行う。創造的なメディア表現を通して、モバイル・メディアについての理解を増進するワークショップ技法を使った実践的なアプローチを積極的に活用している。

研究業績(2013年度)

### 著書

金 暲和:「世相を変えたメディア(韓国語)」, ダルン出版, 2013年.

### 分担著書

Kyounghwa Kim: "Ethnographic worldviews: Transformation and social justice", R. Rinehart & K. Barbour & C. Pope 編, Springer, 2013年.

### 国際会議等

金 暲和:「メディア実践としての「大字報」—オンライン空間の政治参与の系譜学」, 韓国言論情報学会 秋季学術大会, 2013. 【査読有】

## 講演・口頭発表

Kyounghwa Yonnie KIM: "MOBILE PHONE AS "A CULTURAL THING": REFLEXIVE APPROACH TOWARDS MOBILE TECHNOLOGY ", ICA Mobile pre-conference 2013, 2013.

Kyounghwa Yonnie KIM: "Mobile literature and creativity: From a landscape of keitai shosetsu (mobile novel) in Japan", Inter-Asia Cultural Studies Society Conference 2013, 2013.

Kyounghwa Yonnie KIM: "Genealogy of political activism in the cyberspace: From a South Korean case of resistant media practice in the '80", SNU-III UT International Academic Symposium 2013, 2013.

## 受賞

韓国出版文化産業振興院: 2013 年度優秀著作「著書「世相を変えたメディア」」, , 2013 年.

---

## 齋藤 大輔・助教

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2013 年度)

---

## 成原 慧・助教

研究テーマ(主たるもの)

### 情報社会における規制理論

情報社会における規制のあり方について、個人の自由を物理的・技術的に規制する「アーキテクチャ」と呼ばれる規制手法と法的規制の関係に着目して検討を進めている。

### マスメディアおよびインターネットに関する表現の自由

マスメディアおよびインターネットに関する表現の自由のあり方について、表現規制の主体および作用の多元化・重層化という現象に着目して検討を行っている。

### ローレンス・レッシングの憲法理論についての研究

米国の憲法学者であり代表的なサイバー法の研究者として知られるローレンス・レッシングの初期の憲法理論の形成過程について研究を行うことにより、レッシングの憲法理論の基本構造を明らかにすることを試みている。

## 研究業績(2013 年度)

### 分担著書

成原慧:「多元化・重層化する表現規制とその規律—表現の自由・アーキテクチャ・パブリックフォーラム」『憲法理論叢書 21 変動する社会と憲法』, 憲法理論研究会 編, 敬文堂, 2013 年.

### 雑誌論文

成原慧:「憲法とコンテキスト(1)—初期ローレンス・レッシングの憲法理論—」, 東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究, No.86, pp.47-81, 2014 年.

### その他論文

成原慧:「マスコミ関連判例 2012 年 10 月～12 月」, マスコミ倫理 No.646, 2013 年. 【一般向け】

成原慧:「マスコミ関連判例 2013 年 1 月～3 月」, マスコミ倫理 No.648, 2013 年. 【一般向け】

成原慧:「マスコミ関連判例 2013 年 4 月～6 月」, マスコミ倫理 No.651, 2014 年. 【一般向け】

成原慧:「オープンデータと表現の自由」, 行政&情報システム Vol.50, 2014 年. 【一般向け】

### 講演・口頭発表

成原慧:「何が「自主的」な規制なのか」, 国際公共経済学会 Ciriec 次世代研究部会サマースクール「西園寺会議」, 2013.

成原慧:「情報技術の発展と法の変容:Reno 判決の検討を手がかりにして」, 科学技術社会論学会 第 12 回年次研究大会, 2013.

成原慧:「情報社会におけるマルチステークホルダー型規制の意義と課題」, ICPC(情報通信政策研究会議), 2013. 【招待講演】【一般向け】

成原慧:「憲法とコンテキスト—初期ローレンス・レッシングの憲法理論—」, 北陸公法判例研究会, 2014. 【招待講演】

---

## 西川 麻樹・助教

### 研究テーマ(主たるもの)

### 研究業績(2013 年度)

---

## 米 海鵬・助教

研究テーマ(主たるもの)

### ヒューマンロボットインタラクション

人間とロボットの間、協調的な行動やスムーズなコミュニケーションなどのインタラクションを目標として、色々な直感的な操作方法やインタラクションスタイルを研究している。ロボットの応用分野が広がっているため、産業用と家庭用のロボットの限界を超え、教育や、エンターテインメントや、芸術などの目的とするロボットも増やしている。それぞれの目的違いのロボットに対し、ユニークなインタフェースやインタラクションも研究している。

### 自然なユーザーインタフェース

次世代のインタフェースを創出するため、より直感的な、より自然なインタフェースを研究している。例え、タッチ操作よりのインタラクションや、実際の物体を掴んで操作ができるタンジブルユーザーインタフェースなど、物理世界のやり方と同じな操作方法を情報世界にもたらすと、斬新なアプリケーションやシステムを創出する可能性もある。スペシャルニーズ(ゲームや教育支援など)に応じたインタラクティブなアプリケーションも研究している。

研究業績(2013 年度)

### 雑誌論文

Sugimoto, M., Fujita, T., Mi, H., Krzywinski, A.: "RoboTable2: A Novel Programming Environment using Physical Robots on a Tabletop Platform", ACM Computers in Entertainment, Vol.11, 2013 年. 【査読有】

石井 健太郎, 米 海鵬, 馬 雷, Natsuda Laokulrat, 稲見 昌彦 五十嵐 健夫: 「Pebbles: 自律ロボットの移動経路をデザインする タンジブルデバイス」, コンピュータソフトウェア, Vol.30, No.3, 2013 年. 【査読有】

### 国際会議等

Mi, H., Kawaguchi, Y.: "JECCO: A Robotic Sculpture -- From Design to Exhibition", ASIAGRAPH, 2013. 【査読有】

Ishii, K., Mi, H., Ma, L., Laokulrat, N., Inami, M., Igarashi, T.: "Pebbles: User-Configurable Device Network for Robot Navigation", The 14th IFIP Conference on Human-Computer Interaction, 2013. 【査読有】

---

---

## 石川 雄章・特任教授

研究テーマ(主たるもの)

## 新技術の社会への実装(イノベーション・モデル)

ITをはじめとする新しい技術を社会に実装する際には、多くの場合、技術というよりはむしろ、多様なステークホルダーとの調整や既存の社会システムの見直し等が課題となる。こうした課題に対応しつつイノベーションを実現するためには、ステークホルダーの把握、共通目標の設定、コアメンバーの任命とチームの結成、権利と責任の適正な分担、検討プロセス及び場の設計、といった幅広い領域にわたる戦略的な取り組みが必要となる。

21世紀 COE プログラム「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」では、ユビキタス技術の現場への適用をテーマに、政府、自治体などの取り組みを通じて、実証的にこのテーマにアプローチしている。

## IT ガバナンス(公的セクターにおける枠組みと CIO の役割)

IT ガバナンスとは「企業が競争優位構築を目的に、IT 戦略の策定・実行をコントロールし、あるべき方向へ導く組織能力」(「企業の IT ガバナンス向上に向けて」(通商産業省 1999)とされているが、公的セクターにおいても IT 戦略の策定・実行をコントロールすることは重要な課題である。特に、公的セクターは民間セクターとは異なる評価基準、行動制約があり、また社会的な制度設計という特別な機能を有する。こうしたことを前提に、COBIT などの標準的な IT ガバナンスのフレームワークを参考に、自らの県での CIO の経験などを踏まえて、公的なセクターにおける IT ガバナンスの枠組みと CIO の役割について研究している。

## 社会的合意形成

新しい技術・制度の社会への導入など、社会的に大きな影響をあたえる行為を行う際には、事前に関係者の合意を得たうえで進めることが望ましく、こうした活動を怠った場合には、最悪の場合、社会的な反発を招く恐れもある。その一方で、こうした活動を行う組織は社会的に確立しておらず、また方法論も制度として十分ではない。このため、社会的合意形成を支援する NPO 法人 PI-FORUM(ピー・アイ・フォーラム)の活動を通じて、実証的に社会的合意形成の意義、方法、知恵、事例などを研究している。

## 研究業績(2013 年度)

### 雑誌論文

二宮利江, 門間正拳, 石川雄章, 星一郎, 鈴木雄吾, 木村信隆, 竹谷昇二: 「教育システム設計手法に基づく構造物変状判定スキルアッププログラムの開発」, 土木学会論文集 H(教育), 2013 年. 【査読有】

石川雄章: 「社会インフラ管理の現状と課題」, 行政情報システム, 2013 年. 【一般向け】

### 講演・口頭発表

石川雄章: 「ICT 活用によるインフラの管理」, パブリックセクター ソリューションフォーラム 2013, 2013. 【招待講演】  
【一般向け】

石川雄章: 「インフラの老朽化と ICT による新たな事業」, ICT 活用による老朽化インフラ保全技術の革新(日経 BP), 2013.

石川雄章: 「ICT 活用によるインフラの管理 v~情報の収集と分析~」, 公共土木施設の維持管理に関する研修会, 2013. 【招待講演】【一般向け】

石川雄章: 「インフラのメンテナンスとビッグデータ」, TRON SHOW, 2013. 【一般向け】



## 特許

日本電信電話株式会社:「測定装置、測定方法及び測定プログラム」, 特願, 2013 年 08 月.

国立大学法人北海道大学、石川雄章、東日本高速道路株式会社:「変状評価支援システム」, 特願, 2013 年 11 月.

---

## 阿部 卓也・特任講師

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2013 年度)

---

## 瀧浪 佑紀・特任講師

研究テーマ(主たるもの)

### 小津安二郎作品研究

日本を代表する映画監督・小津安二郎のサイレント作品を、ハリウッド映画の影響に焦点を絞りながら、戦間期日本の文化的状況を見据えて、ショットや編集などの次元で詳細に分析する。

### サイレント映画美学

1920 年代のハリウッド映画の話法や技術をその歴史的変遷のもとで捉え、さらにはヨーロッパで発展させられた前衛映画美学や批判理論(ジャン・エプスタイン、ルネ・クレール、セルゲイ・エイゼンシュタイン、ジークフリート・クラカウアーなど)を検証する。さらには、こうした映画理論の同時代日本における受容を精査する(岩崎昶など)。

### デジタル・ヒューマニティーズと映像分析

とりわけアーカイビングと分析という観点から、デジタル技術を介した人文学の可能性を模索し、その知見を映画・映像分析へと応用する。

研究業績(2013 年度)

### 雑誌論文

滝浪佑紀:「不連続性の感覚——小津安二郎の〈視線の一致しない切り返し〉の発生過程」, 『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』, No.85 号, pp.1-20 頁, 2013 年.

---

滝浪佑紀:「テレビにおける野球中継の分析——映画との比較から」、『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』, No.86号, pp.3-46頁, 2014年.

## 国際会議等

Yuki Takinami: "The Issue of Sound-Cinema Aesthetics in Early-1930s Japan: Theory and Practice", Society for Cinema and Media Studies Conference, 2013. 【査読有】

## その他論文

ジェフリー・ロックウェル; 滝浪佑紀, 永崎研宣 (翻訳): 「ソーシャル・デジタル・学術編集(下)」, 『人文情報学月報』27号, 2013年.

ジェフリー・ロックウェル; 滝浪佑紀, 永崎研宣 (翻訳): 「ソーシャル・デジタル・学術編集(上)」, 『人文情報学月報』26号, 2013年.

滝浪佑紀: 「志村三代子著『映画人・菊池寛』, 『Repre』20号, 『Repre』20号, 2014年.

## 講演・口頭発表

Yuki Takinami: "Two Imaginary Effects of the Electric Moving Images: an Analysis of Music Videos of Britney Spears and Perfume", Workshop: Body, Image, Media, Korea University, 2013.

滝浪佑紀: 「テレビにおける野球中継の分析——映画との比較から」, 表象文化論学会第8回研究発表集会, 2013.

---

## 田中 克直・特任講師

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2013年度)

---

## 杜 平・特任講師

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2013年度)

---

## 長澤 裕子・特任講師

研究テーマ(主たるもの)

占領期の日米関係と対朝鮮半島政策

日韓国交正常化交渉期、朝鮮の主権放棄と文化財返還問題

日韓国交正常化後、韓国文化財返還問題と韓国における対日文化開放政策

研究業績(2013 年度)

---

## 別所 正博・特任講師

研究テーマ(主たるもの)

ユビキタス・コンピューティング技術を活用した位置情報サービスに関する研究

ユビキタス・コンピューティング技術に基づく環境センシングインフラや測位インフラを活用し、都市環境の状況をきめ細かに反映することが可能な、位置情報サービス・フレームワークの構築を目指した研究を行っている。特に、多目的に拡張可能で、近年の多様なスマートフォン・プラットフォーム上でサービス提供が可能なソフトウェア・アーキテクチャの構築と、障害者等の交通弱者への移動支援という具体的な応用サービスの構築に関して、研究を進めている。

研究業績(2013 年度)

### 国際会議等

Kim, J. E., Bessho, M., Koshizuka, N., & Sakamura, K.: "SaSYS: A Swipe Gesture-Based System for Exploring Urban Environments for the Visually Impaired", Fifth International Conference on Mobile Computing, Applications and Services, pp.54-71, 2013. 【査読有】

---

## 門間 正拳・特任講師

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2013 年度)

---

---

## 荒 優・特任助教

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2013 年度)

### 分担著書

専修大学ネットワーク情報学部リテラシー演習開発チーム:「大学生のための文章表現ワークブック」, 富永敦子 編, 専修大学出版局, 2013 年.

### その他論文

荒 優:「教師の振り返りを支援する授業要約ソフトウェアの開発」, 日本教育工学会研究会 14-1, 2013 年.

### 講演・口頭発表

Yu Ara: “Results and Analyses of UTokyos MOOCs in 2013”, Coursera Partners Conference, 2013.

---

## 大浦弘樹・特任助教

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2013 年度)

### 受賞

Maureen M. Munn, Hiroki Oura, Mark Gallivan, Katie Van Horne, and Andrew W. Shouse: Science Prize for Inquiry-Based Instruction「Engaging High School Students in Research on Smoking Behavior」, Science/AAAS, 2013 年.

---

## 金 伯柱・特任助教

研究テーマ(主たるもの)

## 朝鮮半島の現状維持と多国間関係

研究業績(2013 年度)

---

## 地引 泰人・特任助教

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2013 年度)

---

## 高橋 薫・特任助教

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2013 年度)

---

## 等々力 賢・特任助教

研究テーマ(主たるもの)

### 防災・減災に資する地球変動予測の研究

主にスーパーコンピューターを用いて、地震動、津波の伝播挙動のシミュレーションを行い、地殻変動や津波の波高等、日本列島に及ぼす様々な影響を調べる。それらの結果を踏まえ、防災・減災に資する地球変動予測の可能性について調べている。

### 複雑挙動を示す非線形現象へのノイズの影響解析

複雑挙動を示す非線形現象、特にカオス力学系を対象として、これらの系に及ぼすノイズの影響を解析する。特に、系に内在し、システムの崩壊をもたらす可能性のあるダイナミカルノイズの影響を調べる。同期や確率的な共鳴現象と云った、ダイナミカルノイズに依る秩序現象の出現の可能性についても調べ、その応用を試みる。

研究業績(2013 年度)

---

## 講演・口頭発表

等々力賢・古村孝志・前田拓人:「南海トラフにおける地形・海水層の地震動への影響 :3次元シミュレーションに基づく検討」, 日本地震学会 2013 年度秋季大会, 2013.

Masaru Todoriki, Takashi Furumura, and Takuto Maeda: "3D FDM Simulation of Seismic Wave Propagation for Nankai Trough Earthquake: Effects of Topography and Seawater", AGU Fall Meeting 2013, 2013.

等々力 賢:「南海トラフ巨大地震の地震動シミュレーションの高度化に向けて」, HPCI戦略プログラム 分野3 地震津波シミュレーションワークショップ ~地震津波シミュレーションの役割と若手研究者の挑戦~, 2013. 【一般向け】

---

## 原田 智也・特任助教

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2013 年度)

### 分担著書

T. Harada and K. Satake: "Tsunami Simulations in the Western Pacific Ocean and East China Sea from the Great Earthquakes along the Nankai-Suruga Trough", Y.A. Kontar, V. Santiago-Fandio, and T. Takahashi 編, Springer, 2013 年.

### 雑誌論文

T. Harada, S. Murotani, and K. Satake: "A deep outer-rise reverse-fault earthquake immediately triggered a shallow normal-fault earthquake: The 7 December 2012 off-Sanriku earthquake (Mw 7.3)", Geophysical Research Letters, Vol.40, pp.4214-4219, 2013 年. 【査読有】

K. Satake, Y. Fujii, T. Harada, and Y. Nameggaya: "Time and Space Distribution of Coseismic Slip of the 2011 Tohoku Earthquake as Inferred from Tsunami Waveform Data", Bulletin of the Seismological Society of America, Vol.103, pp.1473-1492, 2013 年. 【査読有】

N. Hurokawa and T. Harada: "Fault plane of the 1964 Niigata earthquake, Japan, derived from relocation of the mainshock and aftershocks by using the modified joint hypocenter determination and grid search methods", Earth, Planets and Space, Vol.65, pp.1441-1447, 2013 年. 【査読有】

Y. Tsuji, K. Satake, T. Ishibe, T. Harada, A. Nishiyama and S. Kusumoto: "Tsunami Heights along the Pacific Coast of Northern Honshu Recorded from the 2011 Tohoku and Previous Great Earthquakes", Pure and Applied Geophysics, pp.DOI 10.1007/s00024-014-0779-x, 2014 年. 【査読有】

## 講演・口頭発表

原田智也・室谷智子・佐竹健治:「アウターライズ深部の逆断層型地震に誘発された浅部の正断層型地震 -2012年12月7日の三陸沖の地震(Mj7.4)-」, 地球惑星連合 2013 年度連合大会, 2013.

藤井雄士郎・原田智也・佐竹健治:「2011 年東北地方太平洋沖地震と 1896 年明治三陸地震の津波波源モデル」, 地球惑星連合 2013 年度連合大会, 2013.

千葉崇・石辺岳男・佐竹健治・島崎邦彦・須貝俊彦・西山昭仁・原田智也・今井健太郎・行谷佑一・上野俊洋:「三浦半島江奈湾における過去 4000 年間の沿岸環境変動と関東地震による津波堆積物」, 地球惑星連合 2013 年度連合大会, 2013.

原田智也・石橋克彦・佐竹健治:「伊豆-小笠原海溝沿いに(超)巨大地震を想定した場合の津波シミュレーション」, 日本地震学会 2013 年度秋季大会, 2013.

原田智也・佐竹健治:「日本海で 20 世紀後半に発生した M~7 地震の断層面の再検討と震源過程の推定」, 日本地震学会 2013 年度秋季大会, 2013.

古川信雄・原田智也:「時間差グリッドサーチ法を用いて求めた 1933 年昭和三陸地震の震源域と断層面」, 日本地震学会 2013 年度秋季大会, 2013.

石橋克彦・原田智也:「1605(慶長九)年伊豆-小笠原海溝巨大地震と 1614(慶長十九)年南海トラフ地震という作業仮説」, 日本地震学会 2013 年度秋季大会, 2013.

T. Harada, K. Ishibashi, and K. Satake: "Tsunami Numerical Simulation for Hypothetical Giant or Great Earthquakes along the Izu-Bonin Trench", 2013 AGU Fall Meeting, 2013.

T. Goto, K. Satake, T. Sugai, T. Ishibe, T. Harada, and S. Murotani: "Historical Tsunami Deposits on the Sanriku Coast, Japan", 2013 AGU Fall Meeting, 2013.

T. Chiba, T. Ishibe, K. Satake, K. Shimazaki, T. Sugai, A. Nishiyama, T. Harada, K. Imai, Y. Namegaya, and T. Ueno: "Reconstruction of paleo coastal environment and tsunami deposits from the Kanto earthquakes in Ena bay, Miura Peninsula, Japan", 2013 AGU Fall Meeting, 2013.

---

## 藤本 徹・特任助教

### 研究テーマ(主たるもの)

### ソーシャルメディアを利用した学習環境デザイン

ベネッセ先端教育技術学講座において、Facebook を利用した高校生向けのプロジェクト学習や基礎学習支援環境のデザインを行い、ソーシャルメディア環境における学びの場のあり方を研究している。また、ソーシャルメディアを利用した思考図解化支援ツールの開発を通して、時間的・空間的制約に縛られずに知的生産活動を促進・共有できる思考活動支援環境の提供に取り組んでいる。

## デジタルゲームの教育利用

教育をはじめとする社会の諸領域の問題解決のために開発、利用されるデジタルゲーム「シリアスゲーム」の研究動向を調査し、教育現場やインフォーマルな学習の場で利用されるゲームのあり方や効果的な利用方法の開発について研究している。

## ゲームフルデザイン方法論の研究

ゲームデザインの手法を取り入れて教育・学習活動をデザインするアプローチを「ゲームフルデザイン」と捉え、デザイン方法論の体系化とモデルカリキュラムの開発に取り組んでいる。米国を中心に開発が進んでいる「クエスト型カリキュラム」や「マルチプレイヤークラスルーム」などの手法を研究し、国内の大学において「クエスト型授業」アプローチの開発と実践を進めている。

### 研究業績(2013年度)

---

## 水島 希・特任助教

### 研究テーマ(主たるもの)

## 放射線リスクコミュニケーションに関する通時的・共時的文脈の解明

文部科学省・原子力イニシアティブ「原子力と地域住民のリスクコミュニケーションにおける人文・社会・医学による学際的研究」において「放射線リスクコミュニケーションに関する通時的・共時的文脈の解明」研究の一部を担当。科学技術社会論の視点から、放射線に対する一般市民の認識、態度、防護活動の地域差研究、および、福島県飯館村、福島県郡山市、東京都江東区をフィールドとした放射線リスクコミュニケーションの場の分析、放射線に関する科学知と一般市民との相互作用を研究。

## 原子力災害後の女性運動と科学技術——放射性物質をめぐる女性たちの経験・実践の記録と分析

震災後、関東地域の母親たちの懸念を発端に立ち上げられた放射性物質に関する実践活動の詳細を記録し、使用されている「科学」の内容、活動を行った女性たちの経験や科学技術に関する認識を調査する。また、過去の参照点として、チェルノブイリ原発事故を契機として放射性物質測定活動を行ってきた女性たちへの聞き取り調査を行い、現在の動きと共通する理念や質的差異を検討する。

## 科学技術と女性

女性と科学技術はどのような関わりを持っているのだろうか。フェミニズムや女性運動は科学知をどのように利用できるのだろうか。現在の日本で生じている、女性と科学技術との相互作用の場、たとえば医療技術(出生前診断、中絶技法)、放射線防護と母親運動、アンチエイジングと先端科学技術、電化製品と家事労働の省力化、などの具体例を取り上げ、現在の女性と科学技術の相互作用を論じる。



## 研究業績(2013 年度)

### その他論文

水島希:「安全な中絶までの長い道のり」,『安全な中絶 医療保健システムのため技術及び政策の手引き 第2版』(邦訳版)世界保健機関(WHO)、pp.233-235, 2012=2013., 2013 年.【一般向け】

---

## 村館 靖之・特任助教

### 研究テーマ(主たるもの)

#### 鳥取県の産業連関分析

鳥取県の資本マトリックスを計測し、各産業間の投資の連関、最適な産業シェアの分析、ターンパイクの分析などを行っている。

#### オンライン家計簿ココマネの経済分析

オンライン家計簿ココマネに関して、所得を中心とするユーザー属性をもとに、鳥取県を中心とした消費行動の分析を行っている。

## 研究業績(2013 年度)

### 雑誌論文

村館靖之 須藤修:「情報貨幣論に向けて-貨幣・情報・不均衡-」, 情報文化学会誌, Vol.20, No.1, pp.3-9, 2013 年.【査読有】

### 講演・口頭発表

村館靖之:「情報量のマクロ経済的含意」, 日本計画行政学会関東支部・日本社会情報学会共催 第8回若手研究交流会, 2013.

村館靖之 須藤修:「鳥取県 2012 年の資本マトリックスの分析」, 情報処理学会第76回全国大会, 2013.

村館靖之 須藤修:「オンライン家計簿ココマネと震災時における家計の消費行動」, 情報文化学会全国大会, 2013.

村館靖之 須藤修:「オンライン家計簿ココマネにおける消費行動パターンの分析」, 社会情報学会全国大会, 2013.

村館靖之 須藤修:「オンライン家計簿ココマネにおける鳥取県の消費動向の分析」, 情報科学技術フォーラム, 2013.

## 受賞

村館靖之: 第 19 回情報文化学会片方善次賞「貨幣と不均衡理論の関係を情報文化を視座に解明した研究」, 情報文化学会, 2013 年.

---

### 森 玲奈・特任助教

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2013 年度)

---

### 山田 歩・特任助教

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2013 年度)

---

### 湧田 雄基・特任助教

研究テーマ(主たるもの)

#### Human Context Recognition using Ubiquitous Sensors

主に歩行者をターゲットとして, 使用者に取り付けたセンサや都市空間に配置されたセンサ(ユビキタスセンサ)からの情報を利用し, 利用者の位置, 状態または行為を推定することを研究目標とする. こうした利用者の情報を活用し, よりリッチなサービスの提供を実現する.

#### ロボットによるイベント認識のための概念構造の自立的構造化

本研究では, ロボットによる自由度が高くかつロバストな実環境における現象理解と解釈(イベント認識)を実現するためのロボット自身が保有する概念構造を自立的に獲得し構造化するためのアーキテクチャの構築を行う. なお, 本研究は, 文部科学省科学研究費補助金による援助を受けて実施する.

## ネットワークロボットを用いた睡眠を中心とする生活パターン管理・調整支援

本研究では、人の日常生活を観測可能な画像センサを搭載したロボットおよびウェアラブル型の生体センサをワイヤレスネットワークでリンクすることにより、人の生活パターンを管理・調整することが可能なシステムを構築した。提案システムでは、脈波が取得可能な生体センサおよび画像認識による人状態推定手法を組み合わせることにより、日常生活の中の人の行動を推定することが可能である。また、生体リズムの動的変動特性に注目し、人の活性度および活動パターンを調整する手法について提案した。なお、本研究は、文部科学省科学研究費補助金の援助により実施した。

### 研究業績(2013 年度)

---

#### 和嶋 雄一郎・特任助教

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2013 年度)

---

#### 梅田 雅之・特任研究員

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2013 年度)

---

#### 尾崎 亮太・特任研究員

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2013 年度)

---

#### 鎌田 貢・特任研究員

研究テーマ(主たるもの)

---

研究業績(2013 年度)

---

**小泉 直也・特任研究員**

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2013 年度)

---

**Simanchal Padhy・特任研究員**

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2013 年度)

---

**谷島 貫太・特任研究員**

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2013 年度)

---

**傳法 春樹・特任研究員**

研究テーマ(主たるもの)

**新世代ネットワークを支えるネットワーク仮想化基盤技術の研究開発**

統合管理型ネットワーク仮想化基盤技術の研究開発  
進化可能なネットワーク仮想化アーキテクチャ  
エッジ仮想化技術(Network Edge Technologies)

研究業績(2013 年度)

---

---

## 二宮 利江・特任研究員

研究テーマ(主たるもの)

### 行動観察手法を用いた社会インフラ施設の維持管理業務の効率化

行動観察手法等の質的研究法を用いて維持管理業務の分析と業務成果の活用度向上に向けた仕組みを検討している。維持管理業務に関して参与観察や構造化したインタビューを行って関連するデータを収集し、これらのデータから維持管理業務の課題を抽出している。例えば前の業務の成果が次の業務へ十分に活用されていないことなどが分かる。抽出された課題に対処するために必要な技術を定義し、技術者育成プログラムなどを開発している。

### 暗黙知抽出のための方法論構築

深い知識と豊富な経験で高度な知的処理を行う専門家が持つ暗黙知を抽出し、可視化する方法論を検討している。データ収集には、インタビュー(エスノグラフィックインタビュー、問題中心インタビュー、半標準化インタビューなど)、観察(参与観察、エスノグラフィーなど)、資料(視覚データ(写真など)、テキストデータ(技術資料など))を用い、データ分析には、カテゴリー分析(グラウンデッド・セオリーなど)やシーケンス分析(会話分析など)を用いる。

### インストラクショナルデザインを用いた教育プログラムの開発

インストラクショナルデザイン(ID)の手法を用いて、各種専門家の教育プログラムを開発している。ゴール設定、教育ダイアグラム作成、学習者およびコンテキスト分析、学習目標設定、評価基準開発、教授方略開発、教材開発、プログラムの試行と評価、改訂、総合的評価の手順で行う。

研究業績(2013年度)

### 雑誌論文

二宮利江 門間正拳 石川雄章 星一郎 鈴木雄吾 木村信隆 竹谷昇二:「教育システム設計手法に基づく構造物変状判定スキルアッププログラムの開発」, 土木学会論文集 H(教育), Vol.69, No.1, pp.21-30, 2013年. 【査読有】

### 講演・口頭発表

二宮利江、門間正拳、石川雄章、星一郎、鈴木雄吾、竹谷昇二、木村信隆:「行動観察手法を用いた点検業務の改善:技術者育成の観点から」, 土木学会全国大会, 2013.

---

## Putra Pratama・特任研究員

研究テーマ(主たるもの)

## 研究業績(2013 年度)

---

### 宮垣 英司・特任研究員

#### 研究テーマ(主たるもの)

#### 無線端末の仮想化

仮想ネットワーク構築時に端末上において仮想化端末を構築する。また、ユーザー端末自体を仮想ネットワークに参加させることを用意なものとするために、特に無線端末上に置ける仮想化・仮想ネットワークへの参加を容易にする技術の研究開発

#### 研究業績(2013 年度)

---

### 森 太志・特任研究員

#### 研究テーマ(主たるもの)

#### 研究業績(2013 年度)

#### 分担著書

Futoshi Mori, Hiroshi Ohtake, Go Watanabe, Teruo Matsuzawa: "AORTIC ANEURYSM –RECENT ADVANCES: Chapter 12 Numerical Simulation in Ulcer-Like Projection due to Type B Aortic Dissection with Complete Thrombosis Type", Cornelia Amalinei 編, INTECH, 2013 年.

#### 雑誌論文

Sho Hanida, Futoshi Mori, Kiyoshi Kumahata, Masahiro Watanabe, Shigeru Ishikawa, Teruo Matsuzawa: "Influence of Latent Heat in the Nasal Cavity", Journal of Bio mechanical Science and Engineering , Vol.8, pp.209-224, 2013 年.  
【査読有】

#### 講演・口頭発表

Futoshi Mori, Takashi Furumura: "A Test of Performance on Many Cores and Many Integrated Core using by FDM Calculation Code", International Workshop on Software for Peta-Scale Numerical Simulation, 2013.

---

山本 周・特任研究員

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2013 年度)

---

## IV. 外部資金獲得状況

平成 26 (2014) 年 3 月 31 日時点で情報学環に在籍していた教員各人が関係する外部資金の状況を、情報学環研究協力係のデータをもとに、収録しています。

1. 科学研究費補助金交付一覧
2. 寄付講座
3. 受託研究受入一覧
4. 奨学寄附金受入
5. 共同研究受入一覧
6. その他外部資金



## 1. 科学研究費補助金交付一覧

研究種目	研究課題	研究代表者	直接経費	間接経費	計
新学術領域研究	インターネットの構造をもとにした脳のモデルの提案とコミュニケーションの実験	池上 高志	5,000,000	1,500,000	6,500,000
基盤研究 (A)	視聴覚を利用した見まね学習によるアクティブな動的動作生成に関する研究	池内 克史	8,000,000	2,400,000	10,400,000
基盤研究 (A)	学習者の状況および知識構造に対応したシナリオ型防災教育教材の開発	山内 祐平	10,900,000	3,270,000	14,170,000
基盤研究 (A)	時系列データの蓄積から社会変動モデルの構築へ：中国第三次四都市調査の挑戦	園田 茂人	2,000,000	600,000	2,600,000
基盤研究 (A)	矢内原忠雄学生問題研究所未発掘資料から見る1950年代の学生運動と若者意識の分析	吉見 俊哉	5,000,000	1,500,000	6,500,000
基盤研究 (A)	歴史写真に基づく1860～1930年代の日独関係史の再構築	馬場 章	11,600,000	3,480,000	15,080,000
基盤研究 (A)	リスク認知とソーシャルメディア情報拡散過程の進化論的解明：基礎研究から社会実装へ	佐倉 統	12,200,000	3,660,000	15,860,000
基盤研究 (B)	記録映画アーカイブに見る戦後日本イメージの形成と変容	丹羽 美之	3,300,000	990,000	4,290,000
基盤研究 (B)	拓本調査を基盤とする日本金石文の情報資源化と歴史叙述への応用的研究	菊地 大樹	2,800,000	840,000	3,640,000
基盤研究 (B)	寄生蜂とマメゾウムシ2種の記憶と学習を介した3者系個体群動態：神経王道との連携	嶋田 正和	4,100,000	1,230,000	5,330,000
基盤研究 (B)	西欧教会ならびにオペラ劇場の動学的音場解析とその比較	伊東 乾	3,700,000	1,110,000	4,810,000
基盤研究 (B)	マメゾウムシ類の寄主シフトによるジェネラリストの派生的進化：毒物質と乾燥種子利用	嶋田 正和	4,700,000	1,410,000	6,110,000
基盤研究 (B)	路車異種センサー融合による衝突防止システムの統合的研究	上條 俊介	5,500,000	1,650,000	7,150,000
基盤研究 (B)	培養神経回路と人工神経回路の身体化によるホメオダイナミクスの研究	池上 高志	4,400,000	1,320,000	5,720,000
基盤研究 (B)	血管内治療のためのin vivo流体構造連成解析システムの開発	大島 まり	2,600,000	780,000	3,380,000
基盤研究 (B)	メディア産業構造変動から見る報道職とジャーナリズムの将来：東アジア国際比較研究	林 香里	4,800,000	1,440,000	6,240,000
基盤研究 (B)	「薬と健康食品」適正使用のためのリスクコミュニケーションの場とネットワーク創製	堀 里子	2,064,898	619,469	2,684,367
基盤研究 (B)	リスク態度と情報探索態度が実場面での商品選択に与える影響	植田 一博	6,800,000	2,040,000	8,840,000
基盤研究 (B)	人間拡張型テレプレゼンシステムに関する研究	暦本 純一	6,200,000	1,860,000	8,060,000
基盤研究 (B)	手の変形と接触特性を考慮した日時間把持操作モデル	広田 光一	4,100,000	1,230,000	5,330,000
基盤研究 (B)	和解なき安定一民主成時期台湾の国際政治経済学—	松田 康博	4,700,000	1,410,000	6,110,000
基盤研究 (B)	ドライバの状態監視を行うハプティック・ステアリング・ガイダンス制御	中野 公彦	4,900,000	1,470,000	6,370,000

基盤研究 (C)	現代の生政治学的視座から見た生命倫理学の政治的・哲学的射程をめぐる研究	金森 修	800,000	240,000	1,040,000
基盤研究 (C)	ソーシャルメディアを活用したキャリア学習支援の経年的評価	高橋 薫	789,903	236,971	1,026,874
基盤研究 (C)	情報環境のスマート化の下での情報法の理論体系と価値調整に関する日米欧比較制度研究	山口 いつ子	800,000	240,000	1,040,000
基盤研究 (C)	情報社会における規制の重層化に関する比較制度研究	成原 慧	1,400,000	420,000	1,820,000
基盤研究 (C)	東アジア冷戦大成の「溶解」と持続の狭間で：韓国「脱冷戦」外交に焦点を当てて	木宮 正史	1,300,000	390,000	1,690,000
基盤研究 (C)	2020 年代の情報通信ネットワーク構築に向けた包括的課題についての比較研究	岡本 剛和	1,600,000	480,000	2,080,000
基盤研究 (C)	日本サブカルチャーのグローバル化と冷戦後ドイツの文化変容に関する社会学的研究	北田 暁大	800,000	240,000	1,040,000
基盤研究 (C)	児童と保護者の栄養知識を問う質問票開発および栄養知識と栄養摂取の関連の定量的評価	朝倉 敬子	1,000,000	300,000	1,300,000
基盤研究 (C)	アジア地域におけるモバイル・メディアの文化的受容に関する比較文化的研究	金 キョンファ	1,400,000	420,000	1,820,000
基盤研究 (C)	組織の境界を越えた情報セキュリティのガバナンスに関する研究	田中 秀幸	1,400,000	420,000	1,820,000
基盤研究 (C)	高密度地震観測データ解析と大規模数値計算に基づくフィリピン海プレートモデルの構築	古村 孝志	1,200,000	360,000	1,560,000
基盤研究 (C)	イスラーム法から見たムハンマド一族	森本 一夫	800,000	240,000	1,040,000
基盤研究 (C)	外国人患者と日本人医療者間の医療コミュニケーション適切化のための社会言語学的研究	辛 昭静	1,500,000	450,000	1,950,000
基盤研究 (C)	循環型メディア共同体の形成を支援する文化プログラムと技術基盤の統合的デザイン	水越 伸	1,100,000	330,000	1,430,000
基盤研究 (C)	医療コミュニケーションにおける共同移送	石崎 雅人	1,200,000	360,000	1,560,000
基盤研究 (C)	スペイン語彙バリエーションの総合的研究の完成	上田 博人	900,000	270,000	1,170,000
基盤研究 (C)	日韓国交正常化直後の国際状況変化と文化政策の展開	長澤 裕子	1,500,000	450,000	1,950,000
挑戦的萌芽研究	仮想現実システムを用いた認知的時間と空間の多様性に関する理論構築	池上 高志	900,000	270,000	1,170,000
挑戦的萌芽研究	文楽人形遣いにおける阿吽の呼吸の分析	植田 一博	2,300,000	690,000	2,990,000
挑戦的萌芽研究	世界のトップに躍り出たカナダの脳神経倫理学を通して科学技術ガバナンスを考察する	佐倉 統	1,300,000	390,000	1,690,000
挑戦的萌芽研究	色収差を利用した 3 次元共焦点マイクロ PIV システムの開発	大島 まり	700,000	210,000	910,000
挑戦的萌芽研究	後発医薬品評価支援のための市販後情報収集・解析システムの構築	堀 里子	1,700,000	510,000	2,210,000
挑戦的萌芽研究	エネルギー蓄積型力覚提示機構	広田 光一	1,500,000	450,000	1,950,000
挑戦的萌芽研究	コンテンツ産業の進化・変動と生産消費者に関する実証的研究	加藤 綾子	900,000	270,000	1,170,000

#### IV. 外部資金獲得状況

挑戦的萌芽研究	縮小社会の都市計画における性能規定および用途混合の可能性に関する研究	石川 徹	2,100,000	630,000	2,730,000
挑戦的萌芽研究	マイクロ流路長期培養系を用いた大腸菌の細胞伸長における表現型可塑性の解析	嶋田 正和	600,000	180,000	780,000
若手研究 (B)	ソーシャルメディアを利用した思考図解化支援ツールの開発	藤本 徹	1,400,000	420,000	1,820,000
若手研究 (B)	教員のモニタリング能力向上を支援するセルフフレクション支援システムの開発と評価	荒 優	1,000,000	300,000	1,300,000
若手研究 (B)	選択アーキテクチャと態度形成	山田 歩	523,554	157,067	680,621
若手研究 (B)	言語コーパスを用いた「確率的規則からの逸脱予測システム」の構築	和嶋 雄一郎	700,000	210,000	910,000
若手研究 (B)	話者性・言語性の数理モデルと確立的統合に基づく音声情報処理の研究	齊藤 大輔	1,100,000	330,000	1,430,000
若手研究 (B)	災害・危機に対する大学の業務継続マネジメント支援パッケージシステムの開発	大原 美保	1,900,000	570,000	2,470,000
若手研究 (B)	「動き」と「明るさ」の美学——小津安二郎初期映画と戦間期日本における映画言説	瀧浪 佑紀	900,000	270,000	1,170,000
特別研究員奨励費	13-14 世紀ペルシア語文化圏における時間計測の精密化について	諫早 庸一	800,000	0	800,000
特別研究員奨励費	移動する身体 of 管理—生体認証技術の需要と受容をめぐる—	高野 麻子	600,000	0	600,000
特別研究員奨励費	日用品を利用した高齢者向けヘルスケアシステムの開発	辻田(齋藤) 眸	800,000	0	800,000
特別研究員奨励費	寄生蜂 <i>Pimpla</i> の記憶と学習に基づく宿主探索行動解析とモデル—迅速な適応性	阿部 真人	600,000	0	600,000
特別研究員奨励費	15・16 世紀オスマン朝の歴史叙述に見られる「興隆」と「没落」の解釈と評価	山下 真吾	600,000	0	600,000
特別研究員奨励費	「植民地朝鮮」の映像と歴史の記憶—ポストアーカイブの構築—	丁 智恵	900,000	0	900,000
特別研究員奨励費	テレビ・アーカイブを活用したテレビ番組研究—日米安保事例として	松山 秀明	800,000	0	800,000
特別研究員奨励費	自由視点映像による体験拡張コンテンツ創成に関する研究	樋口 啓太	900,000	0	900,000
特別研究員奨励費	図的推論を用いた人の自然な論理推論の解明と促進: 論理学及び認知科学の統合的研究	佐藤 有理	1,300,000	0	1,300,000
特別研究員奨励費	中世スペイン語のコーパス文献学研究	川崎 義史	600,000	0	600,000
特別研究員奨励費	飛行型アバターロボットを用いた遠隔コミュニケーションシステムの研究	尾形 正泰	900,000	0	900,000
特別研究員奨励費	透明視覚を利用した複合現実感 (MR) 環境下における遮蔽問題解決手法の開発	吹上 大樹	1,200,000	0	1,200,000
特別研究員奨励費	数値シミュレーションと室内実験の融合から探る断層帯における不均質構造の成長	吉光 奈奈	1,300,000	0	1,300,000
特別研究員奨励費	社会における科学的言説をめぐる、科学者の分析と展望	加瀬 郁子	900,000	0	900,000
特別研究員奨励費	カブトムシにおける日齢に応じた卵サイズと性比調節の資源投資戦略と表現型可塑性	小島 涉	1,200,000	0	1,200,000

IV. 外部資金獲得状況

特別研究員奨励費	内部告発を端緒とする報道のあり方	松原 妙華	900,000	0	900,000
特別研究員奨励費	乳幼児の言語発達における共感覚の昨日解析と、教育への応用	松田 英子	1,000,000	0	1,000,000
特別研究員奨励費	継続性に着目した健康支援インタフェースの研究	佐藤 彩夏	1,100,000	0	1,100,000
特別研究員奨励費	超高齢社会における高齢者の法律相談へのアクセス及びコミュニケーションの課題	山口 絢	900,000	0	900,000
特別研究員奨励費	メディアがつかない女性たちのアイデンティティと住民運動——ライフストーリー研究の視座から	清原 悠	500,000	0	500,000
特別研究員奨励費	形態可変ディスプレイのインタラクションに関する研究	落合 陽一	1,200,000	0	1,200,000
特別研究員奨励費	日本におけるネパール移民労働者のケーススタディー	ディベシユカレル	1,100,000	0	1,100,000
特別研究員奨励費	ネットワークパフォーマンスに基づく P2P トラヒック制御の研究開発	中尾 彰宏	1,100,000	0	1,100,000
特別研究員奨励費	「帝国」日本と戦後におけるラジオ放送及び主体の政治学	吉見 俊哉	700,000	0	700,000
特別研究員奨励費	物理化学システムにおける自律運動と複雑さの起源の理解を目指して	池上 高志	1,000,000	0	1,000,000
特別研究員奨励費	日韓の市民社会ネットワーク構築を通じた地域共同体の可能性の模索	木宮 正史	800,000	0	800,000
合計	79 件		180,616,767	46,817,032	227,433,799

## 2. 寄付講座

寄附講座名称	寄附者	担当教員等	寄附金額計	備考
角川文化振興財団メディア・コンテンツ研究	一般社団法人角川振興財団	吉見 俊哉	30,000,000	(設置期間 H25.11.1. ~H28.10.31)
合計	1 件		30,000,000	

## 3. 受託研究受入一覧

研究課題名	委託者名	研究代表者氏名	研究期間			25 年度受入額			
						直接経費	間接経費	一般管理費等	計
差分法に基づくポストベタスケールアプリケーション開発環境	(独) 科学技術振興機構	古村 孝志	H25.4.1	~	H26.3.31	8,200,000	2,460,000	0	10,660,000
新世代ネットワークを支えるネットワーク仮想化基盤技術の研究開発	(独) 情報通信研究機構	中尾 彰宏	H23.4.1	~	H27.3.31	86,325,000	8,632,500	0	94,957,500

## IV. 外部資金獲得状況

発 課題ア「総合管理型ネットワーク仮想化基盤技術の研究開発」									
新世代ネットワークを支えるネットワーク仮想化基盤技術の研究開発 課題イ「サービス合成可能なネットワークプラットフォームの研究開発」	(独) 情報通信研究機構	中尾 彰宏	H23.4.1	~	H27.3.31	13,636,364	1,362,000	0	14,998,364
多人数調和型情報提示技術の構築と実践	(独) 科学技術振興機構	苗村 健	H25.4.1		H26.3.31	46,125,000	13,837,500	0	59,962,500
キャッシュ指向ネットワークアーキテクチャ (CONA:Cache-Oriented Network-Architecture) の研究開発	総務省	中尾 彰宏	H25.4.1	~	H26.3.31	9,561,000,	2,868,300	0	12,429,300
市民の交通行動変容を促進する持続可能な生活交通情報 フィードバックシステムの研究開発	総務省	池内 克史	H25.4.1	~	H26.3.31	15,745,000	4,723,500	0	20,468,500
道路維持管理業務の効率化に関する業務	国土交通省関東地方整備局	石川 雄章	H25.10.8	~	H26.3.25	3,836,538	0	1,150,962	4,987,500
地震の予測制度の高度化に関する研究	(独) 海洋研究開発機構	古村 孝志	H25.4.1	~	H26.3.31	21,858,832	0	2,185,883	24,044,715
超巨大データベース時代に向けた最高速データベースエンジンの開発と当該エンジンを核とする戦略的社会的サービスの実証・評価	大学共同利用機関法人情報・システム研究機構	須藤 修	H25.4.1	~	H26.3.31	14,500,000	0	580,000	15,080,000
南海トラフ広域地震防災研究プロジェクト	文部科学省	古村 孝志	H25.8.1	~	H26.3.31	22,727,462	0	2,272,746	25,000,208
M2M クラウド・データの自律集約開放性機構を備える通信アプリケーションの開発	総務省	中尾 彰宏	H25.9.3	~	H26.3.31	4,206,000	0	1,261,800	5,467,800
活力ある高齢者社会の推進	総務省	須藤 修	H25.8.14	~	H26.3.15	12,230,040	0	1,223,004	13,453,044
合計			12 件			248,451,236	23,889,300	18,670,531	287,859,431

#### 4. 奨学寄附金受入

45 件、合計 85,089,278 円の奨学寄附金を受け入れた。

## 5. 共同研究受入一覧

研究課題名	相手方	研究代表者	研究期間			25年度受入額		
						直接経費	研究支援経費	計
建築音響と電子音響の不一致による疲労・障害可能性と予防・安全性拡大に関する研究	(独)産業技術総合研究所	伊東 乾	H21.8.1	～	H26.3.31	0	0	0
複合現実感の研究開発	株式会社アスカラボ	池内 克史	H21.4.1	～	H26.9.30	100,000	10,000	110,000
情報技術によるインフラ高度化	株式会社日立製作所	坂村 健	H21.4.1	～	H26.3.31	3,846,000	1,154,000	5,000,000
情報技術によるインフラ高度化	東京地下鉄株式会社	坂村 健	H21.4.1	～	H26.3.31	3,846,000	1,154,000	5,000,000
情報技術によるインフラ高度化	首都高速道路株式会社	坂村 健	H21.4.1	～	H26.3.31	3,846,000	1,154,000	5,000,000
情報技術によるインフラ高度化	東日本旅客鉄道株式会社	坂村 健	H21.4.1	～	H26.3.31	3,846,000	1,154,000	5,000,000
インナーパワーの臨床的効果の検証	株式会社大塚製薬工場	佐倉 統	H22.5.1	～	H26.3.31	0	0	0
情報技術によるインフラ高度化	アビームコンサルティング株式会社	石川 雄章	H22.4.1	～	H26.3.31	4,545,000	455,000	5,000,000
物理特性モデル化手法に基づく文化財のデジタル化に関する研究	凸版印刷株式会社	池内 克史	H22.10.1	～	H27.3.31	1,363,636	136,364	1,500,000
情報技術を活用した点検業務の改善	東日本高速道路(株)	坂村 健	H23.3.1	～	H26.3.31	4,545,454	454,546	5,000,000
移動型 2次元レンジセンサを用いた形状計測技術の開発	株式会社 IHI	池内 克史	H23.10.1	～	H26.3.31	0	0	0
移動型 2次元レンジセンサを用いた形状計測技術の開発	独立行政法人産業技術総合研究所	池内 克史	H23.10.1	～	H26.3.31	0	0	0
IT耐震計に関する研究	IMV株式会社	鷹野 澄	H23.10.1	～	H26.9.30	182,000	18,000	200,000
情報技術を活用したスマートシティに係るビジネスモデルの研究	アビームコンサルティング株式会社	石川 雄章	H24.2.1	～	H26.4.30	1,818,000	182,000	2,000,000
オープンプラットフォームを用いた人材育成に関する研究	株式会社ソーシャル・キャピタル・デザイン	石川 雄章	H24.4.1	～	H27.3.31	1,410,000	90,000	1,500,000

こどもたちの共に創る力を育むワークショップデザインとファシリテーション	SCSK 株式会社	山内 祐平	H24.4.1	～	H27.3.31	2,700,000	270,000	2,970,000
ブレイクの心理学的効果に関する研究	ジェイ・ウォルター・トンプソン・ジャパン合同会社	植田 一博	H24.6.1	～	H25.11.30	0	0	0
インフラ維持管理分野における ICT の適用性の研究	株式会社パスコ	石川 雄章	H24.3.1	～	H26.3.31	0	0	0
IT 耐震計に関する研究	百年住宅株式会社	鷹野 澄	H24.9.1	～	H26.8.31	182,000	18,000	200,000
IT 耐震計に関する研究	株式会社ソフトテックス	鷹野 澄	H24.9.1	～	H26.8.31	182,000	18,000	200,000
IT 耐震計に関する研究	株式会社 aLab	鷹野 澄	H24.9.1	～	H26.8.31	182,000	18,000	200,000
現場点検業務最適化基盤の研究開発	東日本高速道路株式会社 関東支社	石川 雄章	H24.12.1	～	H26.3.31	3,818,000	382,000	4,200,000
霊長類動物を用いた神経細胞学的な分析及び実験研究と理論研究の統合によるダイナミックネットワークの持つ、記憶構造や適応性等の現象論と理論の構築	独立行政法人理化学研究所	池上 高志	H24.11.5	～	H26.3.31	0	0	0
多頻度災害ならびに激甚災害における災害情報の効果的な伝達に関する研究	財団法人道路交通情報通信システムセンター	大原 美保	H25.1.7	～	H26.3.31	3,636,000	364,000	4,000,000
車載カメラと歩車間通信による対歩行者衝突回避支援技術の研究	株式会社半導体理工学研究センター	上條 俊介	H25.3.1	～	H26.3.31	2,954,500	295,500	3,250,000
「ネットワーク仮想化基盤技術及びその応用」に関する共同研究	独立行政法人情報通信研究機構	中尾 彰宏	H24.11.1	～	H26.3.31	0	0	0
IT 耐震計に関する研究	オムロン株式会社	鷹野 澄	H24.12.1	～	H26.11.30	182,000	18,000	200,000
未来洞察のためのワークショップならびに知識マイニングの手法開発	株式会社日立ソリューションズ	植田 一博	H25.4.1	～	H26.9.30	3,500,000	1,500,000	5,000,000
メディア・コンテンツにおける知識構造	株式会社日立ソリューションズ	吉見 俊哉	H25.4.1	～	H26.3.31	9,100,000	900,000	10,000,000
近未来社会・生活研究	ヒューマンルネサンス研究所	佐倉 統	H24.3.1	～	H26.3.31	2,727,200	272,800	3,000,000
NNN ドキュメントで学ぶテレビ・ジャーナリズム	日本テレビ放送網株式会社	丹羽美之	H24.4.1	～	H27.3.31	0	0	0
IT 強振計に関する研究	テクニカルリンク株式会社	鷹野 澄	H25.5.1	～	H26.4.30	182,000	18,000	200,000

IV. 外部資金獲得状況

都民参加型道路管理支援システムの研究	公益財団法人東京都道路整備保全公社	坂村 健	H25.4.1	～	H26.3.31	4,545,450	454,550	5,000,000
インターネット利用時のリスク低減のための社会科学的研究	日本電信電話株式会社サービスイノベーション総合研究所	橋元 良明	H25.5.16	～	H26.2.28	637,000	63,000	700,000
医療コミュニケーションと健康教育に関する実践的研究	医療社団法人医風会	山内 祐平	H25.5.1	～	H27.3.31	6,370,000	637,000	7,007,000
共焦点マイクロPIVによる流体内部流動	富士ゼロックス株式会社	大島 まり	H25.6.20	～	H26.3.31	811,000	81,500	892,500
テストングにかかわる人の行動分析とそのマーケティングへの応用	アサヒビール株式会社	植田 一博	H25.7.1	～	H26.6.30	1,000,000	100,000	1,100,000
税・番号制度導入にあたっての自治体ICTの在り方	日本マイクロソフト株式会社	須藤 修	H25.5.30	～	H26.6.30	2,000,000	200,000	2,200,000
総合的な防災情報の活用に関する研究	日本放送協会	田中 淳	H25.6.15	～	H30.3.31	450,000	50,000	500,000
データトラフィックの削減・低遅延な伝送を実現するためのネットワーク内情報処理技術における研究	株式会社豊田中央研究所	中尾 彰宏	H25.6.1	～	H26.3.31	909,000	91,000	1,000,000
超小型電気自動車デザインコンテスト	電気自動車普及協議会	山内 祐平	H25.4.1	～	H26.6.30	1,818,000	181,000	1,999,000
学習とコミュニケーションを指向した環境デザインに関する研究	株式会社ミサワホーム総合研究所	山内 祐平	H25.4.1	～	H26.3.31	2,000,000	200,000	2,200,000
文化資源情報の社会的活用のための基礎研究	凸版印刷株式会社	吉見 俊哉	H25.7.1	～	H26.3.31	2,710,000	270,000	2,980,000
情報技術によるインフラ高度化	日本電信電話株式会社アクセスサービスシステム研究所	坂村 健	H25.4.1	～	H26.3.31	4,545,454	454,546	5,000,000
DPNを用いた革新的なネットワークサービスの創成に関する共同研究	日本電信電話株式会社	中尾 彰宏	H25.6.28	～	H26.2.28	2,700,000	270,000	2,970,000
次世代デジタルアーカイブのための画像処理技術の研究	株式会社富士通研究所	池内 克史	H25.9.2	～	H26.3.31	910,000	90,000	1,000,000
反転学習社会連携講座	株式会社 NTTドコモ	山内 祐平	H25.10.1	～	H26.9.30	23,077,000	6,923,000	30,000,000
ネットワークノード仮想化におけるネットワークシステム制御方式の研究	株式会社ボスコ・テクノロジーズ	中尾 彰宏	H25.11.1	～	H26.3.31	910,000	91,000	1,001,000
未来洞察のためのワークショップならびに知識マイニングの手法開発	株式会社ゼロストラクト	植田 一博	H25.12.2	～	H26.3.31	0	0	0

IV. 外部資金獲得状況



情報配信に関する共同実験	エヌ・ティ・ティ・コミュニケーションズ(株)	中尾 彰宏	H25.11.20	～	H26.3.31	0	0	0
高速道路の走行安全性に関する研究(その1)	中日本高速道路株式会社	中野 公彦	H25.12.6	～	H26.9.30	6,500,000	650,000	7,150,000
合計			51 件			120,586,694	20,842,806	141,429,500

## 6. その他外部資金

プログラム名	課題名	金額 (円)
イノベーションシステム整備事業 大学発新産業創出拠点プロジェクト(プロジェクト支援型)	無線アクセスポイント仮想化による情報通信サービスの高度化	35,850,000
合計	1件	35,850,000

東京大学 大学院情報学環・学際情報学府 年報

---

平成27年3月 発行  
編集兼発行者 東京大学大学院情報学環・学際情報学府  
〒113-0033  
東京都文京区本郷7丁目3番1号

---

表紙CG画像提供 角田哲也